

鹿児島県史料集
(54)

通 昭 録
(三)

鹿児島県立図書館

刊 行 の こ と ば

鹿児島県史料集第五十四集としてここに「通昭録（二）」を刊行いたします。

「通昭録」は、江戸時代中期 得能通昭（享保十四年生 寛政元年没）が郡奉行や勧農使として務める傍ら収集したものをまとめたものです。

内容は、鹿児島藩主の編年記・薩摩藩及び公儀の法令・故実・室鳩巢などの漢学の説、番町皿屋敷の由来などの話、和歌・和文・随筆等を含みます。

今回は、八十余巻のうち巻之十九から巻之二十八までを刊行することといたしました。

本史料集は、鹿児島県立図書館所蔵本を底本とし、東京大学史料編纂所本、都城島津邸本を参考に、鹿児島大学法文学部教授の丹羽謙治氏によって、編集・校閲・校訂が進められ、刊行の運びとなりました。長期間にわたる丹羽氏の御苦労に対し、心からお礼を申し上げます。

また、この史料集が本来の目的であります郷土資料の保存と地方史の研究や県民の文化向上に大いに役立てられるよう期待いたします。

平成二十七年三月

鹿児島県立図書館長

原 口 泉

目次

解題	2
『通昭録』について	7
例言	24
通昭録卷十九	25
藻彙編 一	
通昭録卷二十	42
藻彙編 二	
通昭録卷二十一	59
藻彙編 三	
通昭録卷二十二	76
藻彙編 四	
通昭録卷二十三	95
藻彙編 五	
通昭録卷二十四	112
藻彙編 六	
通昭録卷二十五	130
藻彙編 七	
通昭録卷二十六	147
藻彙編 八	
通昭録卷二十七	166
藻彙編 九	
通昭録卷二十八	184

解題

本書には『通昭録』巻十九く巻二十八、すなわち「藻彙編」一く五の翻刻を収録する。「藻彙編」とは文藻すなわち文章や詩を集めたものを言う。『通昭録』『藻彙編』は一部和文を含むがほとんどが先人の漢詩文である。内訳は巻十九から巻二十八前半までが漢文、巻二十八の後半が漢詩である。

収録数は、漢文二百三十四編（画賛も含む。また、重複一編を含むが、巻二十八の「異説類編」「鳩巢先生語」は除く）、漢詩百四十一首（重複一首）である。なお、『通昭録』ではこの「藻彙編」の他に、巻六十九に「舜水朱先生語録百五条」「長門鶴臺韓客筆語」「七子韓客筆語」「徂徠題問搓」等、巻七十二に藪慎庵（熊本藩儒）の文章が収録されている。

まず、「藻彙編」に収録された漢文について見ていきたい。「藻彙編」収録の漢詩文の概要については、後掲の【表1】『藻彙編』収録漢詩文一覧」にまとめてある。

「藻彙編」には中国の唐、宋、明代の文人の文章も収録されているが、大多数を占めるのは日本の近世の儒学者のもので、元禄から宝暦、つまりは十七世紀の末から十八世紀の前半に作られたものである。年代の下限は、山本正誼（子和）が薩摩藩校造士館の教授（文学）として藩主に従って江戸を離れる際、大内熊耳ら師友から贈られた文章で、年記はないものの、安永元年（一七七二）かと推定される。

次に、文章の収録数の多い作者を順に挙げると次のようになる（数字は収録数）。

室鳩巢	36	河口静斎	29
雨森芳洲	26	太宰春臺	24
南浦文之	21	山田君豹	9
貝原益軒	9	植木筑峯	9
朱舜水	5	服部南郭	3
荻生徂徠	3	伊藤仁斎	3

収録漢文の作者について、おおよそ次の六群に整理することができる。

（1）室鳩巢の同門ないしは一門

雨森芳洲、河口静斎、伊東悠斎、植木筑峯、（山田君豹）

（2）古学派の伊藤仁斎の一門、ないしは荻生徂徠の一門
伊藤仁斎、伊藤東涯、荻生徂徠、太宰春臺、服部南郭、大内熊耳、稻垣白巖、松崎惟時

（3）鹿兒島出身、あるいは縁の儒学者、文人、僧
南浦文之、志賀登龍、児玉宗因、日高為純、田中国明、山田君豹、山本正誼、天桂、深見玄岱

（4）その他の日本人儒者

貝原益軒、人見竹洞、林鷺峰、林鳳岡、林信充、梁田蛻巖、今井魯齋、安積澹泊

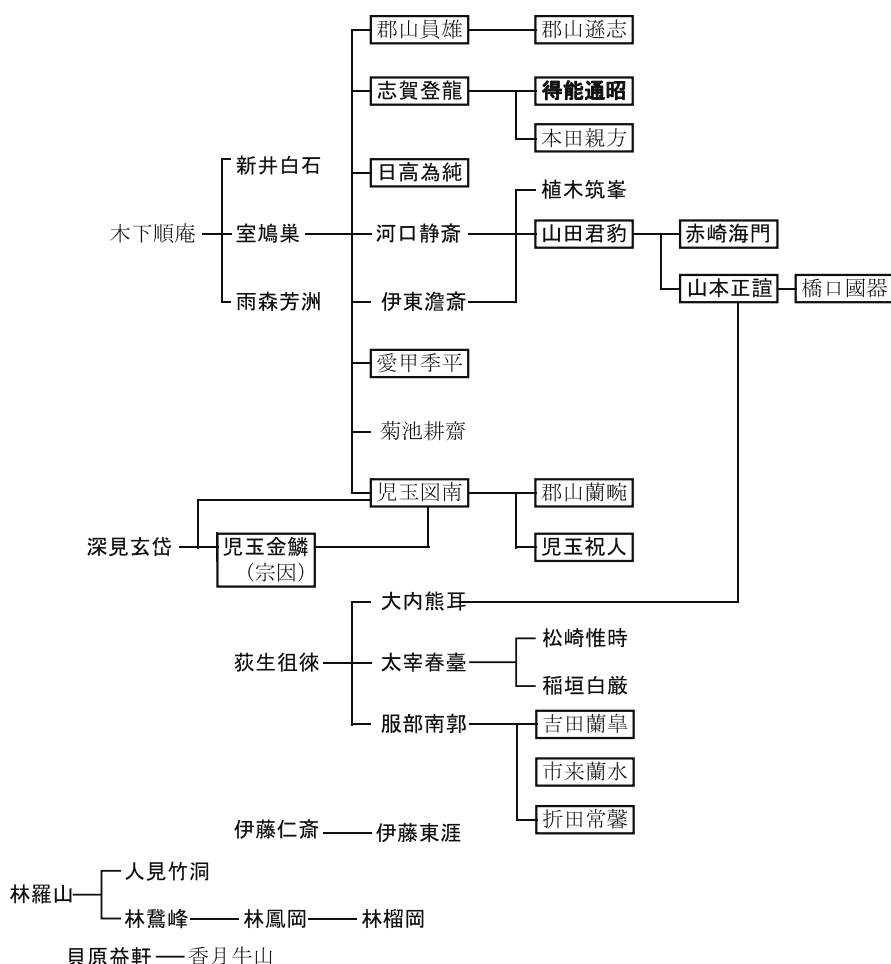
（5）中国および琉球の文人、学者
朱舜水、蘇東坡、白居易、文天祥、李至、李堯夫、葉子能、程順則

（6）その他

長井貞宗、藤原雅常、本多忠統

「藻彙編」をめぐる薩摩藩の儒学者関係図

(武藤長平『西南文運史論』収載図を参考とした。
 □は薩摩藩士を、ゴシック体は「藻彙編」に
 詩文を収録する者をさす。



先述したように、安永二年（一七七三）に薩摩藩主島津重豪は藩校造士館を建設したが、初代の教授となったのは、児玉祝人の推挙によった山本正誼であった。山本は、室鳩巢の門人である山田君豹の弟子であり、かつ荻生徂徠の弟子である大内熊耳の門人でもあった。朱子学（宋学）を信奉する室鳩巢の流れと、これを批判する徂徠の一派は相対立することもしばしばあったが、詩文の創作を重視するという点では共通していた。十八世紀前半を中心とする文藝重視の傾向に竿さす形で、文章や詩の腕を磨くため、多くの文章が書かれ、読まれ、写された。通昭も自身の作文のための模範とすべき文章を多く蓄えていったものと思われる。こうして集められた文章や詩が整理され、「藻彙編」と名付けられたのであった。

以下、主要な作者を紹介しつつ、薩摩藩士との関わりについて述べていく。

室鳩巢は、備中英賀の人。明暦四

年（一六五九）生。木下順庵門。同門に新井白石、雨森芳洲らがいる。寛文十二年（一六七二）前田綱紀に出仕し加賀藩儒となり、正徳元年（一七一一）、新井白石の推挙によって幕府に仕え、朝鮮通信使の応接役を務めた。享保十四年（一七二九）に江戸城西丸（將軍世子徳川家重）侍講となる。享保十九年（一七三四）八月十二日没。室鳩巢には薩摩藩士の児玉図南、志賀登龍らが入門。河口静斎の「吾黨小録」（伊地知季安『漢学紀源』収録）には、室鳩巢に師事した者の中に児玉図南、志賀登龍の名が見え、また『古今諸家人物志』（明和六年刊）には鳩巢門人として愛甲季平、児玉図南の名が挙げられている。

河口静斎は、江戸の人。元禄十六年（一七〇三）生。室鳩巢の高弟。武州川越藩の儒臣（後、藩主松平直矩の転封により姫路藩儒、前橋藩儒となる）。宝暦四年（一七五四）没。著書に『斯文源流』、文集に『芋山集』がある。『古今諸家人物志』（明和六年刊）では静斎の門人として、岩瀬行言、山田君豹、和田邵、井上復、近藤篤、浅岡之冀、植木金（筑峯）、瀧内如明があげられている。この中で薩摩藩士は山田君豹だけであるが、静斎は君豹の他に郡山蘭畠ら多くの薩摩藩士を薫陶し、造士館における鳩巢派の地位を強固なものにした。静斎という存在はあまり知名度が高くない。しかしながら、近年、肥前の鹿島藩主鍋島直郷との交流が注目されている（『鹿島鍋島藩の政治と文化』）。鹿島藩の屋敷は、麻布竜土町にあり、静斎の居宅は同じく「麻布中屋敷」（前掲『古今諸家人物志』）であった。芝の薩摩藩邸ともさほど遠くはなく、薩摩藩士が通いやすい場所にいたことも相俟って、静斎が薩摩藩士へ与えた影響は大きなものがあつたことは認識しておくべきであろう。次の資料は「旧鹿兒島藩學制

沿革取調要目」（鹿兒島県立図書館蔵『薩藩学史二』所収）である。

學校ニテ出版翻刻セシ書籍目録、及藏書ノ種類部數

童蒙須知 芋山文集

月洲詩集 四書山崎點 五經全

孝經

右、部數不詳

藏書ノ種類ハ、国書及十三經、廿一吏詩文章雜書、大凡備ハラザルモノナシ、

この資料は近代になってからまとめられたものであり、その根拠となつた資料を確認する必要があるものの、鳩巢派の学者が多数を占めた造士館の書籍の書目として注目される内容を有するものである。それは、藩校造士館の出版書籍（薩摩府学蔵版本）として河口静斎の文集『芋山文集』と山田君豹の漢詩集『月洲詩集』が挙げられている点である。寛政九年（一七九七）に山本正誼序を付して刊行された朱熹の『童蒙須知』、あるいは島津斉彬がその世子時代に刊行した山崎嘉点の『四書五経』（弘化二年刊、嘉永七年再刊）および「孝経」（天保十三年刊）、これらが実際に府学蔵版本として刊行されているのに対し、先の二者は版本の存在は確かめられていない。「日本古典籍総合目録データベース」によれば、『瀕山文集』（『芋山集』で立項、両者は同じものと推定する）は祐徳稲荷中川文庫に、『月洲詩集』（『月洲先生詩集』で立項、同上）は鹿兒島県立図書館および東京大学史料編纂所（島津家本）にそれぞれ写本があるだけである。ただし、後者については、東大本の見返しが刊本の体裁を

とつていることが注目される。見返題の左に「皇都 北村氏梓繡」とあり、藩版ではないが京都の書肆（平野屋善兵衛か）が刊行した可能性があり、また、刊行を予定して稿本が作成されていた可能性も否定できない。その傍証となるのが、『苧山集』の序文である。

祐徳稲荷中川文庫本には序文が残らないが、東京都立中央図書館蔵『静斎文集』は、近代の写本ながら柴野栗山および菽慎庵の二つの「苧山集序」が収録されている。前者によれば、赤崎海門（彦禮）が栗山に「苧山集前後編二十一巻」を持つて序文を求めたこと、後者には菽庵が薩摩に来た時、赤崎海門を通じて山本正誼と知遇を得て、山本が「先師之師有遺文、曰苧山集藏於我学」で、病気でそれを広めることができずにいるが、主君（島津重豪）に願ってこれを出版しようとしているということが語られている。

右に引用した資料が確かな内容を持つものであるとすれば、ここから見えてくるのは、これが薩摩藩内で学ぶべき漢詩、漢文の手本であり、山田君豹がその師の師である室鳩巢の文集の刊行に尽力したように、山本正誼、赤崎海門らは藩主の助力によってこれを出版しようとしたのではないかということである。そう考えると、『通昭録』の中に『苧山集』の多くの文章が収録されていることも至極自然なことであると言える。

植木筑峯（金）は静斎の弟子であるが、伊東澹斎（悠哉）とともに『鳩巢先生文集前篇』および『同 補遺』の編纂者となり、『後編鳩巢先生文集』では序を書いている。常州真壁郡出身の儒者で、諱は金、字は子蘭、号筑峯。前掲『古今諸家人物志』によれば、その住居「有竹居」は「東都本八丁堀五丁目」にあった（『通昭録』巻二十、植木金「有竹居記」参照）。

この他、福岡藩儒で経史、本草から多くの著述を刊行、もともと宋学を信奉するが晩年は古学に傾いた貝原益軒（一六三〇～一七一四）、木下順庵門で対馬藩儒として日本と朝鮮の橋渡し役を務めた雨森芳洲（一六六八～一七五五）、古学を提唱した京都の伊藤仁斎（一六二七～一七〇五）、また仁斎の思想を継承、発展させた古文辞学派の荻生徂徠（一六六六～一七二八）、徂徠門で経世済民の方面から独自の主張をなした太宰春臺（一六八〇～一七四七）、詩文に優れ詩酒文雅をこととする文人として生涯を送った服部南郭（一六八三～一七五九）らは、ここで改めて紹介するまでもないだろう。

収録された多くの文章は次に掲げる版本に収録されている（※は通昭没後の刊行）。

室 鳩巢 『鳩巢先生文集前編』十三卷十冊（宝暦十三年刊）

『補遺鳩巢先生文集』十一卷六冊（ 同右 ）

『後編鳩巢先生文集』二十卷十五冊（宝暦十四年刊）

雨森芳洲 『橋惣文集』二卷二冊（寛政六年刊）*

太宰春臺 『春臺先生紫芝園稿 前稿』序目一冊、五卷五冊

（宝暦二年刊）

『春臺先生紫芝園稿 後稿』十五卷十五冊、附録一冊

（宝暦二年刊）

南浦文之 『南浦文集』三卷三冊（慶安二年刊）

貝原益軒 『自娛集』（正徳四年刊）

朱 舜水 『舜水先生文集』（正徳五年刊）

服部南郭 『南郭先生文集』初集～四集 全四十卷四十冊（享保

十二年（宝暦八年刊）

荻生徂徠『徂徠集』文部十二卷六冊（元文二年刊）、書部十一卷八冊（元文五年刊）

通昭が版本から抄録したのか、それとも写本として流布した文章を一つ二つと集めたかどうか、詳細は不明ながら、これらの多くは版本で流布したのは事実である。しかしその一方で、刊行されることのなかった河口静斎や植木筑峯の文章がまとまった形で収録されているのは意義がある。

また、鹿兒島や南九州に関わる学者や文人たちの文章を収録していることも特徴として挙げてよいだろう。最も多いのが薩南学派の儒学僧であり、島津家久に仕えた南浦文之である。その次に収録数が多いのは山田君豹（月洲）であり、「補遺鳩巢文集跋」「祭静齋先生文」「書中西長政壽像」「河口雅徧墓誌銘」「振衣亭記」「相良家譜序」「物徂徠論」「勸學說」「辨復讎」が収められている。『月洲遺文』に収録されていないものがほとんどである。その他、薩摩藩の記録方役人（奉行）を務めた志賀登龍、日高為常（為純）、田中国明、児玉金麟（宗因）、町田俊雄、川上親央の文章も貴重である。

通昭は島津家の歴史を紀伝体で叙述した自著『西藩野史』（宝暦元年序）の中で、児玉宗因「護摩所鐘銘」、川上親央「彌勒院鐘銘」、志賀登龍「出水加志久利鐘銘」、「慈徳廟祭文」を引用しているが、これらはいずれも『通昭録』巻二十一に収録されている。二十三代宗信の死に際して作られた「慈徳廟祭文」は、『西藩野史』によると島津久門の作文ということであるが、『通昭録』収録の本文には作者名が無く、目録には「釈」とあるのみである。また葬儀の

日および干支が「何月何日干支」となっている。あるいは、島津久門（後の重年）の代わりに僧侶が認めたものが通昭に伝わったものかも知れない。

漢詩では、木下順庵以来、唐詩を重んじる傾向は徂徠学派に至りいよいよ強まる。『通昭録』には白居易・杜甫の詩は見られるものの、李白を初め、代表的な唐代詩人を欠いている。通昭の詩に対する嗜好が反映しているのかも知れない。漢詩においても文章と同様、鹿兒島のことを詠んだ作品や、薩摩藩士の作品が目みされるところである。前者では、「麴府八景」「坊津八景」の詩、後者では「賀榎本氏慈母七十初慶」「萱堂七十壽賀會詩」がある。

最後に、『通昭録』における通昭の後輩たちの影響について触れておきたい。後輩とはすなわち山本正誼（一七三四～一八〇八）と赤崎海門（一七四二～一八〇五）である。彼らが河口静斎の『苧山文集』刊行に奔走したと思われることは先述したとおりであるが、徂徠学派の大内熊耳らの詩文が『通昭録』に収められているのも山本が通昭に提供した可能性が高く、また赤崎海門の歌は「赤崎海門歌集」として『通昭録』の中に収録されているほどである。詩文の提供源のひとつが、通昭よりそれぞれ五歳と十三歳若い彼らであったことは十分ありうることであろう。山本、赤崎は藩校造士館の教授を歴任する。八代藩主島津重豪によって推し進められた開化政策の象徴の一つがこの造士館である。藩校造士館を中心として行われた文事的一端が、この『通昭録』に現れていると言えるだろう。

参考文献

『近世儒家文集集成 鳩巢先生文集』（杉下元明編、ペリカン社、

平成三年)

『近世儒家文集集成 春台先生紫芝園稿』(小島康敬編、ぺりかん社、昭和六十一年)

『近世儒家文集集成 南郭先生文集』(日野龍夫編、ぺりかん社、昭和六十年)

『近世儒家文集集成 徂徠集』(平石直昭編、ぺりかん社、昭和六十年)

『近世儒家文集集成 紹述先生文集』(三宅正彦編、ぺりかん社、昭和六十三年)

『近世儒家文集集成 蛻巖集』(徳田武編、ぺりかん社、昭和六十三年)

『芳洲文集 雨森芳洲全書 二』(関西大学出版・広報部、昭和五十五年)

『研究成果報告 鹿島鍋島藩の政治と文化』(国文学研究資料館 公募共同研究「江戸時代中期文人大名に見る学芸と思想に関する総合的研究」編、平成十年三月)

卷十九、卷二十八に関する解説を終えるが、以下、調査の過程で判明した事実等を記しておきたい。この場所で述べるのが適当かどうか聊か疑問なしとしないが、『鹿児島県史料集 52』に附された解説は大幅な改定が必要となったため、『通昭録』の基本的な事項に関し敢えて記述をすることにした。

『通昭録』について

丹羽謙治

一 得能通昭とその家系

得能家および得能通昭に焦点を当てた先行研究に林匡「薩摩藩記録奉行得能氏について」『鹿児島県史学』第五十号、平成十七年三月)がある。この論考は、十八世紀後半から幕末にかけて二人の記録奉行―得能通貫と通古―を輩出した得能家について、「得能家諸留」(東京大学史料編纂所、島津家本)に拠りながら検討したものである。

右の林氏の論考は、氏の記録所に関する研究の一環をなし、江戸後期の得能家に限定して述べられているため、通昭以前の得能家については通昭の曾祖父の代まで遡及するのみである。『通昭録』のことを語るためには、もう少し時代を遡って考える必要があるであろう。そこで、東京大学史料編纂所蔵『越智姓得能氏系図』(大正九年写本、天明初年までの内容。以下『系図』)を基にして得能家を眺めてみよう。近代に筆写された一系図に依拠するのは慎重さを欠く誤りを免れないが、個々の記述は他の資料とよく合致することから『系図』に基づき述べることにする。

得能家は伊予の河野氏の一族で、姓は越智である。南北朝時代に南朝に仕え、勤王で名高い得能通綱はこの祖先に当たる。『系図』によれば、通綱の三代の後、河野孫九郎通任が伊予国より大隅国柏原に來たり、島津元久に仕え同国村山を領したとする。その四代後の通能は島津勝久に仕えるが、天文三年(一五三四)十月に島津実久により谷山神前城で自殺させられた。これはその弟の通吉が島津

諸留』。『系図』では得能家の家格については判然としないが、通昭の時代に一代新番となり、通昭の子、正助通貫の代に代々小番に家格は上昇していった。

綱貴の命により姓が河野から得能に変わったことにより、得能家が代々藩主に近侍し、経書を講じたり、文書や道具類などの管理を行ったりする家柄であったことが見えにくくなったものと思われる。右に見てきたように、通宣・通顕・通古らは学問を以て藩主の側近くで勤務する実務官僚であり、通昭が、諸記録を博搜して文章や詩歌を蓄えたり、『西藩野史』を初めとする史書を編纂したりしたのも、右のような家系的な繋がりが大きな要因であったと言える。見方をかえれば、通金、通倫、通昭の三代は、藩主の側近に仕えることが常態であった家にあつては雌伏の時代であつたと言えるかも知れない。記録所の体制が整備されていく時代、得能家は他家に遅れをとった状態であつた。『通昭録』に法令、故実から和歌、漢詩文、そして雑多な情報まで貪欲に記録が集められているのも、家を興さんとする通昭の意志の力を感得することができようと思われる。

なお、鹿児島城下には通昭の家とは別の河野氏が複数確認できる。『薩陽武鑑』には、そのうちの一つ、「一王伊右衛門通貞三男 越智道重」を家祖とする河野氏が載っている。この家は島津義久の時代に能太夫として仕えた「一王雅樂助」(『上井寛兼日記』)から出たものと推定され、「高山河野家系」と『薩陽武鑑』に見えることから、大隅国高山から移った家であることがわかる。この家からは家老、若年寄、大目付等、藩の要職に就く者が出ている。たとえば、通昭とほぼ同時代の河野外記通古である。この河野家と得能家との

繋がりが、当時どうであつたのかを具体的に示す資料は見出していないが、得能家が城下南部の下荒田に居住、敷地も狭いのに対して、河野外記家は北部の大竜寺の近くに五百坪前後の広さの屋敷を構えており、家格の違いは明らかである。

一方、通昭の男、通薫(新助)から分かれた得能家からは、近代になって大蔵省印刷局の基礎を築いた得能良介(諱は通生)、通昌父子が出ていることも付け加えておこう。

では、次に通昭の履歴を見ておこう。

享保十四年(一七三九)

九月二十五日生。初名、彦太郎。父は通倫。母は朝隈氏。

元文四年(一七五五)

二月一日、元服。八月十五日、藩主継豊に初目見。

宝暦四年(一七五四)

八月一日、父通倫江戸で没。十一月八日、家督相続。

宝暦六年(一七五六)

八月二十八日、通称を左平次と改める。

明和三年(一七六六)

十月十八日、二男弥次郎(正助、通貫)誕生。

明和八年(一七七二)

十二月二十四日、長男弥太郎没。享年九。

安永六年(一七七七)

六月十九日、御徒歩目付となる。十二月十六日、大島へ立つ(『丁酉大島紀行』)。

安永七年(一七八八)

一月二十二日、奄美大島着。

安永八年(一七八九)

春、奄美大島に横目として赴任(『大島代官記』)。

安永九年(一七九〇)

七月二十八日、郡奉行となる。九月『通昭

録総目録』成る。

天明元年（一七六一）

藩命により大隅方面巡検（「財部紀行」「福山紀行」）。

寛政元年（一七八九）

四月十七日没。享年六十一。松原山南林寺墓地に葬る。法名、遺愛院去後見思居士。

通昭は、儒学を志賀登龍（弘毅先生）に学んだ。その様子は『通昭録』巻一の「還塞簡記」などから窺うことができる。鹿兒島西郊に営まれた登龍の書斎精義齋に通つて講義を受けた。登龍はもと日向高岡郷士で、初め京都の松岡恕庵（怡顔齋）に学び、後に室鳩巢に師事、宝暦四年（一七五四）没。享年七十。この年は河口静斎の没年でもある。当時通昭二十六歳。通昭は十代から二十代の血氣盛んな時期に鳩巢の二人の弟子から薫陶を受けたことになる。

郡奉行としての通昭の活動は、『通昭録』巻四十七・四十八収載の「丁酉大島紀行」「財部紀行」「福山紀行」「天明癸卯紀行」などから知られ、また橘南谿『西遊記』（寛政七年刊）にその活動の一端が書き留められている。それは正編巻四の「孝行」の話で、通昭が勸農のため巡回の折、薩摩国小山田村の孝子、太郎八（九才）と万亀（七才）の兄妹が、産後体調のすぐれない母に代わつて農作業に従事し、母に付き添い尽くした話を庄屋から聞き、藩主に報告し、孝行者として顕彰したというものである。

二、諸本

現在『通昭録』は、次の三つの機関に所蔵されている。

東京大学史料編纂所

（A）四十冊

（B）五冊（抄）

（C）十九冊（県図本の抄写）

鹿兒島県立図書館

七十八卷三十九冊

都城島津邸

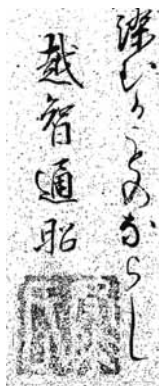
（A）四十冊

（B）（正確な冊数不明）

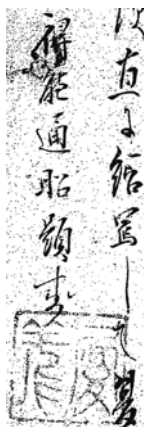
このうち東京大学史料編纂所（A）（以下「東大本」）は、冊の冒頭（つまり奇数の巻）の目録題の下など随所に「得能／氏」（白文）「通昭／之印」（朱文）、「恩基」（白文）、「慶／笈」（朱文）、「□」（白文）といった印が捺されている（図版参照）。書体や料紙の質などから見ても、通昭自筆か否かはさておき、得能家伝来の本であることは間違いないと言える。

東大本（A）、巻五、序

同、巻二十一、目録



同、巻四十九、序



（東京大学史料編纂所蔵）

以下に東大本（島津家さI・1・12・33）の簡略な書誌を掲げる。

体裁 大本 総目録一冊、本文七十六卷三十九冊

(本文八十巻のうち、巻十八、巻三十六、巻七十七、
巻七十八は元来なし。後述)

表紙 茶色無地 縦二十四・七糎、横十六・四糎

外題 題簽(縦十四・五糎、横二・九糎) 表紙左肩

「通昭録 一(〽卅九)」

表紙の中央に「還塞箭記」などと朱書する冊もある。

本文 半葉九行

内題 「通昭録卷之一(〽八十)」(但し、巻によつては巻数が空白のものあり)

尾題 「通昭録卷之一(〽八十)」(同右)

印記 「得能ノ氏」(白文、二種類あり)、「通昭ノ之印」(朱文)、「恩基」(白文)、「慶笈」(朱文)、「□」(白文)、「島津家ノ編輯所」(朱文)、「島津家編輯所圖書・大正一二年二月二〇日受入」「引継」(楕円、墨印、年月は墨書、中央に「3029」)

次に東大史料編纂所(B)であるが、これは大本五冊。「元國事鞅掌史料」の墨印が捺されていることから、明治中期に企てられた明治維新資料の蒐集にかかわつて、写されたものであると判明する。本来は六冊であったが五冊が現存する。「島津家編輯所圖書・昭和二年五月十三日受入」とある。紅色刷の罫紙(十行)に筆写されており、漢字と片仮名で写されているのが特徴である。抄録されたのは、後掲の【表2】の通りである。諸制度など統治関連の資料を中心に抜き書きされており、これと対照的に和歌、漢詩文は写されていない

いことがわかる。

もう一つの東大史料編纂所(C)は大本十九冊。第十九冊の後表紙見返しに次のようにある。

右通昭録原四十冊

鹿兒島縣^{序本} 明治三十七年抄寫 (引用者注「序」は鉛筆書き)

右にいう「鹿兒島縣(序)本」とは、現在の鹿兒島県立図書館所蔵本(県図本)に他ならない。県図本は巻一の後表紙見返しに「明治十三年謄寫全部/四十冊内十八 三十六 冊/原本闕」とあるとおり、西南戦争終結間もない明治十三年(一八七九)に写された。鹿兒島県が主体となつて資料の筆写を行った時代のもので、この時期の写本は一般に「鹿兒島県序本」と称されることが多い。鹿兒島県立図書館は明治四十五年(一九一二)四月の開館で、私立鹿兒島教育会附属図書館を基に開設された。従つて、(C)が写された時代(受入印「東京帝国大學附属圖書館・明治卅七年十二月十九日」が捺されている)はまだ県庁に所蔵されていた時代のことであつた。

この(C)も抄録であるが、(B)よりも量が多い点が異なるものの、やはり文学系の資料が写されていないことが明らかである【表2】(参照)。

都城島津家から伝来した資料は現在都城島津邸の所蔵にかかる。ここには二種類の『通昭録』があるが、両者は別系統のものではなく、東大本(得能本)を写したものの(A)と、それをさらに謄写(透き写し)したものの(B)という関係である。ただし、謄写時期や経緯など詳細は不明である。

まず都城本(A)について見てみよう(以下「都城本」と表記す

る場合はこの本を指す)。この本の成立事情については、目録の扉に、得能大助(通昭の嫡孫)の榎本新九郎宛書簡が写されており、これによって『通昭録』の諸本の関係が判明する。左に引用する(読点は引用者)。

写

尚々餘り事々敷奉存得共、御受取書宅通御認
御遣置被下候へハ至而辱奉存候、

御手紙拝見仕候、通昭録三拾九冊一箱差上申候間、御受取
被下度、左候而、右者全人格別成儀も無御座候得共、愚祖父
編集仕置、外ニ扣逆も無之、是迄脇方江者一切差出さる

事御座候得共、被仰聞趣無據差上申候、其段

先方様江茂被聞召上、右之御考を以御取扱被成下度、偏ニ
奉冀候、以上

八月五日

外ニ壹冊有之、無據入用有之候間、跡々差上可申候、
榎本新九郎様 得能大助

内容は、次の通りである。『通昭録』三十九冊一箱を届けるが、これは特別な物ではなく、祖父の通昭がまとめたもので、現物のほかに写しもないのでこれまで他所へは全く出したことはなかった。今回切なるご依頼ということで送った。このことは先方様(都城島津家)へも知らせほしい。取扱いもそのようにお願いしたい。なお、外に一冊あるが、どうしても必要なので、後から送る。大袈裟だが、領収書を一通お送り願いたい。」

得能大助は、通昭の嫡孫である通古の通称で、藩主斉興が大隅守に叙任、「大」の字の使用が遠慮仰せ付けられたため、天保三年(一八三二)六月に改名願を差出し、彦左衛門と改めている。そのため、右の書簡は天保二年以前ということになる。一方、大助の父(通昭嫡男)で記録奉行を務めた通貫は、文政六年(一八二三)五月に病死していた。大助が自家の蔵書を自由に貸し出すことができる立場にあるのは、それ以後のことであろう。したがって、文政六年(一八三三)〜天保二年(一八三一)の期間に絞り込むことができる。

・卷二十三、二十四
「用紙百一枚 福富仲助写」

・卷二十五、二十六
「 七 竜岡資禎

藻藁編 津曲兼長 相書写

八 天保辛卯秋八月廿九日収筆 「

・卷三十七、三十八

「 種子田写

紙数百枚

糺合相済

「

右から天保二年(一八三一、辛卯)に筆写および校合が、複数の

役人たちの手によって行なわれていたことが明らかとなる。大助書簡の「八月五日」も同年のことと考えるのが自然であろう。

次に宛先の榎本新九郎についてであるが、榎本は当時、都城の「中抑（中押）」の役職にあった鹿児島城下士である。『旧薩藩御城下絵図』によれば城下新屋敷に屋敷があった。『庄内地理志』巻三十八に載る「中押（中抑）」の一覧の中に、

榎本新九郎貞固

同（文政―引用者）十年丁亥四月（久統之時）代有明為中押

石原龍次郎近辰（後称助一）

天保六年乙未四月（久本之時）代貞固為中押

東郷一介実賢

天保八年丁酉五月（久本之時）代近辰為中押

山田増右衛門有淳

天保十三年壬寅五月（久本之時）代貞固為中押

とあり、榎本新九郎が文政十年（一八二八）四月より天保六年（一八三五）四月までその地位についていることが明らかである。

「中抑」は近世前期に置かれた「上置」とは本来の目的が異なるものの、両立期を経て、十七世紀末以降幕末まで「中抑」のみが置かれた。人員は本藩と都城とそれぞれの推薦者一名ずつ計二名置かれ、その職掌の性格は当初の監視役（目付）から次第に取り次ぎ役に変化していくとされる（山下真一「鹿児島藩における都城『上置』と『中抑』」『地方史研究』二七八）。江戸後期の天保年間においては各種の取り次ぎを任としていたと考えてよい。『通昭録』の貸借の

周旋を、榎本が行なったものと見てよいだろう。榎本氏と得能氏は甲突川を隔ててはいるが隣の郷中であり、また『通昭録』には榎本氏に関連する文章や漢詩文なども散見され（巻二十八「賀榎本氏慈母七十初慶」）、両家は親しい関係にあったと推定されるのである。当時、『庄内地理志』は完成していた。『地理志』の資料にというよりはその編纂の余勢を駆って資料蒐集が図られたものと思しい。

三、諸本の関係

以上、諸本のあらましを見てきたが、次に問題となるのはその相互の関係である。東大本（得能本）は、得能大助が榎本新九郎を通じて都城島津家に貸し出したものであると推定される。得能大助が原本を筆写して島津家に献呈したわけではない。その後、島津家では転写作業が行われ、原本は得能家に返却されたはずである。これは先に見たように天保二年（一八三一）の秋のことであった。その後、何らかの事情で副本を作る必要ができたよう、転写された本から再転写（すき写し）されたものと推定する。

県図本（鹿児島県庁本）は、明治十三年に写されたが、東大本かその流れを汲む本からの転写であり、都城本からの転写ではない。

巻二十一「大日本國鎮西薩州娘媽山碑記并銘」（傍線は引用者）

〔東大本〕

（頭書「騰」）

頭聖騰雲駕空

〔都城本〕

（頭書なし）

頭聖騰雲駕空

〔県図本〕

（頭書なし）

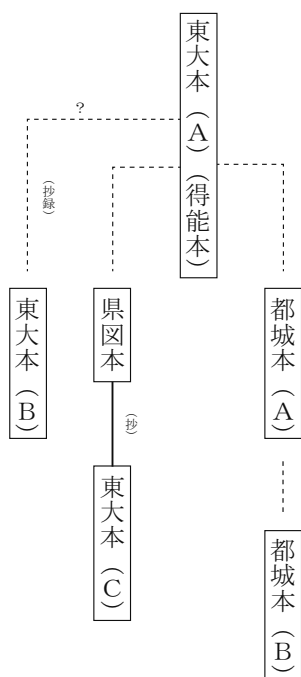
頭聖騰雲駕空

(頭書「刺」)
邵州刺史
(頭書なし)
邵州刺史

(頭書「隣」)
誕后里隣
(頭書なし)
誕后里隣

東大本で欄外(頭書)に修正された文字が書かれているが、都城本では、本文に修正が反映されている。ところが、県図本では、本文は直すことはない。もし、都城本を写したものが県図本であるとすれば、右の本文ではいずれも「騰」「刺」「隣」となっていたはずである。

以上の検証結果を踏まえて、諸本間の関係を図で示すと次のようになろう。

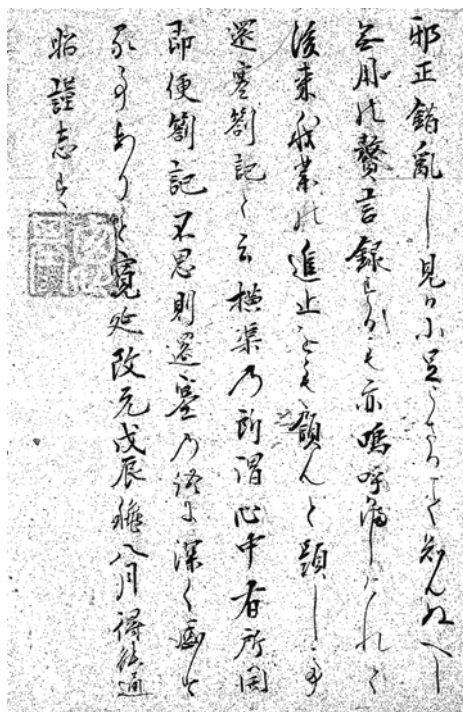


四、成立

『通昭録』の成立については、総目録の序文年記によって安永九年(一七八〇)の成立とされてきた。一方で、県図本の巻一「還塞簡記」序文に「寛政改元戊辰秋八月」とあることから、成立年次についての疑問が提出されていた(『日本歴史地名大系47 鹿児島県の地名』。「還塞簡記」序文については、東大本に「寛延改元戊辰秋八月」とあることから県図本の書写段階での単純な誤写とみなすことができる(図版参照)。

しかしながら、厳密にいうと、総目録の成立した安永九年をもって本書の成立といえるわけではない。総目録の序文には、「見る所を抄出し聞く所を筆記し年を積て七十餘巻をなす、所謂通昭是なり」とし、続けて「又、雑録筆録漫録あり、通計百数十巻」とある。安

東大本(A)、巻一、序末(東京大学史料編纂所蔵)



永九年段階で通昭録は「七十餘巻」となっており、その他に雑録雜記が数十巻あり、合計百数十巻に達していたという。総目録を詳しく見てみると、各分類項目の下に該当する巻が記されているが、それをみると「七一」を限度としていることがわかる。総目録序文の「七十餘巻」と合致しているといえよう。

但し、『通昭録』の巻七十前後の内容については若干の問題を含んでいる。総目録に唯一「七一」と記されているのは「敬齋説」（分類項目でいうと「著述 三十四」）である。「敬齋説」は薩摩藩士小濱貞幹の号について通昭が認めた一丁分の長さの漢文で、東大本では第三十六冊目のほぼ中程に位置している。その前には出典未考ながら漢文の抄録、大島登世勝の「賀仁政序」（題名は総目録による）など四十七丁ある。また、「敬齋説」の後には二丁の白紙をおいて藪震庵の「眞知説」「與物茂卿」などの文章が続く。総目録に従えば（通昭が単純な誤りの可能性も否定できない）、「敬齋説」までが七十一巻ということになる。問題は、総目録では「七十」となっている「賀仁政序」が実際には第三十六冊（巻七十一）の位置にあることである。また、第三十六冊の冒頭の内題には「通昭録巻七十二」とあり、第三十六冊全体が巻七十二であるように受け取られる。こうした矛盾をどう見たらよいのであろうか。

現存する『通昭録』は巻七十二〜七十六、七十九、八十を含んでいるので、これらの巻は総目録完成後増補された可能性が高いといえよう。

また、巻七十一以前においても、安永九年以後の年号が散見される。その例を左に掲げる。

卷四十七『落葉集 三』

○「福山紀行」（「辛丑」は天明元年）

辛丑の秋 公の仰こと奉りて隅州福山へ赴きけり、

○「財部紀行」

天明元年十二月中の八日 公の為に隅州財部へ赴きける、吉野にて雪の降ければ、

卷四十八『落葉集 四』

○「天明癸卯紀行」（「癸卯」は天明三年）

天明癸卯ノ春カシコキ仰ト奉リ日向大隅ノ地ヲ巡リ民ニ農ヲ勸メテ：

これらは、安永九年の総目録作成の後、追加されたものであり、それぞれのまとまりの末尾（たとえば『落葉集』でいえば全四巻の最終巻）に存在することもその証左であるといえるだろう。

このように、『通昭録』は総目録が完成したのちも増補され続けたと考えられるのである。また、東大本を見ると、巻十八、巻三十六、巻七十七、巻七十八はもともと作成されていなかったと推定される。東大本は、例外はあるものの二巻で一冊に纏められ、これらを転写した都城本、県図本もこれを踏襲している。当初から二巻で一冊を基準としているため、『通昭録』の中の大きなまとまり（例えば「和漢制度考」「藻藁編」「石馬集」「越昭随筆」など）はその始まりが冊の途中からではなく最初に置かれるようになったと推定される。そのため、どのようなことが生じたか。巻十三から始まる「和漢制度考」は各巻に一巻ずつ配置され巻十七で終わる。「制度考」五が

入る第九冊は「制度考」が終わったあと、実に六十七丁分の白紙が続くことになる。結局、巻十八の本文はなく、冊を改めて第十冊に巻十九「藻彙編」一が収録されることになった。第十八冊と第十九冊との間でも同じ現象が起きている（その結果巻三十六は存在しない）。なお、七十七、七十八の両巻がない理由は不明である。

今回底本にしている県図本は、先述したように東大本もしくはその系統の本を写したと考えられるが、筆写段階での誤りも多く見られるものの、概ね対象とした本を忠実に写していると思われる。つまり、本文の脱文や独特の異体字、宛字―例えば、「諸侯」を「諸候」「于」を「干」など―は原本に由来するものであることを確認しておきたい。

最後に得能通昭の墓について述べておく。友野春久氏より得能家の墓碑が鹿児島市武岡墓地に現存するとの教示を得た。得能家の墓は旧南林寺墓地にあったが、南林寺墓地の廃止に伴い、大正十年七月十四日武岡墓地に移され、その際、いわゆる家墓が建立された。現存するのはこの家墓である。現在、この墓碑は無縁墓と見なされて本来の位置とは別の場所に移されている。家墓には通昭（墓碑には「昭平」）他の命日が彫られている。もともと南林寺にあった通昭の墓には、義弟であった山本正誼の撰にかかる次の墓碑銘が彫られていたはずであるが、大正期の時点で廃されたのであろうか。次はその墓碑銘（『秋水先生文集』所収「得能左平次君之墓誌」、句点
は引用者）。

君諱通昭、自稱左平次、姓得能氏、本藩鹿児島人、考諱通倫、自稱仲兵衛、君仕為群奉行領勸農事頗以惠愛見稱、寛政元年四月十七日死、年六十一、法名遺愛院去後見思居士、葬松原山、娶村田氏、男四人、長彌六郎、早死、次正助、為嗣、次新助、為從弟源右エ門、季善助、出為徳永氏、後女一人、適小倉氏、初仲兵衛君娶朝隈氏、生男郎左平次君、生女、適伊東氏、朝隈氏先死、再娶上野氏、生女、適但馬氏、上野氏又先死、又娶野田氏、生男、出為牧瀬氏、後諱幸亨、自稱正太、野田氏又以山本氏之子入郎正誼也、嗚呼正誼幼孤、乃從母氏畜於得能氏、而仲兵衛君視予猶子、佐平次君視予猶弟也、養我誨我俾、至於成立、嗚呼徵斯人之力、安得至於今日耶、而所恨者仲兵衛君冢木成、拱母氏及母弟正太又已没、世爾然猶賴左平次君之存以為修身之所依皈、嗚呼孰謂君遽去吾而逝乎、因誌其墓、以悲之而為之銘、銘曰于以葬之南林之原松榮栢茂庶利後昆、寛政二年四月九日、歩卒將行府學教授事山本正誼謹撰并書

参考文献

- 塩満郁夫・友野春久編『新たな発見に出会う 鹿児島城下絵図散歩』（高城書房、平成十六年）
『復刻版 得能良介君傳』（財団法人印刷朝陽会、平成十二年）
林 匡「薩摩藩文書奉行及び初期の記録奉行について」（『鹿児島史学』第52号、平成十九年三月）

本稿を成すにあたり、左の諸氏および機関にお世話になった。

高津 孝 宮崎修多 友野春久 中山右尚 林 匡

内倉昭文 崎山健文 山下真一 米澤英昭 内山 弘

鹿児島大学附属図書館 東京大学史料編纂所

特に高津孝氏には、漢詩の出典や漢文の解釈について数々のご示教を賜った。

また、『通昭録』本文作成には次の諸氏に補助を願った。

杉焼桂子 采野春香 渋谷雪絵 洲上あゆみ 芳野真実

ここに厚く御礼を申し上げる次第である。

【表1】『藻彙編』収録漢詩文一覧

- (凡例) ・題名は「藻彙編」本文のものを用いた。本文に題名がなく、目録にある場合、目録の題名を用い、〔 〕で示した。
 ・著者1の欄は「藻彙編」本文の表記を、著者2の欄は一般に使われる著者名を記した。その際『国書人名辞典』『漢文学者総覧』の項目を参考にした。
 ・年記の欄は「藻彙編」本文に見える年号を抜き出し、西歴と合わせて示した。推定のもものは〔 〕で区別した。
 ・典拠等の欄は、それぞれの漢文または漢詩の典拠ないしは同文が収録されている文献を示した。複数ある場合、筆頭のものが本文比較を行った文献である。『通昭録』よりも明らかに遅れて成立した文献には〔 〕で括った。
 ・典拠ないしは収録文献の刊年（成立年代）は、解題で紹介しているものについては省略した。

巻	番号1	番号2	題 名	著者1	著者2	年 記	典 拠 等
19	1		河守宗儒壽考序	河口静齋	河口静斎		『芋山集』巻四、〔都立中央図書館『静斎文集』〕
19	2		兒圖南傳	河口静齋	河口静斎		『芋山集』巻四、〔『事實文編』巻三十八〕
19	3		私擬策問	河口光遠	河口静斎		『芋山集』巻四、〔都立中央図書館『静斎文集』〕
19	4		暹羅王歌并序	前賢	河口静斎		〔都立中央図書館『静斎文集』〕
19	5		〔送山文蔚歸國序〕	河口子深	河口静斎	延享三(1746)	
19	6		補遺鳩巢先生文集跋	山田君豹	山田月洲	宝暦十二(1762)	『補遺鳩巢文集』巻十一
19	7		〔送山文蔚歸薩〕	韋君祥	韋君祥		
19	8		緑水島津君書室銘	河口子深	河口静斎	延享三(1746)	
19	9		送田元吉序	前賢	河口静斎		『芋山集』巻四、〔都立中央図書館『静斎文集』〕
19	10		芳洲橋先生教法	〔雨森芳洲〕	雨森芳洲		『橋樑文集』巻二
19	11		箭記	芳洲先生	雨森芳洲		『橋樑文集』巻二
19	12		論國王事與某人書并自跋		〔雨森芳洲〕		『橋樑文集』巻二
19	13		上林太史書	雨芳洲	雨森芳洲		『橋樑文集』巻二
19	14		大寶説	雨森東	雨森芳洲		『橋樑文集』巻一
19	15		論武	前賢	雨森芳洲		『橋樑文集』巻一
19	16		武國論	前賢	雨森芳洲		『橋樑文集』巻一
19	17		文質論	前賢	雨森芳洲		『橋樑文集』巻一
19	18		送芳洲先生歸封州序	河口静齋	河口静斎		『芋山集』巻四、〔都立中央図書館『静斎文集』〕
19	19		送南坡雨森君序	前賢	河口静斎		『芋山集』巻四、〔都立中央図書館『静斎文集』〕
19	20		壽鳩巢先生序	前賢	河口静斎		『芋山集』巻四、〔都立中央図書館『静斎文集』〕
20	1		志賀紀事	雨森芳洲	雨森芳洲		『橋樑文集』巻二
20	2		大島氏小傳	前賢	雨森芳洲	宝暦十三(1763)	『橋樑文集』巻二
20	3		有竹居記	植木金	植木筑峯		
20	4		晚翠軒記	河静齋	河口静斎	享保十(1725)	『芋山集』巻四、〔都立中央図書館『静斎文集』〕
20	5		鳩巢記	鳩巢先生	室鳩巢	元禄四(1691)	『前編鳩巢先生文集』巻十二
20	6		送河守國華序	河口子深	河口静斎		『芋山集』巻四、〔都立中央図書館『静斎文集』〕
20	7		題鳩巢先生遺墨後	植木金	植木筑峯	宝暦十三(1763)	
20	8		静齋記	河口子深	河口静斎	享保六(1721)	『芋山集』巻四、〔都立中央図書館『静斎文集』〕
20	9		歌涉蘆記	河口静齋	河口静斎	延享二(1745)	『芋山集』巻四、〔都立中央図書館『静斎文集』〕
20	10		送山本文學子和從薩摩侯歸國序	餘承裕	大内熊耳	〔安永二(1773)〕	『熊耳先生文集 正編』巻五(天明五年序刊)
20	11		送山子和從薩侯帰藩序	源弘休			
20	12		送山文學子和從薩其侯歸藩序	源維亮		〔安永二(1773)〕	
20	13		送山君子和序	藤忠休	大久保狭南	〔安永二(1773)〕	
20	14		衆妙館記	河口静齋	河口静斎	延享二(1745)	『芋山集』巻四、〔都立中央図書館『静斎文集』〕
20	15		群牧類編序	前賢	河口静斎		『芋山集』巻四、〔都立中央図書館『静斎文集』〕
20	16		神武嫡緒序	前賢	河口静斎		『芋山集』巻四、〔都立中央図書館『静斎文集』〕
20	17		叙四字經序	伊藤長胤	伊藤東涯		『新編故事旁訓四字経』(元文二年、大坂)桑原藩蔵・村上伊兵衛刊)
20	18		題四字經跋	埴錦	松岡伯顔斎	享保十一(1726)	『新編故事旁訓四字経』(元文二年、大坂)桑原藩蔵・村上伊兵衛刊)
20	19		題養生論跋	釈大道	大道	〔貞享三(1686)〕	『養生論』(京都大学富士川文庫蔵、写本)
20	20		風雲詩稿叙	河口静齋	河口静斎		『芋山集』巻四、〔都立中央図書館『静斎文集』〕
20	21		水哉堂印譜序	植木金	植木筑峯	宝暦十四(1764)	
20	22		題山水圖	雨芳洲	雨森芳洲		『橋樑文集』巻二
20	23		赤壁戰圖贊	前賢	雨森芳洲		『橋樑文集』巻二
20	24		壽竹徑圖序	河口静齋	河口静斎		『芋山集』巻四、〔都立中央図書館『静斎文集』〕
20	25		祭静齋先生文	山田君豹	山田月洲	宝暦四(1754)	
20	26		書中西長政肖像	前賢	山田月洲	宝暦五(1755)	
20	27		答山君豹書	伊東悠哉	伊東悠哉	宝暦十二(1762)	
20	28		澹齋先生誌名	植木金	植木筑峯	明和元(1764)	
20	29		澹齋先生碑陰記	植木金	植木筑峯	明和元(1764)	
20	30		祭澹齋先生文	植木金	植木筑峯		
20	31		登龍志賀先生墓誌銘	山常行	山本秋水		
20	32		永福靈寺記	高元泰	深見玄岱(高天嶺)	寛保三(1743)	
20	33		蘭卿字説	河静齋	河口静斎		〔都立中央図書館『静斎文集』〕
21	1		香月氏六醫仙畫像記	鳩巢	室鳩巢	享保三(1718)	『後編鳩巢先生文集』巻十
21	2		木村長門守重成賛	鳩巢	室鳩巢		『後編鳩巢先生文集』巻十八
21	3		後藤又兵衛政次賛		〔室鳩巢〕		『後編鳩巢先生文集』巻十八
21	4		題王子猷訪戴逵圖		〔室鳩巢〕		『後編鳩巢先生文集』巻十八
21	5		河口雅惟墓誌銘		山田月洲	宝暦三(1753)	
21	6		吊平忠度文并序	赤石梁田邦美景賢撰	梁田蛻巖		『蛻巖集』巻八
21	7		送梁邦彦赴明石序	鳩巢先生	室鳩巢	享保四(1719)	『後編鳩巢先生文集』巻十三
21	8		題田家種苗圖	鳩巢先生	室鳩巢		『後編鳩巢先生文集』巻十八
21	9		鐘道賛	鳩巢先生	室鳩巢		『後編鳩巢先生文集』巻十八
21	10		香月牛山先生墓碑	南郭	服部南郭		『南郭集 三編』巻八、〔『事實文編』巻二十九〕
21	11		薩州八咏亭歌跋		〔服部南郭〕		『南郭先生文集 二編』巻八、〔白尾国柱『寛澤名勝考』巻一〕
21	12		浄光明寺鐘銘	町田氏藤原俊雄謹誌	町田俊雄	元文五(1740)	〔『旧記雑録追録』巻八十五〕
21	13		護麻所鐘銘	児玉宗因	児玉宗因	正徳元(1711)	〔『西藩野史』巻十九〕
21	14		彌勒院鐘銘	〔川上親央〕	川上親央	寛保元(1741)	〔『西藩野史』巻十九〕
21	15		高岡鐘銘	町田俊雄	町田俊雄	寛延元(1748)	
21	16		有徳廟牌銘	〔林信光〕	林權岡(信充)		『快晴紫雲録』(和歌山大学紀州藩文庫)

卷	番号1	番号2	題 名	著者1	著者2	年 記	典 拠 等
21	17		陽和夫人造髮錫壺銘	田中國明	田中国明		
21	18		武家編年記跋	〔川上親央〕	川上親央	元文四（1739）	
21	19		慈德廟祭文	〔釋〕	〔島津久門〕	寛延二（1749）	『西藩野史』卷二十一
21	20		相良家譜序	山田月洲	山田月洲	宝曆二（1752）	
21	21		物徂徠論	山君豹	山田月洲		
21	22		木脇祐辰墓銘	釈天桂	天桂	享保七（1722）	『鹿兒島市史 Ⅲ』 ※石碑現存
21	23		賀真田昌幸村兵法授受圖	林春齊	林鷲峰		
21	24		幽靈論	長井貞宗	長井貞宗		
21	25		出水加志久利鐘銘 有序	志賀登龍	志賀登龍		『西藩野史』卷十九
21	26		函工春田氏傳				
21	27		函工春田氏家傳	山田某	河口静齋		『芋山集』卷三
21	28			丹波大掾春田故明			
21	29		福昌寺教州入院疏				
21	30		大日本國鎮西薩州娘媽山碑記并銘	〔深見玄岱〕	深見玄岱	宝永三（1706）／宝曆九（1759）	『寛藩名勝考』卷三 、『薩藩名勝志』卷六
22	1		座右銘	漢崔瑗			『古今事文類聚 別集』（寛文六年刊）卷八、『文選』、『墨場必携』
22	2		座右銘并序	白居易	白居易		『古今事文類聚 別集』卷八、『白氏文集』卷二十二、『墨場必携』
22	3		續座右銘	宋 李至	李至		『古今事文類聚 別集』卷八、『墨場必携』
22	4		布袋銘	宋 范堯夫	范純仁		『古今事文類聚 統集』（寛文六年刊）卷二十一
22	5		孔明廟記	蘇東坡	蘇東坡		『漢丞相諸葛忠武侯集』卷二十
22	6		孔明贊	宋 葉士能			『李卓吾先生批評三國志』（『三國演義』）
22	7		宋丞相文天祥臨刑衣帶內有贊	〔文天祥〕	文天祥		『文山先生全集』卷十
22	8		精義齋記	〔白為純〕	白高為純	享保十五（1730）	
22	9		膝野驛墓銘	田中國明	田中国明		
22	10		奉近衛君詩并序	程順則	程順則	正德五年（1715）	『程氏家譜』
22	11		與田頭親雲上書	井因碩	井上因碩	寛延元年（1748）	
22	12		送惠性帰國序并詩	登龍	志賀登龍	〔享保十九（1734）〕	
22	13		振衣亭記	鶴山君豹	山田月洲		『月洲遺文』（東大史料編纂所蔵）
22	14		舜水先生行實	今井弘濟・安積寛	今井魯齋・安積澹泊		『舜水先生文集』附録、『続々群書類從 第三 史伝部2』
22	15		夫子説	貝原篤信	貝原益軒		『自娛集』卷一
22	16		五常配五倫説	貝篤信	貝原益軒		『自娛集』卷一
22	17		海潮説	篤信	貝原益軒		『自娛集』卷二
22	18		五行生克論	篤信	貝原益軒		『自娛集』卷四
22	19		豫知死日論	篤信	貝原益軒		『自娛集』卷六
22	20		他姓為後説	篤信	貝原益軒		『自娛集』卷七
22	21		楠公教子圖贊	篤信	貝原益軒		『自娛集』卷七
22	22		自贊畫像	篤信	貝原益軒		『自娛集』卷七
22	23		答問書序	本多忠統	本多忠統	享保十（1725）	『徂求先生答問書』序（享保十二年、野田弥兵衛・野田太兵衛刊）
22	24		讀朱子書辨	篤信	貝原益軒		『自娛集』卷三
22	25		舜水先生畫像贊	大學頭藤原信篤	林鳳岡		
22	26		題普賢畫像	朱舜水	朱舜水		『舜水先生文集』卷十七
22	27		題安積自贊簿	朱舜水	朱舜水		『舜水先生文集』卷二十一
22	28		与小宅生順		朱舜水		『舜水先生文集』卷十一
22	29		墓祭議		朱舜水		『舜水先生文集』卷十四
22	30		與諸孫男書		朱舜水		『舜水先生文集』卷一
22	31		三槐堂銘	東坡	蘇東坡		『正文章軌範』卷七
23	1		答遊佐次郎左衛門書	鳩巢先生	室鳩巢		『前編鳩巢先生文集』卷八
23	2		答青地貞叔論封事別幅	前賢	室鳩巢		『前編鳩巢先生文集』卷十
23	3		答屈景山書	物徂徠	荻生徂徠		『徂徠集』卷二十七
23	4		鳩巢先生文集後編序	植木金	植木筑峯	宝曆十三（1763）	『後編鳩巢先生文集』
23	5		答和田伯高書	前賢	植木筑峯	宝曆十三（1763）	
23	6		輩田惟明字説	河静齋	河口静齋	享保十八（1733）	〔都立中央図書館『静齋文集』〕
23	7		唔呷堂記	雨森芳洲	雨森芳洲		『橋樑文集』卷一
23	8		送春菴序	前賢	雨森芳洲		『橋樑文集』卷二
23	9		題登龍墨跡後	浙水沈爰庵			
23	10		又	江天錫			
23	11		答牧野先生書	鳩巢先生	室鳩巢		『前編鳩巢先生文集』卷十
23	12		祭堀江夫人文	代人 植木金	植木筑峯		
23	13		君祥名字説	河口静齋	河口静齋		〔都立中央図書館『静齋文集』〕
23	14		木君名字説	前賢	河口静齋		〔都立中央図書館『静齋文集』〕
23	15		莊子論	雨芳洲	雨森芳洲		『橋樑文集』卷一
23	16		適齋記		雨森芳洲	延享三（1746）	『橋樑文集』卷一
23	17		勢州大杖村義犬記	鳩巢先生	室鳩巢		『前編鳩巢先生文集』卷十二
23	18		西村正陽字説	河口子深	河口静齋	元文三（1739）	〔都立中央図書館『静齋文集』〕
23	19		郡山故記室荻生氏墓誌銘	太宰春臺	太宰春臺		『春臺先生文集 後稿』卷十一、『『事實文編』卷三十一〕
23	20		孟子論	太宰春臺	太宰春臺		『春臺先生文集 後稿』卷八
23	21		國分新府記	釋文之	南浦文之		『南浦文集』（慶安二年刊）卷上
23	22		修復高野山蓮金院記	前賢	南浦文之		『南浦文集』（慶安二年刊）卷上
24	1		鉄炮記	釋文之	南浦文之		『南浦文集』（慶安二年刊）卷上、『『事實文編 次編』卷一〕
24	2		寄附高野山屏風	前賢	南浦文之		『南浦文集』（慶安二年刊）卷上
24	3		呈大明使書	前賢	南浦文之		『南浦文集』（慶安二年刊）卷中
24	4		與大明商客	前賢	南浦文之		『南浦文集』（慶安二年刊）卷中
24	5		與大明福建軍門書	前賢	南浦文之		『南浦文集』（慶安二年刊）卷中
24	6		與壺君書	前賢	南浦文之		『南浦文集』（慶安二年刊）卷中
24	7		答壺君書	前賢	南浦文之		『南浦文集』（慶安二年刊）卷中
24	8		答南堂松主書	前賢	南浦文之		『南浦文集』（慶安二年刊）卷中
24	9		答南堂四國老書	前賢	南浦文之		『南浦文集』（慶安二年刊）卷中
24	10		寄呂宋國船主書	前賢	南浦文之		『南浦文集』（慶安二年刊）卷中

卷	番号	番号2	題 名	著者1	著者2	年 記	典 拠 等
24	11		答安南國書		南浦文之		『南浦文集』(慶安二年刊) 卷中
24	12		答琉球國王書	前賢	南浦文之		『南浦文集』(慶安二年刊) 卷中
24	13		呈琉球國王書	前賢	南浦文之		『南浦文集』(慶安二年刊) 卷中
24	14		呈琉球國王書	前賢	南浦文之		『南浦文集』(重複)
24	15		吊戰亡文	前賢	南浦文之		『南浦文集』(慶安二年刊) 卷中
24	16		祭亡友義則文	前賢	南浦文之		『南浦文集』(慶安二年刊) 卷中
24	17		跋兵術書後 代羽林公		南浦文之		『南浦文集』(慶安二年刊) 卷上
24	18		與重位書	前賢	南浦文之		『南浦文集』(慶安二年刊) 卷上
24	19		隅州願成寺鐘銘	前賢	南浦文之		『南浦文集』(慶安二年刊) 卷上
24	20		淨光明寺上梁文	前賢	南浦文之		『南浦文集』(慶安二年刊) 卷上
24	21		朱氏詩傳膏肓後序	太宰春臺	太宰春台		『春臺先生文集 後稿』 卷四
24	22		讀朱氏詩傳	前賢	太宰春台		『春臺先生文集 後稿』 卷十
24	23		聖學問答序	前賢	太宰春台		『春臺先生文集 後稿』 卷四
24	24		論語古訓序	前賢	太宰春台		『春臺先生文集 後稿』 卷四
24	25		朱氏小學論	前賢	太宰春台		『春臺先生文集 後稿』 卷八
24	26		讀赤穂義人錄	前賢	太宰春台		『春臺先生文集 後稿』 卷十
24	27		讀東匡古今學變	前賢	太宰春台		『春臺先生文集 後稿』 卷十
24	28		讀損軒先生大疑錄	前賢	太宰春台		『春臺先生文集 後稿』 卷十
24	29		書但來遺文後	前賢	太宰春台		『春臺先生文集 後稿』 卷十
25	1		讀韓愈拘幽操	鳩巢先生	室鳩巢		『補遺鳩巢文集』 卷十
25	2		内外教辨	太宰純	太宰春台		『春臺先生文集 後稿』 卷九
25	3		書東匡辨疑錄後	前賢	太宰春台		『春臺先生文集 後稿』 卷十
25	4		文論	前賢	太宰春台		『春臺先生文集 後稿』 卷七
25	5		深淵紀事	雨森東	雨森芳洲	延享元(1744)	『橋樑文集』 卷二
25	6		火術論	前賢	雨森芳洲		『橋樑文集』 卷一
25	7		靈芝記	前賢	雨森芳洲		『橋樑文集』 卷一
25	8		續名數序	人見友元	人見竹洞	元禄五(1692)	『綾和漢名數』 序
25	9		答安瀨泊書	物但來	荻生徂徠		『徂徠集』 卷二十八
25	10		文論	春臺	太宰春台		『春臺先生文集 後稿』 卷七
25	11		與子還書		太宰春台		『春臺先生文集 後稿』 卷十二
25	12		倭楷正訛序	前賢	太宰春台		『春臺先生文集 後稿』 卷五
25	13		與子和書	前賢	太宰春台		『春臺先生文集 後稿』 卷十三
25	14		答五十川剛伯書	鳩巢先生	室鳩巢		『鳩巢文集』 卷十
25	15		示修行氏	雨伯陽	雨森芳洲		『橋樑文集』 卷二
25	16		復子允書	太宰純	太宰春台		『春臺先生文集 後稿』 卷十四
25	17		復小倉中將宜季書	前賢	太宰春台		『春臺先生文集 後稿』 卷十四
25	18		折首神自警文	鳩巢先生	室鳩巢		『補遺鳩巢文集』 卷十
25	19		登靈嶽紀事略	春臺	太宰春台		『春臺先生文集 前稿』 卷三
25	20		讀李于鱗文略	前賢	太宰春台		『春臺先生文集 後稿』 卷十
25	21		讀仁齋論語古義	前賢	太宰春台		『春臺先生文集 後稿』 卷十
25	22		對備陽賴宮策問	植木金	植木筑峯	宝暦九(1759)	
25	23		春臺墓碑	服子選	服部南郭		『春臺先生文集 後稿』 附録、『事實文編』 卷三十三
25	24		春臺墓誌	稲垣長章	稲垣白巖		『春臺先生文集 後稿』 附録、『事實文編』 卷三十三
26	1		春臺行狀	松崎惟時	松崎惟時		『春臺先生文集 後稿』 附録、『事實文編』 卷三十三
26	2		與但來書	太宰春臺	太宰春台		『春臺先生文集 後稿』 卷十五
26	3		昏禮婿死女不嫁議	鳩巢先生	室鳩巢		『補遺鳩巢文集』 卷四
26	4		再嫁議	前賢	室鳩巢		『補遺鳩巢文集』 卷四
26	5		祭論	伊藤維楨	伊藤仁齋		
26	6		辨蔡氏鬼神說	鳩巢先生	室鳩巢	元禄十一(1698)	『補遺鳩巢文集』 卷三
26	7		觀游亭記	雨森芳洲	雨森芳洲		『橋樑文集』 卷一
26	8		永賀亭記	前賢	雨森芳洲		『橋樑文集』 卷一
26	9		白雲樓記	前賢	雨森芳洲		『橋樑文集』 卷一
26	10		誠信堂記	前賢	雨森芳洲	享保十五(1730)	『橋樑文集』 卷一
26	11		研山記	前賢	雨森芳洲		『橋樑文集』 卷一
26	12		小峨眉記	前賢	雨森芳洲	元文四(1739)	『橋樑文集』 卷一
26	13		是其山石記	鳩巢先生	室鳩巢		『前編鳩巢先生文集』 卷十二
26	14		答稻若水論朱文公祠官書	前賢	室鳩巢		『前編鳩巢先生文集』 卷十一
26	15		與稻宣義書	前賢	室鳩巢		『前編鳩巢先生文集』 卷八
26	16		答青地貞叔書	前賢	室鳩巢		『前編鳩巢先生文集』 卷十
26	17		答青地貞叔論封事別幅	前賢	室鳩巢		『前編鳩巢先生文集』 卷十
26	18		論孔子不言性善 (附但來說)	伊藤仁齋	伊藤仁齋		
26	19		與大野書	雨森芳洲	雨森芳洲		『橋樑文集』 卷二
27	1		紹述先生謁銘	內大臣常雅	藤原常雅	元文二(1737)	『紹述先生文集』(冒頭)、『事實文編』 卷三十二
27	2		論子哭慟	伊藤仁齋	伊藤仁齋		
27	3		答鈴木貞齋書	鳩巢先生	室鳩巢		『後編鳩巢先生文集』 卷七
27	4		答堀正修書	鳩巢先生	室鳩巢		『後編鳩巢先生文集』 卷六
27	5		答摂州鹽土小林道本書	前賢	室鳩巢		『後編鳩巢先生文集』 卷九
27	6		書和角某長田忠致論後	前賢	室鳩巢	享保十(1725)	『後編鳩巢先生文集』 卷十六
27	7		題高木氏倫學論	前賢	室鳩巢	享保十九(1734)	『後編鳩巢先生文集』 卷十六
27	8		戒子孫語	前賢	室鳩巢	享保十二(1727)	『後編鳩巢先生文集』 卷二十
27	9		新井源公碑銘	鳩巢先生	室鳩巢		『後編鳩巢先生文集』 卷十七、『事實文編』 卷二十九
27	10		題清鄭任論所序白石餘稿	室鳩巢	室鳩巢	正徳五(1715)	『後編鳩巢先生文集』 卷十五、『白石餘稿』
27	11		讀山田定經鬼神畧論	室鳩巢	室鳩巢	享保十二(1727)	『後編鳩巢先生文集』 卷二十
27	12		答山宮仲淵神佐	河口靜齋	河口靜齋		〔都立中央図書館『靜齋文集』〕
27	13		書川口生將進酒篇後	鳩巢先生	室鳩巢	享保三(1718)	『後編鳩巢先生文集』 卷十五
27	14		題江閨筆談後	鳩巢先生	室鳩巢		『後編鳩巢先生文集』 卷十五
27	15		題內殿燕樂筆語後	鳩巢先生	室鳩巢		『後編鳩巢先生文集』 卷十五
27	16		送田邊子善序	河口靜齋	河口靜齋	〔寛延三(1750)〕	〔都立中央図書館『靜齋文集』〕
27	17		題山田氏擬請立儒宗門疏	鳩巢先生	室鳩巢	享保十二(1727)	『後編鳩巢先生文集』 卷十六
27	18		答學者問	鳩巢先生	室鳩巢		『後編鳩巢先生文集』 卷二十
27	19		弔大石良雄文	鳩巢先生	室鳩巢		『後編鳩巢先生文集』 卷十七

卷	番号1	番号2	題 名	著者1	著者2	年 記	典 拠 等
27	20		祭小谷勉善文	鳩巢先生	室鳩巢		『後編鳩巢先生文集』卷十七
27	21		陶靖節贊	河口靜齋	河口靜齋		〔都立中央図書館『静齋文集』〕
27	22		〔題管公祠〕	前賢	河口靜齋	宝暦四（1754）	〔都立中央図書館『静齋文集』〕
27	23		勸學說	山田文蔚	山田月洲		
27	24		辨復讎	山田君豹	山田月洲		
27	25		天狗説	物茂卿	荻生徂徠		『徂徠集』卷十六
27	26		〔蝦夷記〕	〔河静齋〕	河口静齋		〔都立中央図書館『静齋文集』〕
28	1		異説類編				
28	2		鳩巢先生語				
28	3		《雜詩類編》				
28	3	1	「題富士山」	琉球 蔡宏 謨卯			〔「蔡氏武嵩家家譜」〕
28	3	2	「己巳歲旦」	山君豹	山田月洲	寛延二（1749）	『月洲詩集』（東大史料編纂所）
28	3	3	「瓊河発掉」	琉球 程順 則	程順則		『雪堂燕遊草』『中山詩文集』（尚敬王13・1725刊）
28	3	4	「郷夢」	前賢	程順則		『雪堂燕遊草』『中山詩文集』（尚敬王13・1725刊）
28	3	5	「南陽曉行」	前賢	程順則		『雪堂燕遊草』『中山詩文集』（尚敬王13・1725刊）
28	3	6	「出都」	前賢	程順則		『雪堂燕遊草』『中山詩文集』（尚敬王13・1725刊）
28	3	7	「咏竹」	那覇宮 吳 彬	吳彬		『題畫奉祝詰封翰林汪太公壽詩』『中山詩文集』（尚敬王13・1725刊）
28	3	8	「上巳」	程搏萬仲扶	程搏萬仲扶		『焚餘稿』『中山詩文集』（尚敬王13・1725刊）
28	3	9	「懷人」	前賢	程搏萬仲扶		『焚餘稿』『中山詩文集』（尚敬王13・1725刊）
28	3	10	「咏松竹」	王舅毛自義	毛自義		『題畫奉祝詰封翰林汪太公壽詩』『中山詩文集』（尚敬王13・1725刊）
28	3	11	「客中殘春」	周新命熙臣	周新命熙臣		『翠雲樓詩箋』『中山詩文集』（尚敬王13・1725刊）
28	3	12	「送鄭克理歸中山」	前賢	周新命熙臣		『翠雲樓詩箋』『中山詩文集』（尚敬王13・1725刊）
28	3	13	「浪華城陥後作」	前田德善院	前田玄以（德 善院）		
28	3	14	「又」				
28	3	15	「奉賀八十八韻」	山君豹	山田月洲		
28	3	16		木村貞行	木村貞行		室鳩巢『赤穂義人傳』巻下
28	3	17	「梅若塚」				
28	3	18	「富士」	道本	道本		
28	3	19	「延享戊辰元旦」	釈正眞	正眞		
28	3	20	「歲晚書懷」	洞庭屈壽			
28	3	21	「夜下墨水」	南郭	服部南郭		
28	3	22	「小夜中山」	道春	林羅山		『丙辰紀行』（『羅山林先生詩集』巻一・〔寛文二年刊〕所收）、〔『東海道名所図会』巻四〕
28	3	23	「拜敦盛石塔」				
28	3	24	「賀榎本氏慈母七十初慶」	嵩君謨	島津久峯		
28	3	25	「全」	島田錫	島津久微		
28	3	26	「全」	上野成章	上野成章		
28	3	27		郡山國華	郡山國華		
28	3	28		谷元延清	谷元延清		
28	3	29		小濱貞幹	小濱貞幹		
28	3	30		山本正誼	山本秋水		
28	3	31		岩切貞喜	岩切貞喜		
28	3	32		赤崎貞幹	赤崎海門		
28	3	33		赤崎貞幹	赤崎海門		
28	3	34		橋口為美	橋口為美		
28	3	35	「薩太守源公殿下經・・・」	長崎真寛松			
28	3	36	「贈人親場」				
28	3	37	「閨怨」	柳沢氏女（采 女）	柳沢采女		
28	3	38	「雪中」	同前	柳沢采女		
28	3	39		管家	菅原道真		『歴朝詩集』巻十八（宝暦六序刊）、『菅家文草』巻一
28	3	40	「應安元年禅僧絶海・・・」				
28	3	41	「太祖大感賜和草」				
28	3	42	「長門春草」	一休	一休		『狂雲詩集』
28	3	43	「春日山莊應制」	有智子内親 王	有智子内親王		『本朝一人一首』、『続日本後紀』
28	3	44	「海雲夜雨（麿府八景）」				
28	3	45	「櫻島暮雪（麿府八景）」				
28	3	46	「堀江帰帆（麿府八景）」				
28	3	47	「松原晚鐘（麿府八景）」				
28	3	48	「紫原夕照（麿府八景）」				
28	3	49	「塩屋秋月（麿府八景）」				
28	3	50	「荒田落鴈（麿府八景）」				
28	3	51	「郡本晴嵐（麿府八景）」				
28	3	52	「深浦夜雨（坊津八景）」				
28	3	53	「中嶋晴嵐（坊津八景）」				
28	3	54	「和龍洞院」				
28	3	55	「和奥院」				
28	3	56	「和池中辨天」				
28	3	57	「和時雨瀧」				
28	3	58	「和稲荷社」				
28	3	59	「松山晚鐘」				
28	3	60	「亀浦帰帆」				
28	3	61	「鶴崎暮雪」				
28	3	62	「網代夕照」				
28	3	63	「御寄秋月」				
28	3	64	「田代落雁」				

巻	番号	番号2	題 名	著者1	著者2	年 記	典 拠 等
28	3	65	「櫻花」	平城天皇	平城天皇		『歴朝詩纂』 卷一（宝暦六序刊）
28	3	66	「見 禁中花」	伊勢貞昌	伊勢貞昌		
28	3	67	「七步詩」	曾子建	曾子建		『三国志演義』 第七十九回
28	3	68					
28	3	69		杜子美	杜甫		『全唐詩』
28	3	70	「挽詩」		〔程頤〕		『三国志演義』 第四百回
28	3	71	「感旧詩卷」	白樂天	白居易		『全唐詩』
28	3	72		前賢	白居易		『全唐詩』
28	3	73		前賢	白居易		『全唐詩』
28	3	74					
28	3	75	「文武吟」	邵雍夫	邵雍		『全宋詩』
28	3	76	「春望」	杜子美	杜甫		『全唐詩』
28	3	77	「惜牡丹」	白樂天	白居易		『白氏長慶集』 卷十四、『全唐詩』
28	3	78	「寒食夜」	前賢	白居易		『白氏長慶集』 卷十四、『全唐詩』
28	3	79	「禁中夜作書與元九」	前賢	白居易		『白氏長慶集』 卷十四、『全唐詩』
28	3	80		前賢	白居易		『全唐詩』
28	3	81		邵康節	邵雍		『全宋詩』
28	3	82		泰山孫明復			『二程集』 河南程氏遺書卷十八
28	3	83		東坡	蘇東坡		
28	3	84					
28	3	85		東坡	蘇東坡		
28	3	86	「花上金飾」	蕭水匡	蕭立之		『聯珠詩格』 卷十
28	3	87	「偶書」	唐洪甫			
28	3	88	「櫻」	宋景濂	宋景濂		『和爾雅』（元禄七年刊）卷七、〔『鄴交微書 三篇』（天保十一年刊）卷二）
28	3	89	「全」	王荊公	王安石		『臨川先生文集』 卷二十八
28	3	90	「挽恭靖木先生」	新井白石	新井白石		『白石餘稿』（正徳五年序刊） 卷二（十首のうちのー）
28	3	91	「秋江送人」	新井白石	新井白石		『白石餘稿』（正徳五年序刊） 卷一
28	3	92	「和雪夜韻」		新井白石		『白石餘稿』（正徳五年序刊） 卷一
28	3	93	「柳辺繫馬」		新井白石		『白石餘稿』（正徳五年序刊） 卷一
28	3	94	「採蓮曲」		新井白石		『白石餘稿』（正徳五年序刊） 卷一
28	3	95	「即事」		新井白石		『白石餘稿』（正徳五年序刊） 卷一
28	3	96	「宮前螢」		新井白石		『白石餘稿』（正徳五年序刊） 卷一
28	3	97	「歲寒林」		新井白石		『白石餘稿』（正徳五年序刊） 卷一
28	3	98	「浴月池」		新井白石		『白石餘稿』（正徳五年序刊） 卷一
28	3	99	「甲子十二月十日恭陪」	大駕於東天 台佛會			
28	3	100	「花下小飲」				
28	3	101	「與明遠兒 在小琉球作」	山月洲	山田月洲		『月洲詩集』 卷一（安永三年序、東大史料編纂所）
28	3	102	「恭謁神武帝宮」		山田月洲		『月洲詩集』 卷二（安永三年序、東大史料編纂所）
28	3	103	「遺問」		山田月洲		『月洲詩集』 卷二（安永三年序、東大史料編纂所）
28	3	104	「拜圖南先生墓」		山田月洲		『月洲詩集』 卷二（安永三年序、東大史料編纂所）
28	3	105	「別稚子」		山田月洲		『月洲詩集』 卷四（安永三年序、東大史料編纂所）
28	3	106	「旅泊」		山田月洲		『月洲詩集』 卷四（安永三年序、東大史料編纂所）
28	3	107	「（東都四時歌） 春」		山田月洲		『月洲詩集』 卷四（安永三年序、東大史料編纂所）
28	3	108	「（東都四時歌） 夏」		山田月洲		『月洲詩集』 卷四（安永三年序、東大史料編纂所）
28	3	109	「（東都四時歌） 秋」		山田月洲		『月洲詩集』 卷四（安永三年序、東大史料編纂所）
28	3	110	「（東都四時歌） 冬」		山田月洲		『月洲詩集』 卷四（安永三年序、東大史料編纂所）
28	3	111	「水上別家人」		山田月洲		『月洲詩集』 卷四（安永三年序、東大史料編纂所）
28	3	112	「退朝口號」		山田月洲		『月洲詩集』 卷四（安永三年序、東大史料編纂所）
28	3	113	「渡疆溪」		山田月洲		『月洲詩集』 卷四（安永三年序、東大史料編纂所）
28	3	114	「上巳前一日悼適女孫」		山田月洲		『月洲詩集』 卷五（安永三年序、東大史料編纂所）
28	3	115	「萱堂七十壽賀會詩」	兒壽	兒玉祝人		
28	3	116		上成章	上野成章（善兵衛）		
28	3	117		倪草	兒玉早之允		
28	3	118		兒秉徳	兒玉五兵衛		
28	3	119		白兼備	日置五郎太		
28	3	120		黒清逸	黒田嘉右衛門		
28	3	121		平武文	平山五郎右衛門		
28	3	122		三經柄	三原次助		
28	3	123		白國器	迫田甚之丞		
28	3	124		帖來章	帖佐次左衛門		
28	3	125		長通喬	長崎鉄之丞		
28	3	126		種時真	種子島伊蔵		
28	3	127		石近誼	石原傳太夫		
28	3	128		伊兼峯	伊集院新五衛門		
28	3	129		重篤宣	重久仙蔵		
28	3	130		入親雄	入田喜右衛門		
28	3	131		小貞幹	小濱貞幹（長蔵）		
28	3	132		志常名	志和池源五		
28	3	133		本親賢	本田武兵衛		
28	3	134		得通昭	得能通昭		
28	3	135		關修齡	関栄一郎		
28	3	136		関黙成			
28	3	137		宗大禮	市来四郎太		
28	3	138		橋子璣	橋口權蔵		
28	3	139		向井章	向井源五左衛門		
28	3	140		川成憲	川上幸右衛門		
28	3	141		山本正誼	山本秋水		

【表2】『通昭録』諸本の構成

(表中の○は本文が全てあること、△は部分収録(抄録)であること、×は欠本であることを示す)

巻	冊	内容	備考1	備考2	東大(A)	東大(B)	東大(C)	鹿児島県	都城(A)	都城(B)
総目録	総目録	総目録		安永庚子季秋越智通昭題す	○		○	○	○	
1	1	還塞割記 一		寛延改元戊辰秋八月得能通昭謹志す	○			○	○	
2		還塞割記 二			○			○	○	
3	2	編年紀稿 一		(延享元年までの記述)	○		○	○	○	
4		編年紀稿 二			○		○	○	○	
5	3	譚数筆録 一		(呉華中) 寛延庚午の年夏五月誌す	○		○	○	○	
6		譚数筆録 二			○	△		○	○	
7	4	監察使問答抄 上		(太守重年公、宝暦五年乙亥六月十六日於江府御差法)	○	△	○	○	○	
8		監察使問答抄 下			○	△	○	○	○	
9	5	故実要領 一		得能通昭謹誌	○		○	○	○	
10		故実要領 二			○			○	○	
11	6	瑾瑜集 一	白紙16丁	宝暦改元の冬霜月 越智通昭誌す	○		○	○	○	○
12		瑾瑜集 二	卷数空白		○		○	○	○	
13	7	和漢制度考 一			○	△		○	○	○
14		和漢制度考 二			○	△		○	○	○
15	8	和漢制度考 三			○	△		○	○	○
16		和漢制度考 四			○	△		○	○	○
17	9	和漢制度考 五	白紙67丁		○	△		○	○	
[18]										
19	10	藻薈編一			○			○	○	
20					○			○	○	
21	11	藻薈編二			○			○	○	
22					○			○	○	
23	12	藻薈編三			○			○	○	○
24					○			○	○	
25	13	藻薈編			○			○	○	○
26					○			○	○	○
27	14	藻薈編			○			○	○	○
28		黒脱類編・鳩巢先生語・雑詩類編			○			○	○	○
29	15	石馬集 一			○			○	○	○
30		石馬集 二			○			○	○	○
31	16	石馬集 三			○		○	○	○	○
32		石馬集 四			○			○	○	○
33	17	石馬集 五			○		○	○	○	○
34		石馬集 六			○		○	○	○	○
35	18	石馬集 七	白紙		○			○	○	○
[36]										
37	19	法令 一			○	△		○	○	○
38		法令 二			○	△		○	○	○
39	20	法令 三			○		○	○	○	○
40		法令 四			○		○	○	○	○
41	21	公義法令 三			○	△		○	○	○
42		(系図)			○	△		○	○	○
43	22	和文之部	卷数空白		○		○	○	○	○
44			卷数空白		○			○	○	○
45	23	落葉集 一		戊戌の年水無月 得能通昭	○		○	○	○	
46		落葉集 二			○		○	○	○	
47	24	落葉集 三			○		○	○	○	○
48		落葉集 四			○		○	○	○	○
49	25	越昭随筆 一			○	△		○	○	○
50		越昭随筆 二			○	△	○	○	○	○
51	26	越昭随筆 三			○	△		○	○	
52		越昭随筆 四			○	△		○	○	
53	27	越氏随筆 五			○			○	○	
54		越氏随筆 六			○		○	○	○	
55	28	越氏随筆 七			○	△	○	○	○	○
56		越氏随筆 八			○	△	○	○	○	○
57	29	越氏随筆 九			○			○	○	○
58		越氏随筆 十			○		○	○	○	○
59	30	越昭随筆 十一			○		○	×	○	○
60		越昭随筆 十二			○		○	×	○	○
61	31	越昭随筆 十三			○			○	○	○
62		越昭随筆 十四			○		○	○	○	○
63	32	越昭随筆 十五			○			○	○	○
64		越昭随筆 十六			○		○	○	○	
65	33	越昭随筆 (十七)			○			○	○	
66		越昭随筆 (十八)			○		○	○	○	
67	34	桜島炎上記他9篇			○		○	○	○	○
68		21篇和文			○		○	○	○	○
69	35	越昭随筆			○			○	○	
70		越昭随筆			○			○	○	
[71]	36	實仁政序・敬齋説・他(漢文)			○			○	○	○
72		真和説・與物茂卿・他	白紙30丁		○			○	○	○
73	37	遠遊録			○		○	○	○	○
74		薩隅日三州郡村志			○		○	○	○	○
75	38	村雨夕・龍・他(和文)			○			○	○	○
76		返魂丹・翁物語(和文)			○			○	○	○
[77]										
[78]										
79	39	秋夜談話・農種備略・斯文源流抄略			○			○	○	○
80		優待詞集・和歌鑑別・通昭家訓・台湾降参之記			○			○	○	○

例言

- 一 底本は、鹿児島県立図書館本とし、『通昭録』の本文以外で比較できる文献がある場合、それらと比較した。【表1】の「典拠等」の欄にある文献の筆頭のものが比較したものである。それらとの異同は「―」で本文の右傍に示した。なお、得能家より伝来したものと推定される東京大学史料編纂所（A）本および、都城島津邸（A）本を参照し、注（*）で異同を示した。
- 一 【表1】との対照の便宜を考慮して、各漢詩文の頭に、仮の番号（巻数・巻の中の通番）を付した。なお、漢詩については（二八・〇三・通番）。
- 一 本文作成に当たっては次のような方針をとった。
 - 1 漢字は、常用漢字にあるものはこれを用いたが、別字である「芸」と「藝」、「聯」と「連」など底本のままとした。なお、一部の異体字については原本のまま残したこともある。（「𪛗」「𪛖」「𪛗」など）
 - 2 底本にある訓点は残すように努めたが、一部省略したり改めたりしたところもある。
 - 3 闕字、平出、抬頭はこれを反映させた。
 - 4 本文の上欄に、挿入がある場合、指定箇所を組み入れた。その際、一々注記しない。
 - 5 私に句点（・）を施した。
 - 6 欠損部分や判読が困難な箇所は□で示し、東大本の形を「―」で括って傍書した。
- 一
 - 7 本文は「于」を「干」と表記しているが、「于」の意味で使われているものはすべて「于」で統一した。
 - 8 明らかな脱字については、「―」で示し、注で断った。特に断らない場合は東大本によって補ったものである。
 - 9 注は本文の該当箇所に*1、*2などと傍書し、本文の末に記載した。
 - 10 頭注がある場合、該当する本文の位置（右傍）に※を付し、本文の末に※【頭書】として「―」に掲げた。本文および解題の作成は、丹羽謙治が行った。

藻
彙
編

通昭録卷之十九

藻彙編卷之一

河守宗僊壽卷序

河口静斉

児図南伝

私擬問

暹羅王歌并序

送山文蔚帰国序

補遺鳩巢文集跋

送山文蔚帰薩

緑水君書室銘

送田元吉序

教法

筭記

論国王事与某人書并跋

上林太史書

大宝説

論武

武国論

文質論

送芳洲帰対州序

送南坡雨森君序

寿鳩巢先生序

河口静斉

藻彙編卷之一

一九・〇一

河守宗僊壽卷序

河口静斉

遠之榛原有処士焉、以厚德淳行率其郷里、以謹慎温愿教其子弟、以勤儉力作治其家、以恬退寡慾^{※1}其養身、而為郷人所信、扶老恤寡、其三子服膺嚴訓、皆彬々成立、而門庭雍睦、内外百口愉々如也、行年八十、聰明不衰、步履輕健、与五六十時無異、庶幾古所謂有道者、問共姓与名、則予友河守国華之父宗仙翁是也、庚申歲秋七月、国華曾族人子姪、奉觴上寿以慶初度、遠近士友相伝、誇称不絶于口、尽以詩若歌贈遺、東西數十駄、累篇及百五六十而未已、至清人草亭沈子亦贈言以嘉之、於是河守氏父子之美、一朝聞於諸国、流于海外、豈不盛哉、蓋得于人而不得于天、則固不可也、若能得于天、而不能得于人、則雖於已無恨、然未足以為全、翁之德行孚於郷党、浹於室家、此翁之所以得於天^{※2}之道也、而其子之材不材則天也、其身之寿考康寧亦天也、翁既已得之于天矣、而窮郷遐陬山谷之間、固多長寿者、而人或不知、況能以詩若歌張大其事以成其子弟欲尊榮父兄之意哉、此在乎人耳、今翁既得所難得于天、而又能使衆人驩欣歌誦如此之盛不善哉、光遠与国華有同門之誼、喜国華能顯揚其親、而慕翁之隱德、自身而家、自家而郷、遂能致異域遠邦之人猶称羨咨嗟之、因題其卷首以紀吾党之盛事云、

*1 『静斎文集』は頭注で「其養恐倒置『芋山集』は「養其身」。東大本、都城本は果図本に同じ。

*2 「已」の字、『静斎文集』になし。他はあり。

兄図南伝

河口静斎

兄図南、名一鵬、以字行、一字希雲、薩摩人、姓藤氏、其先関東名族、薩候^{*1}始祖建久中初都督三州、兄氏從而西遷、自是世為君臣五百余年、図南父曰金鱗、好学教授郷里、有五男子、図南為長、為人渾樸不事表襮、拓落有高世之風、嘗遊東武、師鳩巢室子、是時室子以西城侍講、告病臥于家、嫉時人棄正党邪競為醜論、不可告語杜門謝客、奉贄請業者往々峻拒焉、然天下以宿德老師仰之益甚、一時有志之士亦賴此以為重、図南慨然委身受教、自謂得所帰而其友則仙台蘆徳林、南集大与、中州伊知量平、安田維則、東武山維深、与其郷人愛季平及不佞光遠日与周旋、相得極驩、不視時從違而為向背、如是者三載、図南学大進、辞師友帰国、國中士大夫共称其材、薩候^{*2}擢掌文翰、薩人最榮此職、図南之名大振、寛保辛酉以職至東武、不佞聞其来、趨而問其舍、鞍馬僕隸赫然有生色、非復嚮時図南矣、而睨其状^{*4}、則惟賣書數十卷及筆研而已、依然書生也、図南出迎、握手談旧、移時不倦、問不佞別後状^{*5}、不佞具言、室公父子相踵^{*6}不世、徳林以直道触邦禁、被幽囚之禍、而不佞亦速^{*7}罹家艱、憂謗交攻、斷喪憔悴僅存視息無復人理、図南泣曰、嗟乎、善人之寡祐一至於此耶、自是踰月不相見、是歲十月、図南病卒于客邸、年四十一、図南容貌英偉、一目重瞳子、在衆中頽然、性不飲酒、而無老稚尽得其歡心、学書于高玄岱、善艸隸、宏放類其為人云、家世武人、図南亦豪健、使弓馬、嘗為不佞言、在郷時与年少携銃出獵、跋涉山林、日夜不已、割鮮野食、其樂忘死、語之纒々、喜動鬚眉、可謂壯士也、及其没也、親党莫不愕惋、以其素無疾病、寛緩不苛、未聞他嗜好、而止於此、^{*10}乃所謂善人多不幸者非耶、不佞相知最

厚、故待其為人之詳如此、

友人河光遠曰、世常云古今人不相及、蓋謬妄語焉耳、使古人生於今世、未必与今人大異、唯伝之与不伝而已、使図南之徒生在秦漢之間、則其行事之偉固当不止於是、而其名之伝豈易量也哉、

*1 東大本、都城本「候」。

*2 『芋山集』「南阿集大興」。東大本、都城本は果図本に同じ。

*3 東大本、都城本「候」。

*4 東大本、都城本「状」。

*5 東大本、都城本「状」。

*6 東大本、都城本「不」。

*7 東大本、都城本「速」。

*8 東大本、都城本「使」。

*9 東大本の本文は「俟」。頭書で「俟倅敷」とする。都城本も同じ。

*10 『芋山集』「而寿止於此」。東大本、都城本は果図本に同じ。

一九・〇三

私擬策問

河目光遠

夏殷周三代、俱為聖人之後、而伝祚之數、所以有多少者、果天命耶、抑亦人事耶、

古之得天下者、其道有二、曰徳、曰功、其徳厚者其世長、其功盛者其勢大、自秦以降以此推之、莫能逃其情、唯三代皆聖人之胤也、禹也、文武也、論經緯幽明之徳、參贊化育之功、及夫礼樂刑政之属、凡所以祈天永命者、不容有毫釐之差、而夏則四百年、殷則六百年、周則八百年、久促相懸、学者疑焉、或曰、国之興亡、猶人之夭寿、蓋受之天、一定不移、雖聖人将奈之何、或云不然、天之於人、豈有

意故為之修短遲速耶、人自取之也、如三代其始固皆聖人也、至於子孫有賢有愚、賢多而愚寡則過其歷、愚多而賢寡則不及其數、故無桀則夏不滅、無紂則商必存、此二說皆非、何則二說雖殊、要之分天人為二塗則一也、天之与人^{*1本}木不相離、今謂天之所為人莫能預、人之所致天莫能制、誤矣、於此有人焉、病而求治、有良医一投藥而愈、一人曰、此医之功也、一人曰、非医之功、即其人之福也、柳不知治病者良医之功、而遇良医者實為其人之福也、天人一致於是可^{*3(變)}駁、然則夏商及周伝祚之數、果何所由耶、請試論之、鯀与稷契同事於堯、稷契有大功、而鯀以罪誅、鯀之子是為禹、而契之後十有余世、經四百年而乃為湯、稷之後亦十有余世、經一千年而乃為文武、功德雖均然、積累之漸、其異如此、先得者先亡、後得者後亡、最得者最後亡、自然之理也、天命人事豈有彼此之可言也哉、且夫桀亡而紀統其祀、紂敗而宋奉其祭、与周盛衰前後迭滅、以此觀之、三代之統、上自唐虞之間、而及於周末、或為天子、或為諸侯^{*4(侯)}、宗廟血食各二千歲、則天之報施、聖人未嘗不均矣、若^{*5(求)}未區々事跡于斷簡敗冊之中、必欲寸々而較之、銖々而擬之、則以追蠡議禹文也、豈足与語天人之際哉、

又

井田者、王政之要、治國之基、而万事之本也、其可行之於今日、得有利而無弊乎、

臣伏誦明詔云、井田者王政之要、治國之基、而万事之本、臣謂陛下之言及此、万姓之福也、何則臣誦漢書至魏相伝、未嘗不反覆嘆息、夫漢至宣帝可謂盛矣、而郡國子弑父妻殺夫者几若干人、他人恬不之恠、唯魏相謹而奏之、固得其職矣、然子而弑父、妻而殺夫、天下之大惡、豈有踰於此者耶、以極盛之時不免如此其多、則其治可知也

已、所以然者何也、聖人之沢竭、王者之跡熄、礼樂不興、所謂治者亦文具而已、相雖知其為變可畏、而終不能革、雜霸之習以效三代之治、將何益之有、故為政不以三代為法、与無政均耳、三代之政莫急於井田、陛下首問及此、臣知千載斯道之湮晦、当待陛下之時而再新、臣雖愚戇敢不尽言、唯陛下少垂聽為^{*6(焉)}、今夫井田之為良法、三尺童子人々知之、固不待議、而至經画之製^{*7(則)}、則博古之士^{*8(博)}誦求無遺、陛下一朝按图問之^{*9(問)}、首尾次第、如指諸掌、亦何病哉、今独所患在行之而人不^{*10(清)}服耳、子曰、斯民也、三代所以直道而行也、三代之天下即今日之天下、而至於井田之法、時苦難行者何哉、臣^{*11(不)}顧忌諱為陛下陳之、患在人主之德不能化天下耳、古者聖人之於天下、非有心強服、而固持之、業々然唯敬天修身之為務、而天下自然^{*12(依)}歸之者、德盛之所致也、故未設一法度、未出一号^{*13(今)}、而海内固也晏如矣、然後以首出庶物之資、觀天下之勢、順万民之情、徐々而利導之、於是外建諸侯^{*14(侯)}、內置百官、紀綱粲然、雷動風行、其易猶探囊中之物而陳之於地上、当是時也、井田不為則已、為之則人心悅服、何難行之有、後世則不然、虜人父誅人兄而臣共子弟、今日北面而事我、奉我為君者、皆昔日相与馳騁於中原、推鋒投刃以争一朝之命者也、雖幸而獲定、常惴々恐其叛去、故私恩小惠以結其意、嚴刑峻法以挫其心、上下相防、内外相窺、如此則城郭不得不高、封建不得不^{*15(固)}、礼樂安得不略乎、法令安得不簡乎、政体安得不^{*16(苟)}其乎、世移時變、雖不尽如國初馬上之治、然其美德無以相尚、唯力是視則維持偷安之不暇、何能遑談三代哉、当是時也、欲遽行井田之制、猶不耕而播種、望其有秋亦難矣、故井田易行、唯能行井田為難、願陛下慨然悟天下不可恃力為治、聖敬日躋問、学不怠、躬履布衣之行、以先天下、而後井田可得而言為、至小々利弊、豈能無之、在能者變而通

之耳、則美一有司之任也、伏願深鑒秦漢以來之害、決遵商周明王之法、脩身而推之家國、循序而不遽、則成康刑措之風可與^{*14}於今日、^{*15}詩云不競不綌布政優々、孔子曰、為仁由已而由人乎哉、唯陛下察之、臣某謹對、

*1 東大本は最初「木」とし朱で五画目の横棒を加え、さらに「本本作木」を頭書。都城本もこれに同じ。

*2 東大本は「抑抑」とし上の「抑」を見せ消ちとする。都城本は「抑抑」。

*3 東大本、都城本「駿」、『静斎文集』は「駿」に傍書して「歟カ」とある。

*4 東大本、都城本「候」。

*5 東大本、都城本「未」。

*6 東大本、都城本「焉」。

*7 東大本、都城本「制」。

*8 東大本、都城本「誦」。

*9 東大本、都城本「問」。

*10 東大本、都城本「清」。

*11 東大本、都城本「令」。

*12 東大本、都城本「候」。

*13 東大本、都城本「苟其」。

*14 東大本、都城本「与」。東大本は頭書「与興歟」。

*15 東大本、都城本「詩」。『静斎文集』「詩」。

一九、〇四

暹羅王歌并序

前賢

寛永中、有駿府商船被風飄到暹羅國、夷人問知為吾國人報其國王、國王即日召見館、待甚厚、至夜又召入宮中、王親問失風情由、勞慰再三、聽其言語、非蕃人音、心甚疑訝、王惻然謂^{*1}田^{*2}吾与卿同鄉人

也、嘗被風漂到此國、正与卿輩今日不異、國主憐而收我、此時國中兵起、四隣相攻、我見其戰鬪、殊無紀律、遂以策獻王、王任我為大將、戰屢有功、國中尽定、王及諸頭領以我有大勲、以王女嫁我、及王歿無嗣、諸酋推我主國事、因襲王位、致有今日、卿輩能留此國、富貴唯其所欲、商人等驚異對云、多感王意、然鄉親難捨、願得速還為幸、王為脩船、贈盤纏、臨行授一方板上備尽戰鬪之勢曰、是吾當年克敵之狀也、託卿持還掛之本國淺間廟壁、遙祈神祐、且致我睦恋桑梓之意、商人等告別歸駿府、掛図于淺間廟如其言、淺間廟祝恐其歲久丹青晦爛、収之庫中以時示人、享保乙卯石州濱田^{*3}候家人松井經長、命工描其図、併録其事以伝、予覽其摸本於加藤子暢家、図有巨艦、雜豎旌幟、戎士裝束全效吾國、外作波濤洶湧之狀、以助其勢、其額署曰、寛永三年丙寅二月七日生國駿州今住暹羅仁左衛門尉長政、所謂仁左衛門者、在吾國所稱、長政其名也、按暹羅王長政、挺身遠渡立功異域、終以國壻代署王事、其事与安南謝升卿異代同符、予自幼時屢聞此語、或云、駿州藁科人、或云、為伊勢神宮賤隸、獲罪逃亡投于海外、或云、初称山田仁左衛門、未詳其的確、唯此所伝実為有拠、故粗次第之以備大史氏之採云、又按明人所記暹羅在明万曆年間、与隣國東蛮牛構冠相攻伐、觀此國中兵起四隣相攻等語、最為可証、既叙其事、係之以論曰、吾國之盛冠于覆載、神后西征邈哉、上世跡多奇異、理閔靈聖、非淺見寡聞所敢道也、自斯厥後北羅夫朴來津之儉已提使伊企難之属、標英略於西鄙、奮奇節于鯢壑、名聲煊赫、不可勝数、而唐宋元明之間、冠髻勒跡于外史、文武播藝乎殊邦、昔又復更僕不能尽也、今皆舍是及彼、文祿之師也、投風雲之会、馳雷霆之威、猛將如林、則亦不待具称也已、若夫為朝闕祚於虬洲、義絳垂統于蝦虜、典策雖闕、伝誦匪誣彝器尚存、廟貌巍

然、是乃同託神明之胄、各建南面之基、譬諸北庭稟軒轅之裔、東海奉文命之祠、德照遐方、慶延千載、武功之成於斯為烈、不得以其荒陬而遺之也、至于義秀血食朝鮮、行平蕃種八丈事則微矣、然好事者猶或一道焉、今如暹羅僻在海隅、王生寒族、素不知名、羈旅無聊、涉不測之淵、出万死之計、固無可觀、而僅託商舶始通聲聞、本末難究不足為吾輕重、然楚金之利齊紫之色、唯地氣使然、古云、葦尔國暹羅一王、出吾僕隸、生曉戰法、施技身毒弭內乱、攘外寇以濟一方穿耳之民、亦豈非吾國家威靈之所及哉、可謂快矣、抑此称寛永三年頗為可疑、盖是時五市之法、有吾商賈駕船載貨往來于天竺諸國者、寛永紀号夷人所知、然亦可以正朔遠施之驗矣、因作詩二十五韻以歌其事、歌曰、

暹羅王、々々々、一身漂泊向炎方、々々国乱干戈起、戰鼓轟々震大洋、蛮婦尽哭蛮兒泣、瘴煙蔽空殺氣黄、暹王慷慨献奇策、攘臂一呼海水揚、十丈巨艦如山動、旌旗連雲劍飛霜、千鯨捲湖波^{*6}沸、万象蹴濤星月蒼、百戰功成蛮境靜、蛮人論功莫敢当、推髻羅^{*7}拜呼万歳、終奄日南為真王、三稻八蠶府庫溢、真珠樓閣紫檀牀、華鬢飄風長葳蕤、瓔珞日爛生光、金冠宝帶瑪瑙案、柳酒蔗漿螺殼觴、恨如中夜衣錦繡、忽遇鄉人泣数行、举手揖客殷勤謝、起顧雲水共茫茫、起禽胡馬豈無念、心摧旭日上扶桑、憑君聊致首丘意、五色炳煥写戰装、画中雖壯今老矣、自知不得生還鄉、此図願留扮楡社、期以名字託廟牆、君不見元和距応仁、竜爭虎戰何大頻、忽乘雲雨取節鉞、高車駟馬馳朱輪、俄失風水制螻蟻、鬪體飛作沙場塵、不貴、

*1 東大本「曰」。都城本は「王惻然謂曰」の部分は空白。

- *2 東大本、都城本「尽」。『静斎文集』は「尽」として「画カ」と傍書。
- *3 東大本、都城本「侯」。
- *4 『静斎文集』は「冠」として「寇カ」と傍書。
- *5 『静斎文集』は「五」として「互カ」と傍書。
- *6 東大本、都城本「朝」。
- *7 東大本、都城本「越」。

一九・〇五

*1 〔送山文蔚帰国序〕

河口子深

鳩巢室先生唱道於駿台、四方豪傑之士源々而來、其在西藩、則薩人兇君凶南為之冠焉、不幸先生易策未數年、而凶南病歿于旅邸、然薩人好學能文章者多于凶南之門、以是其徒東遊、則必過不佞之廬以問焉、視不佞猶先生也、不佞視其人亦猶凶南矣、薩国昔鎌倉之先封而天下之旧邦也、故家遺俗至今不改、而倜儻非常之才往々出焉、語曰、深山大沢実生竜蛇、豈不信乎、不佞接凶南之徒亦多矣、而唯山文蔚最為可喜、文蔚英特不修邊幅、善談笑、大類凶南之為人、其詩清麗閑遠、超過流輩、即凶南之詩、雖豪放恢奇、亦未必勝吾文蔚焉、惜哉、不及見鳩巢先生也、故其帰也、酌酒而語之曰、文蔚之詩善矣、不佞莫以加焉、必也益〔読〕^{*2}天下之書以広胸中〔之〕蓄、則変態日新、何必外此而他求焉哉、文蔚勉旃、鳩巢先生所以教人如是而已、不佞所以答文蔚見問之意者、亦唯以是也已、延享丙寅夏五、

- *1 目録により補う。
- *2 東大本により補う。

一九・〇六

補遺鳩巢先生文集跋

山田君豹

豹日總角、從本州之兎岡南氏而學焉、実岡南受業於鳩巢室子之門、而西歸之時也、其授徒之次稱室子道德之盛學術之正亶々不勸、雖豹童卯不能盡解其言、猶稍識敬信焉、及既長而東遊、則室子已歿矣、乃師事靜齋河口先生、晚而又事澹齋伊東先生、此二先生者蓋室門之高弟也、是以有聞室子之人之道頗詳焉、因追念往時岡南氏之所以告豹者、雖或深淺精粗各自以其所得者、然至於所謂德之盛學之正者、則斷然如畫一也、既而取室子之書已行乎世者伏而讀之、旁及其片語隻辭之遺未嘗不錄而誦之、然尚以未得觀其全集為憾焉、今茲東遊、會澹齋先生輯錄鳩巢文集將上梓、因得其藁而讀之、雄深宏博、偉麗典雅、一出乎仁義道德之中而沛如也、其所以羽翼聖學維持世教者大有益於天下後世、而非世之名能文者所企及也、於是乎益信先生長者之言不余欺而不疑矣、顧豹來後居僻、雖不得及乎室子之門親觀其宗廟之美百官之富、然幸因先生長者之言以得聞其人之与道如此、復因先生長者之舉以得往昔之所願見者而觀之如此也、則可謂得其所歸而無復憾者矣、先生及二三學士大夫業已為之叙跋、而亦命豹以補遺之跋、因申戒之以其淵源所自出也、不可固辭、豹唯々而退、於是構思數日、卒無所得、因謂集之有叙有跋所由古矣、率皆所以贊成其道稱頌其文而使之赫々乎著於天下以垂不朽者焉耳、是以必託之縉紳先生一時有名之士、然後為之也、今如斯文者以其人之与道也固已足以顯於天下而存諸不朽、況有黼黻之文珪璋之質粲然不可掩者乎哉、而又其於贊成稱頌者、則老先生暨學士大夫既已尽其道矣、如豹不肖、嗚呼亦何言哉、故唯陳私淑之所自以竊寓々々敬信之意云、宝曆壬午十二年秋季九月薩藩山田君豹謹跋、

一九・〇七

^{*1}〔送山文蔚歸薩〕

韋君祥

文蔚者、西薩之奇士也、客歲官遊東都來、謁吾靜齋先生、於是余亦得一望其風采、則已知文蔚非尋常人、雖在稠人廣眾中巖然可敬目擊而道存、豈謂此耶、余雖孤陋乎、未嘗悚焉異之、及見雄篇大作、則極其興麗而靜齋先生之門繼踵至者操觚茲多、二三兄弟、抵掌晤言、一堂之上者稱足下不已、即不佞如祥、亦不自測忝得從二三兄弟之後、讀其書、誦其詩、古人猶可尚友、況於今乎、然亦非超然英特之質、誰能追其後乎、聞、君歸國之斯已迫矣、雖東西万里、契濶踰歲、願託高誼終承 嘉惠、不堪懇祈、益謂 足下之東遊來年當再、豈其然乎、亦唯歧望是切、別後所特一札十行、時々通問加餐行矣、自愛不宣、

*1 目錄により補う。

一九・〇八

緑水島津君書室銘

河口子深

島津君、名咸、字有沢、薩州名士也、因同藩山文蔚請銘其誦書之室、子深嘉 君之志為作其辭、曰、
貌哉聖經、肇自上古、天錫義圖、斯文攸祖、煌々典謨、百王規矩、詩及春秋、惟義之府、礼云礼云、允文允武、集厥大成、盛于鄒魯、明同日月、施比風雨、凡汝民生、非教曷恬、^{*2}人而無學、乃讐乃瞽、薩州君子、曰有沢甫、勤儉弗懈、以樞以僕、三命益恭、擬正考父、公退誦書、燕居閑宇、縹卷細帙、陳列廊廡、婆娑篇章、涵泳訓詁、^{*3}

蘊藉優游、為國良輔、深源流遠、余慶爰晉、世篤忠孝、受天之祐、
貴非軒裳、富非倉庾、予言匪僭、孰敢謂迂、
延享丙寅夏五月、播府河口子深撰、

*1 県図本は「詔」。東大本、都城本とも「銘」。改める。

*2 東大本、都城本「怙」。

*3 県図本は「話」。東大本、都城本とも「話」。改める。

一九・〇九

送田元吉序

前賢

天下之州郡既庶且富、為四方所仰瞻者蓋可知也、礼樂之鄉、衣冠之
区、神聖之攸宅、風雨之攸会、而 照臨之下、万物咸被其末光焉、
是為上京莫之尚已、豐氏崛起、大坂斯建、地勢宏敞、人物阜、而
其震撼山河之威呼嘯風雲之氣、猶有盤礴乎深隍堅堞之間、至今弗泯
者、且為百工之藪、万貨之淵、開闢發劔囊中錢穀之要、海函而川
布、以是屹為鉅鎮、而雄絕乎関西也、至如江府、則古今朝市之盛、
未有出其右者、廟堂之事則不與聞矣、唯其幅員之広、生齒之繁、蓋
入之茫乎不知其畔岸、処之累世不能悉其大半、故能容万国之衆、如
潦水之帰壑、文武耆老医卜書画工商倡優之属、紛紜旁午、目不安於
視、耳不安於聴、故能鼓舞奔走、天下 知巧之士、勇敢強有力之
人、老且死于其間、不可終極、此江府之所以為大、而井觀鎌倉丘視
安土也、癸丑之夏 田子原吉、賁大坂井誠之書來見余、原吉生於京
師、而從誠之學焉、其周旋于二境之間者熟矣、而又來此土、於向所
謂四方仰瞻之地、既已歴覽之矣、子之於世亦幸矣哉、而猶以為未
足、今歲四月將奉其大人西遊日州、日州在西海数里之外、道路之所

經、山川城邑、原隰林麓、凡有見聞、皆足激子之氣發子之心、此固
大丈夫之願也、莫以遠自憚焉、余匏繫一隅、未能輕拳常以負愧、故
於其行喟然曰、吾聞豪傑之士、不在通邑大都、則必在窮谷絕崖之
濱、子之斯行、若見名山大壑之中貌碩而神充者、必隱君子也、試以
余言語之、

*1 東大本、都城本「敵」。

*2 東大本、都城本「知」。

一九・一〇

芳洲橘先生教法

先生 姓雨森、名東、字伯陽、一

字東五郎、受業於木下 順庵先

生、仕対州、

一 教小兒、須從六七歲始、

一 四書、小学、近思錄、須令連註熟讀、

一 孝經、敬齋、箴、白鹿洞、學規、字訓等類、須令他諳

誦、三日一次、或五日一次為可、

一 每日須將小学所載故事、及見於他書、意思易

曉者、或一條或二條、替他指書說了、令彼又一

說、待明日復令一說了、其ノ中為要語者、須令彼背

誦、且記二字画、譬如說曾參事、推牛而祭、不

若雞豚之逮親存一句、所謂要語也、

一 小兒雖有聰明過人者、歲末到二十六七時、決不可

及五經、十六七已上、令熟讀一經、亦可也、大抵日本

読法、不如此中国、便易、若貪多強讀、則恐精神困

備^{※1}、又從^テ而生^ス疾病^ヲ、是不^レ可^レ不^ル知^ラ、曾^テ見^ル世^ニ人^ヲ、
教^ニ小兒^ヲ、必使^レ他^ニ泛^ク讀^ニ四書五經古文三體詩小學近思錄
等^ノ書^ヲ、不^レ要^セ誨^ニ之以^ニスル^ヲ、意義^ヲ、彼^レ到^ニ十六七^ニ、世務
日^ニ加^ヘ、心志外^ニ馳^セ、不^レ復^レ能^ル用^ニ力^ヲ於^ニ諷誦^ニ、則^ニ數年^ノ之^ノ
功^ヲ盡^ク亡^フ、余^ハ謂^ニ誨^ニ人^ヲ要^ニ簡易精審^ヲ、簡易^{ナレハ}則^ニ人^ノ甘^ニ從^レ
之^ニ、精審^{スレハ}則^ニ久^ニ而寡^シ失^ヲ、苟^モ隨^ニ斯法^ニ、推^ニ之^ヲ天下^ニ、則^ニ
中^ノ材^ハ已^ニ下^ニ皆有^ニ以^ニ知^ル仁義^ノ之^ノ為^ニ仁義^ニ、而^モ亦未^レ必^ニ
無^ニ丙^ハ、德器成^レ就^ニ超^ニ於^ニ衆人^ノ者^ヲ出^ル於^ニ其間^ニ矣、風俗之淳厚、
國祚之永久、其^ハ或^ハ幾^ハ乎、

或問、古者八歲而入^ニ小學^ニ、子^ハ以^テ爲^ニ須^ニ從^ニ六七歲^ニ始^ニ上^ル者
何^{ソヤ}也、曰、看^ニ內^ニ則^ニ所^ニ記^ス云^ク、六年教^ニ之^ヲ教^ニ与^ニ方^ノ名^ノ、七
年男女不^レ同^セ席^ヲ、不^レ共^セ食^ヲ、然^ハ、則^ニ古人教^ニ之^ヲ於^ニ家^ニ有^ニ素^ヲ、
而後入^ニ之^ヲ於^ニ小學^ニ也、宜^ニ乎德性純茂而教誨^ノ之^ヲ易^ニ入^リ也、余^ハ
謂^ニ須^ニ從^ニ六七歲^ニ始^ニ上^ル者、非^ニ必^ニ謂^ニ以^ニ諷誦^ヲ、^{※5}咿々^ノ之^ノ難^ヲ、
責^ニ之^ヲ於^ニ童穉^ノ之時^ニ、但^ニ將^ニ孝經^ノ等^ノ書^ヲ、或^ハ一^ノ句^ノ或^ハ兩^ノ句^ノ、
日^々教^ニ之^ヲ、收^ニ斂^シ其^ノ心^ヲ俾^ニ邪僻驕淫^ノ之心^ヲ無^ニ從^ニ而^ニ入^ル焉^ニ
耳^{ノミ}、

或問、子^ハ於^ニ小兒^ニ、必^ニ欲^ニ求^ニ意旨^ノ之^ノ易^ニ曉^リ而^ニ教^ニ之^ヲ者^ハ何^{ソヤ}
也、曰、義深而旨遠者雖^ニ成^ニ大^ニ之人^ノ、尚^ニ有^ニ所^ニ不^レ會^ニ、而況^ニ
於^ニ童穉^ノ乎、彼^レ若^ニ生^ニ厭倦^ノ之心^ヲ、而欲^ニ僻^ニ之^ヲ、則^ニ心志^ノ一^ノ馳^ニ、
不^レ可^ニ復^ニ回^ニ、故若^ニ說^ニ二事^ヲ、一^ノ則^ニ以^ニ忠孝^ノ之事^ヲ、如^ニ小學所^ニ
載^ニ是^ニ也、一^ノ則^ニ以^ニ可^ニ喜^ノ之事^ヲ、使^ニ其^ノ傾^ニ聽^ニ樂^ニ問^ニ不^レ能^ニ自^ニ休^ニ
耳^{ノミ}、大抵薰^ニ陶^ニ之^ヲ、則^ニ被^ニ不^ニ自知^ニ而有^ニ進^ニ、逼^ニ迫^ニ之^ヲ、則^ニ求^ニ
成^ニ而反^ニ敗^ニ、求^ニ備^ニ而反^ニ缺^ニ、可^レ不^レ察^ニ乎、
或問、子^ハ所謂^ニ可^ニ喜^ノ之事^ハ何^也也、曰、余曾聚^ニ小輩^ヲ、說^ニ之^ヲ以^ニ楚

漢鴻門之會、齊魏馬陵之戰、既^ニ而^ニ曰、楚所^ニ以^ニ亡^ニ者^ハ刻^ニ暴^ニ
也、漢所^ニ以^ニ興^ニ者^ハ寬^ニ仁^ニ也、龐涓以嫉^ニ能^ニ而^ニ死^ニ、田忌以得^ニ士^ニ
而^ニ榮^ニ、後^ニ經^ニ數^ニ日^ノ之^ノ問^ニ之^ヲ、歷^ニ々^ノ道說^ニ而^ニ不^ニ少^ニ忘^ニ、事^ノ之^ノ可^ニ喜^ニ
者^ハ有^ニ益^ニ於^ニ小兒^ニ、率^ニ此^ノ類^ニ也、

或問、小兒雖^ニ有^ニ聰明過^ニ人^ノ者^ハ、歲未^ニ到^ニ十六七^ニ時^ノ、決^ニ不^ニ
可^ニ及^ニ五經^ニ、十六七已^ニ上^ニ、令^ニ熟^ニ讀^ニ一^ノ經^ヲ、亦^ニ可^ニナリ、以^ニ余^ノ觀^ニ
之^ヲ、子^ハ之^ノ所^ニ謂^ニ者、要^ニ欲^ニ通^ニ於^ニ天下^ニ而^ニ不^ニ廢^ニ也、大抵十八^ノ
九歲^ノ以上^ノ、有^ニ二奔走役使之勞^ヲ、有^ニ二死喪問遺之務^ヲ、而^ニ不^ニ復^ニ
能^ニ用^ニ力^ヲ於^ニ講讀^ニ焉、故自^ニ六七歲^ニ至^ニ十八九歲^ニ、爲^ニ人家勤^ニ
學^ノ之^ノ準^ニ、當^ニ斯^ノ之際^ニ、以^ニ簡易精審^ノ教^ニ之^ヲ、爲^ニ他^ノ日成^ニ材^ノ之^ノ
地^ニ、則^ニ上^ノ材^ハ不^レ督^ニ自^ニ勵^ニ、中^ノ材^ハ不^レ至^ニ昏惰^ニ、下^ノ材^ハ之^ノ人^ノ雖^ニ
未^ニ必^ニ善^ニ、而亦^ニ不^レ至^ニ於^ニ敗^ニ俗^ニ、此^ハ固^ニ良^ニ法^ニ也、然^ニ聰明^ノ之^ノ人^ノ
若^ニ限^ニ以^ニ四書^ノ等^ノ、不^レ及^ニ五經^ニ、則^ニ學^ノ狹^ニ而^ニ識^ノ淺^ニ、材^ハ短^ニ而^ニ智^ノ
屈^ニ、吾未^ニ知^ニ其^ノ可^ニ也、曰、不^レ然^ニ、夫^ハ基^ハ不^レ厚^ニ則^ニ崩^ニ、根^ハ不^レ深^ニ
則^ニ倒^ニ必然^ノ之^ノ理^ニ也、余^ハ所謂^ニ聰明^ノ者^ハ聰^ニ明^ニ於^ニ道^ニ也、吾既^ニ爲^ニ之^ヲ厚^ニ
基^ニ深^ニ根^ニ、彼^レ果^ニ聰明^ノ而^ニ嗜^ニ道^ニ則^ニ博^ニ究^ニ二^ノ郡^ノ經^ヲ、旁^ニ搜^ニ諸^ノ子^ノ窮^ニ
天下^ノ之^ノ理^ヲ而^ニ尽^ニ萬物^ノ之情^ヲ、必^ニ有^ニ不^レ待^ニ他人^ノ之^ノ教^ヲ者^ハ矣、大抵立^ニ
法^ニ、要^ニ簡易精審^ノ、經^ニ久^ニ而^ニ不^ニ上^ニ變^ニ、我^ハ故^ニ曰、苟^モ隨^ニ斯法^ニ、推^ニ
之^ヲ於^ニ天下^ニ、則^ニ中^ノ材^ハ已^ニ下^ニ皆有^ニ以^ニ知^ル仁義^ノ之^ノ爲^ニ仁義^ニ、而亦未^ニ
必^ニ無^ニ德器成就^ニ、超^ニ於^ニ衆人^ノ者^ヲ出^ル於^ニ其^ノ間^ニ矣、或問、子^ハ所謂^ニ
十六七已^ニ上^ニ、令^ニ熟^ニ讀^ニ一^ノ經^ヲ、亦^ニ可^ニ也者^ハ、謂^ニ下^ニ稟^ニ中和^ノ之^ノ質^ヲ而^ニ具^ニ
明睿^ノ之^ノ材^ヲ者^ハ乎否^ヤ、曰、是^ハナリ、
或問、子^ハ以^ニ簡易精審^ノ爲^ニ言^ヲ、此^ハ四箇^ノ字^ノ教^ニ人^ノ之^ノ要^ノ領^ノ乎、
曰、是^ハ也、

* 1 東大本、都城本「学」。

* 2 『橘隠文集』は「三日一次」の前に「約」の字あり。東大本、都城本「約」あり。

* 3 『橘隠文集』「則」なし。

* 4 東大本、都城本「備」。

* 5 東大本、都城本「咄」。

* 6 東大本、都城本「彼」。

* 7 東大本、都城本「士」。

* 8 東大本、都城本「以」。

* 9 『橘隠文集』は以下「吾根不深則倒、必然之理也、余所謂聰明者聰明於道也、……『文集』に欠文あるか。

* 10 東大本、都城本「群」。

一九、一一

割記 或作遺囑

芳洲先生

予課童之暇、乃取南華在有一篇二千三百七字、而讀之、千遍、九月起十一月止、共五句也、初、則每一句、^{*2}讀「百遍、次、則或三四行或七八行為一聯、每聯讀「百遍熟諳訖、溫習八百遍、今此一事特為錄示、以作遺念之具、云、予螢雪晤伊之勤至老不^レ倦、則有^レ之矣、而竟無一篇文字、可^レ以請教於君子者、無不敏大焉、然、^レ讀「書經久不^レ忘之法、除此別無^レ捷徑、汝輩素有^レ穎悟之資、又且富^レ於春秋、倘或^レ以此為^レ準、夙之夜之佑之畢之務、使^レ古人文章言語^レ磅礴蠶蟪於靈台丹府之間、何患^レ乎、沒世而名不^レ稱焉、至囑々々、寬保辛酉冬至月念二日、芳洲七十四歲書、

* 1 『橘隠文集』では「遺囑」を題とし、「筭記」は別の文を取める。

* 2 東大本、都城本「句」。

* 3 『橘隠文集』は「次則或三四行或七八行為一聯、每聯」を脱す。

一九、一二

論 国王事 与 某人 書并自跋

對馬州書記雨森東謹^レ白、頃使人至^レ、憑^レ審^レ執事、官況康裕、寵眷日隆、斯文之興、或將^レ於^レ是乎望^レ焉、幸甚々々、向^レ聞^レ這回^レ信使之来、也、接応事例有^レ異^レ前時、而其^レ說皆出^レ於執事之主張、思慮既^レ精、処置適^レ宜、正^レ交隣之礼、省^レ無名之費、使^レ沿路臣民無^レ所^レ患苦、苟^レ微^レ執事、孰^レ能及^レ之、真^レ所謂仁人之言、其^レ利博哉者也、尋^レ承^レ内議有^レ稱王之舉、而其^レ說亦出^レ於執事之主張、僕^レ一聞^レ之、且^レ驚且痛、窃^レ怪^レ以^レ執事之學問見識素^レ明、^{ナルヲ}春秋之義、而乖刺顛倒、一^レ何^レ至^レ於此^レ哉、区々^{タル}偏性不^レ忍^レ緘默、成事不^レ說之戒、雖^レ出^レ於聖訓、改^レ過勿^レ吝之義、將^レ望^レ於執事、幸^レ探察^{セヨ}焉、窃^レ惟^レ國家源平相軋以來王綱日弛、不^レ絶^レ如^レ綫、徒^レ擁^レ虛器、為^レ域内之共主、而世^レ、掌^サ兵權者、名雖^レ大臣、實^レ乃國主爵祿廢置皆出^レ其手、遂^レ使^レ域内之人、不^レ復知^レ有^レ天並^レ日之聖統巍巍然、擲^レ億兆臣民之上、冠裳倒置莫^レ此^レ為^レ甚、唯有臣子恭順^レ一節、可^レ以^レ當^レ羶羊之告朔^ニ者、不^レ敢^レ公然^テ自^ラ稱^ニ王号^ヲ於朝鮮^ニ耳、夫^レ稱^レ我^ヲ為^レ君而我不^レ辭、我即^レ君^{ナレハ}也、呼^レ我^ヲ為^レ臣、而我不^レ怒、我即^レ臣也、歷代將家不^レ敢^テ自^ラ王^ニ而朝

鮮稱^{スルニ}以^ニ殿下之書、欣然^ト輪納^シ未^ニ嘗^テ為^ニ之^カ一辭^ヲ足^レ以^レ王自居^{ハシ}也、則^ニ与^ニ夫^ニ自王^{タル}者固^リ自無^ニ間然^{タル}、此猶有^ニ可^レ怒者^一存焉、今乃廢^シ歷代持起之定例、創^ニ一切無稽之新^一規、上^ハ則失^ニ恭順之義^ヲ、下^ハ則悖^ル祖上之法^ニ、吾以為^ニ凡^ク為^ル臣子^一者、固^リ當^ニ從容規諫^シ繼^ニ以^ニ犯爭^一、務使其君不陷于偏上欺下之地、然後乃可^レ謂^レ不^レ負^ニ聖賢之書^ニ矣、若^シ有一言半句、涉^ル於德惠、必欲為魏家之荀彧、則不但自誤且以誤君、吾知^ニ執事之必不^レ為此也久^シ矣、似聞有^ニ諸侯王例之說^一、此甚無^レ謂^レ、何^{ナレハ}則或^ハ稱^ニ日本國武藏王^一、或^ハ稱^ニ日本國關東王^一、是可^レ無^レ問而知^ニ其為^ニ我國諸侯王^一也、若^シ專^ラ以^ニ國号^ヲ加^ニ于王^ノ字之上^ニ、則為^ニ國內無上之尊稱^一、豈非^ニ胎^ニ然^ニ歟、設^シ或^ハ如^レ此可^ニ以為^ニ我國諸侯王^一、則彼^レ其朝鮮國王^一者亦將^ニ以為^ニ我國諸侯王^一、烏^ソ乎可也、夫^レ前日之稱^ニ日本國姓某^一、彼國奉承、未^ニ嘗^レ為^ニ之少^ク減^ヲ焉、今日之稱^ニ日本國王^一、彼國恭敬亦何^ノ為^レ之少^ク加^シ焉、不^レ知有^ニ何^ノ所求^一、而欲^レ使^ニ其戴^ニ大臣之冠^一冒^ニ國王之名^ヲ、与^ニ夫^レ將家諸公同^ク蒙^ニ千古不磨之是非^一耶、大君之稱固似^レ不^レ穩、稱王之舉亦為^ニ失^レ宜、後世有以下今日之罪^ニ羅山^一者、罪^ハ執事^ニ、則吾恐^ハ執事將^ニ何以自諉^ヲ焉、請^フ加^ニ三思^一、慷慨之極累^ニ發狂言^一、切^ニ自振慄、唯待^ニ鬼門一謫^一耳、謹此不備、三月十四日雨森東再拜、

自跋^ニ書尾^ニ曰、東作^ニ此書^ヲ、實^ニ切^ニ憂慮^ス、一言既出駟馬難^レ追、倘^シ加^ニ以謗^ニ訕時政^一之罪^上、則家門之禍可^ニ勝^テ言^ニ哉、第^一一片慷慨忠義之心勃々不^レ能^ニ自制^一、且^ツ任^ニ紀綱^一正^ニ名^一分^一、唯為^ニ君子之學^ヲ者能^レ之、若^シ自^ラ畏^レ威儉^レ安箝^ハ口^ヲ於履霜堅冰之際、則平生所^レ讀者果^ニ何^ノ書^ソ耶、縱^ヒ踏^ニ不^レ惻^一、實^ニ

所^ニ甘心^一、蓋^シ往昔將家通門^ニ之式我書稱^ニ日本國源某^一、彼書稱^ニ日本國殿下^一、彼此未^ニ嘗^レ有^ニ稱^ニ王^一之例、慶長十二年講和通使、彼書始^テ稱^ニ日本國王殿下^一、元和三年、寬永元年、書式相仍、皆以^ニ國王殿下填^ス焉、寬永十二年命^ニ我^一對州^一使^ニ彼書改^テ填^ニ日本國大君殿下^一、翌十三年遣^ニ使來^一聘、始^テ稱^ニ日本國大君殿下^一、寬永廿年、明曆元年、天和二年、相仍不^レ改而我書則自^ニ慶長^一以來一^ニ依^ニ將家書式^一、但稱^ニ日本國源某^一而已、夫^レ大君之稱在^レ易^ニ、則固^ニ為^ニ至尊之名^一、然^ニ古今異^レ稱^一、時有^ニ轉移^一、或^ハ以^ニ嫡王子^一為^ニ大君^一、或^ハ以^ニ侯伯^一為^ニ大君^一、或^ハ稱^ニ人^一父^一為^ニ尊大君^一、見^ニ於伝記^一歷々可^レ考、非^レ若^ニ皇帝或^ハ天子及^ニ王号^一古今一定而不可^レ易者也、夫^レ然^ハ則我國大君之稱、大君^ハ即^ニ家君^一也、猶^レ言^ニ諸侯之長^一也、云^レ爾、有^ニ何^ノ不可^一哉、寬永之所^ニ以汲^ニ於改稱^一者、安^ソ知^ニ恭順之義有^レ所不^レ敢^セ而特^ニ起^ニ此称号^一耶、且^ハ或^ハ稱^ニ日本國殿下^一、或^ハ稱^ニ日本國王殿下^一、或^ハ稱^ニ日本國大君殿下^一、咸出^ニ於彼之所^ニ稱^一、而在^ニ我則自^ニ將家^一以來至^ニ天和壬戌^一歷世相承、但^ニ稱^ニ日本國源某^一、其所^ニ以難^ニ於稱呼^一者、豈^ハ非不^ニ敢僭^レ上之意隱然^ト見^ニ于書法之間^上乎、今乃欲^ニ一舉而廢^レ之、苟知^ニ王霸之弁^一者其^ニ誰^一不^レ為^ニ之拊^ニ心^一、余之所^ニ以極^レ力弁駁奮^テ不^レ顧^ニ身者^一、笑^ニ由^ニ此也、嘗^テ觀^ニ善隣國寶記^一、有^ニ云、外國稱^ニ我將相^一為^ニ王^一、蓋推尊之義、不^ニ必却^レ之、每^ニ一^一開^ニ卷^一不堪^レ捧腹、夫^レ我非^ニ王而彼^レ以^ニ王稱^一之、猶^ニ我商^一買^ニ而彼^レ以^ニ士大夫^一稱^一之、我婦女^ヲ而彼^レ以^ニ丈夫^一稱^一之、予焉受焉、皆可^ニ以為^ニ不^レ智^一何^ノ推尊之^ニ与^一、光榮之有、且大臣之階出^ニ於朝命^一、王爵之稱定^ニ乎自心^一、或^ハ是恭順

或^ハ是專橫、亦不^レ思之甚也、究^ニ其根由、無^ニ非不學無識之所^ニ致矣、可^ニ勝^テ歎^一哉、三月廿一日雨伯陽甫識、

*1 東大本、都城本「謹」。

*2 東大本、都城本「胎」。

*3 『橘隱文集』は「雨森東再拜」なし。

*4 東大本、都城本「問」。

*5 東大本、都城本「買」。

*6 東大本、都城本「不」。

*7 『橘隱文集』は「雨伯陽甫識」なし。

一九、一三

上林太史書

雨芳洲

凡^ソ所^レ貴^ニ乎執御親秘之臣^一者、以^ハ其能^ク有^レ所^レ薦^{ムル}也、蓋^シ區寓^ノ之^ナ大^一億兆之衆、獲^レ材^ヲ則治^リ、否^{サレハ}則乱^ル、自^レ古及今^ニ、未^レ有^ニ不^ル然^ラ者^一也、而^ソ上^ノ之人常^ニ患^フ乎隳靡慌惚、未^ル嘗^テ少^ク經^ニ于心^一而天下有^ニ遺賢^一、是果^ニ上^ノ之人之過^キ耶、抑非也、彼^レ其侍^ニ帷幄^一陪^ニ語笑^一之人、誠^ニ有^ニ憂^レ國愛^{スル}民之念^一、博^ク采^リ審^ヒ訪^ヒ、必^ス得^ニ瓊偉英^一特^一之士^一而為^ニ之推轂朝薦而暮召改^レ絃而易^レ轍、有^ニ何^ノ難^一哉、善^カ乎、鄒生之言也、曰^ク、天下布衣窮居之士、身在^ニ貧賤^一、雖^レ包^ニ堯舜之術^一挟^ニ伊管之弁^一、懷^ニ竜逢比干之意^一、欲^ト尽^ニ忠^一、當世之君^一、而素^リ無^ニ根抵之容^一、人生必有^ニ按^レ劍相盼之跡^一、而不得^レ為^ニ枯木朽株之資^一也、東誦^ヤ斯^ノ言^一也、非^ニ止一日^一矣、今夫^レ武關^ハ天下之雄藩也、以^レ職則周公召公、以^レ功則齊桓晉文、撰^ニ八柄之

權^一、成^ニ一匡之業^一、翼^ニ戴皇室^一、扶^ニ持國脉^一、累代奕葉重德增輝、凡^レ版藉之所^レ載^ル、堪輿之所^レ接^ル、咸皆府伏委命、外至^ニ雞林蝦貳、太泥鴻毛、伊斯之國^一、莫^レ不^ニ稽顙來朝^一、相率^ニ猷^ニ琛於廊庭^一、戸不^ニ夜扃^一、〔男女異路、較諸近世以來、未有如今日之〕盛^ニ且大^{ナル}者也、窃^ニ惟^ニ太史先生閣下、該洽博大之學、雍容寬厚之資、以^ニ三世箕裘之務^一、掌^ニ一代文章之衡^一、而身抱^ニ含雞之署^一、家飫^ニ稽古之榮^一、凡^レ遊^ニ乎其間^一者、一獲^ニ聲咳^一胥人增^レ價、天下翕^ニ々然莫^レ不^ニ望其風采^一、僕不肖以爲^ニ其於^ニ一世之士^一也、必有^ニ以顛裳寒素之余、傾筐淖汗之中、煎沸淬濯、慙慙吹噓、以著^ニ國家求^ニ賢如^レ渴之誼^一、使夫祈奚蓋黜之徒、不敢擅美於千古之上也、然^ニ未^レ之或聞焉、而又以為大人君子之所存、常出於庸俗之表、固非淺中薄慮者、所得而能料、其意謂必有駸駸之良、然後可以立購金之庭、必有魁壘之質、然後可以進擁簪之門、故其謹自脩潔、不敢有所薦引者、蓋有待也、非自私也、夫然則堀穴巖巖之士、庶幾將有以彈冠趣裝翹企三晋之是尽者乎、東乃西荒齷齪之小人、擁腫寡偶、素乏鄉曲之譽、年邁力衰、行將溘焉以沒、固無所望於斯世、然至於慕古哲之高誼、踐善人之遺跡、則未敢自謂其無志也、從今以往、倘或有聞夫紀綱世教、黼黻皇猷之士、援茹稟征咸出吾先生之門、寧欣々然揚眉抵掌於魚竜出沒之鄉哉、此至願也、此至祝也、此天下國家之福也、古之人將欲有謁必先贊之以文、故此藻飾卑陋敢吐胸臆、固不自覺狂言之過、當幸裁察焉、不勝屏營畏縮之至、

*3.5 先生自^ニ注^一云、此文余四十九歲、在江戶時所作、江戶儒家羅山至^ニ整字^一、凡^レ稱^ニ武城^一為^ニ柳營^一、將軍為^ニ大樹^一、其他亦稱^レ此、整字末年一時文人墨士惟要^ニ言詞宏麗^一、不^レ顧^ニ名分所

在、競^テ用^ニ鳳城童闕等ノ字^ヲ、整宇亦莫^ニ之能^ク禁^ル、余
故作^ニ此書^ヲ、致^ニ正名之意^ヲ、

- *1 東大本、都城本「特」。
- *2 『橘隱文集』により補う。東大本、都城本も異図本と同じ。
- *3 東大本、都城本「未」。
- *4 東大本、都城本「焉」。
- *5 東大本、都城本「注」。

一九、一四

大宝説

雨森東

自^レ古国家實祚之長短、皆繇^ニ祖宗德沢之淺深^ニ、天人之際如^レ合^ニ符節^一、感応之理昭然可^レ驗、蓋天之愛^ニ人也甚至^リ、亦猶^ニ父母之於^レ子、偏覆包函、無^レ所^ニ殊異^一、燭^ニ之以^ニ日月^一、潤^ニ之以^ニ雨露^一、又有^ニ五穀魚鼈桑麻林卉之養^一、無^ニ一^ト而非^ル為^ニ人^一之具^ニ、聖人財成輔相為^ニ之^ガ制度^一、極^ニ乎愛護養育^一之道、則天之報^ニ復其子孫^一者、猶如^ニ良守令之祈^ニ主^一、^{※2}櫓^{※3}爵、伝^ニ世而不^レ絶也、在昔三代之有^ニ天下^一、或^ハ四百、或^ハ六百、或^ハ八百、其国祚之長^キ也、豈非^ニ天之報復者^一耶、惟我国前有^ニ七^一聖、後有^ニ五^一聖、積德累善、率真為^ニ治^一以^ニ清浄之心^一、行^ニ和煦之政^一、巍々乎、蕩々乎、養^ニ成^一一^ニ国^一万世仁寿忠質之俗^{※4}、又有^ニ三^一宝之教^一、尊^ニ奉上蒼^一、燕翼貽謀、其成化也久、故入人也深、遠超三代、蔑視漢唐、实有非天壤間万国之所能髣髴者、嗚呼盛矣哉、夫我之為^ニ国也^一、太陽之所繇、始而在地之東、或曰君子之国言其仁也、或曰東方之寿域言其齡也、仁者天地生々之理

也、在方則為東、在時^{※5}別^{※6}為春、我在^{※7}也^{※8}之東而当於春、此其所以仁也歟、典章文物讓於中原、々々其猶夏乎、孔子曰、周監二代、郁々乎文哉、吾從周、夫周之文固盛矣、後世人君不能追躡周之盛跡、而政刑風俗日趨於僂、使天下之民悴々焉無所措其手足、一變而為是非火坑、再變而為犬羊戰区、董仲舒者、漢之明道者也、漢之去周末遠、猶言若亘少損周之文致用夏之忠、使其生於後世、又當何如哉、然則我東之典章文物讓於中原、宜賀不當慨也、夫上下^{※9}觀^{※10}治、甘其食、美其服、樂其俗、安其居、世無刻薄之風、人有慈憫之心、国之為形屹然立於瀛海之中、未嘗受干戈於外国、皇々如、熙々如、举城內之民、相安於無事之境^ニ、安^ニ有^ニ中道天札之患^一、嗟乎仁^ニ而寿^一者、非^ニ君子之國^一其能然^ニ乎^一、從^ニ古以來不^レ輒^一之^{※11}臣負^レ固特^レ險、抗^ニ拒王命^一、一旦蒙^ニ朝敵之名^一、無^レ不^ニ登時殲滅^一、如^ニ奧之貞任、鎌之高時^一、天討一加、家破人亡、無^レ復^ニ噍類^一矣、是故愚妄如^ニ義滿^一、強暴如^ニ秀吉^一、舉皆低頭縮手、不^ニ敢^一垂涎^ニ於九鼎^一、知^ニ天命之不^レ可^レ犯^一、而皇座之不^レ可^レ覬也、由^ニ是觀^一之、神胤聖孫蟄々繩々、与^ニ生々之^一理^一、無^レ窮^ニ於霄壤^一、可不^レト而知也、中原之人、喜^ニ為^一夸^一毗^一、動^ニ輒^一鄙^ニ陋^一、^{※12}四方之國^一、甚^ハ至^ニ于比^一為^ニ禽^一獸^一、然^ニ其言曰^一、南^ニ變^一从^ニ虫^一、北狄从^ニ犬^一、西羌从^ニ羊^一、惟東夷从^ニ大^一、从^ニ弓^一、俗仁而寿、我東用大弓、其来尚矣、万国之所無有也、蒼頡制字之始、已知東方有君子之國、故指事成画、書之以夷字、是以君子待之也、比諸羌狄視為異類者、奚啻天淵、然則我東之聞於中原、在于唐虞之前、其当七五之季世耶、孔子嘗曰、少連大連善居喪、東夷之子也、既而欲居九夷、曰君子居之、何陋之有、亦聞我東有仁寿之俗也、所謂九夷、蓋九筑也、竊惟三宝之設也、一曰璽、二

曰劍、三日鏡、璽者仁也、劍者武也、鏡者明也、明以燭之、武以斷之、仁以成之、上之所守、下之所宣、聖々相伝、際天蟠地、我東之所謂神道者、舍此乎何求、誠使其在上者夙寤晨興、兢々業々奉至尊、彰盛業、先自立万化之源、以庶物之首、受天之祐而享鬼神之靈、内而輔弼百司、外而大師^{*12}群后、惟忠惟順、克慎克畏、翊載^{*13}一人、不二其儀、尊卑^{*14}觀^{*15}欣、遠迤和洽、則王教明而休德流、陰陽調而風雨時、景雲出、朱艸生、鳳凰集於苑囿、麒麟遊于郊藪、皇祚之長也、真将与天地同久、豈啻億万斯年哉、詩不云乎、嗟尔君子、母常安息、神之聽之、介尔景福、

此篇当与班彪王命論相照千古、行於天下而無愧、豈区々拈弄筆墨、争奇角巧者所能窺哉、盖九夷之名与今名不相似者、因九区之旧称、以彼国字填之、猶如後世女尊為卑弥呼、平戸為肥鸞島也、余嘗有言曰、我国称为武国者、非通論也、盖 国家靖難之初、

聖天子恭默思治、夢帝賁弼、選扨天下之大賢、授以征夷之任、兼以内府之司、故能殲滅元凶、掃蕩妖氛、以成整頓乾坤之大業、而後皇統明於上、霸功建於下、六十余州熙々然如登春台、人知其神劍之為用甚大、而不知神璽神鏡乃為之本、故有武国之称耳、雖然文武之為用、猶陰陽之相待也、天下雖安、忘戰則危、武不武則文不文、神劍一麾、而神璽神鏡亦將從而隕矣、窃惟堯舜之授受著於言、神聖之伝繼托於器必也、三器備而後天下永泰平矣、

- * 1 東大本、都城本「節」。
- * 2 東大本、都城本「折」。
- * 3 東大本、都城本「檐」。
- * 4 東大本、都城本「俗」。

- * 5 東大本、都城本「実」。
- * 6 東大本、都城本「則」。
- * 7 東大本、都城本「地」。
- * 8 東大本、都城本「觀」。
- * 9 東大本、都城本「軌」。
- * 10 『橘隠文集』「陋乎四方之国」
- * 11 東大本、都城本「変从」。
- * 12 東大本、都城本「師」。
- * 13 東大本、都城本「翊載」。
- * 14 東大本、都城本「觀」。

一九、一五

論武

前賢

夫^レ国^ニ之有^ニ文武^一也、譬^フ諸^ル輿^ノ之有^レ輪^ニ、殊^ニ軌^ヲ而同^ス塗^ヲ、聯^レ体^ヲ而交^ニ運^ニ乃^一天地之大^ニ經^ニ而古今之通^ニ義^一也、夫^レ子^ノ嘗^テ有^レ言^ヲ曰^ル、有^ニ文^ノ事^一者必^ニ有^ニ武^ノ備^一而冉^ニ求^ニ之戰^ヲ於^ニ郎^一而克^レ之^ニ也、曰^ル学^ニ之^ヲ孔子^一則^ニ洙^ノ泗^ノ之教^ヲ人^ニ也、籩^ニ豆^ノ雍^ノ容^ノ之暇^ヲ禮^ニ、象^ノ削^ノ綴^ノ兆^ノ之余^ヲ言^ク、未^レ始^{ヨリ}不^レ在^ニ乎^ニ武^一也、然而用^ニ正^ノ制^ノ奇^ノ之方^一、攻^ニ伐^ノ擊^ノ刺^ノ之術^一、所^ノ以^テ不^レ見^ニ於^ニ經^一者何^{ソヤ}也、盖^シ当^ニ春^ノ秋^ノ戰^ノ國^ノ之^ニ際^一天下之所^ニ患^ニ專^ニ在^ニ于^ニ用^ニ武^一、彼^ノ聖^ノ賢^ノ者有^ニ所^ニ深^ク慮^一、故^ニ難^ニ於^ニ開^ニ口^一、固^ニ其^ニ宜^ニ也^一此^ニ言^ニ聖^ノ賢^ノ之^ニ學^一也^一及^テ至^ニ澆^ノ季^一世^ノ道^ノ日^ノ降^リ、上^ノ下俱^ニ有^ニ功^ノ利^ノ之^ニ心^一、而剛^ノ悍^ノ暴^ノ戾^ノ之^ニ徒^一、鼓^レ口^ヲ弄^レ舌^ヲ競^テ為^ニ用^ノ兵^一之說^ヲ、以^テ中^ニ人^ノ主^ノ之^ニ欲^一、苟^モ非^レ開^ニ二^ノ罅^一於^ニ邊^ノ陲^一則^ニ必^ニ生^ニ事^一於^ニ中^一、卒^ニ至^ニ於^ニ天下^ノ騷^ニ然^一邦^ノ隨^ニ滅^ニ亡^一、此^レ乃^ニ仁^ノ人^ノ君^ノ子^ノ之^ニ所^ニ不^レ忍^一見^ニ故^ニ後^ニ世^ノ如^ニ閭^ノ洛^ノ之^ニ賢^一、專^ニ說^ニ礼^ノ樂^ノ不^レ及^ニ武^ノ道^一、蓋^シ出^ニ於^ニ慈^ノ憫^ノ惻^ノ怛^ノ之^ニ念^一、亦孔^ノ孟^ノ之^ニ心^一也^一此^ニ言^ニ宋^ノ儒^ノ之^ニ說^一、不^レ及^ニ武^ノ者^一、亦^ニ有^ニ所^ニ深^一慮^一猶^ニ如^ニ對^ニ醉^ノ客^一、不^レ敢^ニ言^ニ酒^一是^ニ常^ノ養生^一也

心此言說書之惠、常在于不得其心也、昧乎理勢之源、闊倭漢之情此言倭之辱漢、地殊則俗異、時易則勢變、不可混而為一也、以為談武非吾儒事也、何以異乎取陽而舍陰、悅仁而忘義、遺大經而失通誼、可謂謬矣、嗚呼為斯說者、何不觀於古今之變乎、在昔神聖之

傳寶也此言上古神聖之所以傳三寶、其意在道而不在于器、一曰璽、璽者仁也、二曰劍、劍者武也、三曰鏡、鏡者明也、所以示萬世之教也此言三寶備而教義立平、治天下之道盡于此也、而

樞宮之承統也、仁同天地、明並日月、而勦群兇於中原、開鴻祚於無窮、赫々乎武矣、何其盛此言樞宮之盛、三寶全備而成功者專在于武、所以證武也時遷代易、上玩下忽、璽不璽、鏡不鏡、降テ而至ル於航海之變文治元年歲在己巳三月王師敗于長門、劍已頓矣此言仁明武俱失、所以致此、於是主威如綫、疆臣跋扈、作テ俑レ於鎌ニ、弄柄於室、而效尤於豐、禍乱相尋於四百年之久、強凌弱、大併セ小、四分五裂、星散シ

某二峙、生靈失所、肝腦塗ル地、非ニ武一之道之衰乎、幸而天開昌運、明良相遇慶長元年、歲在丙申、關東任內大臣、未幾拜征夷大將軍、於是乎保又有天下焉、帝統高ニ於上一、洗々乎霸功燭ニ於東一焉、在泰一之六五二曰

帝乙婦妹以祉元吉王室以レ之、在大有之九二二曰大車以レ載有レ攸征、无咎、大君以レ之寬永十二年以來、東台書割、始用大君為号、大君即家君、猶言天下諸侯之長耳、非至尊之稱也、既而浪華奏凱元和元年、歲在乙卯、月豐氏滅、距元治年四百三十一年、百廢六丕興六、奸宄除ク、而草窃伏

天降瑞而地獻珍、舉ニ寓一內之大、熙々然共ニ躋一于壽寧之域、漢一、漢一、云唐一云、風斯在下、所謂盛德大業、於是乎彰ル矣此言德業所盛且大、一者由是觀之、武道之所係、果何由於三寶之備也、而武功何以大廢乎

如ソ哉、吾以為為日中ス、則昃、月盈ス、則虧、時不可ニ以常一泰一、予不可以常ニ享一、亦安ソ知ニ其久一而無レ衰一也、凡士

之生於斯世、有志於國家者務當ニ以忘一戰一、則危一之說、上獻ニ於其君一、下論ニ於此民一、預メ修ニ措置一之方、誠

適ニ制馭之宜一、使レ之家各武ニ其武一、海內肅人各親ニ其親一、

而天下順、斯文斯武並行レ而俱ニ得一、毫無偏廢之弊、則庶乎永世無レ愆、大平可レ保矣、彼其ニ翦一々於ニ詞章之末一、以ニ繁一縟一為レ急、迂闊是習フ者果ニ何一益一耶、雖然柳有ニ一統一焉、夫武之為ニ道也一、以此為ニ設一險保一邦之資一者君子心也、聖門之學也、以此為ニ狡一焉ニ啓一疆之具一者小人心也、盜賊之事也、其可ニ以弗一察也夫此言無用之文、有害之武、俱不可以治天下也

* 1 『橘廳文集』では「盛也」。東大本、都城本は畧図本に同じ。

* 2 東大本、都城本「某」。

* 3 『橘廳文集』では「上焉」。東大本、都城本は畧図本に同じ。

* 4 東大本、都城本「泰」。

* 5 『橘廳文集』では「文治元年」。東大本、都城本は畧図本に同じ。

* 6 東大本、都城本「廢」。

* 7 東大本、都城本「泰」。

* 8 東大本、都城本「翦」。

一九、一六

武国論

前賢

夫天下之大、四海之広、非ハ仁ニ則不レ育、非ハ明ニ則不レ燭、非ハ武ニ則不レ整、此乃天理之常、而帝道之規也、窃ニ惟一上古神聖之道、所ニ重一在ニ乎三器一也、已堯舜之授受著ニ於言一、神聖之伝繼託ニ於器一、嘻ナ大ナル矣乎哉、三器全備ハ、則天下ニ治一、一不ハ備ニ則傾一、二不ハ備ニ則危一、無レ一焉者ハ亡一、而鋒ニ滴一以降、至ニ於人紀一、重輝累德、天覆地載、莫シ不下ニ以一神一璜一為レ先、孔子欲ニ居一之九夷即九筑、神聖建都之地、君子国之名始此、倉父之制、字也从大从弓、我國所用也、西土人北日狄、西日物類、画之、以其仁而壽也亦以此也、今世之以武国為ニ稱一、其故何

ソヤ 耶、蓋保元以來、神璜韜德、靈鑑鏤彩、而宝鉞歛鏐、下陵上替、宇内雲擾、列國分爭、生民塗炭、於是乎齒脣盈於溝壑、肝腦塗於原野、始如春秋、終如戰國、殆五百年矣、天下洶々焉、惟武之惟用、敢死勇力之武、奔命之不懈、當此之時、苟非雄傑英烈、稟天地之秀、為億兆之歸往者、本之雨露、照之以日月、震之以雷電、驅之以風飈、曷能廻狂濫之波、於既倒之後哉、惟神惟聖、誕誘宸衷、惟帝赫怒、鑒照下土、遂挾天下至賢、授之以敵愾之任、加之以調燮之司、使之奉神璜於章墀、開靈鑑於天府、宝鉞之用行於域内、於是乎兇頑除而黎庶安、世綱立而天道明也、豈非三器全備之所致耶、庸俗之士、徒見宝鉞之為用、而不其本之以神璜、輔之以靈鑑、而後宝鉞能為用也、然則稱之為武、國者、非通論也、雖然、天下雖安、忘戰則危、文極則武、其弊也慘、武極則文、其弊也偷、若使宝鉞之用有所學缺、則神璜靈鑑亦將從而隳矣、可不慎哉、

* 1 東大本、都城本「擾」。

* 2 東大本、都城本「惟」。

* 3 『橘隱文集』は「天下之通論」。

一九、一七

文質論

前賢

天下之所尚有二、曰文、曰質、而所謂忠者、未有不_レ在_二其間_一、猶太極之於陰陽也、一文一質消長遷徙、隨時變

易、上下相安、亦猶二昼之必有_レ夜、々之必有_レ昼、天地之大數也、蓋夷狄之俗尚質、中國之俗尚文、尚質之極同於禽獸、而無別、固為不可、然尚文而不_レ已、則其弊也必至_二于僭_一、而人有不堪者、於是乎、夷狄乘之而入_二于中國_一、中國之人莫不_レ甘心相率而歸之、然則夷狄之禍在_二于中國文_一之太過、而不_レ在_二于文之不_レ足_一、中國之人曾不_レ察之、而欲愈益其文、而勝之、可謂惑矣、今以_二居喪一事_一言之、則上古之時父母死、哭泣而已矣、_{繁辭下伝云古之葬者、厚衣之以蓆、殯之中野、不_レ封、不_レ樹、喪期無數、及_二至_二中世_一、礼文漸備、然人服_二重喪_一、唯止_二三月_一、其_レ他可知、自此已後、月益歲增、纖悉無遺、哭泣殯斂之節、棺槨衰麻之制、至於礼典之所不能_レ盡載、而少_レ有_二違_一之者、斥為_レ失礼、加_二以_二責罰_一、於是乎天下始有_レ不能堪焉、亦理之常也、春秋以來所謂周礼、其中必有_二有_レ於後世之所_レ為而非_二周公創制之初法_一者、_{周頌離篇云、燕及皇天、克昌厥後、朱文王名昌而此詩曰、克昌厥後何也、曰、周之所謂諱不_レ以其名号之故、而遂廢其文也、諱其_レ名而廢其_レ文者、周礼之未失也、先生所謂有出_二於後世之所_レ為而非_二周公創制之初法_一者、可見_二其_レ一端_一焉}、何以言之、夫子嘗曰、從衆從下從可知矣、然則夫子吾從_二周_一者何_レ也、是舉_二其大者_一而言之_レ也、豈其繁文偽飾之謂_二耶_一、吾意_二使_二夫子而從_二中政_一於當時_一、則斟酌于中而合_二乎事宜_一、必有_二不_レ足_一而足_二于_一者、顏子為_レ邦之答、其_レ不_レ盡_二從_二乎周_一也、豈非_二明然_一乎、}

先生自注云、薛文靖公統讀書錄卷六、王凝論元魏曰、夷狄之德黎民懷之、不_レ知何_レ謂也、薛文靖非_二實_一不_レ知其故、蓋_二在_二中原_一則有難_二於開_二口者_一故_二不_レ肯言_一也、

*1 『橘隠文集』は「未嘗不在」。

*2 東大本、都城本「徒」。

*3 『橘隠文集』は「矣」と割注の間に「瘡毀而已矣、水漿不入于口而已矣」がある。

*4 『橘隠文集』はこの後に「淮南子云、三年之喪は強人所不及也、而以偽輔情也、三月之服は絶哀而迫切之性也、高誘注、三月之服、夏后氏之礼」とある。

一九・一八

送芳洲先生帰対州序 河口静斎

物有異類而相感、忽然而遇、倏尔而合、若有陰驅而潜約之者、今夫対之為国、西通鯢壑、四面抵海、蛟蜃之所出沒、魚竜之所遊戲、神恠詭幻、不可紀極、怒濤澎湃、駭鯨奔蚪、而風止日出、長州如縈、余波遙曳、洄洑容与之際、蚪貝霞布、光彩輝射、玳瑁珠璣之属、粲爛溢目、奇珍異宝好貨上菓往々而出、然其地孤絶、自非舟楫之利、竟不能至、奥之為州、皮服之郷、霜雪之域、風氣勁悍、地多平原広沢、故其民便鞍馬以射獵為楽、筋力倍常、輕忽險阻、每獸肥草淺、則鳴鏑之声相属於野、騎而馳驅、涉歷榛莽、食其肉、飲其血、羽毛是貢、以奥視対、猶燕越也、遠宦遊之始、愚昧寒陋、年又幻^{*2(幼)}少、上無所援、下無所附、窃仰瞻鉅儒碩士藝文之盛、則茫然而嘆、赧然而慚、殆將捲業以返數、適謁対馬儒宗芳洲先生、先生一見不啻父兄之於子弟、誨之以其不逮、許之以其必成、於是前日茫然赧然者、一朝改觀、使人有進々不已之意、自是厥後十年於今、情如一日、未嘗少變、東西加此之邈^{*3(蜀)}、賢否加此之殊、可謂天洲^{*4(淵)}矣、而立談之間、意氣相投、稱為知己、誼比骨肉、是豈非前所云有陰驅而

潜約之者耶、不然則安能以三尺無介一童子、而睥睨于大賢之側、不為其所斥、而反為其所録如此哉、乙巳之歲、先生隨其国主朝于東武、觀礼已畢、戒行有日、先生於遠也厚、遠常以無報自愧、然詩有曰、中心藏之、何日忘之、既已藏之於心、何仮形於言語乎、故舍而不道独述異類相感不偶然之意、以序其別云、是歲八月望日、白河河口光遠仲賓父拜書、

*1 東大本、都城本「州」。

*2 東大本、都城本「幼」。

*3 東大本、都城本「邈」。

*4 東大本「淵」、都城本「然」を「淵」に改める。

一九・一九

送南坡雨森君序

前賢

予読離騷、所云樂莫樂於新相知、悲莫悲於生別離、初未嘗知其味、今於南坡君之帰也、乃三復吟哦、嘆古人不我欺矣、南坡君名父之子、年僅弱冠、神清氣和、蓋王弼衛玠之流也、乙巳之歲、隨其尊人西来、予一見、即欽其風采、幾辭帰、於是又惜其去之遽、及其将行、乃歌曰、山川悠遠、既阻且深、嚴霜晨隕、孤鴻暮吟、嗟我良友、如玉如金、楊鑣遐路、克広徳心、又歌曰、秋風夕起露為霜、曰帰曰帰道路長、俎有肴兮樽有酒、酌以勸君寿無疆、欲行不行永今夕、伊人宛在海中央、歌闌南坡君已命駕矣、于時中秋前一日静菴書、

壽鳩巢室先生序

前賢

享保十二年春、鳩巢室夫子壽躋七旬、於是二月廿又六日、男洪謨、率門人高安橘繼美南海平直方等若干人上壽、相与再拜于堂下、冠服跪起之容肅如也、酒三行、各誦所聞、稱揚盛德、白河河口光遠言曰、唯仁義是崇、唯王道是尚、唯朱氏是宗、先生之學可謂正矣、是其是、非其非、辭弗虛、說弗濫、先生之文可謂至矣、居仁由義、動必循禮、^{*1}昭然水潔、焜乎玉光、先生之為人可謂高矣、苟有一是、上之足以參議大庭、下之足以流化上庠、況先生兼而有之、^{*2}宜矣天下仰之為一代宗師焉、予聞賢者之在世也、與時世相為滂隆、故用室之衰、雖仲尼之聖、不能保上壽而履極位、而漢家之興、申公轅固生僅守一藝之徒耳、抱遺經於亂離之末、未有一節可奇者、無足深論、而猶尚荷厚寵享遐齡、赫然于朝、稽古之榮、為衆所羨、方今區宇艾安、內外驩悅、跂行喙息之類、咸遂厥宜、札樂鬱与士大夫莫不爭相砥礪、習為君子長者之行、視西京之列遠過之、而黃髮番々如先生者、^{*3}當是時、耳目聰明、心力克壯、嚮用于時、亦豈申轅之流、咕畢口耳之學所得而望也哉、蓋天以為麟鳳龜竜、諸所謂嘉瑞之物不足以貺昭代而褒善治、故令其賢者榮且壽、以答吾君恭儉之誠、何其盛也、然則今日之會、不特門下數子得而賴之而已、^{*3}柳亦國家之余慶也歟、且夫引年養老先生之典莫懿於是、廢而不行千有余年、久廢者理當必復、復其在今日乎、一旦廊廟之上、議及于此、不憚割牲執觴之勞、臨東序而乞言焉、則非先生孰其當之、孰其當之、詩曰、保佑命之、自天申之、天於先生固其申之哉、小子不敏謹秉筆以頌云、遂書為獻、

* 1 東大本、都城本「昭」。

* 2 東大本、都城本「周」。

* 3 東大本、都城本「抑」。

通昭録卷之二十

藻彙編卷之二

志賀紀事

大島氏小伝

有竹居記

晚翠軒記

鳩巢記

送河守国華序

鳩巢遺墨跋

静斉記

歎涉廬記

送山子和序

同

同

同

衆妙館記

群牧類編序

神武迪精序

四字経序

四字経跋

養生論跋

風雲詩稿序

水哉堂印譜序

題山水図

雨森東

植木金

河静斉

鳩巢先生

河静斉

植木金

河静斉

河子深

余承裕

源弘休

源維亮

藤中休^{*1}

河子深

伊藤長胤

松岡玄達

釈大道

河静斉

植木金

雨芳洲

赤壁戦図賛

寿竹径翁序

祭静斉先生文

書中秀政寿像

答山田君豹書

澹斉先生誌名

澹斉先生碑陰記

祭澹斉先生文

登竜先生墓誌銘

永福寺記

蘭卿字説

河静斉

山文蔚

伊東悠哉

植木金

植木金

山常行

高玄泰

河子深

*1 東大本、都城本「仲」。

藻彙編卷之二

二〇・〇一

志賀紀事

雨森芳洲

古川翁、諱方久、為本州判掌官、元配内野氏、有三子、長十一歳、名勝允、次四歳、名常久、次名隆久、享保己酉掩粧、長者薨々子立、少者尚在襁褓、哀苦悽慘之状不可名言、翁以撫養無人、娶志賀氏為継室、氏賦性貞淑、慈惠有余、愛養三子不異所生、自衣服飲食、以至一切調度之物、莫不極意周全、或有疾病躬親湯藥夜不安寢、若有過失或譴呵之、或勸誘之惟三子之成材是望、二十七年間有如一、姻婭宗族莫不稱嘆、隣里出入之人、不知其為継母、三子亦

感慕切至、定省弥勤、家庭之間、雍々如也、寬保癸亥正月二日病逝、享年六十歲、翁泣而告余曰、亡妻別無所長、詩所謂無非無儀、惟酒食是議、不過婦人之常道耳、唯愛護前妻之子、出于至誠、不可以不伝于後昆、永為我家媳婦之範、吾子以為何如、余曰、自道之喪也、世無良俗、男子猶然、何況婦女乎、由是觀之、若氏之賢淑之德、固可伝于世、豈特一家而已哉、於是乎書、

二〇・〇二

大島氏小伝

前賢

夫古人所謂士者巍々然矣、求之於澆季之世、衰微之時、安得如巍々然者、苟其所為、或翹楚於衆人^{*1}之中者、雖不魏々、亦与古人並稱而伝之、豈得謂之過乎、大島氏、諱朝尚者、其為人也、吾知之矣、村岡家之初立也、官扨其可為給事者無有焉、有一薦大島子者、以為其人貞廉慎儉、必能任之、既而為給事、前後六年、卒使其闔家雍睦、且有不虞之儲、非独幹事^{*2}之過人已也、其言曰、治家当以身為規、教子姪^{*3}有法、嚴而且惠、奴僕有病、躬自煎藥以予之、故門無喧爭之声、親戚隣里、歛々如也、間暇以読書為娛、性不喜酒、享年六十九歲而逝、其子某為郡奉行、今年反賜乃祖旧祿若干、正当其七回之歲、人以為大島子忠厚之報云、嗚呼求士於目今、如大島子者亦寥寥焉、吾安得不書而伝之乎、大島子小名讃三郎、九歲喪親、子立聲然、家生子太右衛門、鞠育成人、亦可謂義僕矣、

二〇・〇三

有竹居記

植木金

宝曆庚辰秋、移居於武江城東鎧津之傍、居之數歲、客曰、此居也、余未見其有竹也、而以有竹揭焉者何也、応之曰、予嘗挂冠於虎門、卜居於麻山、其地幽邃、佳木蔽扉、脩竹繞屋、環堵寂寞、不聞^レ人声^一、此吾人之所以棲遲也、於是乎、予肆心於經術、期志於有成矣、或有來訪者、則与之談笑以尽一日之歡焉、不敢願求交游而見識于世、唯從容於煙雲竹樹之間、以自適而已矣、或曰、凡物有遇、有不遇、而得其遇者甚難矣、吾子在此也、実得其遇者也、何則雖有其人而使之居囂塵湫溢之地、豈不庶乎、令人而俗也哉、雖有其地、而使奔趨貪婪之人得以居之、豈不庶乎、令居而俗也哉、故其人而得其居、則風操弥高也、其地而得其人、則境壤益雅也、令也使好古風操之人居幽閑清爽之地、豈非人地相遇兩得其所者乎、且夫吾子之愛最在乎竹、盖將擬古之人者邪、曰、何須必擬古之人哉、予有自取而已、夫竹之為物也、中通而外円、是知者之所愛也、葉縁而光潤、是仁人之所愛也、節高而剛堅、是志士之所愛也、幹聳而綽約、是高人之所愛也、春秋寒燠不問盛衰、是忠臣之所愛也、烈風積雪不論屈伸、是義士之所愛也、此六者未知有同古人之愛乎否、余自取于養己、静齊夫子聞之、以為得其要、遂命以有竹、今也斯居無竹而有竹名、此因其旧焉、然疇昔之竹猶依然在于心胸之間、其既在于心胸之間矣、則足以自養己、其足自養己矣、則其謂之有竹、不亦宜哉、於是乎記、于時癸未六月也、

*1 『橘隠文集』では「衆人之中者」の「之」なし。

*2 『橘隠文集』では「幹事之才過人」とある。

*3 東大本、都城本「姪」。

*1 東大本「令」。頭書「令 当作令」。

二〇・〇四

晚翠軒記

河口靜齋

盈尺之階、徑丈之室、其楹黯然而黑、其壁坳然以歛、上茅下薦、加以塵埃風雨所侵虫鼠所侮、非予誰能堪之、是吾軒之陋也、庭除之內有松生焉、長僅及簷、蔭不掩畝、輪菌離奇、旁挺而側出、枝疎而幹瘦、是軒之所以取名也、而范魯公所謂鬱々含晚翠者、名之所以出也、夫軒之庫且隘既如此、其所以得名猥瑣又如此、而朝夕於斯者、其人卑微蒙昧、又復如此、雖有能言之士、不能誇而道之也明矣、然予構此不求于人、不仮于市、用工寡故無屑々督迫之勞、限価也廉、故無規々營度之累、唯吾安耳、他人之嘲我無与焉、且吾聞之、君子之業不在於貌、而在乎材、不在材而在乎節、趙文子其中退然如不勝衣、而相晋國霸諸侯、裴丞相不長不楊^{*3}、而出將入相、貌固不足論也、而孟賁夏育非不勇也、而位不過鼎官、蘇秦張儀非不辯、而老為說士終軍、賈誼非不文也、而天且折、材亦豈足恃哉、松之為物衆美盡備、其貌与材皆可謂絶於群木者也、或翫諸耳目、或加以斧斤、唯人所、使無有不当、是以欲供池隍之植列門廡之觀、則必求夭矯奮迅、如童之躍、如虎之躡、布葉欲密、風日不漏、抽枝欲繁、鸞鶴焉託、其曲如釣、其繞如輪、如負劔而立、如執壁而揖、春煙靄而秋霧縹、迎朝陽而延夜月、其色如膏如黛、湛々郁々如流水如美女者、而後為得、是非尚其貌乎、欲為棟為梁、架之明堂上、納之清廟之中、則必求霜雪之所蹙、雷霆之所薄、上摩蒼天、下臨無地十围而千尺者、而後為稱、是非尚其材乎、若夫朔風振野、寒氣墮指、先之以微霰、次之以密雪、亘山埋谷、是時也、凡天地之所生、陰陽之所育、鉅而山川、細而昆虫、莫不縮栗凝閉、伏氣而飲聲、改色而易態、而愈茂益秀、特立独在于百卉零落之間、恬不知春夏之謝而秋冬

之至、至是其節傑焉以著、松之所以松、蓋在此尔、而人不之察、独吾夫子有曰、歲寒而後知松柏之後凋、舍貌与材、唯節之貴、自古知松者未有若吾夫子也、今吾軒所栽、雖貌不足愛、材未堪用、然至論昂霄之氣、凌霜之操、則实可与彼童形虎姿十围千尺之徒、相對而無愧、雖非流輩所賞、庶幾世間有激濁^{*6}楊清之士見而憐之必不廢矣、予不颺不敏、幸得此軒以処吾身、又得此松以適吾趣、何慊之有、唯勉固初志、遠期晚節、深惟夫子之訓以自勵、松乎、松乎、微是吾誰与帰、享保乙巳歲春二月二十日、白河書生河口光遠仲賓父識、

*1 『芋山集』「用工也寡」。他は景岡本に同じ。

*2 『芋山集』「不在於材」。他は景岡本に同じ。

*3 東大本、都城本「楊」。『静齋文集』「楊」。

*4 東大本、都城本「釣」。

*5 『芋山集』「明堂之上」、「静齋文集」「明堂」。東大本、都城本は景岡本に同じ。

*6 東大本、都城本「楊」。『静齋文集』「楊」。

二〇・〇五

鳩巢記

鳩巢先生

元祿三年秋、余在賀陽、得永氏廢宅在城西者買而居焉、蓋余仕賀十有九年、始得有家安処免於遷徙^{*4}之勞、於是名其宅曰鳩巢、而人有問之者、余笑而応之曰、詩不云乎、維鵲有巢、維鳩居之、蓋鳩性也拙矣、不能自蓄租以巢、而來居鵲之巢、故詩人見而詠之、亦足以見其博物之一端矣、余材腐力弱拙於治生、如一宇之屋數楹之室、其用

力之至輕而人生有待之急者，猶不能蚤自任土木之事，而遂求他人旧築，以為棲息之計，則世之至拙者莫余若也，今夫鳥之有巢也，自鷦鷯燕雀之微皆有以能之，而鳩乃不能焉，常以居他鳥之巢，則其視余也可謂異類而同拙矣，既以名宅，奚曰不宜，顧其屋宇湫隘，土地卑濕，加以歷年既久，牆壁崩壞，此世之聰明豪雋材力自好者所不堪也，非余之拙，其誰能居之，孔子曰，君子食無求飽，居無求安，何者其志有在而不暇及安飽也，余於君子之志雖日勉勵而不及，然食求飽居求安者，豈其本心也哉，是其於室家之美結構之完，不独有不能亦有不為者存焉，此余之所以安於窮陋而不悔也，若余之所樂，則有之公退之暇，每遇良辰美景，即其室之北窗以讀書詠詩，悠然自得不知日之將夕，至其默契千載之前，豪蕩一醉之間超然出於人世之表，而獨与造物者遊，毀譽得喪死生窮達無芥於胸中，而世之可喜可厭可愕可懼者，無復一毫容於其間，不知夫輪奐雕鏤高大之觀為何美也，庾廌細施声伎之奉為何樂也，幸市鄺之近，朝夕以得所求，可拱甘旨以奉親，可沽酒肉以待客，亦小人之利也，此豈不足可樂而養其拙哉，始余之至此，嘗從隣翁而問此字之所自焉，則曰，自永氏未居於斯也，有青氏者始卜築於茲，未幾其人死，子孫他遷而後永氏居之，二世而亡，当青氏卜築之時，吾及見之，安知其為永氏之所居乎，方吾与永氏往来如今日於吾子，又安知吾子来居之乎，曾歲月之幾何，其變遷如此，又安知吾子後不有何人繼而居之乎，余聞而悲之，夫人生不常，何足^{※2}控揣^{※2}，而世之營々欲務為宮室服御之美以圖久遠者，嗚呼亦愚矣，君子仁以為宅，義以為路，居安宅而行正路，施為事業著為文章，生也有光於當時，死也不朽於後世，此与夫外物之奉取快一時不待其尽而忽焉，以亡其始尽一生之力以得之，僅足以湮滅而無聞者，其得失何如哉，嗚呼君子所以自強於道而不以

此易彼者，其由是也欤，夫巧者不足^レ多，而拙者不足^レ於隣翁之言^一，益信故并書以伝之，以俟^一来者觀^レ焉，四年五月二十七日記

※1 【頭注】「前漢書王吉伝広夏之下細旃之上」。

※2 【頭注】「賈誼鵬鳥賦忽然為人何足控揣化為異物又何足患」。

*1 東大本、都城本「徒」。

二〇・〇六

送河守国華序

河口子深

世有大可愧之事，而人或不知也，為人所師，其美弗副，是欺人也，一為可愧，遠遶膝下千里而來，号曰就學，徒悵歲日^{※1}，務戲談而已，是欺親也，二為可愧，今城府内外學士大夫，開館延生徒老何^{※2}限，至其受業之人，計百倍之，其師云弟子云者，能無有一人懷此二愧乎，遠江処士河守子，少有志操，奉父命来師事鳩巢先生，留其門下十有余月，先生嘉其意，為之臨席講解，自疆不息，寒暑無避，靡々如鋸解木，每遇義利之弁，取舍所決，及近世士習之弊，激厲之色見乎鬚眉，懦夫為立，而河守子亦能自勉，口誦抄^{※3}，篋笥皆滿，留滯之間，行已一以先生之言為法，足不妄出戶，非其友未曾交，終相載以歸，視先生所以教子，与子之所以學于先生者，然後始信世不乏人，而向之所云二愧，豈特免之而已哉，先生有以德於子無以忝其親此可貴也，及其將行，友人河口光遠而高其義双美其事，製詩一篇歌以送之曰，正德年来文運新，大開邸第聚縉紳，仲舒不老江都相，馬卿終為漢廷珍，當時文章誰第一，鳩巢先生真絕倫，議論尽傾天下士，呵則為秋噓為春，有時謝客不肯語，眼光堂々射倒人，白日門前

清如水、五侯七貴尚逡、孰其從之河守子、少年瞻氣大於身、家在大井河上^{*4}任、日夜滄浪濯纓塵、男兒不枉桑逢志、負担詩書辭老親、冬月讀書肌生粟、手写細字幾達晨、俄歌婦歎意何似、瞻恋庭闈人頻、飄然揖我將西去、執手相顧淚沾巾、來時腰下無^{*5}物、婦日囊中重万鈞^{*7}、々々非金又非玉、一卷魯論不憂貧、

- *1 東大本、都城本「日」。『静斎文集』は「日」として「月カ」と傍書。
- *2 東大本、都城本「老」。『静斎文集』は「老」として「者カ」と傍書。
- *3 『芋山集』「口誦手抄」。東大本、都城本、『静斎文集』は県図本に同じ。
- *4 東大本、都城本「住」。
- *5 『芋山集』『静斎文集』「入夢頻」。東大本、都城本は県図本に同じ。
- *6 『芋山集』「無一物」。他はすべて県図本に同じ。
- *7 東大本、都城本「鈞」。

二〇・〇七

題鳩巢先生遺墨後

植木金

鳩巢室先生、蚤志于聖学、深造以道、既造之以道、而后自得之也、故其發於言語著文辞者、无美不尽矣、又无善不尽矣、何惟言語文辞而已也哉、於末藝小道亦復然矣、所謂取之左右逢其原者也乎至如筆墨、則余未嘗聞用意以学之也、然其所手書者、以書鳴于世者之則不敢不称其美而歎其善矣、以予觀之、如先生者、可謂通儒全才矣、右国字之文数篇、則先生所自草者也、而賜之福原医翁、々又伝之余、盖以余景慕之深也、於是新加表幀十襲以藏于篋笥、斯欲其无虫鼠之患云、宝曆癸未六月、

二〇・〇八

静斎記

河口子深

静斎者、河口皞讀書之室也、皞家于四達之衢、市声之喧已不可堪、而車馬之所轟、塵沙之所眯、日為之蔽、耳為之塞、心亦為之不免迷惑矣、拋之患矣斯室一啓童孺不窺、賓客不入、危膝独坐、唯書之对、清閒之樂、似略有得焉、几案既設、筆硯既序、乃請先生長者咨名之之義、先生長者憐皞之志、命之曰静、且告之曰、子之志夫水乎、千仞之壑、万頃之坡、大淵淪渟畜湛若大虛、蛟竜魚鼈於首屈宅、終年弥月不流不溢、而一決之則崩林麓、倒山嶽、勢如風雨、莫之能禦者、至静之發也、至打夏潦之聚、濶不踰畝、深僅数尺、一旱使之竭、一雨使之盈、則余沢之所施、下流之所及之可知也已、管子曰、無黙々之事者、無昭々之功、此之謂也、諸葛孔明又云、非寧静無以致遠子其勉旃皞拜口而退既以名斉、且云其語置諸壁間、朝夕覽省、以自勵、願無忘先生長者之賜、享保辛丑秋八月、河口皞太初記、

鳩巢先生評 無一点俗氣、勉之々々、古人可及、

- *1 東大本、都城本「日」。
- *2 県図本、「^{*4}」、東大本、都城本、『静斎文集』いずれも草書体。『芋山集』「矣」。
- *3 東大本、都城本「項」。
- *4 東大本、都城本、『静斎文集』「坡」。
- *5 県図本「^{*5}」。東大本、都城本、『静斎文集』いずれも草書体。『芋山集』「発」。
- *6 東大本、都城本「於」の草体か。

*7 『芋山集』は「受」、『静斎文集』は「辭」。東大本他は原本を模写したものの。判読不可。

*8 東大本、都城本「斉」。

*9 東大本、都城本「書」の草体か。

二〇・〇九

歌涉廬記

河口静斉

東武城南亀岡有沼田侯賜莊、負丘枕海、喬木參天、地形幽阻、迥出塵寰、而侯居之三世、增植佳卉、駢置奇石、最与境称、故名其園曰衆芳、而俯眺天地、積水無際、潮汐之進退、波瀾之起伏、若指諸掌、賈艦漁艇出沒于朝風夕霧之間、景和氣霽焉、則房山總岫、眉列髻露於煙靄之中、宛如古所伝海中神山者、殆有褰裳濡足之想、故名其亭曰登瀛者、彩巖桂君為今侯所命也、君既名之、又為之記周覽之致備矣、而侯又託深使記所謂歌涉廬焉、蓋地勢逶迤、竹樹茂深、小径旁午、紆迴上下、如往而復、始迷後得、恍然自失、故就岸側五分之二構廬、以為升降憩息之所、所以有此号也、^深昔一拜謁先侯拾遺公、以及今侯周旋十余載、聞此壯之勝、未得一見、属授簡之日、乃請往遊焉、既悉其奇、退而嘆曰、嗟乎、先拾遺公器業著於一代、声望滿于天下、所蒞之邦^邦至今誦遺愛、將愈久而愈新、然如其功績之懿、則自有大史氏在、陪臣小子豈敢僭越、入此園者、亦可以卜公之盛德、觀其艸木暢遂禽鳥嚶鳴、則知公之慈仁積和之氣充溢乎庭宇也、觀其因自然不勞人工、則知公質直渾樸不喜彫琢也、觀其棟桷、無丹堊之飾、器玩無金碧之麗、則知公尚儉安素、愛養物力、貽厥孫謀、不亦嘉乎也、謝安石江左之良相也、東山之遊目為高標、而後之学安石者、恬退加安石、鎮靜不能如安石、識鑒忠亮皆不能如安石、

而唯其遊之尚、不亦左乎、況於李德裕平泉之記、惜一艸一木以為家誠、陋矣哉、今嗣侯蚤有令聞、不墜家聲、時遊此園、將仰惟遺範、益振芳躅、豈特林泉之美也已哉、深竊頌侯父子之賢、以記侯之廬如此云、延享乙丑冬十二月、播府河口子深拜手謹撰、

*1 東大本、都城本ともに「邦至今」。

二〇・一〇

送山本文字子和從

余承裕

薩摩侯帰国序

凡事無小大、有不得其時以興者乎、亦猶如百穀之區別、非以膏雨降之候、不能生萌芽也、故曰雖有鎡鋸、不期待時、而所謂時也者、亦待物類相感以生而成者歟、今茲 薩摩侯 賜休暇帰国也、其文学山子和從焉、先是子和喜我徂來翁之教、東来与吾党諸士周旋、吾党諸士無有先之者矣、至此来辞曰、以某之從先生游之有日也、願乞得一言、以為帰装、余応之曰、吾老矣、無復為、又何言、雖然、無已、子主方向文学也、聞此行也、議中国授室、以養士導民、乃受其制於林祭酒以筦、至哉此举也、天子曰 璧雍、^璧諸侯曰泮宮、自唐虞三代以来、莫不置焉以設教矣、蓋天下之濶、人民之衆、不可戸至人論、則非此無以施教也、即司徒之職、經野建国、以此為先、亦職是之由、薩摩自国我西南隅、凡六百年、世称藩屏、上戴天子、下事 霸主、貢獻以時、朝請以年、未嘗失臣附之礼、且不覲中原、不掠隣国、曰、進取有得之為無饜、孰若退守無失之為知足之愈也、故未嘗尺寸侵入、亦未嘗尺寸為人侵、六百年如一日矣、盖国大民富、自足無他也、可謂有道君子之国矣、然而其地以越在僻遠、

特隱微聞胥、未嘗聞有一文学之士、見乎世者出也、盖我

東方、戰国已來、天下一切武熙至、或有士而不知一丁字者、是豈独

薩摩為然、諸国皆然、及

神祖出一定天下、戢武事揆文教、於是乎、諸国往々出学士、而薩摩亦然、豈独諸国為然、則

神祖之化、殆将暨南北而遍乎、是為時也、盖於是乎、有是拳焉、顧子以其職、必与其事焉、苟与其事焉者、最^{*2}諸勿失于時矣已、昔文翁起学官化蜀、為大守僅數歲、既比齊魯、遂又以至使天子令天下郡国、皆立学校、以弘漢化、則豈不謂教之流行、速且博者也、況今以有道君子之国、導六百年固結之民、何待數歲之後、必将速乎、応響者乎、且豈唯比齊魯耳、方今昇平、文化漸興、則遂至令天下郡国、皆立学校、亦将自此始、則無論漢、即先生之化、於斯為盛、亦何讓焉、先是一二侯国、亦置以為治、則豈不所謂時也者、亦待物類相感以生而成者乎、唯斯時為然也、不然、安有六百年隱微聞胥、不能出一士、而遽至此哉、祭酒、羅山先生之後也、先生在^{*4}国初、嘗定一代之礼^{*4}曲、則我

神祖之叔孫通也、縣絕遺法、必藏在家、則至其制、亦非於是取、将誰適從、行矣、子之業、其在泮水之四章乎、曰、穆々魯侯、克明其德、勉光昭主之明德、勿使文翁^{*3}壇^{*3}美於前代哉、子和曰、命之矣、不敢惟命是奉、敬從事於斯乎、余無言之以贈之、乃述其所聞於此行、以壯其際時得從事之務、且因以又嘉徂來翁之教、亦将有因子和及遠、古人曰、人亦不可以無年、余老猶及見斯盛事、亦唯時乎、不然、徒老而已者何限、是為送序、

*1 東大本、都城本「璧」。

*2 東大本、都城本「最」。

*3 東大本、都城本「王」。

*4 東大本、都城本「曲」。

*5 東大本、都城本「壇」。

*6 『熊耳先生文集 正篇』卷五では「老」の次に「死」がある。東大本、都城本は景図本に同じ。

二〇、一

送山子和從

薩侯歸藩序

源弘休

盖余之交子和驪也、始相識熊耳先生所云、先是子和每從 侯述職而來也、則謂、方今江都郡々文学之盛、儒師之衆遑々開塾於闔閭、而分門戶招生徒者、未可俚指、我誰適從、貿々挾師東西一無可其意、十稔所于茲矣、而獨聞我熊耳先生之業、而欣然喜曰、是我師也、乃執贄更恨^(繼承之)□□之晚也、子和素讀書不廉、吾党之士得子和喜、猶獲一大敵国、其時以聞就談焉、則子和実巖函之固、雖将善雲梯仰攻、殆無得乘其倏者、其学之雄博夫亦其国矣、歲越壬辰 薩州有修起泮宮之举、訪落江都学宮制於林祭酒、子和以其職与矣、夫我 邦今也承平之代、□□□□中国而授弟子室文学之士、不圻地而崛起、若夫薩之為封則賜履東至大隅、北及日向、西疆肥後、南服琉球、自從鎌倉氏之世緝熙祖業、未嘗顛墜、唯是尠 武夫之盛国而武備甲於天下矣已無矣、又富矣而未有以文学聞於世者、其少見則 湍興初僅有僧文之、然後世無得而称其唯其時俗所称者、□□文学有山文蔚者、子和嘗為弘休語、見其遺詩則猶有為可誦者、夫以薩土之広、人士之衆、歷年之久、而寥々乎如斯、乏其人者其故維何也、盖有待上之化

而後興者然也、今而後泮宮立焉、則以薩士之庠人士之衆而教育其所久待者、則靡然嚮風矣、猶時雨化之也、可計日而待矣、夫教法立焉而人材育焉、而人各執技能忠孝以事君親、則侯亦宗廟社稷四時祭祀惟是奉享、上則天子、中則霸主、能繩祖武以奉其職、則豈惟邦之是禔乎哉、國其庶矣、哉昔在炎漢文翁為蜀郡守、仁愛好教化修起學宮於成都、市中招下隸子弟以為學宮弟子、為除更繇高者以補郡縣吏、次為孝悌力田、常選學友童子、使在便坐受事、每出行縣、益從學宮諸生明經飭行者與俱、使傳教令出入閭閻、縣邑吏民見而榮之、數年爭欲為學宮弟子、富人至出錢以求之、繇是大化、至今巴蜀好文雅、文翁之化也、後有若司馬相如楊雄輩雜然勃起焉、若夫蜀地僻陋文翁教化猶且然、況今以薩士之庠人士之衆而誘進矣、已久待則豈惟如蜀地僻陋文翁教化猶且然乎哉、其薩文學之盛也、可拭目而待焉、子和其勉之哉、臨別為子和語者如此、是為序、

*1 東大本、都城本「如」。

二〇・一二

送山文學子和從駕其

侯歸薩藩序

源維亮

今茲癸巳之歲、薩侯就國、文學山子和從焉、蓋聞、薩故國海之西南隅、而距中土三千里而遙矣、其地甚富而美出金于山、出塩於海、稱天府之國者非邪、然其民不甚解曉文義、以故至或謂薩無人、此行也、侯將中國而起泮水之宮、招文學之士、而敦教化、脩仁政、使民由先王之教、於是請學官制於林祭酒、子和以其職與焉、夫本邦設為庠序學校也、始于大宝之間、及

天平之時、吉備公奉

敕親自教授天下學士、靡然鄉風矣、延喜之時、於茲為盛、學校官及勸學田無國無之、其後風化稍々陵夷、至天仁之時、諸州學校廢毀不治、或為街房、或為寺觀、先生之教於是乎亡、自是以往、天下擾亂、攻城野戰、血流漂杵、奚暇治禮義哉、及乎

昭代、海內晏然百有余載、先王之教復敷四海、封建之制亦焉依、蓋欲成三代之盛、是以上則天子、中則霸主、設學校官、下至侯國亦一二有效之者、而古樵編而難結者、咸襲衣冠、舌洗舐而勉為文、矧今侯方鄉文學、向上風呼、奚必加疾、廼使其民興起、而解曉文義內先王之教、子和与此盛事、可謂君臣之遇其時哉、子和最哉、且炎漢之時、文翁為蜀郡守修起學官於成都、市中招下隸子弟為學宮弟子、每出行縣、從諸生明經飭行者與俱、使傳教令出入閭閻、吏民見而榮之、爭欲為學宮弟子、繇是教化大行蜀地、學京師者比齊魯焉、遂至令天下郡國皆立學校官、蜀地僻陋而有蠻夷風、誘進之如此、今薩出金于山、出塩於海、富饒無以尚焉、然而子和其才博學乎六藝之文、則使其民解曉文義由先王之教者固也、段使子和行義雖脩、非遇其時焉、能得与此盛事乎、即是千載一時而亦千歲一遇也、而今而後薩好文雅、豈啻如巴蜀乎、則益致富疆比齊魯、何有雖延喜之盛亦可庶幾矣、亦唯子和行義兼脩重以其時也、君臣之迹、非知無以相得、是亦侯之明德克成是功而已、余於子和以臭味、則見此盛舉、安可無言、因序送行如此、令薩好文雅由先王之教、蓋自此始云、

*1 東大本、都城本「王」。

*2 東大本、都城本「擾」。

送山君子和序

滕忠休

薩州文学 山君子和、客歲從

侯駕東、問業於熊耳先生、於是吾輩初相見于山陰社、山君為人、謹厚謙讓如虛、其學不可得而闕、及會業亦似不能言者、人人或不能言、而一發言、則無不人人各如其意所欲出、而後人人服其博物、然猶不自多、終如^{*}必恭、未嘗失札於勸說雷同、初與諸友訪其邸舍也、私窃念 山君礼嚴也、恐少所容、既諸則童僕提挈擊鮮命酒、礼節不設、主賓相忘、談諧終日、繼之以燭、諸子狂態倍恒矣、當此時也、阮氏不能作白眼、所向念顧自失焉、唯是以小人謀君子、猶尚疑今日之歡實由諸友也、如休等一介处士、寧得無經面乎、既而重訪也、無伴到門、則尋声出延、謝有急不得、遂亦置酒懽若初、於是所向念弥益自失有大慙矣、後聞諸友、詣者無不談笑、真率令各如歸家、亦唯雖臭味之故、固君子之博愛哉、而至交熟、送迎揖讓、其儀不忒、久而敬之、即不私同盟、亦不可不曰寬厚長者也、嚮與伯芝輩誼韓非於邸舍、余亦約与共、無何移居城北、道路相隔、切磋志願與約違、尔來時事相迫、欲一往尋旧歡、猶不果、而 山君今已歸、恨不可言、先是聞之、

今侯敦学 命建孔廟於国城、山君以文学与其事焉、而自廟貌俎豆至学館藏書大率効東都之制、則就林家問之、罔成既致国一大盛事哉、昔文翁者非一代之郡守歟、而猶好教化誘之、則蜀地嚮学至富人出錢以求之、今夫

薩侯世君、厥国厥民世服厥政、於化之何有学之与^{*}如水之就下、念当廟之經營、庶民欽樂攻之、即勿亟不日成、々則 山君必祭酒、乃總領学政、勉勵生徒、其勤可知已、大邦人士之盛、当其君好学之時、

而不可無才子輩出、亦且 山君為師儒、寬厚誘進之、則子弟学職彬々、礼讓文雅之俗、千載下当与齊魯競美耳、果若此言、則山君既事熊耳先生、々々之名亦鳴大邦矣、於是乎、厠末列如休等者亦有榮施哉、然則此行也、非尋常送別之比、因以詩代祝詞、其詩曰、海西列国大牙分、殊称薩州富有殷、齊景千駟豈可問、今侯德成能好文、一經伝旧山文学、東朝西歸恒從君、借問寵遇一何盛、文采風流本出群、一日來遊山陰社、才反三隅且精勤、門下今見鄭康成、礼樂歸去應擅名、何須別後軫式逐、已聞聖廟国經營々、々到日見肅穆学、政綱紀知待卿々、自学德中祭酒、々々從來領諸生、々徒縫掖育養功、俊秀成德国風榮、努力三千里外別、更待翕然伝英声、

* 1 東大本、都城本「始」。

* 2 東大本、都城本「詣」。

* 3 東大本、都城本「興」。

* 4 東大本は「当」として下の「当」を見せ消ち。都城本は「当常」。

衆妙館記

河口静斉

潜谷子善書、宗青蓮家筆跡、流麗華潤、觀者莫不嗟服、而其声名鬱塞、未振於世、蓋有故也、其為人温厚自牧、退然唯以揮染為娛、未嘗標榜于外、嘉遁於羽畎之野者十又余年、因自号曰潜谷子云、今歲夏六月、偶遊東武寓于麻山之麓、而未有識者、適一門生持其書奉伝士子恭林公、林公一見称嘆、謂尊円氏之流乃有此人、為作詩一篇並序數百言極贊其妙、於是潜谷子之名始發聞于縉紳間、潜谷子不喜其名之顯、而喜天下有知己者尚在、以示於予、々曰、林氏公朝儒宗四

世文獻、寒士于升斗之祿於筆硯之間者、願掛名于弟子籍、皆奉贄紹价于貴勢之人、仰冀譬咳之余沢、而不可苟得、況望其片言隻字之賜乎、而子自遠邦新來、未及叩林公之門、而属姓名於閭吏、而坐受木卷巨軸之寵子謂知己、豈虛矣哉、殆尊^{*1}_露氏之覆^{*1}於子也、似不偶然、而林公詩語中有衆妙字、以題于僑居文室、以識其喜可乎、潜谷子曰、佳則佳矣、不亦太侈耶、予曰、何為其然妙、而謂之衆妙、桂下之意可知也已、人々皆有其妙、事事各有其妙、請以書言之、篆有籀斯之妙、而義獻之所不建也、而隸有義獻之妙、而籀斯之所不知也、雖易地皆然、亦隨時共貴、尊^{*2}_{青蓮氏}之於行草也、為千載之墨妙、不論籀斯義獻之同異、唯自妙其妙而已、衆妙之意非能妙^{*2}_{子衆}人、而与衆人共此妙者也、且林公之所命、孰敢異議乎、潜谷子猶疑後人貽惑于此、請予作記、予為积其義如此、於是亦可以見潜谷子之不矜焉、延享二年中元後一日、芋山太初散人河光遠記、^{*3}

*1 東大本、都城本「露」。

*2 東大本、都城本「子」。

*3 『芋山集』、東大本および都城本には改行して次の注（小字）を載せる。「經筵講官林公贈溝口成從詩曰、衆妙写来非汝誰」。

二〇・一五

群牧類編序

前賢

予同藩小笠原先生家伝礼学、世称淵博、士林說容典者、就以為楷式、素通兵書金鼓進退之節、偏伍弥縫之序、營壘部校之制、以暨近世將之得失、士之勇怯、勝敗之數功否之状、靡不貫究、以是二者卓然自名其家、而其余暇又慨中葉以來諸侯遷徙無常、系譜淆雜、雖有

成書未免疎繆、因尽集前載手加裁正、举真黜偽、質古徵今、既詳且密、凡親賢錯峙之勢、大小相維之形、山川要害之實、立国之始末、世家之遠近、披卷瞭然如指諸掌、可謂不下堂、而知天下者也、名曰群牧類編、命予作叙、雖不敏敢采大意謹而叙之曰、夫有天地、而後有人物、有人物、而後有君臣、有君臣、而後有城邑、有城邑、而後興滅盛衰之跡著焉、推其跡而考其世、未有失道而昌、得道而亡者也、故曰前事之不忘後事之師、此編之謂也、後之人君觀此編者、得予言而存之、庶幾免矣、享保十三年十二月光遠識、

二〇・一六

神武迪精序

前賢

昔圯上老人授留侯一編書曰、讀此可為王者師、蓋太公兵法云而侯多病、未嘗特將無赫赫之功、高帝飾其說亦戰輒敗、然則侯之兵法果何在耶、當時最善用兵、莫如韓淮陰、々々用兵有多々益善之妙、此豈籍一語於留侯耶、雖然、一借箸而天下定曲逆之奇猶瞠乎、其後況於淮陰乎、淮陰称高帝曰、陛下不善將兵、而善將々淮陰之卓識有以窺其微矣、後世談兵之流勉夥、亦淮陰以下已、何則留侯之能事不可談、其可談者至於旗鼓之間而極、蓋大匠之規矩不得不然、独村井氏著神武迪精乃有意于将々之道耶、村井氏於旗鼓、豈敢有略、謂其書既具其法既詳、而留侯之能事為不可談焉、終于不可談、則人莫能知其端倪、豈特屑々乎淮陰以下而已哉、或乃流為盜賊之靡不難矣、村井氏著此書、不得已尔、不得已尔、予書生不足以知其微意之所在、唯因其介蘆惟明而請也、姑吐予所欲言者、寬保改元春三月、光遠題、

二〇・一七

叙四字經

伊藤長胤

薰^{*1}聒之移人、深於耳堤、童習之成性、不待夏楚、今也舞勺之教久廢、外伝之訓不修、挑^{*2}闔浮嫻、以及于長、而後始欲^下尚^二友古賢^一、以服^中聖訓^上、宜其扞格之難^レ禁也、欲端^二其蒙養^一、莫如使^下其日記^二故事^一、漸^二漬于前言往行^一、以^テ成^中其性^上焉、千文蒙求之作、其庶幾乎、然汎資^二博聞^一、或疎規戒、明漢冲蕭良有氏^{*1}着^二四字經^一、括往牒之成語、存前世之法戒、協以韻語^一、以便^二課誦^一、幼學之徒說之、雖未必通其義、而諳其名号、亦發蒙之一助也、刻成、丐序於長胤、因弁^二其端^一以数語云、

※1 【頭注】「楊子方言曰、童而習之白首紛然」。

※2 【頭注】「詩鄭風挑兮達兮、註挑輕儇跳躍之貌達放恣也」。

*1 東大本、都城本「着」。

二〇・一八

題四字經後

埴鈴<sup>姓松岡、名成章
字玄達、号怨庵</sup>

明蕭良有所著四字經、專為童蒙而設、約古今之言以提經史之要、四言為對、綴以韻語^一、以便誦誦^一、又從而訓積、大意已了然、於是記得前言往行則亦足以裨補千慮一失、豈特止於資童學而已、學者多勤博洽而遺功近、朱夫子所謂如遊騎之長驅不知所還也、凡學士大夫庠師塾生亦各宜置^二一通於左右^一与千文急就稽古叙古諸篇并時々誦誦以備遺忘意、夫人豈不復有不顧於泰山、而躓于培塿者乎、讀者不可以其零碎瑣屑而輕視之、頃梓既成、就予求跋其後、因題数語以与

之、享保丙午之孟春、

二〇・一九

題養生論^{*1}後

釈大道^{号独庵}

斗瞻所著之養生論^{*2}者、蓋因 太上皇之命所述也、其言不出民生日用之間、而能如其說補養者、則上逮上寿、下不失中寿、非老鍊於醫術者、則不能道矣、斗瞻、姓高氏、名玄泰^{*3}、斗瞻者其字也、早學於大明西湖独立來遊此土、而尽得其術、又遊京師探明医鉅儒之堂奥、今日疊々研精於三教、聖人之書將大有為者也、区々之養生論^{*4}、不可卒於斗瞻^{*5}。

*1 『養生論』（京大富士川文庫藏）「編」。

*2 『養生論』（京大富士川文庫藏）跋は「如其說行則上逮上寿…」。

*3 東大本、都城本「玄」。

*4 *1に同じ。

*5 『養生論』跋（同右）は「皆／貞享丙寅二月望独菴叟去／光書（印）」

二〇・二〇

風雲詩稿叙

河口静斎

虎嘯^{*1}西風生、竜吟而雲興、試問風何自而生、雲何自而興、即竜虎亦不自知其何故、唯其不自知、是以蓬々然滂々然而無窮、人之言是為詩、朝廷草野行役羈旅万境變於前、憂悲愉逸慷慨曠達百感交于内、天機流動、失口成章、即作者亦不自悟其所至、唯其不自悟、是以紛々焉擾々焉而無已、霍氏之子豹、年末綫角、喜而作詩、自題其稿曰風雲、吾愛其取喻不凡、因書其首以勉厥志、既而申之曰、風

雲者天地所以鼓万物、而施沢乎四海也、君子仁以覆天下、義以厲一世、其道亦如是已、

* 1 東大本、都城本「而」。

* 2 東大本、都城本「矢」。

二〇・二一

水哉堂印譜序

植木金

世之刻印章者如其多矣、而世之以能印章聞焉者如其寡矣、其故何哉、蓋印章之為物也、貴介公子搢紳處士、脩學游藝者之所以為文房之具、而非市井里巷之所以宜玩也、然世人徒知其為美觀、而未嘗識其為文玩也、故俗間漫刻以弄之、所以刻印章云者多、是鄙俚拙工足以為文房之具者、蓋亦鮮矣、能者之乏于世也、職此之田當此之時巧于印章者、獨備之芝山公在焉、其所刻者、古雅精妙、瑰奇秀絕、雖禹碑周鼎之文、亦何之加哉、体裁氣象如是、而后足以為文房之具矣、於是乎觀者皆謂曰、自非積功之篤、用刀之深、則何以能至于此哉、是未知公之為公者之言也、夫公蚤志太學、而晒眼於經傳、從事於斯終日、而黽勉有余力、則以及于此、故公之於印章也、實其素事而已、何必兀々專力於小藝者也哉、烏虜其不知人乎、烏虜其不知言乎、公時使近臣某冀所曾刻之印、摺以為譜也、於此金奉旨題數語於其首云、寶曆甲申夏六月上澣日、

二〇・二二

題山水圖

雨芳洲

賢侯瀟洒愛山水、却令画工滿壁描、上有峻嶺之峯嶺、下有清流之

逍遙、飛泉懸空濺如玉、万丈碎巖帶驚飈、^{*2(鑑)}古木蒼蔚檜与柏、凝翠錯紫凌蒼霄、亭台樓閣互隱映、宝塔崢嶸聯屋椽、定有高僧持半偈、手敲木魚修昏朝、又見騷客尋詩料、幅巾藜杖過溪橋、々々之水何滯々、瀉作葡萄繞山腰、樵歌漁唱遠相答、掀篷鼓棹知何艘、田疇連畝稻梁足、^{*3(鑑)}鶴汀鳬渚兼葭饒、雁字蘸波応伝信、成行飛下自嘹々、千態万狀入妙筆、左顧右接忘塵囂、安得引身置此処、染毫欣然謾自謔、

* 1 東大本、都城本「洒」。

* 2 東大本、都城本「飈」。

* 3 東大本、都城本「梁」。

* 4 東大本、都城本「妙」。

二〇・二三

赤壁戰図賛

前賢

竜田子乃好古之士、喜講三国時事不厭、蓋赤壁一戰古今以為奇勲、孔明乃千古之雄傑、周瑜是三国之人材、非孔明無以濟糾合之謀、非周瑜無以成克擊之功、兩賢相遇、義同意協、雖有姦、如曹瞞喪氣破膽、惟敗竄之^{*1(附)}不暇、漢炎之不遽燬夷由于此、不亦奇乎、竜田子徧閱事跡、審察地勢自為形図、使筑前州名工衣笠某画為一軸、挂於堂壁朝夕觀玩、竜田子亦奇士哉、

* 1 東大本、都城本「不」。

二〇・二四

寿竹径翁序

河口静斎

歲戊午冬十月、筠洲森君命光遠曰、今月某日、^{*1}五大人懸孤之辰也、顧百度不肖奉大人無極之恩、生之膝下鞠育撫摩、至于成人、襲守家挑、唯恐弗堪以為大人之辱、則姑舍是而忝預 大廷之選、補黑衣之闕、而得入充宿衛之周行、出陪屬車之清塵、以親觀清時国容儀物之盛、豈不肖能致云乎哉、^{*2}五大人之余沢為然、唯願大人寿昌覆露不肖及新婦弱孫輩而無有休已、此吾森氏之大慶也、惟是朝夕就養之子所以竭菽水之微歛者、不肖未之逮、以為大懼、今幸大人齡躋七秩、吾將乞詩若文於諸作者以歌詠、森氏一時之榮、且所以顯揚吾大人之盛德、或万一千斯歟、子以為可耶、不可耶、光遠再拜起曰、可也哉、以光遠遊君父子之間、或問筠洲君於光遠、則對曰、詩有之云、^{*3}温々恭人、惟德之基、筠洲君其人也、又問其大人竹径君、則又對云、^{*3}詩又有之云、豈弟君子、純嘏尔常、竹径君其人也、是乃一橋一梓、根肥葉盛、豈非鳴鶴在陰其子和之者耶、問者莫不晚服、光遠誦君父子之美不一日矣、今以君請播諸縉紳、孰不欣応而喜道之、大冊巨軸不難矣、筠洲君唯々既踰月、筠洲君又告光遠曰、信如子所云、子亦為吾一言、光遠曰、嚮業已言之、且此卷名公鉅卿巍峩相望、予又何言、君曰、雖然為吾強一言、光遠曰、水陸之味、于鉶于鼎、莫不大具、珍羞嘉餽之盛、猶尚取薑桂之末、以助其滋、以為之和者、烹煎之道也、今也此卷百牢不啻也、而區々之言以為薑若桂、則又可焉哉、此不敢辞矣、白河河口光遠再拜謹書、

*1 東大本、都城本「五」。

*2 東大本、都城本「五」。

*3 東大本「日」、頭書で「云」と直す。都城本は「日」で頭書なし。

二〇・二五

祭静斎先生文

山田君豹

維宝曆四年甲戌、十二月二十二日丙寅、門人薩摩山田君豹敢昭告于先師厩橋故侍講静斎^{*1}河口先生之靈曰、嗚呼天乎、蓄精降神、堂々大東、斯生偉人、幼克岐嶷、瑞鳳祥麟、浩々典墳、日誦万言、時乃室子、巍々其門、往而歸之、探頤窮源、終承其統、斯道斯存、德宇恢廓、澹泊容与、剛亦不吐、柔又不茹、^{*2}綜核今古、貫穿蓋輿、炳乎辭藻、夙得光譽、夫子謙恭、深藏若虛、衣錦尚絅、闇然以章、猗与明哲、実邦之光、胡為無祿、奄忽而亡、豹也小子、撫衣仰風、誘掖諄至、發我昏蒙、山頽梁壞、誰從折衷、余泣漣如、余心忡々、天降若人、將成厥功、曷克有初、靡克有終、歲月不留、痛恨無窮、薄言奉奠、呼彼蒼穹、恭惟 神靈、鑒此愚忠、嗚呼哀哉、尚饗、

*1 東大本、都城本「斎」。

*2 東大本、都城本「茹」。

二〇・二六

書中西 長 政寿像

前賢^{*1}代宮内安村
宝曆乙亥春

此幅中之叟、中西秀政先生七十七寿像也、先生自幼学觀世氏流之樂舞、夙造其妙年、方成童名震天下、先君子嘗好此技、而与先生友善、余初生也、請先生行栞弧之礼、年十有二乃命師事乎、先生誘掖開導、亶々不勸、至十有六恭奉 国命補樂府之闕、於是除疾痛大故之外、無日不侍側、承教殆乎積紀矣、恩如父子、雖以余鶩駘、未足

闕其堂奧、每觀其進退中節、周旋若神、輒不覺絕倒、遂錄而藏焉、寬延辛未、余祇役東武、竊謂万里遼絕、人生難保、不忍永訣也、因一肖像、朝昏拜瞻、冀託欽慕之意、就和田助貞圖焉、助貞善畫、竊工伝神然、性耿介尚氣節、往々峻拒來者、不肯為人揮染、及聞余之言慨然曰、善為尔援筆、於是年六月、請先生共詣助貞之廬写其肖像、神采秀發、鬚眉逼真奇宝也、嗚呼、人心如面、安知我子孫有不樂礼者、不以此圖為覆瓿乎哉、故識以貼云、

*1 東大本、都城本も同じ。目録では「秀政」。

二〇・二七

答山君豹書

伊東悠哉

伊東貞、敬奉復書山田君几下、去年之秋辱賜存問之書、且別幅被教諭、以与朝岡子嘗為談話之言鄭重反復、特命僕以開講席誘生徒、以二君之賢待僕、不為白首書生之輩、而却以長老宿儒之行、於僕之身、何榮如之、誠不知所以謝厚意之賜、然如僕之愚陋、如何得當宿儒之事、竊謂、凡可以為師者宜有其品級、若夫小学之聖謨以行之於身、脩大學之明法以得之於心、其學脩之功、驗乎瑟僎、其蘊蓄之實、著乎赫喧、其學之正、其業之成、如此而後如獲其位、則可以為王侯之佐而行其道於當世、如不獲其位、則可以為俊秀之師而伝其學於後覺、有儒如此、可以為道學之師也、其亜也者、雖未觀其德業之崇広、乃數歲之功、不雜他術、研究聖經而能通其訓詁博覽史伝而詳考其事寔、說經義、則可以喻文意、執筆翰、則可以達言辭、其學之正、其術之備宜以設講席教子弟、有儒如此、可以為文学之師也、自是以降、則如或得其一而不得其二、或達一藝一技之輩、各以其事可

為其師也、私顧、足下教諭之意、以僕嘗學 故鳩巢先生之門、且犬馬之齡、有一日之長而推之熨之、仮於僕以唱 鳩巢之學於都下之名、而二君之材力以鼓舞之、以輔翼之、則將有庶闢邪僻明正道焉、可謂正學興立之大策也、非二君之賢、則就於今之世任道、憂世之志、豈及於斯乎、雖僕豈亦不感服乎、只恨、雖二君之力有余、奈僕不能堪室門親炙之人、既越一世、無幾有焉、而幸僕之存於今、仮令為挙赤幟之名、豈得不比劉玄之孱弱、豪傑失望之類乎、恐雖二君將有不免不知人之謗、是所以不得奉貴論也、若夫為文学之師、亦非僕之能事矣、不材不文雖隣明通家^{*2}、亦皆知之也、又至如為一事之師、則雖強起羸靡努力為之、恐似不足為奉貴論、雖以僕鄙拙、亦非所以為素志也、況於無一藝之得於身乎、如僕之今衰老、雖日晚道遠、尚願親賢者、求益友、聞所未聞、知所未知、而一日進於一日、自忘老癯憤為以勤學而不厭之學耳矣、諸君屢臨敝廬而得相与為講窮討論之会、則何賜如之、可謂老境之大幸也、冀 足下審僕区々之志、則幸甚昭亮、不備、

附啓、去冬託上野子之帰郷、而寄伝語并和歌、以略述僕之意、宜達 几下、旧年以來、以專事鳩巢文集之編集、而衰老之力不能分於他事、是以頗久怠奉復之礼、願賜有恕之慈、則幸甚、不宣、宝曆壬午奉三月十八日、伊東貞敬復書、

*1 東大本、都城本「孰」。

*2 東大本、都城本「朋」。

二〇・二八

澹斎先生誌石 代守約

植木金

先生、諱貞、字知量、稱貞右衛門、晚稱悠哉、姓伊東氏、号澹齋、其先安藝人也、自曾祖道樹、徙家於長門赤間邑、至祖直信、遂為長門人、父治成離鄉遊京師、以医為業、嘗娶加藤氏、生一女一男、公其男也、及父治成承伯兄某遺言歸鄉、保其家、公降武江、依伯父儀、遂為其子、公以元禄十二年某月某日、生于長州赤間邑、以明和元年九月廿一日、卒于江都鉄炮洲、享年六十六、有一女、以中島氏守約為嗣、以其女妻之、有孫男二人、以是月廿二日葬芝泉岳寺、明和元年甲申九月廿二日、不肖子守約泣血誌、

*1 都城本「廿」の部分、空白。

二〇・二九

澹齋伊東先生碑陰記 植木金

先生、姓伊東氏、諱貞、字知量、号澹齋、晚稱悠哉、其先藝人也、自曾祖道樹、移家於長州赤間邑、遂為長人、父治成、母加藤氏、治成嘗學医、以妻子遊于京師、伯兄春信早卒、子男皆幼、不克家事、乃遺言以治成為嗣、於是留女京師、託二條公之家、使君赴東武依伯父儀、是以遂為儀子、儀嘗以文学仕士屋但馬候、以老病致事、歸休于白金村、候猶使廩人給粟、会有火災、延及其宅、松平周防候聞之、使儀就居鉄炮洲別邸之舍、召君与之月俸以供其養、享保十三年九月晦日、儀卒、兩候猶使吏給廩粟、享保十八年春、迎実父治成於長州養于其家、數月而卒、延享元年為周防候以事、使石州濱田還報稱候之旨倍賜月俸、盖賞其功也、宝曆十二年、纂鳩巢文集、梓行既成矣、繼而纂經解若干編、有梓行之志而未成、惜哉、君始受業於父儀、々為一代之真儒、是以力学日篤、又事鳩巢室子、學業益進、深

究六經、博涉子史、不好詞章、專以行檢為先、周防候召而待之也、猶待父儀之礼、益貴其學術行履之篤也、在但馬侯亦猶此焉、其後以衰老辭說書、以元禄十二年三月廿一日、生於長州赤間邑、以明和元年九月廿一日、卒於江都鉄炮津、享年六十六、葬于芝村泉岳禪寺、有女一人、以中島守約為嗣、以其女妻之、有孫男二人、明和元年甲申十一月某日、門人植木金謹記、

*1 東大寺本、都城本「蓋」。

二〇・三〇

祭澹齋先生文 植木金

維明和元年歲次甲申九月二十七日、門人常陽処士植木金、敢明告于吾師澹齋伊東先生之靈曰、嗚乎先生、天資非常、幼克岐嶷、壯有威望、蚤辞京師、來遊武陽、初學伯父、繼事鳩巢、高攀紫陽、遠溯洙泗、勉勵德行、深探經義、辨異端說、發正學蘊、明於庶物、察于人倫、其事親也、愉色婉如、其接人也、忠信有余、莊敬恭儉、公從事此、造次顛沛、其必於是、公卿大夫、以至士庶、見者感佩、聞者景慕、魏々室門、道統所歸、志士英才、翕然宗之、金也不敏、几杖以從、誘掖獎勸、導余義方、公懷其宝、其邦之光、奄忽一逝、四方失望、使吾孤立、營々彷徨、抱志業不得成章、嗚乎夫子、棄余永訣、譬譬無相、行則有蹶、不肖蠢愚、無所取材、誰從折衷、嗚乎哀哉、立于門下、二十五年、追想往事、流涕泫然、泰梁頽壞、哲人其亡、其誰不悼、余心摧傷、日月不居、痛恨深焉、致哀一奠、招魂九天、伏惟神靈、其諸監旃、嗚呼哀哉、尚饗、

登竜志賀先生墓誌銘

山常行

先生諱親宣、日州高岡人也、其先者大友氏、為豐州人、何代祖諱某、初歸薩、由是世住高岡、曾祖諱某、大父諱某、共為二大家、父諱親宗、武人、學孫吳之術、慷慨有氣略、娶某氏、而生二男子、先生其長子也、先生幼好學、夙夜不懈、雞鳴而起、孳々修弟子之職、其在鄉黨宗族之際、敬長尊老、退遜謙讓、而若不勝焉、郡中稱之、長而來自覺都、慨然又有遠游之志、遂破家產負_(タテ)□、以寓于京師、從怨庵松岡先生而學十二年、朝薺暮鹽、集蓼莫厭焉、

邦君廼又資_レ先生_一、使請_二業於鳩巢室先生_一、先生乃東、見_二室先生_一、室先生者時為天下之儒宗、其從學者多、貴人公子衣服甚美、先生獨以市衣交於其間、室先生即稱之曰、士志於道而恥惡衣惡食者、未足與語也、若子者、則其於與語也、母乃可乎久之、廼歸、

邦君乃擢為城下士、命以司徒教授之職、又通_二籍_一中_一、當世榮之、寶曆四年歲在甲戌、先生從安樂之溫泉、過国分、郡士為_レ請先生留而積經焉、遽病而卒、年七十二、有子及孫、時皆從也、門人等迎喪於中路、郡士隨者數人、歸而葬于_(南)□林寺、私諡之曰弘毅先生、資稟剛毅、精力過人、是以淬厲艱苦、自生至死始終一心、而能成其學、而及於夫搶劍之術、蹋鞠挫胡之技、各有所詣焉、而最善書又好琴、曾_二一_一卷其書以贈清人、清人以為結構精嚴似紫陽也、其持己立身之高、則卓然有大節、不慕富貴、不憂貧賤、不顧毀譽、確乎其不可奪也已、是以家無担石之儲而晏如也、嘗謂、富貴有命、吾寧得而私_(センヤ)諸、未_(下)嘗少貶_(ト)其道_一以徇於人_(上)焉、

而亦寬弘豁達、有量度、物靡不_(容)□者、直諒樂易、尤惡矯節察其處衆接物不設防界、以矜小廉不修邊幅、以釣虛声色柔容順氣和言溫、是以尊卑老少咸得歡心、其或有譏議非笑之者、則以_三其超邁不屑之韻異_二於時好_一耳、非惡且咎之也、晚年尤以訓導諸生為務、憂_レ夫世之學者厭常喜奇、各立門戶、陵轢前賢而互自標榜_(上)也、則其講學一宗程朱、研窮理義、毫芒必辨其於人也、指誨縱與反覆而不遺力矣、及其卒也、有志之士靡不歎惜者焉、贈賻甚衆、明年某月門人買石而銘焉、使山本常行撰之、銘曰、

蕞尔西垂、天生是人、茲文為任、維国先民、學之孳々、教之諄々、老而益壯、窮不知貧、明道講德、張皇精微、一時從_(者)□、稠載而歸、於戲夫子、忽焉相違、已_(ヌルカ)廬已廬、後生安依、

二〇・三二

永福密寺記

高元泰

薩州田浦東嶺山慈眼院永福密寺、廼大乘院之子院、而地屬平安養院、負山面海、南向而立、一水涵藍千里、而至諸山積翠排闥而來、左桜島右開聞、双柱分聳巍然仰止、雖慊土基之未專爰逞一方之大觀者可謂壯哉、往者諸先輩運遭明季逃乱航海承蒙国許、乃舍乃居斯宮斯息、居已安矣、業已就矣、未備宗祀之典、少_(節)□約之會、於是欲肯構立祀上以報国次焉、及衆祈祐禮福庶懌寄蹤之攸歸、乃衆謀捐貲及州府客商激勸相佐凡七十有一名助銀若干昉事於寬永庚午辛未之間、遂翕然大就鐘鼓之殷俎豆之豐潔其美而禮其祀濟々礼貌可稱一時之盛舉也、而府城南林山口旧有廟、世俗稱田浦、曰上菩薩堂山口、曰下菩薩堂山口、人衆物阜香火特甚奈、一焚終滅無復起者田浦地僻人稀、而至今猶存、噫隱顯起滅盛衰之理、寧得易議之乎、今如永福密

寺幸不至於堙沒、而稱於世者、蓋吾二公戮力之勤尔、不尔雖不至如山口之撲滅掃跡独難於扶持、至今何則堂宇翼然像尊端肅不有人以典其祭祀修葺攸備、則空々^(四)壁幾為鴟鴞之室、狐兔之窟焉、是以二公若渤海高公一覽擢嶠陽大詛士權可以化舟舶之上以輸至、凡題者三十有八名助銀若干潁川陳公友官承國優待家貲本足領輸至之鏹為之飯貸歛息漸積其贏誠謂高公首倡而陳公隨心而相協濟卒成其事、遂買田六十石充為桑盛土木工庸之費余當膳給并額以今名係慶安己丑之歲也、是其化廟為寺回將墜之緒新斯軌度可稱一中興而別開一門者矣、

屈請覺因大和尚為開山、鼻祖相傳至^(五)四十有二年、於茲如其住僧更代必先吾曹相議決其某可某不可、然後告諸祖山稟命有司非其人不与也、有觀音大士閔帝天妃娘娘塑像共三尊並^(六)座計六位暨旧像天妃娘一尊附座二位連輝一堂温而有赫及春夏祀典田籍器具等條在院簿休哉因矣繼終以始貽厥子孫殆無二公之力、則凡一百有九人之姓氏心業俱泯滅而灰燼、安得復燃於今日哉、惟惜者当盛山繼席忽鍛翬飛之羽蹙為蝸居之隘、觀者咸歎失色、惡能以大易小毀美作陋而快於其心耶、未可悉其所為而後之恢復、又安知其無人乎哉、時泰寓居廡下第八伝住持政忍法印、一日要潁川竜重暨弟竜貞渤海但元等飯之、予亦預席^(七)胥窃謂、寺場興廢不可測養田鬻散是慮恐墜先人之志而至于淪亡無識者、盍記以勒諸石以告來者知悉遵而行之、永垂不朽計、輒命泰筆之、泰雖不才不足以輝先人之績、然亦不敢固辭者謂宜亟圖而遂敢書焉、元禄三年歲次庚午、崎陽渤海高元泰謹撰、

寛保三癸亥歲武城渤海高玄融敬書

本府渤海高有親拝建

二〇・三三

蘭卿字説

河静斎

嘗読離騷、愛三閭大夫被服衆芳、以自修飾、後世之人莫曉其意、而於蘭与蕙最殷勤焉、蘭卿用岐扁之道、名其家則於艸木之性、宜核且詳、而特以蘭自称、觀其所好、亦三閭之遺也耶、伝云、以蘭有国香、又云、医可以及国、嗟乎医而及国、其芳蓋媚于君子而流乎百世者耶、

通昭録卷之二十一

六医仙画像記	鳩巢先生
木村重成賛	
後藤政次賛	
題子猷訪載達図	
河口雅徧墓誌銘	山田君豹
吊平忠度文	梁田邦美
送梁田氏之明石序	鳩巢先生
題田家種苗図	鳩巢先生
鐘馗賛	
牛山墓碑	南郭
八咏亭卷跋	
淨光明寺鐘銘	町田俊雄
弥勒院鐘銘	川上親央
高岡鐘銘	町田俊雄
有徳廟牌銘	林信光
陽和夫人遺髮錫壺銘	田中国明
拔萃武家徧年記跋	川上親央
慈徳廟祭文	釈
相良家譜序	山田君豹
物徂徠論	
木脇祐辰墓銘	釈天桂
賛昌幸父子兵法図	林春齋
幽霊論	長井貞宗

函工春田氏伝
加志久利鐘銘^{*2}
釈教州入院疏
娘媽山碑記并銘
寔城鐘銘

河口静斎
志賀登竜
深見玄岱
児玉宗因

*1 東大本、頭書「後」。
*2 東大本、頭書「前」。

通昭録卷之

二一、〇一

香月氏六医仙画像記 鳩巢

士固有偶儻不羈而以能事自逃於世者、世亦以能事呼之号為某仙、所以異其人也、夫麴蘖外物也、詞賦末事也、至其一觴一詠、外視形骸、邈乎高出一世之上、衆称焉以為詩酒之仙、亦謂其抱負不輕、有所独詣也、矧夫高材上達多出於医、而撰生之道馴致長生、則其可称仙者、莫可称「於」^{*1}医也、然自前世以来、未聞有以仙名於医者、其以仙名於医、蓋自牛山香月氏始也、吾聞古有神医、不用藥石以愈人疾、今之所謂仙者、古之所謂神也、其必蟬蛻乎混濁之外、超軼乎無為之先、神^口而不傷於智巧、氣清而不滓於滋垢、常因自然以長生、不待藥餌而引年、以此自為又以為人、古之為医而有得於道者正如是尔、若夫規々特以湯藥鍼灸、見能於方技而已、則吾未見其能神而仙

也、今之所謂良医者、吾知之矣、明於五臟癥結、窮論受病之原、陰陽以察、寒熱以証、然後湯熨鍼石所投、而応緩急升降惟宜之適、及其藥劑、命中刁圭奏功、盤根錯節迎刃而解、使夫宿痼頓愈、瀕死復蘇、一世之人咸与驚異以為天下之良工、嗚呼方技之精至此亦難矣哉、若等而上之、至於扁鵲華佗之所為、亦其精之精者也、然医之見能於方技者能医已病之疾、不能医未病之疾、夫医已病之疾者、有可治、有不可治、方其可治、雖庸医亦足有為、方其不可治、雖国医無奈之何、然則雖割皮解肌爪幕浣腸、以極天下之精巧者、吾恐其術有時而無施矣、曷若防微杜漸先其未病而医之不至於不可治哉、天下有未病之疾、五色盲人之目、五声聾人之耳、甘脆肥醲腐人之腸、娥眉曼睩伐人之性、是故能飲食、能言笑、而恒病於平居無事之日、天下之人皆是也、非古之神医有燭理之明兼濟之仁、其誰知而医之、恬澹無欲以養其性、呼吸吐納以導其氣、節飲食時寢起、疾疢莫□乎中、外邪無自而入、豈非吾之所謂能医未病之疾者乎、蓋神医以撰生之道濟人、使天下無天札之患莫不保寿考、尽天年以終其利物也博矣、推此道也、雖保合太和燮理陰陽而贊天地之化可也、故曰、上医々国、其次医人、豈不信歟、香月君以医鳴洛陽、五葉六技每試必効、其所全活幾人、近者将求古人隱於医者与之友、乃於漢晋梁唐、得六焉、曰封衡皇甫謐葛洪陶弘景孫思邈孟詵皆図其貌、各繫其語於上、為讚常掲諸壁間、朝夕於斯以寓平生景慕之意、而乞文於余以識之、余謂、香月君既医已病之疾、見能於方技久矣、今觀図上所繫之語、皆簡靜自守之言、於凡世所称方術奇偉之事、一無取焉、顧其意亦将抑方技尚撰生以医未病之疾乎、不然何其舍扁鵲華佗、而取於隱約素履之士為也、豈不以其所重者在此、而所輕者在彼哉、此必有卓然之識、以出等倫、而余之說亦庶乎不遠矣、遂書以贈之、享保三歲次戊

戊夏六月十五日、英賀室直清記、

*1 果図本、ここを空白とする。『鳩巢文集』、東大本、都城本「於」今補う。

二一、〇二

木村長門守重成賛

鳩巢

一世英妙風流颯芳、軍中授首兜鍪留香、誰言^{*1(云)}不寿青史輝光、清揚有宛吾淚其滂、

*1 東大本、都城本「言」。

二一、〇三

後藤又兵衛政次賛

身逃西藩亡命自匿、一朝登□隱若敵国、秉心靡他以死曷惑、吁嗟若人百夫之特、

二一、〇四

題王子猷訪載^{*1(載)}遼図

謂之興尽乎、有雪有月無尽藏、謂不尽乎、心境俱空人可忘、試道尽与不尽、其興孰短孰長、

*1 東大本、都城本「載」。

二一・〇五

河口雅徧墓誌銘

君諱雅徧、本橘姓、前州氏、世為丹波人、父茂雅事、三田侯娶加藤氏、生二男二女、君其季也、寛保癸亥、君年十七、初仕三田侯、寛延庚午、以事辞仕、後來東武、宝曆壬申、厩橋侯侍講靜齋^{*1}先生配以長女、立以為嗣、更称河口氏、明年癸酉五月六日病歿于麻山邸舍、享年二十七、葬于郷之善学寺、君為人貞実周慎、進退起居一以礼、雖家人未嘗見其惰容、而孝敬行於家、初在三田、学射騎鎗拳各有所得、又学劍於同藩小田又右衛門、深諸其奥、而為師所許可焉、於是先生惜其蚤歿無聞、命門人君豹為之銘、其文曰、
嗚呼君乎、胡為而生、天資孝友、顯揚休声、学武多藝、維候干城、発憤去国、誓成其名、鼎獲其所、令聞益彰、庶幾繼善、宜有以光、生而不寿、孰成其章、勒文斯⁽⁵⁾、承伝無疆、

宝曆三年秋八月 薩摩国史 山田君豹撰
厩橋 芦田惇叙書

*1 東大本、都城本「齋」。

*2 東大本、都城本「詣」。

二一・〇六

吊平忠度文并序

赤石梁田邦美景鸞甫撰
忠度墓在大蔵門東南可百二十步、延宝中旧使君源忠国創立碑、久之
廃蕪殆絶、寛保壬戌冬十有二月、我侯命有司重修周以垣、蓋示民不
忘古也、邦美嘗過之、悼忠度風流醞藉、平氏佳公子而不幸遭時乱、

与武夫悍卒角逐、踏刃歿、因為文以吊之、県令岩井種玄乃聞于鎮、遂刻諸石、使後人有所觀感而詠嘆云、^{*1}

赫八条之虐焰、天醉^{*2}怙⁽¹⁰⁾乎弗知、一旦忽焉天醒、何肉食之蚩々、
先天蚤有惕若、舍内府而其誰後天克俟玄命、於夫子而得之、托罹^{*4}
旅以揆藻、蓄懷于微辞、觀夫東風一競熊虎桓々、逆霽^{*5}霽⁽¹²⁾湓川鬱膊⁽⁶⁾
鷗臯、歐鵠鸞⁽⁹⁾弃簪纓、而奔^{*7}竄宅舟筏而苟安卓錫之地焉、在局躋、
宇宙之寛、譬⁽⁸⁾諸日莫塗遠曠野無家、春雲寒兮惹霰、海颺急兮簸
沙、僕馬瘡兮彷徨、杳寥廓兮無涯、税駕芳樾、枕肱深花、々不言
兮為主、夜閨寂兮長嗟、噫考之有大咎子、匪幹蠱之材、侮昊威兮淫
慝、余波及兮喧阗、傾厦不可支兮、覆木不可培兮、肆使此人甘斯荼
毒蒼天、蒼天謂之何哉、^{*13}

- *1 東大本、都城本「詠嘆」。
- *2 東大本、都城本「怙」。
- *3 『蛻巖集』「於」の上に「惟」あり。
- *4 東大本、都城本「罹」。
- *5 東大本、都城本「逆」。
- *6 東大本、都城本「歐」。
- *7 東大本、都城本「奔」。
- *8 『蛻巖集』「苟」の下に「以」。
- *9 東大本、都城本「宇宙」。
- *10 東大本、都城本「辟」。
- *11 東大本、都城本「無」。
- *12 『蛻巖集』「夫傘工之子竄」。
- *13 東大本、都城本「使此人」。

送梁邦彥赴明石序

鳩巢先生

梁子學博而材富、以詩鳴東都三十年于今矣、其詩大抵陶鎔雕刻、變幻百出、發於抵掌笑噓之余、動輒累數百言、觀者目駭而魂褫、欲与之抗衡方軌于通衢大街之中、而莫之及也、然其為人、不矜細行、任俠談諧自快於鄉曲之間、詩愈巧而身愈窮、名愈擅、而志愈逸、以此時論沸興、毀譽相半、而梁子亦倦遊矣、歲之三月來見余于駿台之下、其色莊、其口止、克然自得甚、不似當日之貌、謂余曰、近有遠郡之辟、將往就之、幸得子之一言、自勗焉、問其所仕、則播之明石也、問其所職、則師儒之事也、余曰、何其幸歟、何其幸歟、以子之材千里聘召、固不足恠、百吾之所深為子慶者、^{*1}柳有說焉、今世以武鎮天下、藩國大者專方面之任、小者分郡縣之治、蟻附蠅聚、皆介胄之士、暗鳴叱咤率以成風、而僻遠之俗殊甚焉、今儒之仕於窮鄉者、莫不蹙頞於邑、以土地褊窄民俗鄙俚為言、其故何也、蓋出于其野、既無名山大川可以上下游觀、又入于其郭、欲求交游相与往來歛語以據平生之志、則其所群居而与之齒者、身不嫻札、目不識書、唯知疆弩試劍習技擊而已、平居椎髻箕踞、好以漁獵博戲、相徵逐儻焉如不終日、使酒用氣、其聲譟々尔、乃日夜与其奴隸婢子鰥黑胼胝言侏儒而身并服者、交膝雜居、刺々相語、莫非料錢穀督租稅謀酒食察雞豚、嗚呼鄙矣哉、求一人可与談詩書論文辭者、豈可得乎、是仕者之一厄也、若夫劇郡要地民物殷庶稍若愈於嚮之窮鄉者、殊不知公私、^{*3}若於應對、使令急於星火概以便捷取給為治、而一切以法御下、束濕薪察淵魚、吾徒之仕者、乃逢掖緩帶、出入風議乎其間、為文吏之所拘、簿書期會之所驅迫、而崎嶇蹇步狼狽自救之不暇、何暇復出一言、自効尺寸、亦仕者之一厄也、夫明石天下之名區也、海嶽

幽勝、号为奇絕、世有康樂之癖者、千里羸糧担簦得一造焉、而僅寓目輒去、猶足於心以為樂、而況筮仕適其土、朝夕于斯者乎、且聞其地得好文之君、士皆彬彬有君子風、而子以教導為職、居恒与其子弟來學者、春誦夏絃從事於鄉校之上、曾無吏事鞅掌以勞心而疲体也、顧不樂歟、有仕之樂、無仕之厄、今於子乎見之、雖然明侯以成就人材為託焉、則子之任亦重矣、誠宜修飭行師表諸士、不負君長付託之意、不得与处士說容、^{*5}舉動自由者比焉、語曰、以身教者從、以言教者訟、豈徒誦誦足以誘人、云尔哉、吾之所告於子者、止於此矣、於其行遂叙而送之、享保四年己亥夏四月初七日、英賀直清書、

*1 東大本、都城本「而」。

*2 東大本、都城本「抑」。

*3 東大本、都城本「若」。

*4 『鳩巢文集』は「修辭飭行」。東大本は「修(行)飭行」、都城本は果図本に同じ。

*5 東大本、都城本「客」。

二一・〇八

題田家種苗圖

鳩巢先生

富士嶽兮峯巍々、田子海兮遠依々、陰雲翳兮雨稀、平田漠兮水肥万畝、共種席布基圍、白紵哥短褐衣、爰鼓爰舞、如市斯埽、台等揚兮翩飛、荊釵群兮是非田家、未必寂寞、誰知生事不微、

二一・〇九

鐘植贊

鳩巢先生

正氣之聚、賦形純陽、艸有指佞、獸有神羊、英鋒所抵、陰邪莫當、矧茲靈質、凝為剛腸、驅鬼誅姦、妖厲忽喪、偉矣肖貌、威稜孔揚、冀護君子、呵禁不詳、^{*1}、

*1 東大本、都城本「詳」。

二一・一〇

香月牛山先生墓碑

南郭

先生諱則真、字啓益、号牛山、筑前人、厥初出自香月君小狹田彦、四十三世之後曰香月七郎則宗、又十六世曰六郎諱重貞、為先生考、先生少學貝原益軒、又師鶴原玄益、受方技書、極其旨、遂為医、及壯游事豐中津、有男子乳出汗如婦人者、舌生毛者、產後不穀食唯嗜肉者、皆從先生治得愈、名益起、旁諸大國更請診治、從中津侯朝而東、東諸侯及名公鉅儒莫不敬服其術若學之精者、在中津十四年、託病而行遊京、会大覺親王病舌瘡半年、諸医百方不得效、召先生、々々曰、鬱痰尔、法当吐之、諸医懼其毒、爭持不決、事聞

^{*1}大上皇、

上皇詔使從先生言、先生乃施其方法、吐痰斗余、病去、言笑復故、更調兩月而安、於是人益信、術益行、先生在京所相善、自伊仁齋諸大儒、至諸山高僧、名高一時之選、莫不納交、声益籍甚、四方來受業者常百余人、先生乃築医仙堂、因揭所欽古先六人、各題其至言、而其字与扁署、皆台閣公卿為手書、人佗稱為榮、在京十七年、小倉先侯聘召、不起、辟其侄則貫、監書記事、於是先生偕來以客受養老

稟給、侯重其術、歲加賜与以待之、至小倉今侯、遇愈盛、医倣益及隣国、先生復營医仙堂以居、至老書不釈手、所著書凡二十三部、多行^{*2}千世、年七十五老焉、曰、吾事畢矣、自今而後、雖生猶死、遊魂行尸、其豈与人間乎、乃器用財賄、悉分諸親故、而後卜葬地、制棺槨、以土伯曄仕小倉、同其業相善、請為志其生平、作木牌刻之、先生不取妻妾、無子、侄則貫先卒、其子尚幼、先生乞令受業門人貞菴受其稟給、以待侄孫長、貞菴名則道、乃冒香月氏、以父養先生、後十年、先生八十五、以元文庚申三月十六日終於小倉、葬于国城東円応教寺、門人共議建碑、土伯曄乃助貞菴遠視其志、請余作墓銘、先生生平医倣特異、与所著書目、皆具門人所伝、及伯曄所志、余乃略拋其状、繫之以銘、其辞曰、術之在人、意之在書、自西自東、名亦不虛、

*1 東大本、都城本「太」。

*2 東大本、都城本「于」。

二一・一一

薩州八咏亭卷跋

聞之薩人、其邦之勝尤佳者為新築地、蓋山海並絶也、樺山氏家園、坐而收之、乃作八咏亭賞之、如此卷所図若誦、余謂、詩一也、和歌一也、図画一也、固為三絶、然非有此勝未足施此技、則景絶一也、世之俗士、謂山蓋高、謂海蓋深、非不覩也、苟無勝情以会之、不啻牆面、則亦樺山君好事其絶一也、可謂五絶矣、雖然山海吾勝也、五絶吾絶也、吾不帶芥者誰居、薩国之為大、無所弗有已、薩安養湛公為其邸來、修護摩于東都、則為樺山君属余跋、余得閱此卷、爽然自

失乎其絶之富、

二一、一二

淨光明寺鐘銘

薩摩国鹿兒島松峯山淨光明寺者、

島津太祖*1(侯)封薩隅日三州之日、挿一荖艸時衆宗般舟三昧之道場也、及三代*2(侯)候之時、為一遍派宮建輪奐、弘安七年閏四月、当其

皇考十三回忌、鑄鳧鐘以懸寺樓、薦冥福、弥今四百五十七年、雖

歷久遠、春容不減、鯨音*3(信)信新、銘刻亦顯然、匪啻寺家之宝器、旧

国之宝物也、方今住持寿門慮宝器之久、而損壞摸新鐘、欲以報晨昏

乃告、官多方募銅範摸已成火、官子來金工雲会、遂得釁焉、別造庫

藏以納旧鐘、素有楼觀以架*2(新)鐘、於是旧固宝新大吼隱々乎、林中

琅々乎、花外縮長樂*4(千)此、負豐山于此、聽其音而誰不亦說乎、寿

門欲令此盛举垂不窮、請銘於官、国命許之、乃使僕為銘、々曰、

偉哉斯器 摸鑄再円 二儀合氣

九乳備全

樓觀茲卓

蒲牢高懸

声通遠金*5(近)

響震山川

告曠与曉

自幽入玄

十方敬聽

無明攪眠

德音不尽

終功有縁

賦筭靈地

清静*6(淨)福田

礼讃勤行

法筵儼然

徧応大挺

悉会衆賢

檀門久肅

祖風長扇

常輝舜日

永祝堯天

元文五年歲舍庚申仲春日

勸縁比丘淨光明寺二十世桂光院其阿上人足下寿門淨福

治工薩陽鹿兒島住黒木安左衛門藤原実教

薩陽候記録官小司町田氏藤原俊雄謹誌

二一、一三

護麻所鐘銘

児玉宗因

薩州麿府

上山金城

由良方位

報時華鯨

古今不懈

昼夜伝声

人民覺夢

郡県知更

進退以整

威儀茲成

天長地久

家齋国平

正徳元竜集辛卯冬十一月二十六日、

因旧鐘損壞用新鑄矣、

麿府治工

長倉幸左衛門藤原祐昌

濱田長右門藤原盛辰

二一、一四

弥勒院鐘銘

天之所覆、地之所載、於其区域靡有靈神不擁護、有神有社、司有社

司有別当寺、習俗自然、爰隅州桑原郡西国分郷宮内正八幡宮者、往

古之神廟、延喜式曰鹿兒島神社是也、其嚴威赫々乎光*2(古今)、誰

人豈不尊敬焉、方今闕別當寺以故 薩隅日三州太守前正四位下中將源吉貴公与孝子從四位上中將源繼豐公俱同志為大檀主、繼絕興廢、享保七年壬寅五月相攸於宮内、大起土木再興之、至翌年八月經營既成矣、山曰鷲峯、寺田^{*1}靈鷲山、院号弥勒、為別當寺、使大僧都法印憲宮為院主、施入若干佛像仏具寺具等、加復寄進宮内原墾田二百斛於 正八幡宮、輝神威而為寺產、是追 先考從四位上中將源綱貴公之素思、且遂 両公之志願、尔来雖規模稍備、未有洪鐘也、於是憲英訟法器之缺於官家、則允容之、鑄鎔之、今復施入之、可謂百舉悉足、使僕叙其事系銘、々曰、

隅州之地 国分之郷 宮内勝域
弥勒道場 華鐘新鑄 殿堂添光
簾簾高揭^{*2} 鯨音大物^{*2} 徹天台麓
響豐嶺霜 驚眠警覺 啓陰迪陽
教令克肅 規範自常 邦家遠久
寺山全昌 神人擁護 弘運綿長
維斯法器 永伝無疆

維時寛保元年辛酉八月吉祥日

供養導師弥勒院中興第一世大僧都法印憲英

薩陽記録官小司川上氏藤原親央謹誌

冶工黒木安左々門藤原実教

*1 東大本、都城本「日」。

*2 東大本、都城本「揚」。

二一、一五

高岡鐘銘

町田俊雄

日向国諸県郡高岡郷者、薩国之藩籬、去府三十里、頗士民集会之勝地也、嘗元禄辛未春、郷有司告于 官鑄鳧鐘架於治之東城山、以報二六時也、然経星霜項年、損壞唾其声矣、於是今有司再告于 官鑄新鐘以架旧楼、效先躅為六時之用、冀永不蠹、銘曰、

日州諸県 高岡古城 九乳再架
六時声鳴 聞上下界 通遠近程
民庶覺睡 郷村知更 頑囁心浄
痴聾耳亨 天長地久 邦城泰平
寛延元年戊辰九月日

二一、一六

*1 有徳廟牌銘

前征夷大將軍正二位右大臣源朝臣吉宗公墓^{*2}、在位凡三十年、解職^{*3}七年、貞享元甲子十一月二十一日誕生、寛延四年辛未六月廿日^{*4}薨、寿六十八、閏六月十日 勅贈 太政大臣正一位、賜号有徳院、葬示^{*5}東叡山上、從五位下守大学頭藤原信光^{*6}拜書、

*1 『快晴紫雲録』は「御石柳蓋石之 御銘文」と題する。

*2 『快晴紫雲録』「公」なし。東大本、都城本「公」あり。

*3 『快晴紫雲録』は「貞享元甲子十一月二十一日誕生／在位凡三十年

辞職七歳／寛延四年…」

*4 東大本、都城本「廿」。

*5 『快晴紫雲録』は「薨」なし。

* 6 『快晴紫雲錄』は「イ（異本の意―引用者）閏六月十日」と傍書。

* 7 東大本、都城本「太」。

* 8 東大本、都城本「示」。

* 9 東大本、都城本「光」。

二一、一七

陽和夫人遺髮錫壺銘 田中国明

斯是壺中髮者、陽和院殿本嶽自勝大姉鬢髮也、大姉者從二位行中納言平時庸朝臣女、而薩隅日三州主兼領琉球国從四位上行左近衛權中將源光久朝臣繼娶之夫人也、惟時正徳元年辛卯八月十有二薨逝去、

二一、一八

武家編年記跋

此拔萃武家編年記七十卷者、

前羽林源吉貴欲自

本朝清和帝以來、使武家之事業一貫而易見易聞所纂集也、乃曰、此書全成者、猶可經歲月、故自神武帝至文德帝者、首略記之、自清和帝至正親町帝者、記其事於某世某年某月之下終編、如夫後陽成帝天正十五年以來者、先且措之、等待後年之暇日而此書成矣、閱之則王代五十二世七百二十八年之際、武家之盛衰、世道之得失、可大概知而已、若有訛謬、明識者之可也、因跋、

元文四年己未仲 上旬

二一、一九

慈德廟祭文

維時、寬延二己巳年秋七月十日丙辰、吾 邦君、故從四位下左近衛中將、薩三國主兼領琉球国、

慈德院殿源公俊嚴良英大居士、養阿於薩府之城中寢席、不安、是故傾心於三宝、尽情於巫医、雖然、靈驗皆空、而俄驚棠棣之花萎、越同月十三日己未之夜、殯靈柩於福昌禪寺、何月何日支干依梵儀終葬、今臨中陰之日、不肖孫^{*3}臣源久門不堪哀悼之至、謹備水蘋澗藻之微、供奉致祭於^{*4}尊靈之前、其辞曰、

嗚呼哀哉

源氏貴胤 三国棟梁 文經武緯

誰敢爭長 温良恭儉 含蘭麝芳

寬度胸海 閭奥難量 慈顏在眼

欲忘不忘 万民潤德 憶彼甘棠

嗚呼哀哉

積善深思 自見言行 麟鳳之質

竜虎之將 豈思^俄哦項 在泉行装

鵠寒在野 不覺淚滂 風悲庭樹

月照空牀 秋天寂寞 鳥空翱翔

嗚呼哀哉

二十余歲 一炊黃梁 寿期千載

人皆失望 從今賴誰 渡如無航

不夢疑夢 触物欲狂 聊備菲薄

願賜龍光 香煙影裏 速降此場

嗚呼哀哉

尚饗

* 1 東大本、都城本とも、「寛延二己巳」^年・秋七月十日・吾^西・邦君故^{行上ケ}…。

県図本は本文に組み入れているが「行上ケ」はない。

* 2 『西藩野史』では「同月二十四日庚午」。

* 3 県図本、東大本、都城本とも「孫」を見せ消ちにして「弟」と傍書。

* 4 闕字の指示。

二一・二〇

相良家譜序

山君豹

宗姪長祐十一世之祖曰次郎三郎長光、不詳其所出、按相良氏之先、出自藤姓南家武智麻呂、是公雄友弟河高扶清夏經幾為憲為時時頼維兼維頼、至周頼始居遠淡海相良邑、因氏焉、及光頼頼寛頼繁頼景、世食其邑、頼景仕 鎌倉右幕下、受封於肥後州球磨郡、頼景子曰長頼、移郡内人吉邑、閔閔盛世子孫昌大云、蓋長光亦其裔也、唯国史不少概見、無詳何時歸於

本藩也矣、長祐家藏古譜図、行寧嘗就国史町田俊雄問焉、雄曰、図中繫長光於四郎太郎忠房之子、又載長光之玄孫堅助頼房享年十九、元龜壬申死三山之役、忠光球磨侯相良氏之世子、而天正中質於本藩、時尚妙齡也、以長光為忠房之子誤矣、窃惟、先君子亦嘗肄業史局、博覽載籍、其於家譜宜最精詳、而無一語以及此者何也、蓋以先世之所傳、子孫当尊而奉之故、不敢改焉耳、夫譜図体裁在明祖先之出、嚴適庶之分、如唯仍旧則恐有歷載愈久、而愈失其真者也、雖然、行寧謫陋寡聞、不可輕改焉、於是図別撰新譜、以伝不朽、遂請俊雄起艸、長光而上、茫不可知、故以長光為始祖、歴叙至長祐、而復講安藤茂真山田君豹以拾遺補闕、踰年乃成、感載

国恩、續承祖業者、於是乎在、可世宝謨訓矣、長祐及子孫尊奉修

撰、慎勤勿懈、則赫乎家声、与譜図永存乎千百世、勉旃、是為序、

時

宝曆二年壬申七月

二一・二一

物徂徠論

山君豹

古今有英雄之人、而必有英雄之言、漢祖曰、大丈夫当如此也、項籍曰、彼可取而代之也、主父偃曰、生不五鼎食即五鼎烹、桓温曰、不能流芳千載亦当遺臭百世、此数人之者、豈不知黃鉞之威赤旗之誅、可敵可畏乎哉、然当其欲言敢不依違回避焉、嗚呼、偉哉物徂徠、倡古学下視一世高跨千古、自程朱諸公而上及思孟莫不尽排而斥之矣、彼亦豈不知世有豪傑之士、不受其欺者掉舌握管、議於其後、誅嚴於斧越戮慘於湯鑊乎哉、然亦敢言不順、是以風靡一時直捫天下学士大夫之上、豈其英雄乎、惜哉其言止擯思孟程朱、而未能毀孔子、猶有所諱者独何也、或曰、思孟程朱学猶有蔽、故彼辞而闕之、若孔子聰明、睿智出類拔萃宜矣、彼信而奉之也、曰、不然、英雄之士不言則已、一言則駭世驚人、故於其所欲言也、誹堯舜訕湯武而不顧焉、況孔子乎、物氏果非英雄也、彼若曰孔子大聖不可毀、則思孟之徒亦何人也、彼焉得而忘議乎、是無他彼本詭譎之儒姦猾之徒、窃窺世俗浮薄之士、久困程朱為己之学以為奇貨、可置之機會於是乎、造作邪說而為之竜断耳、然以程朱言淵源乎思孟而不可誣也、并而謗之、且其意謂不誹思孟則人不以己為至而歸之、毀孔子則人以己為誕而不從之、故陽尊孔子文其醜以先王札樂之說、譬諸市人競利称揚燕石、以為隋珠夸耀布褐、以為狐腋言語曉々眩惑時俗唯售之務、如物氏者真可謂賈豎之雄矣、其為賈豎者武人俗吏尚且愧与較也、如士大夫学聖

人之道、由之成德立業以輔其君以濟其民謂之君子、謂聖人之徒、其尊大如此、而豈与之爭長短乎、嗟乎、亦不思也已、余故曰、好弃物氏自賤者也、

* 1 東大本、都城本「顧」。

* 2 東大本、都城本「妄」。

二一、二二

木脇祐辰石碑

釈天桂

祐辰、姓藤原、氏木脇、仮名納右々門、刑部左々門祐秀第二子、而其為人、毅然奮志、忠勇過人、寛永之間、承府命住加治木、氣類不含詞氣塞、諤自引去、官府拾其所短取所長、不重責其過、先俾悔贍影跡於興國謝罪幾年、蓋惜其勇敢也、奈命途解、正保四年丁亥六月十八日賜死於宇宿、春秋三十五、法名不損一刃居士、吾灰聞之於祐辰末後、劔刃上作略快沽自在、可謂古今未曾有、當為叔世武士之龜鑑者乎、今茲同氏祐盛來興國丈室告曰、吾祖父祐為実弟、祐辰塚石存宇宿通衛之停、歲月相積風雨清磨見之不忍、故命石工埋旧代新、請文以記之、永備不朽、予不得辭、略録口碑、而係之以辭、

寄身五常

遊孝友郷

履刃不變

堪称木賜

凜乎豪氣

七十霜霰

墓石磨毀

藉甚流芳

街童走豎

採花進香

銘新代故

謀日月長

享保七年壬寅三月二十一日現興國天桂叟記焉

家嫡祐盛立焉

二一、二三

賛真田昌幸村兵法授受図

林春斉

石墨堡障、督繩修為、五宮八陣、踐墨整治、微乎膝矩、神乎出規、則其形象、開理數基、兩哲授受、為百世師、

二一、二四

幽靈論

長井貞宗

奥州会津人

人物之生乎天地陰陽所感、聚而生、散而死、故生者自息死者自復消、更無一息之間斷、由是見之、怎生者有人死而再生之理乎、雖然至魂氣之大虛不能無遲速、譬如灯炯衝上漸々無去煙氣凝結厚蒸者薄然去既遲炯氣之鬱泯然溥者無去速既羸病死之人、結氣漸尽了、方死故其氣速散無咎至不得其死之人其氣漸不能、卒消耗鬱結而為妖為怪、鄭伯有之厲殺公孫段包生之靈、竟睨齋候之類是也、

二一、二五

出水加志久利鐘銘

序有

志賀登竜

追創業基

修飭崇神

靈驗愈現

德輝益振

茲鑄宝器

永驚丸民

一声攪夢

百撥発真

妖孽蟻潰

禎祥雀臻

徧通庶物

高徹大鈞

福応無期

旧邦反新

二一、二六

函工春田氏伝

一、春田の家は 開化天皇の皇子白髪王の苗裔にして、世々血脈連綿して函工を業とし、今に至るまで他姓を以続ことなし、そのかみ淡海の国浅井郡なる鵜田を給ひて、其所に貫してより姓を治田連とす（此日本記にも見へたり）、元明天皇大和国平城に都し給ひし時、治田連か居をも同じく平城にうつして造兵司に属せり、其平城の宅地の跡、今も春田の京終といふ所にありて人是を知れり、即其所の巷を今も春田か辻といふ、又庶流は山城国栗田、伊賀国小治田、相模国小田原、同国鎌倉雪下、越前国（福井）勝山、紀伊国雑賀等所々にわかれて住居す、

一、治田氏の祖神は大和国高市郡岡村といふ所にあり（此事も古書、かし今は其土の人民伝へあやまりて其社を八幡宮と称す、

一、古より名高き将師勇士の甲冑おほくは予か家より造進せり、義家朝臣の五匂（五）□其外世に名ある甲とも、春田家より造進せるもの多し（武鏡録等に見へたり）、其後治乱うつり替るといへとも、世々家業を専として今に至れり、

一、普通の鉄甲鉄冑の外、別に一家承伝の法有て、古より革きたひの甲冑を製し来りて業とせり（其造法延喜式などにも見へたれ、と、今の製する所同しからず）、夫革甲の物たる、最軍場に便利なり、如何にとなれば、彼鉄甲鉄冑のときは、必鋭矢劔戟を防かんと設くれば、重くして起居運動にたへず、起居運動にやすからんと製すれば、薄くして鋭矢劔戟にたえず、只予か家製の革甲は鉄硬（鉄）にして鋭物にたへ、軽薄にして運動に便なり、然るに近世慶長の比より鳥銃といふ物出来りて、軍とたにいへは必是を用ゆ、彼古製の甲冑は鋭矢劔戟はふせく事を得れとも、鳥銃に至りては、是を留る事甚かたし、こゝにおゐて、予か曾祖父広信（俗稱丹波といふ）より深く其造法を考へ、祖父宗次、父喜勝

並に俗稱同じ予に至る迄連綿して心を用ひ鍛錬し、彼承伝の古製に、（此丹波といふ）此熟習の新奇を交へて始めて能鳥銃を留（む）る事を得たり（但、鳥銃普通なれば、必留めすと云事なし、若、無比精選の薬を加倍せることなきにいたりては、いまた必しもとむるといふへからず、猶此後深く考て必留る製をも得べし、

一、東照神君の御代、平城に於て、きたひためしの革函を製したるに、
台徳公の御代に至りて、予か曾祖父広信を東都に召れしに、其時広信、病ありて命に應ずる事を得さ（り）ければ、代りとして弟子一人を東都に向わしめ、公命を受奉りぬ（此時の奈良奉行を中坊美作守と其記録にもくわしくありき）、広信身まかりて後、祖父宗次、父喜勝、並に東都に向ふ志有といへども、当務に迫りて稽遲する間に、皆とし老にければ、平城にのみ居りぬ、予か壮年の比、喜勝及ひ予か母秀慶、常々予にいへらく、汝必東都に向ひ再家を興すべきよし切に教へけるまゝに、予か此ころさし心肝に銘し、骨髓に徹し、春日大神に深く祈奉りて、享保三年戊戌十月、予初て東都に下り、先列候已下諸家の甲冑、其需に應して造らせし、年々南都に帰りては更に東都に赴き、旅行往復数年にして、忝くも今の大将軍の台聴に達し奉り、初て命（を）蒙りて、家伝革製の御馬上楯三枚を造献せり、即當中におゐて鳥銃鋭矢劔戟等を以、試させ給ひけるに、各徹る事なく割る事なし、予多年の志願遂て供奉の軍器を造献する事、此三枚の御楯より初まりなれば、予か家の標紋、古へより横木爪といふ物を用ひ来りし、其木爪の中なり花菱を除き、彼三枚の楯に象りて、更に木爪の内に豎の三引を画して此時より改めて家の標紋とせり、其後又命を蒙りて、革製の甲冑を献す、更に鳥銃を以試させ給ふに（此時鳥銃は田付四郎兵衛直、久監使は山本出雲守茂明也）、五発こと／＼く留まりて徹る事なし、是より頻に官事に供奉して、今に至るまで然り、か

くのことく、予かいやしき名を以、忝くも台聴に達し、我家製を以、供奉の軍器を奉れる事、是全く曾祖父広信か始めて思を馳、力を励ましけるにより起りぬれば、広信か家に功ある事を、実に春田家の中興といふへし、

一、享保七年壬寅年に至て、

大將軍の台慮によりて、諸州にある所の寺社及農商の家までに伝へ來れる古代の軍器、予檢閲して委しく図画或はひな形を制し奉覽すべきよし命を蒙り奉れり、其中に古き横刀をも関すべき由の命あり、予辞し奉りしは、甲冑の事、臣か知ところ也、刀劔鍛冶の精粗新古は臣か知る処にあらずと申し奉りしを、更に命したまはく、其さえを見定めとの事にあらず、横刀の修飾の三百年以前と見ゆる物^⑤らは是を模すべきよしゆへ、畏まりて命に応し奉りぬ、即京都南都の有司^⑥へ号令ありて、⁷此時京都所司代は泰平伊賀守忠榮朝臣、奈良奉行ハ中坊美作守南都御代官は会田伊右衛門資則なり程町⁸く予東都を發して巡行す、大和国にては春日神社を始として十津川五十四郷、熊野神社等のあたりまで国内一郡一郷も残さず巡行し、山城国にては京北鞍馬山、京南藤森壮社其外旧地所々及余州まで檢閲しぬ、其中に春日社の宝府¹⁰にある所の古甲八領を閲覽せしに、八領ともに実に旧物とそ見えたる、¹¹中にも一領はいひ伝ふる所も頼朝卿の寄附となん、諾なるかな、明白に往代の將師の着用ありしと見えて、他郡にこれに比類すべき物なし、又義経の興福寺勸修坊に形見として残されしといふ古甲あり是等の類を摸するため、春日社の直会殿のうちに仮に其場を設け、予及び弟子某、日々に是にに向ひ、春日の祠官社僧の長、同しく会集し、祢宜数輩に右の古器を宝庫より出さしめて、図画ひな形を命し作らしめ、夕に至れば更に庫に藏め、かく

のことくする事数十日にして功遂ぬ¹²此神庫の古甲を摸せしむる間に藏に大神の神跡は是、かくて其よしを京都諸司代伊賀守忠榮朝臣に申せしに、忠榮朝臣、其正器と図画等を比較して一たひ同異を正さんとあるによりて、予即興福の□□円明院と共に、右の古器をゐて上京し、所司代の邸に参り、忠榮朝臣みづから詳に正器と図画等比較ありしに、聊も違ふ所なし、時に忠榮朝臣より予を褒して白金を賜り、納謝して退去し、即東都に帰り至りて図画雛形及び記録せる所等を奉覽して事早りぬ城州和州其外諸州巡行の記は別にあり、¹³實に造兵を業とする者の家に、かゝる面目比類なく、舞蹈に堪さるものなり、

一、右にいへる予か巡行檢閲せし外、猶諸州に古甲古器ありといへども、おほくは一所に一二箇に過す、又は藝州嚴島神社、薩州宮内八幡のとき、遠国は往て檢閲する事も事輒からさる「か」故に、此類は皆其領主へ命有て、或は直に正器を致し、或ハ委しく図画に模さしめて、悉御覽ありき、其時は予も召に依て営中に候し、御覽終て後、かならず熟覽しぬ、¹⁴すゝを以、大低海内にある所の古甲、予か目を及ぼさる物なし、抑予か家に伝へ來りし古記旧録若干ありて、今に到るまで世々秘藏し、時々考閱すといへとも、其中ニ今の世名のみ残りて其形製分明ならさる物多し、然るに忝も君上の明威をかり奉りて、海内の古器を目視せしに因て、彼古記旧録ノ中、或は論弁せる所も解釈して詳なり、是皆君恩の余沢、子孫にいたるまでゆめ疎に思ふへからず、

一、享保八年卯年より、當中紅葉山の宝府¹⁵の軍器、或は新造、或は修繕すべきよしの命を蒙り、今に至るまで間断なく勤務す、予卑賤の身として忝くも世々將軍着御の甲冑にたゞちに手をふれ、修補する事、函工の眉目、

一家の大栄、これにかふる事なく、欣躍してもあまりある者也、

- * 1 東大本、都城本「冑」。
- * 2 東大本、都城本「堅」。
- * 3 東大本、都城本「まで」。
- * 4 東大本、都城本「再」。
- * 5 東大本、都城本「た」。
- * 6 東大本、都城本「る」。
- * 7 以下、県図本は「田伊右エ門、／奈良奉行ハ中坊美作守、南都御代官は会資則なり」と誤写、今改める。
- * 8 東大本、都城本「な」。
- * 9 東大本、都城本「藤森社其外…」。県図本の「壮社」は衍字か。
- * 10 東大本、都城本「宝庫にある処の…」。
- * 11 東大本、都城本「り」。
- * 12 東大本、都城本「等とを比較ありしに」。
- * 13 東大本、都城本「こ」。
- * 14 東大本、都城本「抵」。
- * 15 東大本、都城本「癸」。
- * 16 東大本、都城本「庫」。

二二、二七

函工春田氏家伝

春田氏出于 開化天皇皇子白髮王、世々不絶以至于今、未嘗濫養他姓其祖神廟在大和口口市郡、載在旧姓記、土人不弁、今訛称八幡宮者也、上世賜淡海国浅井郡墾田、命姓治田連事見日本紀、及元明天皇都平城、從[＊]欠駕遷為大和国人、属造兵司、当時所給宅地、在今年城之[＊]京終之地、土人猶能記憶呼曰春田辻、治田軒為春田方音不殊、其支庶散处、山城国栗田、伊賀国小治田、相模国

小田原及鎌倉雪下、越前国福井及勝山、紀伊国雜賀等地、家業函工、自古名将驍士所宝介甲多出其家、義家朝臣五匂威即其一也、而春田氏所伝常製鉄甲之外、別有秘術善造皮鎧、視延式所著之法亦有不同、甚輕便且堅緻、雖近代鳥銃、不能犯傷、何況弓矢、蓋丹波広信依家法益致其精、伝其子宗次、孫喜勝、曾孫故明、歷世竭神凝思、始得能禦銃丸、而故明猶曰、吾家所製皮甲、平常銃子則不足恤、若精煉火藥倍用分剂、則未敢自保、自今更加習練、庶幾可以万全、新製皮甲始于 東照宮之時、及台德廟召広信赴江府、広信適病、使一弟子代己、以供上用是時中坊美作守知、平城事旧案具存、広信既歿、宗次喜勝世有東行之志而不能果、乃訓故明曰、汝善述吾事以昌吾門、而故明母秀慶亦云、故明承父母之懇誠感激刺骨、於是默禱 春日大明神、享保三年戊戌冬十月発南京赴東武、以業于列侯以下造進介冑、自是歳々往来、頼天之靈達 幕府、台聴始奉命造家伝革製馬上盾三枚以進、内試銃矢劒戟諸般、一無損傷穿敗、春田氏供奉元戎美従此時為始、故 其家標章、旧為所謂横木瓜、於是改除木瓜内花紋、代三縦画以象三盾云、後又奉 命献革甲、使田付四郎兵衛直久放銃以試、山本出雲守茂明監臨、五発尽格不穿札、自是屢供官用、蓋広信貽厥孫謀、実為春田氏中興、而及故明三世遂克堂構、可謂善繼矣、享保七年壬寅大将軍殿下慨然謂、上古戎器猶有散逸在諸国祠院及士民之家者、乃命故明奉 台旨巡歴諸方、檢閱古物或図写全状、或倣製小樣以進、故明辞曰、甲冑則臣所諳知敢不遵旨、至于刀劒、臣所不識精粗新旧、何能弁焉、再降旨曰、唯視飾裝可＊三百年以上者模之、因令京尹松平伊賀守忠榮、南都鎮台中坊美作守及郡宰会田伊右衛門資則、給其所須、故明先至大和国、自春日神社徧歴、十津川五十四郷以及熊野神社、山城国則北登鞍馬山、南窺藤森社、其余県邑莫不搜

尋、以暨他州春日社所藏古甲八枚真為旧物、就中二牧伝云源頼朝所奉審其器実為前世將師所披用、他処無可与之比、又興福寺有源義経与勸修坊訣所遺甲^{事与東鑑合}、故明率弟子就直会殿、会春日祠官社僧上首等、使祢宜開宝庫出前件諸甲、模製図尽、及夕還、藏庫中如故如此者数十日、始訖其事由以報所司代忠榮朝臣、〔朝臣〕欲親自比較、

於是故明与興福五師円明院、同奉真器至京師所司代第、逐一校視無有差謬、忠榮朝臣賞故明以白金、事畢赴東武以図并小様私記事状投進、函工之榮自古希有、和州城州及他州所得有別録、但他州不甚多、又如藝之嚴島神社、薩之宮内八幡、以遠境不易躬涉、別命其国主或直致其真或模写呈上、是時輒召故明于 營中、台覽纔畢付故明熟視、以故海内古物莫有不究、故明家有祖先遺書、介冑今古之製備載無遺、然有徒聞其名今世絶失其伝者、今頼、大君之余沢、目觀天下奇宝、從來疑難得以氷积、京保八年癸卯奉旨修繕紅葉山宗廟所藏戎器、間以新製、故明一介之微沐 君恩奮家声如此、宜其感戴激切喜懼竦踊、自録遭遇始末以為一卷、垂示兒孫、庶幾無忘 国家覆載之私焉、豹為訳其語、以為此篇、俟他日大史氏之採云、

薩广国史

山田 某撰

* 1 『芋山集』では題名の下に「代山文蔚」と小書きする。

* 2 底本の「欠」は闕字を示す。

* 3 東大本、都城本「平城京終之地」。

* 4 東大本、都城本「延喜式」。

* 5 底本「三年」百、今改む。

* 6 東大本により補う。

* 7 東大本、都城本「享」。

二一、二八

我国造甲冑也、出於上世、僕家世在和州、以函工供支殆二千年、古之驍將勇士其名鳴世者、既多用僕家所造之甲冑、僕紹奕世之業而琢磨不措、始解革甲奇製至輕可以能使動作、至硬可以能禦失石、享保之始、奉教上進之官乃為試之、尋常鳥銃敢不洞達、以故厚被褒賞、尋之、更奉教造革盾以進之、自此連綿數供官事、又和州古之皇居、城州今之帝京、並多千載寺社、百世土人而其間有藏旧兵器存者、僕奉 教巡行檢閱、作之図以上官、其官家所藏之甲兵旧図亦得辱觀之、夫僕家雖千歲造甲冑來、而未有其業之榮如今日者、是以広請我國儒生、先既得詩延及西湖鄞水等人、近聞貴客將到、欣然不堪扑躍屈指計歲月渴望至今日、恭冀 諸名公憐僕丹府、為揮管城惠賜^〆事一篇、若佳什一章、則真僕家明月貽光於日域、後葉者也云尔、

日本国供奉函工春田丹波大掾故明

副啓

僕家從來造墨、享保中官課諸造墨手、依延喜年古製造之而諸手所造並不能合於古製、於是僕奉

鈞旨試造之、考之典籍斷之胸臆小心銷志亘歲初就全然合古如符契矣、官以之為万機用度、僕以之得一世榮名、是以先我國諸豪傑賦詩以贈之、次請福建浙江西湖鄞水等人亦同得之、或絶、或律、或五言七言、其数居多、就中浙江孫氏特作之跋以与之、而未得之序、敢不堪遺憾、仰冀

名公併彼革甲鳴今与此玄雲合古為述叙事一篇、以冠卷端、則実因千

載奇遇得百世珍宝、僕之幸莫大焉、敬呈敬祈、

供奉函工丹波大掾春田故明

二一、二九

福昌寺教州入院疏

惟夫契西來於祖意始出天童一家統北統於惠灯誰到石屋三昧選膺其器請在、茲時覺照山妙谷禪寺教州和尚、才挺僧中教播封内学人、取準著宿共尊智日騰輝祝聖運之永盛祥、河滌垢禱邦家之泰寧、因疏、面壁既已、九日弘塵、照峯庭栢、況逢三春、迎策玉阜、

二一、三〇

大日本国鎮西薩摩州娘媽山碑記并銘

紀^ニ稱^ス、湄州神姑蹟跡久^シ矣、銅鑪遡^リ流、枯槎頭^ス聖、騰^リ雲駕^レ空、叱^シ風驅^レ波、或^ハ如^ク巖馭^ノ鏘々^{タルカ}、閃忽往^リ來有聲、是^レ皆神之所^ニ依^レ杓^ト、而通^ニ變^シ通^ニ現^ス、不^レ一^ニ其方^ヲ、猶如^ニ大士三十二相普^ニ幼^ニ化^シ之罔^レ窮^リ也、隨^レ跡立^ツ廟^ヲ、有^レ廟必^ス祀、榮貤褒封、歷^ニ代有^レ命、天下府州、鼎銜海濱、河陬列^ニ士、崇祀望秩等於嶽瀆、誥命準乎天后、有宋以來神未^レ有^ニ如此之享盛^{ナルハ}也、盖^シ其護^シ国庇^シ民^ヲ搗^レ邪扶^レ正、為^ニ万世不磨^ノ之典^ニ已^ル、至^{テハ}如^{キニ}我^カ

大日本国薩州川邊郡加世田娘媽山宮廟、其來^ル尚矣哉、古老之言^ニ曰、有^ニ中華神女^一、機上閉^テ睫^ヲ遊^{シム}神^ヲ、顔色頓^ニ變^シ、手持^レ梭^ヲ、足^ニ踏^ミ機軸^ヲ而眠^レ狀若^シ有^{ルカ}所^ニ挾^ム、母怪^テ急^ニ呼^レ之、醒而梭墜^ツ、神女泣^テ曰、阿父無^シ恙、兄没^ス矣、頃^ニ而報至、果^シ然^リ、彼時父於^ニ怒濤^ノ中^ニ幾^ト溺^{ントス}、似^リ有^ニ護者^一獲^{ルニ}

安^ヲ、兄^ノ舟忽然^ト舵摧、顛覆^ノ莫^シ救^フ、神女酷^タ哀^ム出^ニ柔輓^ノ音^ヲ、誓願^テ曰、當來世海中遇^レ難者、念我乞^ハ救護^ヲ、我必^ス応^ニ之念得^ニ度脱^ヲ、遂^ニ投^シ身^ヲ入^ル海^ニ、其肉身臨^ム此、皮膚麗^{ナル}如^ク桃花、身体煥^{ナル}如^ク活人、觀^ル者如^レ堵、遠近大驚^ク之、知^ニ其非^ニ凡人^ニ也、舉^ニ而以^レ礼^ヲ葬^ス焉、後^チ三年中華來^リ尋、彼欲^レ分^シ其神^ヲ首^ヲ以^レ歸^リ葬^ト云、噫、神变固罔^レ極^リ、此盖^シ蹟跡之最^モ著^{シキ}也、

国君特立^ツ廟^ヲ山^ノ巔^ニ、号^フ曰^ニ西宮^一、春秋二祀、処依^ル典^ニ礼^ニ、其像馥郁甚香、議者謂^ク伽楠木^{ナリ}、恒封鎖閤不^レ獲^レ覩^マ、有^ニ三華表^一、自^ニ一華表^一至^ニ巔^一十八里而遙山皆樹木蔭森、多^シ堅木、銘^シ可^シ棟梁^{トス}、人懼^レ雷霆之震^ヲ即^チ樵者不^レ敢加^ヘ斧、有^ニ通天小径^一、苟^モ非^ニ攀^レ蘿^ヲ捫^ニ葛^ヲ、則弗^レ能^ル踰^ル最巔、巨石層々如^ク玉版^ニ然、三面俱海、西北衝^キ溟渤之外^ヲ、卓^ニ立^ス雲端^ニ、望^メ之^ヲ儼^ト如^ク宝幢^ノ、信^ニ為^ニ一方尊標^一也、凡^ソ高艫大舶、一葦片帆、靠^レ海為^ス利者、莫^シ不^レ遙^ニ拜默祝^ノ、而咸賴^ラ焉、座主僧歲々以^テ八月^ニ至^ニ九月終^ニ、舍^ニ二華表本地堂^一、修^シ踰伽密法^ヲ、禱^ニ禪^ノ國家太平、風順雨若、海天寧靖、賈舶通利、訖^ニ十月朔^一下^ル山^ヲ、原^{ルニ}夫^ノ東宮^ハ者居^ル先^ニ而西宮配^ス焉、伝^ニ言^フ、中天竺摩伽陀国王^ノ子、乘^ニ飛車^一來^テ、止^ニ於山下^ニ、旌^フ其駐蹕^ヲ曰^フ神渡^ト、既^ニ而此去^ル他山^一、脱^フ其玉冠^ヲ留^ム之^ヲ、国人名^テ其山^ヲ曰^フ冠嶽山^一、立^テ祠号^ス冠嶽權現^ト、又去^リ他山^ニ卸^ニ紫衣裾^ヲ留^ム山^ニ、立^レ祠号^ス紫尾權現^ト、終^ニ去^テ之^ク紀州熊野山^ニ、其^ノ国人立^テ祠号^フ曰^フ熊野大權現^ト、吾^レ聞^ク之、熊野大權現、伊婁冊尊^ニ而女神也、今夫尊^ト与^レ后配祀^ル東海西鄙之極^ニ、偶尔会成、陰^ト与^レ陰濟^リ不^レ

今歳冬予随高駕而旅于加世田、幸以余暇日登陟此嶽巔、躋壑履巖、披蒙茸踞虎豹、仰攀葛藟、俯眺靈池、景色超然自有感神秀矣、故下麓之後、問東西二祠之来由於愛染院僧、々粗答乃携此碑記一軸出曰、是則玄岱翁所撰、最卓尔、然無点、難悟愚蒙之徒、以是、先僧嘗需補之金鱗叟、々固辞不敢補也、予謹閱之、蓋能写神嶽形勢、能記頭跡来由、可謂英藻也、遂請膳之於旅下、窃叙輸端云尔、

峯

宝曆第九竜集己卯冬十月

- * 1 東大本、都城本「托」。
- * 2 東大本、都城本「幻」。
- * 3 東大本、都城本「歴」。
- * 4 東大本、都城本「土」。
- * 5 『薩藩名勝志』『神祀未有…』
- * 6 東大本、都城本「項」。
- * 7 東大本、都城本「首」。
- * 8 東大本、都城本「議」。
- * 9 東大本、都城本「楠」。
- * 10 東大本、都城本「銘」。
- * 11 東大本、都城本「」。
- * 12 『薩藩名勝志』『歳以…』。東大本「歳、」
- * 13 東大本、都城本「興」。
- * 14 東大本、都城本「敕」と書き、頭書で「刺」と修正。
- * 15 同右。
- * 16 『薩藩名勝志』は次に「孚子惟慤、諱愿、為都巡官、即后父也、…」と続く。

- * 17 * 14に同じ。
- * 18 東大本、都城本「聚」と書き、頭書で「娶」と修正。
- * 19 『薩藩名勝志』次に「矣」あり。東大本、都城本にも「矣」あり。
- * 20 東大本、都城本「棄」と書き、頭書で「乗」と訂正。
- * 21 東大本、都城本「羽」。
- * 22 東大本、都城本「干」。
- * 23 東大本、都城本「昊」。
- * 24 東大本、都城本「天」。
- * 25 東大本、都城本「另」。
- * 26 東大本、都城本「囟」。
- * 27 東大本、都城本「勒」。
- * 28 東大本、都城本「譚」。
- * 29 『薩藩名勝志』、東大本、都城本「文之不文」。
- * 30 東大本、都城本「抨擊」。
- * 31 東大本、都城本「詳」。
- * 32 東大本、都城本「丁亥」。
- * 33 東大本、都城本「位」。
- * 34 以下は『薩藩名勝志』になし。
- * 35 東大本、都城本は抬頭。
- * 36 東大本、都城本は「旅窓下…」
- * 37 東大本、都城本は「翰」。

通昭録卷之二十二

座右銘	漢崔瑗
座右銘并序	白居易
統座右銘	宋李至
布衾銘	范堯夫
孔明廟記	蘇東坡
衣帶銘	文天祥
精義齋記	日為純
膝趺驛墓銘	田中国明
奉近衛君詩并序	程順則
与田頭親雲上書	井上因碩
送惠性帰国詩并序	志賀登竜
振衣亭記	山田君豹
舜水行実	今井弘濟 安稱覚
夫子説	貝原篤信
五常配五倫記	
海潮説	
〇行生克論	
予知死日論	
他姓為後説	
楠公教子図賛	
自賛画像	
答問書序	本多忠統
読朱子書弁	貝原篤信

舜水先生画賛

題普賢像

題安積自実簿

与安它生順書

与諸孫男書

三槐堂銘

林 篤信^{*1}
朱 舜水

蘇東坡

*1 東大本は「篤信」と転倒の指示あり。畧図本は傍書なし。

*2 頭書「小」。東大本も頭書「小」。都城本、頭書なし。

*3 東大本、都城本「宅」。

二二一、〇一

座右銘

漢崔瑗

無^レ道^フ人^一之短^一、無^レ説^二己之長、施^レ人^ニ慎^テ勿^レ念^一、受^テ施^レ慎^テ勿^レ忘^一、世^ル譽^ス不^ス足^ラ慕^フ、唯^レ仁^ニ為^二紀綱^一、隱^テ心^ニ而後^ニ動^一、謗^レ譏^庸何^マ傷^マ、無^レ使^ル名^一過^二実^一、守^レ愚^ハ聖^ノ所^ニ臧^{スル}在^一、淫^ハ不^レ溜^マ、暖^ハ不^レ暗^ト、内^ニ含^ム光^一、柔^ハ弱^ハ生^ニ之徒^一、老^ニ氏^一誠^ニ剛^一疆^一、行^ハ々^ハ鄙^夫志^シ、悠^々故^ニ難^一量、慎^ニ言^一節^ニ飲^一食、知^レ足^ニ勝^一不^レ詳^一、
行之苟有恒、久々自芬々^{*2芳也}

*1 東大本、都城本「詳」。

*2 東大本、都城本「々」。

二二・〇二

座右銘并序

白居易

崔子玉^カ座右銘^ノ、予窃慕^フ之、雖未能^ハ盡^ク行^フ、常^ニ書^ス屋壁^ニ、然其間似^リ有^ル未^レ盡^ル者^一、因統^テ為^ル座右銘^ヲ、勿慕^ニ貴^ヲ富^ヲ、勿憂^ニ賤^ヲ與^ニ貧^ヲ、自問^フ道如何^ニ、貴賤何足^シ云^ニ、聞^テ毀^レ勿^レ戚^{タル}、聞^テ譽^ヲ勿^ニ欣^{タル}、自問^フ行如何^ニ、毀譽安足論^ニ、無^ニ以^テ意^ヲ傲^ル物^ヲ、以^テ遠辱^於人^ニ、無^ニ以^テ色^ヲ求^ル事^ヲ、以自重其身^ニ、遊^ニ與^ニ分岐^ヲ、居^ニ與^ニ正為^ニ隣^ヲ、於中有取捨^ニ、此外無疎親^ニ、修外以及內^ニ、靜養和^ニ與^ニ親^ヲ、養內不遺外^ニ、動率義^ニ與^ニ仁^ヲ、千里始足下^ニ、高山起微塵^ニ、吾道亦如此^ニ、行之貴日新^ニ、不敢規他人^ニ、聊自^ラ諸神^ヲ、終身且自最^ニ、身没貽後昆^ニ、苟反是非我之子孫^ニ、

*1 東大本、都城本「問」。

*2 『白氏文集』では「遊与邪分岐」。東大本、都城本は異図本に同じ。

*3 『白氏文集』では「聊自書諸紳」。東大本、都城本も『文集』に同じ。

*4 東大本、都城本「紳」。

*5 東大本、都城本「最」。

二二・〇三

続座右銘

宋 李至

短^ハ不^レ可^レ護^ニ、々則終短^ニ、長不可矜^ニ、々則不長^ニ尤人^ニ、不如尤己^ニ、好田不如好方^ニ、用晦則天下莫与汝爭智^ニ、擲謙則天下莫与汝爭強^ニ、多言者、老氏所戒^ニ、欲納訥者、仲尼所臧^ニ、妄動有晦^ニ、何如靜而勿動^ニ、太剛則折^ニ、何如柔勿剛^ニ、吾見^ニ、進而不已者敗^ニ、未見退而自足者亡^ニ、為

善則遊君子之域、為惡則入小人之鄉、吾將書紳帶以自警、刻盤^{*1}孟而遇防、豈如長存於座右、庶夙夜之不忘、

*1 東大本、都城本「孟」。

二二・〇四

布衾銘

宋 范堯夫

藜藿之甘、綈布之溫、名教之樂、德義之尊、求之孔易、享之常安、錦繡之奢、膏粱之珍、權寵之盛、利欲之繁、若難其得、危辱旋^{*1}錄^ニ、舍難舍難取易^ニ、去危至愚且智^ニ、士寧不然、顏就安樂、簞瓢万世師、模紂居瓊台、死為独夫、君子以儉為德、小人以侈喪軀、然則斯衾之陋、其可忽諸、

*1 東大本、都城本「錄」。

*2 『事文類聚』衍字なし。

二二・〇五

孔明廟記

蘇東坡

密如鬼神、疾若風雷、進不可当、退不可追、書^{*1}不可攻、夜不可襲、多不可欺、少不可歎、前後応会、左右指揮、移五行之性、變四時之令、人也、神也、仙也、吾不知之真臥竜也、

*1 東大本、都城本「昼」。

二二・〇六

孔明贊

宋 葉士能

退莫追*1分進莫攻、來如風雨去無踪、神機妙算誰能測、果是人間一臥竜、

*1 東大本、都城本「分」。

二二・〇七

宋丞相文天祥臨刑衣帶內有贊

孔曰成仁、孟曰取義、唯其義盡、所以仁至、讀聖賢書、所學何事、而今而後、庶幾無愧、

二二・〇八

精義齋記

登竜志賀氏之宅、在城西半里許、今歲孟春依諸賢之加青眼、乃築齋、名之曰精義、以為講學之所、縱橫三丈有半、唯實載籍數百卷與素琴一張筆研而已、其所以名齋者何哉、蓋採于繫辭曰精義入神、精義入神者何所謂、物格知至也、物格知至而至能慮能得也、然精義而至於入神、則其所以涵養於內者至矣、其涵養於內者、則為出而致用之本且意誠心正身修亦本是、其本立則於為國家天下乎、何有其至仁熟德盛亦不外是也、是故三代之學皆以致知格物為始、善哉其名之也、善哉其名之也、有客來謂予曰、古之淑人君子先原乎天人之性、校乎邪正之分出處進退、誠與時俱而偃息乎、詩書之苑優游乎、礼樂之庭佩道藝之華含仁義之英、逝而不召、來而不距、得而不戚、不汲々於富貴、不戚戚於貧賤、若有游觀疾病之故、未嘗不在於學、如

曾哲風乎舞雩曾子易大夫之簣是也、今登竜子有之乎哉、曰、姑舍

是、曰、然則是斗筭之人乎、曰、不然、曰、請問其為人、曰、吾能知之異時同侪游於室鳩巢先生之門、搏髀於東都而論道既三年、先是游学于京師五六歲、乃還鄉能述其所聞焉、又視其交接之間、求之以善、輔之以文、或論變化之至妙、或敷道德之弘麗、無乃為匪精義乎、顧則庶乎以文會友、以友輔仁者矣、且朝則講書於窓下、以教授乎諸生、暮則彈琴於月前、而清淨乎、心氣不亦樂乎、客悅曰、吾以是告之於登竜子、願為我記之、峻拒不措、遂乃陳其事以与焉、

庚戌永夏

綠筠齋日為純誌

二二・〇九

膝跣駢墓碑銘

田中国明

夫無有雖獸有人心者乎、諒有之矣、麟先其物也、所謂含仁抱義行步中規折旋中矩故毛虫三百六十而麟為之長矣、且如其竜馬負圖出河神聖、則之乃發叡智、易曰、乾健也、健而無息矣、而以乾為馬、馬亦負重致遠達人用、宜哉有所以也、周穆八竜、漢文九逸、是皆出離三羸五驚之凡類而巡行、天下之駿足也、脱樊城之厄難、免檀案□之急、掛寿亭之侯印而斬五閔之將、騎益扶英氣者劉皇叔之的顱、閔將軍之赤免也、此外雖多、措不論也、抑吾

島津兵庫頭忠平後義弘公十七代之主也未繼統之前、奉邦君之命有日州之边境飯

野城、庄鎮伊東相良、時有自愛之一騎、駿騎之所向無敵、元龜三年五月四日、伊東義祐遣伊東新次郎同加賀守為大將、其外以一族之輩副之、變類千士、卒其弘曉御枚經過飯野、直逼加久藤城、縱火急攻焉、預有告報者、繇繫主設奇計為武備、指揮健將勇士、一舉擊破之、於之敵將新次及加賀授首、殘党狼狽北、追之到本知原屠殺數百

人、既而 主猶追到鬼塚原、則勢逼敗軍之敵、時柚木崎丹後肥田木
玄斎者相共抽鋒向 主來、主亦提鎗名謁、則是見知大將、乃捨鋒
跪坐地上而點頭 主騎、欲搶之難時乘驛乍趺膝伏地、因茲主客易下
立、突之兩敵、共斬首自〔是名馬呼膝趺驛〕愛増深苦如摧秣、終生
涯於厩中斃、時八十三歳、主感其人心、埋之於始羅郡内亀泉院中、
豎土為墳、上安一石、今茲宝永四年春二月、余觀察郡県、來当郡、
一日偶臨此墓、墳石缺碎痛永不伝、以為驛事也、不可不刊之樂石垂
之、以後世取取伝寺僧及里人之口碑綴之、以詞猗驛乎、位節趺膝忠
也、義也、如斯是謂人心也、猗驛乎、於忠義知其忠義、可以人而不
如騎^{*2}、乃且作銘曰、

今臨墳墓	熟思趺驛	繫如絲散
項似雞鳴	眼等明鏡	尾類流星
兩耳批竹	四蹄絕塵	抱忠向敵
存義傲麟	養受糟握	恩報主人
功老一廩	齡超八旬	落驍騰氣
捐首藉春	誰為求骨	万世伝真
覲碑文字	苔蝕莫泯	

平伊時新建焉

*1 県図本、脱す。東大本により補う。

*2 県図本「駭」。これは東大本が「驛」の字を書きかけで終わらせていたのを写したため。

二二、一〇

奉近衛君亭並詩

琉球程順則

恭贈

前撰政大政大臣藤原家熙公高隱稿、

嘗聞、德不務修才無表往々^{*1}以不仕為高遯跡人間世此驕語貧賤者吾
見其人矣、若経術夙蘊於中得時則駕、至功成名遂之後、見幾而作
甘与烟霞為侶泉石相親者、則罕得而覲也、故從來名公卿賢將相雖
有、則旋転乾坤之能、不無投老山林之念、彼豈輕富貴而薄顯榮
哉、誠有見夫消息盈虚之理、即春榮夏茂秋收冬藏不忒之序、惟收
藏之、而後能榮茂之每見士大夫、家祖父知足、則孫子克昌、孰非
消而息虚而盈者乎、余聞、

京洛有

撰政家熙公、續其

尊翁関白大政大臣從一位藤原基熙公、任撰政

大政大臣從一位当国年敷施允当喜怒不形、有古伊尹周公之風、
故扶桑国実嘉頼之敬之如神明、親之如父母、乃投簪解組效靖節之
賦歸來、構物外樓結一小亭、煮泉試茗於其中、或坐花説書、或玩
月題詩、或看帖揮毫、暇則羅列三代漢唐宋諸古器撫摩扨拭以為
賞、心樂事脱宦海之風波、而尋□天之魚鳥、秋收冬藏之理□^{〔註〕}

撰政公籌之熟矣、況階前玉樹濟々臨風、金枝奕葉承露、他日必以門
第繼踵公之勲業、而光大之、即春榮夏茂之候也、四時之氣華於一
門舍公而外又何可多得哉、方今

聖人御宇泰運方亨海不揚波、年豐人樂、公從

此而耄耄而期頤龐眉兒齒坐、享太平之福、尚未有艾也、甲午夏、

余泛星槎、抵薩州、重九日随

薩摩太守中将吉貴公赴

江都、道経江州草津駅、時遇

願玉^{*(2)(3)}院權僧正聞其詳矣、僧正乞余一言、以贈

撰政公、爰忘固陋、喜綴數言以

呈

正

寄贈物外樓隱君子

閑居物外謝浮華、玩月題詩試露芽、聞道鴨川清且勝、羨君坐臥樂
烟霞、

幽韻蕭然迴出塵、鴨鷗江鷺日相親、齋中半榻高懸處、山水清暉護

主人、

年來高眼看佳山、每坐江樓自解顏、松鶴情忘忘世路、烟霞夢不隔

柴関、新

詩喜共梅花折旧客当乘明月還綠堂前

多景色知君行楽画図間

解組帰来鬢未皤夢竜事業□^(付)烟蘿澄懷

大道兼風雅適志千秋足嘯歌膝下菜衣輝

画錦階前玉樹発新柯栽培旧徳門庭好

善積無疆福自多

右俚言

正徳乙未春王正月灯節前三日書於江州

草津客邸

琉球国中山王府慶

賀典翰史正議大夫程順則拜贈

*1 県図本は空白。東大本により補う。

*2 東大本、都城本「王」。

二二、一

与田頭親雲上書

井因碩

今茲戊辰之季冬、琉球国王之賀慶使陪

從

領主羽林中郎将源宗信公、而來武江其属官

有田頭親雲上者、琉国之碁手也、

公奉

官命、使琉人田頭与本邦^{因碩}圍碁^{*1}於邸中矣、窃惟欲決彼此之優劣、

定手品之差位者乎、既而田頭試著三碁子^対因碩也、於是^{因碩}備

觀田頭之下子、則手該不庸工夫有余而^昼紙之^之勞、覆棋之功、可謂必

大者也、蓋琉人之碁手、先是往々王使之次来于

日本国者稍夥焉、雖然未嘗聞如此人之有奇策者矣、因許之^対因碩以

一著先子一著二石而已、猶他日漸摩之功不怠、則殆臻玄妙之域者

歟、為賞之贈印証尔、

日本国官碁手

寛延元年戊辰臘月

井□^(上)因碩

示

琉球国田頭親雲上丈

*1 東大本、都城本「碁」だが、「棋」の誤字であろう。

*2 東大本は「談」。

*3 東大本、都城本「画」。

送惠性雅丈婦故国序并詩 登竜^{*1}

惠性雅丈、同国之英、而忘形之友生也、其為人也、穎悟而好与剛毅而勵行一旦、脱然為苾蒨矣、其志欲会一乘之旨、而施仏化於四海、予本草莽之生、愚且無師受家、亦貧而無書無由知隻字、況於聖賢之道哉、雖然、自幼父母警之曰、夫人之所以為大丈夫者、以有撥乱反正之才也、徒待父母之膝下、而能養其口体者、女子之孝也、故男子桑弧蓬矢以射四方、無苟懷安逸、以敗其名、則可謂孝矣、於是慷慨、遂有遠遊之志、時享保四歲次己亥十一月初四、茶承嘉惠受業於洛陽松岡恕庵先生也、実喜千歳之不遇、却歎不惑之年、翼秋八月雅丈飛錫來、予喜甚、遂与遊恕庵先生之門、或攀義瑞上人之高堂、幾得其旨、勉々循々、未嘗廢業、志倦体疲、則東徘徊華頂之下、北吟嘯鴨水之上、從意之所欲、而未嘗見姦声乱其耳艷色動其情、与寓居今三年于茲也、不図是歲壬寅冬十一月、有父師之命忽焉婦故国、臨別不堪悵愴之思、故賦野詩一章、以比古人餞言之遺意而已、

曉行馬蹄輕、相送洛陽城、何時終吾業、比君衣錦榮、

*1 県図本は「登竜惠」、本文書き出しを「性雅丈」とする。今、改める。

振衣亭記

鶴山君豹 静斎批評

予読離騷之所云、曰、新沐者必振冠、新浴者必振衣、太愛其志潔、其行廉而遺風余烈凜然、猶在千載之下、使読者有蟬脱^{*1}乎濁穢、以

浮遊塵埃之外之況、一唱三嘆誦之久矣、嗟接得住方見文字悠暢、丁卯初春、予遊伊作、相識田原臧、椒儼俊偉、不事袿襮夙脱羈轡、歸隱田里、郷之湯浦有温泉焉、原臧結茅於其側、以為憩息之处、乃其亭也、蓬戸繩樞環堵蕭然、僅蔽風雨、臧或朝來暮還、或留連閨月唯情之適、而又不携家累、躬親薪水、未嘗見其戚々焉、往々於浴泉之後散髮露頂、偃蹇亭上傲然長嘯、有与世相遺之致而与之論古今烈士峻節尚義之事、則慨然擊節色動鬚眉、蓋亦有意於三閭之言者也歟、一日問予亭名、因誦前言、命曰振衣、

讀之、知其人非凡而其文亦不凡、

*1 東大本、都城本「脱」。

舜水先生

今井弘濟

謹撰

行実

安積寛

文恭先生諱之瑜、字魯璣、姓朱氏、号舜水、明浙江余姚人、其先封邾、春秋所謂邾子也、後改為鄒、秦楚之際、去邑為朱、漢興、流轉魯魏之間、在東漢時、曰暉曰穆、俱顯于世、亦其先也、^(元)季、明太祖高皇帝定鼎金陵、當時遠祖某^{闕名}帝之族兄也、雅不欲以天潢為累、帝物色累徵、而某堅臥不起、帝不能奪、家居終身、改姓為諸^{漢音朱諸}、及附主入廟、題朱姓為朱、子孫復今姓、高祖竜山^{闕名}、^{音相同}不仕卒家、高祖妣黃氏、曾祖諱詔号守愚、累歷顯職、誥贈榮祿大夫、曾祖妣孟氏、誥贈夫人、祖諱孔孟、号惠翁、誥贈光祿大夫、祖妣楊氏、誥贈夫人、父諱正、字存之、号定寰、別号位垣、累遷總督

漕運〔軍〕門、及卒誥贈光祿大夫上柱國、妣金氏、前封安人、誥贈一品夫人、先生其第三子也、以明萬曆二十八年庚子十月十二日申時生焉、幼而穎悟絕倫、殆若成人、九歲喪父、^{*2(哀)}裏毀踰禮、初從慈谿李契玄學、及長受業于吏部左侍郎朱永祐、及東閣大學士兼吏戶工三部尚書張肯堂、^{*3(完)}禮部尚書吳鍾巒、^{*4}研宛古學、特明詩書、初為南京松江府儒學生、所謂秀才也、少抱經濟之志、動輒適禮、宗族及鄉先生、多以公輔相期、弱冠見世道日壞、國是日非、慨然絕近仕之〔懷、而有高蹈之〕^{*5}致、每對妻子云、我若第一進士、作一臬令、初年必逮係、次年三年、百姓誦德、上官稱譽、必得科道、由此建言、必獲大罪、身家不保、自揣淺衷激烈、不能隱忍含弘、故絕志於上進耳、鄉黨每有疑難、先生片言折之、嘗有人携家譜來謂曰、我朱文公之裔也、文公之子、為余姚令、子孫因家焉、意欲認先生為同族、及閱譜、世累大同、而唯有一世可疑者、宗族皆欲從之、先生正色曰、一世不明、則余不足拋、方今九族尚不能敦睦、何用捨近求遠耶、狄青武人、尚不認仁傑、若能自立、自我作祖、棄其先德、則四凶非聖人之後乎、宗族皆服其卓識、而從其言、先生始娶葉氏、先歿、繼妻陳氏志意克諧、事姑尽孝、能安貧賤、有短裳挽鹿之風、年至四十、欲棄拳子業、退安耕鑿、諸父兄弟愛其器度可大用、而不許、於是每逢大比、徒作遊戲了事而已、或有勸顯達者、則恬然不肖、^{*7(省)}崇禎某年、提督蘇松等處學政監察御史元某^{*8(文)}武全才第一名、薦於禮部、崇禎十六年癸未十月、幕府辟為監紀同知、不受、尋擢恩貢生、^{*9(卷)}老官吳鐘巒貢筭、稱為開國來第一、十七年甲申詔特徵、不受、弘光元年乙酉正月、又詔徵、亦不受、四月、即授江西提刑按察司副使兼兵部職方^{*10(清)}請、^{*11(就家)}吏司郎中^{*12(公)}云、方国安軍、不拜、於是台省交帝^{*13(意)}論劾、之瑜偷蹇、不奉朝命、無人臣禮、先生

即不別家人、^{*15(題)}皇夜逃避海浜、此時左良玉之子夢庚背叛報急、羽檄張皇、故得免於逮捕、既而自舟山至日本、軫抵交趾、未幾還舟山、隆武三年丁亥^{*16(卷)}永曆元年舟山守將招討大將軍威虜侯黃某、承制授昌國縣知縣、不多、十月又題請監察御史管理屯田事務、亦不受、聘請軍前贊画、不就、永曆五年辛卯、舟山諸將、互抱疑貳、欲相屠殺、清兵將至、先生予料禍敗、欲自舟山至安南、而阻風轉至日本、先生素與經略直浙兵部侍郎王翊、深相締結、且與舟山諸將密定恢復之策、時王翊兵勢頗振、屢立戰功、蓋先生以所屢至日本者、欲以王翊為主將鄉導、而借援兵也、然在日本、未掌露情洩機、既而王翊戰敗被禽、^{*17(題)}不屢而死、久之先生得聞其計、然莫詳其月日、乃以八月十五日設祭祀焉、哀悼激烈、發于其文、尔來每逢八月十五日、杜門謝客、愴然不樂、終身廢中秋賞月、自是而後、先生歸路梗塞、然以日本禁淹留外邦人、復過舟山、六年壬辰^{*18(卷)}監國魯王駐蹕舟山、時安洋軍門劉世勲、疏薦監紀推官、不受、吏部左侍郎朱永祐、擬兵科給事中、旋改吏科給事中、亦不受、禮部尚書吳鍾巒、擬授翰林院官^{*19(先生自書履歷)}曰、翰林院官、大則功論贊允、小則修撰編纂、乘命未下、再三力辭、故不知係何官辭而不就、時先生有浮海之志、偶在舟中、為清兵所迫脅、白刃合圍、欲使就降髡髮、先生誓以必死、談笑自若、同舟劉文高等七人、感其義烈、駕舟送還舟山、因是巡按直浙監察御史王某嘉其節操、薦舉孝廉、不受、上疏固辭、時天下大亂、憲綱蕩然、先生雖有志於匡救、而時事不可為故、累蒙徵辟十有二次、前後力辭、七年癸巳^{*20(監國)}六年七月復來日本、十二月復赴安南、先生雅有意於經歷外邦、而資恢復之勢、是故東南海外、雖暹羅小夷、亦曾至焉、監國九年丙申三月魯王特勅徵勅書降自舟山、而先生東漂西落莫能速達、至明年丁酉正月、始達交趾、先生特制処士衣巾、設香案開說、叩頭謝恩、獻欵慷慨、欲自海路赴思明、而就徵、適遭安南

之役、不果、所謂役者是時安南國王檄取中原誠字人、差官拳以先生、一時掩捕、如擒寇虜、而使先生面試作詩寫字、先生不作詩、但書朱之瑜浙江余姚人、南直隸松江籍、因中国折柱缺維、天傾日喪、不甘難髮從虜、逃避貴邦、于今一十二年、棄捐墳墓妻子、虜氛未滅國族難歸、潰毫憂焚、作詩無取、該體作色該體交趾吏自、百般恐嚇、欲令屈服、而先生毫無沮色、其間往復之言、忠憤義烈、激功慨然、夷人亦為之改容、遂將至外營國王屯兵之所、即日命見文武大臣悉集、露刃環立者數千人、意欲令拜國王、或慰諭焉、或怒逼焉、先生故為不解其狀、差官拳杖、画一拜字於砂上、先生乃借其杖「加」不字于拜字上、又牽袖按抑令拜、先生揮而脫之、國王大怒、令長刀手押出西行、先生毫無顧盼、揮手即行、心決一死耳、遂將赴該體所、於是闔國君臣震怒、必欲殺之、而先生執意弥固、有黎医官者、從容勸諭曰、君必不拜、見殺無疑、何不自愛至此、先生厲声曰、今日守礼而死、含笑入地耳、何必多言、次日黎明、自取脯下水、洗沐更衣、撮土向北拜辭訖、埃天明、内樓供奉勅書、拜訖、附以蘇吾、囑托後事、謂黎医官曰、我死後料尔輩不敢收骨、如可收、乞題曰明徵君朱某之墓、国人稍々探知其無辜遭難、乃有嘆服而称奇者、國王亦差人訪察拳動知其履歷事實、於是擅殺之計弛、而任用之心萌矣、然先生未之知焉、独在困厄之際、惟恐身名埋没于外夷、而無達于天朝、乃密草奏疏、且錄遭役本末、封付王鳳、使上於魯王、數日國王致書于先生令仕、有太公佐周而周王、陳平在漢而漢興等語、先生復書拒之、自此而後、闔國君臣、悉知先生貞烈義勇、凜乎不可犯、反相敬重、如國王之弟、亦至称为大人、其敬服如此、時國王遣人、書一確字來問、先生解以堅確之儀、*20義遂使先生作堅確賦、先生既無拘留之患、欲浮海而歸、乃作書辞國王、歸至会安、寓中盜窃罄空、親友皆言是居停所

為、頗有証摠、而先生明察非寓主之所為、一概不究、諸人笑以為痴、後事發、竟与寓主無涉、ル諸人嗟歎、謂非常人所能也、其後先生錄遭役本末往復事實、名曰安南供役紀事、先生欲歸桑梓、潛察中興之勢、而屢經窘迫、資裝匱耗、乃又上疏魯王陳其情狀、明年戊戌夏、又至日本、蓋因魯主之召、而欲從日本抵思明、親據情實而決去就也、是時海内幅裂、兵革鼎沸、欲從安南直赴、則行路艱澁、是以欲取海路、而舟山既陷、先生師友、擁兵懷忠者、如朱永佑吳鐘巒等、皆已死節、先生聞之、進退狼狽、然欲審察時勢、密料成敗、故濡滯沿海、艱厄危險、万死如髮、於是熟知声*21勢之不可敵、壞地不可復、敗將不可振、若处内地、則不得不從清朝之俗、毀冕裂裳、髡頭束手、乃决蹈海全節之志、以明年己亥日本方治二年又至日本、先是筑後柳川有安東守約者号者庵、欽其學植德望、師事之、深体先生忠義之心、知其歸路絕、宿望沮、固請先生留日本、先生從焉、乃与同志者、連署白長崎鎮巡、々々許之、然先生流離屯蹙、四海空囊、孤身飄然、不能自支、守約乃分祿、奉其半、先生辞以過多、守約曰、先賢有以麦舟救朋友之急者、古人称師与君父、所在致死、況其余哉、然則義当悉献年俸、自取其三之一、然辱愛之深志、不許之、故今取其中以分其半、若非其義非其道、則奉者受者、猶之匪人、老師高風峻節、必不受不義之祿、豈以守約之所奉為不義之祿乎、守約百事不如人、惟於取与欲尽心以合理、若拒之、則為匪人也、豈相愛之道哉、先生重辞以心不安、答曰、守約為生、豐於老師、則豈於心安乎、縱使傾家奉之、志則在矣、難以致久、故酌其宜以中分之、有余則不在此限、不足則亦不必如此、願不過為慮也、守約尊信老師、本非為名、老師愛守約、亦豈有私、惟欲斯道之明而已、先生乃知其志不可移、而許其所請、自是守約仕官之暇、窮微探蹟、學術頓進、先生雖客寓於

茲、莫不日向鄉而泣血、時背北而切齒、惟以邦讐未雪為憾、不以闔室既破為悲、所恃者旧邦二三之忠臣、所仰者明室累世之積德耳、辛丑歲^{元文}、守約問明室致亂之由、及恢復兵勢、先生乃撰書一卷答之、名曰中原陽九述略、先生幼時嘗夢夜暖溶霜月風輕薄露水二句、因以溶霜名齋、而未知其兆、及在日本、習其風土、恍然自悟曰、吾漂零海外、命也夫、癸卯^{三春}、長崎大火、先生僑屋亦蕩盡、因寄寓于皓台寺廡下、風雨不蔽、盜賊充斥、不保旦夕、守約聞之曰、我養老師、四方所俱知也、使老師餓死、則我何面目立乎世哉、即時赴之、拮据綢繆而還、甲辰^{四春}我宰相上公、遺儒臣小宅生順於長崎、採訪碩德耆儒、生順屢詣先生、談論古今、謂先生曰、東武若有奉先生為師者、能東遊否、先生曰、興學設教、是國家大典、而在貴國為更重、我深有望於貴國、但以我才德菲薄、何遽足為庠序之師、至若招我不論祿而論禮、恐今日未易輕言也、惟看其意何如耳、及順婦、上公備聞先生才德文行、明年乙巳稟明公延聘召先生、々々乃與詔者及門人議其去就、皆曰、上公好賢嗜學、特召先生、不可違拒、先生乃忘其聘、七月至武江、自是禮接鄭重、待以師友、八月上公就邦、九月迎先生至水戶、十二月歸武江、丁未^{年七}八月、又至水戶、每引見談論、先生援引古義、彌縫規諷、曲尽忠告善道之意、上公亦与之論難經史、講究道義、冬上公鑄鐘、鑄于城樓、以備警時、乃使先生作銘、自書于鐘、及上公構高枕亭于綠岡、又使志其亭、先是上公欲為先生起第駒籠別莊、先生力辭數四、且曰、吾藉上公之眷顧、藏孤蹤於外邦、得養志守節、而保明室之衣冠、感恩浴德、莫之大焉、不能報其万一、至于衣之食之居之或豐或儉、則未嘗置之懷抱也、且吾祖宗墳墓喬木秀美、想必為虜發掘剪除、每念及此、五內慘裂、恥逆虜之未滅、痛祭祀之有闕、若豐屋而安居、非我志也、上公慰諭懇至、

乃勉從之、甲申二月、歸武江新第、先生常念守約傾心之篤、每通書信、或寄黃金衣服、以據情素、守約領其輕、還其重、先生乃代金以絹帛、書論之曰、昔及相見、分微祿、以其半贍不佞、賢契敝衣糲飯、樂在其中、蓋以我為能賢、以為道在是也、豈有有道之人、而忘人之德者乎、賢契而忘之則可也、不佞而忘之、尚得謂之人乎、大凡賢者處世、既當量己、又當量人、賢契自居高潔、則不佞處於不肖矣、不幾與初心相紕繆乎、況非所謂高潔乎、自是不敢拒而受之、己酉^{年九}先生歲七十、以年老神耗、欲辭西歸、乃啓陳其意、上公嘉其肫篤、慰勉欵曲、先生不得止而從之、十一月十二日、先生誕日、上公設養老之禮、饗先生于後樂園、授几杖而禮養焉、十六日親臨其第、酒設幣帛、禮接稠疊、新製屏風、画以倭漢年邵德高者六人^{倭成、太公望、桓榮、文彦博、武內宿禰、藤原}、祝其遐壽、盡歡而歸、是歲先生作諸侯五廟圖說、博採衆說、通會經史、旁考古今、以理折衷、識者皆謂不朽之盛典、庚戌^{年十}先生以檜木作壽器、制度周密、漆而藏之、先是每歲欲用油杉制之、而終無良材称意者、故以檜木代焉、乃謂門人曰、我既老在異邦、自誓非中國恢復不歸也、而或一旦老疾不起、則骸骨無所歸、必當葬于茲土、然汝曹素不知制棺之法、臨期苟作、則工手不精、制度不密、數年之後、必致朽敗、後來儻有逆虜敗亡之日、我子若孫、有志氣者、或欲請之歸葬、而墓木未拱、棺槨朽弊、則非從二三子之差、亦日域之玷也、吾之所以作此者、非為手足也、為後日慮耳、況禮有七十月制之文乎、是歲上公使先生作學宮圖說、商^確古今、剖微索隱、覽者若燭照而數計焉、上公乃使梓人依其圖而以木模焉、大居其三分之一、棟梁桁椽、莫不悉備而殿堂結構之法、梓人所不能通曉者、先生親指授之、及度量分寸、湊離機巧、教喻縝密、經歲而果、^{文廟、}啓聖宮、明倫堂、尊經閣、學舍、進賢樓、廊廡、射

圃、門樓、牆垣等、皆極精巧、及上公作石橋于後樂園、先生亦授梓人以制度、梓人自愧其能之不及也、又命造祭器之合古典者、先生乃作古升古尺、揣其稱勝、作簠簋籩豆登銅之屬、古意煥乎溢目、如周廟欽器、唐宋以來、固雖存而制莫傳、先生依圖考古、研覈其法、巧思默契、指畫精到、授之工師、*25(禮)、未幾洞達、乃為之揣輕重、定尺寸、閏機運動、教之弥年、卒得成之、壬子冬、上公使先生率儒學生、習稷奠禮、改定儀注、(禮)、詳明□節、學者通其梗概、明年癸丑延平元年復於別莊、權裝學宮、使再習之、於是學者皆精究其禮、甲寅、先是上公使先生製明室衣冠、至是而成、朝服、角帶、野服、道服、明道巾、紗帽、幘頭之類也、上公素遇先生以殊禮、寒暑風雨、必問起居、殺饌性牢、莫不備焉、常念先生客居他邦、清節厲操、鄉信阻絕、而言不及子孫、乃諭先生、寄書于家、問其家信、且召一孫侍養焉、先生作書寄之、*26、先生之在鄉也、兄曰啓明、一名之琦、号蒼曙、登進士第、因忤閹宦、妄為所劾、雖兩奉明旨昭雪、而不賂權要、故十年不得復、後遭運缺、御筆親除、時因流賊破北京、未得到任、遂歸、南京洋務軍門缺、理應啓明推補、而時相馬士英、惟略是圖、又起姦党阮大鍼、為兵部侍郎、以為羽翼、而共推劉安行補焉、啓明擯落、但奉朝請而已、清朝欲強用之、不可、部院陳錦欲殺之、以操江唐際盛力救得免、後錮南京、屏居灌園、及先生流離海外、莫知其存亡、次兄某字仲琳、未弱冠而卒、先生繼妻陳氏亦先沒、後聘胡氏、先是妻父胡公、必欲配之先生、而先生固辭者三、且作書苦辭、胡公不許、聘後先生適會母喪未娶、後值亂離奔逃、數寄書而使別許配、而胡公堅執不允、後亦莫知其存亡、先生有二子一女、長大成字咸一、（一）次大成字咸二、（二）今忘之之語、則先生之子不止於是、然平日所語、只有一男、則元楷或是大成大威之改名者、今莫能詳、女高字柔端、即陳氏所生也、高忠孝性成、

聰明絕世、兒時三歲、便如成人、一言一動、俱有矩矱、長者皆愛之憚之、六歲喪母、哭泣之慘、弔祭者哀不能起、遇事先意承志、先生藉以忘憂、變革以來年十二三、嚴備利刃、晝夜不去身、其矜駭焉問之、曰、佩此作何事、曰、夷虜犬羊、豈知禮義、兒若有不幸、即以此自刎、寧肯辱身、其矜固與臥起、欲窃其刀、四年不能得、幼字同邑何氏、因其舅為滿官、日夜思父、又愧憤其失節、忿懣違疾、未嫁而亡、是時先生在外、不知其亡年、大約在壬辰癸巳間也、大成隱居教授、不就清朝考試、以己酉年卒、大成先沒、無子、大成有二子、曰毓仁、毓德孤貧養於外祖姚姚家、先生所寄書達姚家、家人相與驚嘆、始知其尚在天壤間、且悲且喜、然未審海外陰夷禁諱、是以切欲訪求、而不敢輕動、乃託外家親姚江、赴日本、候察邦憲及先生安否、泰謂、先生離鄉年久、不識姚江、故授之、以先生所嘗有金扇及命紙等為証、而附以家書、丙辰江至長崎、先生覽書、始知大成之死、泫然隕涕、江之在崎也、備識先生与上公相得而保明室衣冠、及召一孫之意、及歸、被清朝官吏監察、而以犯禁充於軍後泰及毓仁毓德傳聞先生消息明確、戊午、毓仁直來日本、十二月至長崎、而礙法禁不能詣武江、先生亦老疾不能赴長崎、唯以書通情而已、上公聞之閔惻、欲召毓仁侍養、而毓仁受命而來、當歸報母、故踟躕不敢遵命也、於是上公諭先生使門人今井弘濟往長崎、賜賚毓仁甚優渥、先生寄書、審問祖宗之墳墓、旧友之存亡、且警之、以國亡家破、農圃漁樵、自食其力、百工技藝亦自不妨、惟有虜官決不可為耳、竟不及其他、己未四月、弘濟抵長崎、与毓仁相見、備述先生之意、且諭毓仁侍養、毓仁謂弘濟曰、毓仁幼失父、家有母及弟、而無負郭之田、我之來也、欲問家祖安否、面陳情實、歸告母及外祖、以慰其渴望、然後辭母再來而終侍養之孝耳、前者姚江之來、不及至家、中途遭

事、而毓仁家貧、不能贖之、居常鬱陶、忽焉浮海、而長留不歸、雖有事祖之誠、而缺倚門之望、今且歸而報母、必圖後舉、然則于祖于母、孝心兩得矣、七月弘濟煇都、備述毓仁之意、及桑梓之信、先生慨然感憤、是歲先生年八十矣、及先生誕日、上公又設養老礼、前一日、親就第祝壽、奉以羔裘鳩杖龜鶴屏等、凡二十品、明日先生設香燭、拜告天地、祝以逆虜未亡、故土為墟、而身在異邦、遲暮衰疾、久受上公隆恩、無以報之、獻歆流涕、感動傍人、是日上公命奏古樂而樂之、庚申、先生素患咳血、二十余年、精神俊爽、苟無惰容、年逾八十、老疾稍漸、膚燥体寢、因生疥瘡、不勝起坐、岑^{*30}在床、明年辛酉^{元和元年}衰損日甚、上公屢使人問候、饋以菓殽、且使医官與山玄建診察進藥、先是先生每疾、常服玄建之藥、至此先生辞曰、玄建者常在公候之門、医療權要者也、今吾之疾也、疥癢浸淫、手足汚爛、而使之診脈、恐伝染医手、則累人居多、未必不由吾也、利己而損人、君子戒之、且大馬之齒、既過耄臺、而欲用菓石延旦夕之命、未為知命者也、吾必不敢承命矣、上公為之慰喻懇欵、玄建亦屢至累請、而先生力辞不使診脈、玄建乃望聞而制藥、先生服之、意在重上公之命而已、壬戌三月、設宴招親友及門人等力疾起坐、諄々教誨、蓋永訣也、四月十七日無有他疾、語言声色不異平日、未時奄然而逝、年八十三、先生既制棺、又逆備葬具、門人歛畢、歎惜不已、臨送其葬、親題神主、世子亦会焉、以四月二十六日、葬於常陸久慈郡大田鄉瑞竜山麓、依明朝式成墳焉、癸亥^{年三}七月十二日上公与群臣議、諡曰文恭先生、親詣墓、薦少牢、文曰、嗚呼先生、道德坤厚、才望崧高、生于明季之衰、遭于陽九之厄、危行砥節、屯蹇隱居、鶴書連徵、確乎不拔、身陷賊窟、守正不移、流離輻蓬、經幾年所、衣冠慕古、未曾變夷、歐血嘗胆、至誠無息、發光肥遯、謝恩遠

辭、鼓翼南溟、奮鱗東海、風餐雪虐、義氣益堅、寬文乙巳夏六月、惠然寓我、々茲師資、終日諄々、論文講礼、嗚呼先生、博学強記、靡事不知、起廢開蒙、孜孜善誘、敷我未半、天不假年、去歲夏初、奄忽長逝、嗚呼先生、生有懿行、死不可無美諡、古言曰、道德博聞曰文、執事堅固曰恭、蓋先生之謂乎、故諡曰文恭、肅摠哀誠、敢告塋墓、嗚呼哀哉、伏尚先生之靈、來聽來饗、甲子^{貞享元年}上公命構祠堂于駒籠別莊、十二月十三日遷主、祭用少牢、自作文祝之曰、嗚呼先生、明之遺民、避難乘槎、來止秋津、寤寢憂國、老淚霑巾、衡門常杜、簞瓢樂貧、韜光晦迹、德必有隣、天下所仰、衆生拱辰、既見既覲、真希世人、溫然其声、儼然其身、威容堂々、文質彬彬、學貫古今、思出風塵、道德循備、家宝国珍、函丈師事、恭礼夤賓、嗚呼哀哉、齒超八旬、遽尔捐館、今及三春、情所不忍、結不能伸、相攸構廟、輪奐維新、簠簋饔豆、云設云陳、牲醴粢盛、克祀克禋、敢告徵誠、焚香參神、々若有知、來綏來臻、尚饗、自是每忌日、親举祭礼、然是日適當東照公之忌日、有事于太廟、故移祭于明日、率以為常、先生性質謹慎、記神敏、雖老而疾、手不釋卷、凡所經覽、鉤深体実、博而約、達而醇、嘗謂門人曰、學問之道、如治裘、遴其粹然者、而取之、若曰吾某氏学〔某氏学〕、則非所謂博學審問之謂也、又曰、為学之道、外修其名者無益也、必須身体力行、方為有得、故子貢天資穎悟、不得与聖道之伝、無他、華而不実也、作文、雄壯古雅、持論逸宕、筆翰如流、随手成章、嘗〔曰〕、大凡作文、須本六經、佐以子史而潤沢之以古文、内既充溢、則下筆自然湊泊、不期文而自文、若有意為文、便非文章之至也、碩儒學生、常造其門者、相与討論講習、善誘以道、於是學問之方、簡牘之式、科試之制、用字之法、皆与有聞焉、先生飭身以礼、燕居儼若也、平居見客、雖親暱

必具衣冠、謙而接物、不尽人歡、嚴而自持、苟無虛飾、治家以儉、量入為出、離家四十年、不接婦女、或論以置妾以備藥餌之奉、而先生不許〔焉、格物窮理、志慮精純、古今禮儀而下、雖農圃梓〕匠之事、衣冠器用之制、皆審其法度、窮其工巧、識者服其多能而不伐、該博而精密也、為人剛毅方直、操履中規、挾交而慎言、晦迹以遠疑、如其祖宗官銜、及身蒙微辟之榮者、雖親友門人、未嘗与之言也、魯王勅諭、亦不示人、及卒、有古匣鎖而封焉、於中得所自書祖宗以下紙牌、及奏疏履歷等、勅書別藏于描竜箱、於是人皆服其深密謹厚、而知本末事實云、

- * 1 『舜水先生文集』「題姓為朱」。東大本「題朱」姓為「
* 2 東大本、都城本「哀」。
* 3 東大本、都城本「究」。
* 4 『舜水先生文集』「儒學學生」。東大本、都城本「儒學生」。
* 5 東大本、都城本によつて補う。『舜水先生文集』も東大本、都城本に同じ。

- * 6 東大本、都城本「系」。
* 7 東大本、都城本「省」。
* 8 東大本、都城本「千」。
* 9 東大本、都城本「考」。
* 10 東大本、都城本「清」。
* 11 東大本、都城本「納」。
* 12 東大本、都城本「云」。
* 13 東大本、都城本「章」。
* 14 東大本、都城本「儉」と書いて、頭書で「偃」と訂正。
* 15 東大本、都城本「星」。
* 16 東大本、都城本「受」。

- * 17 東大本、都城本「屈」。
* 18 東大本「莫」。都城本「莫」。
* 19 東大本、都城本「歲」。
* 20 東大本、都城本「義」。
* 21 東大本、都城本「々」。
* 22 『舜水先生文集』は「恐不許之」
* 23 東大本、都城本「官」。
* 24 東大本、都城本「畢」。
* 25 東大本、都城本「々」。
* 26 東大本、都城本「先生在之也」なし。
* 27 『舜水先生文集』「其始与同臥起、…」。東大本は「同」頭書。
* 28 底本「訪求：」以下一丁分、次の丁と錯簡あり。今正す。
* 29 『舜水先生文集』「歔歔流涕：」。東大本、都城本は『文集』に同じ。
* 30 『舜水先生文集』「岑岑在床」。東大本、都城本は『文集』に同じ。
* 31 『舜水先生文集』によつて補う。東大本、都城本も『文集』に同じ。

二二、一五

夫子説

貝原篤信

夫子之称始於何時乎、刑昺孝經疏曰、孔子嘗為魯国大夫、故弟子連官称之、尊之以別余人也、後人尊師者因例曰夫子、篤信竊按、書泰誓曰、勗哉夫子、註曰、夫子將士也、易恒卦六五婦人吉、夫子凶、是以丈夫称夫子也、史記註鄭玄曰、夫子丈夫之称、然則謂師称夫子者、亦猶称先生之意、此孔子以前既指人称夫子者有之、刑昺連官称之之説、恐未免為無稽之言、朱子答許順之書曰、石丈惠書、以夫子見謂、詳此二字、古人用之本非尊称、如伐顓臾之季氏毀仲尼之叔孫、皆得以称、蓋猶曰夫夫之人之比耳、然孔門弟子称仲尼以此、故

後人往々辟其号、蓋不惟不敢使人以是加諸已、亦不敢以是加諸人也、朱子謹夫子之稱謂如此、然稱二程為夫子、是倣孔門稱師之例、所以尊有德而宗師之也、後人以夫子之号加人者、往々有之、宜考朱子之言而避其号、不可妄加於非人、

二二、一六

五常配五倫說

貝篤信

五常配五倫、則父子之親仁也、君臣之義義也、朋友之信信也、不知夫婦之別與長幼之序、以何屬礼以何屬智乎、愚曩謂、男女者人之大慾存焉、故夫婦尤易至褻瀆、苟無礼以別之、豈不至于蔽惑乎、夫禽獸無礼、故父子聚麀、內則曰、礼始謹於夫婦、是夫婦之間以礼為重、故可以礼當夫婦之別、夫長幼非一人、故長々幼々者、明弁其等級隆殺、而後可以序之、明弁之者非智乎、且知彼之長與我之幼、尊卑不同、則其序自不可紊、是長幼之間以智為重、故可以智當長幼之序、篤信初年之所見蓋如此、後來及見朱子以夫婦之別屬智之說、而改旧見而知其非、適知分別者屬智、此說有至理而存焉、固可信也、學者須考索而知之、嗚呼稽古之有益于講學也如是、學者之所以貴博覽廣聞也、

二二、一七

海潮說

篤信

海水潮汐之說、先儒各立論不同、或以為地之呼吸、或曰日出則水涸、月出則水復生、又曰、所以応月者從其類也、此等說吾愚未知所適從、竊謂、大地非有肺腸而氣息出入、如人畜之類者、不可有呼吸也、如日出則水涸、月出則水復生之說、最不可曉、何則水之生乎地

中也、其初甚微^{*1}矣、自涓滴之聚合而漸為細流、如泯江之初濫觴、不可歛然而為大水森渺、若夫潮汐之進退、海水半日而進者忽大漲、半日而退者忽大減、其進退增減翹半日之間、而其生涸不可如此其大而速也、且月望天上時、若其下地之潮応之忽生、則誠可為從其類、然月臨中天則潮必平、月出東方則潮生于西海、月入西方則潮漲于東海、其間相距不知幾万里、不可謂從其類也、是以疑而不能歸乎一而已、嘗謂、大率天地之運行變化、有自然之類^{*2}不可以私意窺測、不可以常理推窮、故雖賢者恐不能知所以然、苟欲窮所以然、不免為私意臆度也、然則如此之類、措之度外不論而可也、近觀海潮論曰、大地隨氣出入上下、地下則滄海之水入於江、謂之潮、地上則江河之水歸於滄海、謂之汐、前所述諸儒之說紛々、吾未能決定而適從、只海潮論所說、大地上下之論、覺端的有理、由此說觀之、地勢雖寧靜不動、隨天氣之運行、不能不微^{*3}升降、故每日二次上下而不息、其所以有定限而不大升降者地形本凝定、只隨天運而微^{*4}上下而已矣、是潮汐之所以日日進退也、其一月之中潮汐進退之時、所以日日有遲速而不同者、各有定期而不差、是与天道之運行晝夜一周而不息、皆是天地自然之理、不可測知其所以然也、張子正蒙亦曰、至於一晝夜之盈虛升降、則以海水潮汐驗之為信、此亦以升降言之也、嗚呼海潮進退之理、只此一說、自謂、得所的拋而為可信、且從其說頗述鄙意如右、未知識者以為奈何耶、

*1 東大本、都城本「微」。

*2 東大本、都城本「數」。

*3 東大本、都城本「微」。

*4 東大本、都城本「微」。

五行生克論

篤信

五行之相生、只是言四時之代運、四氣之迭盛、其次序如此而已矣、蓋春木生夏火、夏火生土旺、土旺生秋金、秋金生冬水、又生春木、其相生自如此也、非言五行之形質本始必資之而生也、若言其形質之初生、則須如水火木金土之序也、蓋如木生火、只是言有火而後可以薪相伝也、非言其始自木生火也、蓋水火者陰陽之徵兆、而先金木而生也、非資金木之氣而始生者也、言若鑽木即生火則戛石亦火生、非一生于木而已、如火生土、若言火焚物則忽成灰、々化而後為土、則尚可也、然木之腐朽亦能生土、若言土之始生時、資火而生則不可也、蓋土即地、地之始生也、与天相對而成、混沌之氣輕清者運轉為天、重濁者凝聚而為地矣、然則土豈資火而後成者乎、如土生金、誠是如此、如曰金生水者最無理、水火者陰陽之始生者、如前所言也、天下水多金少、天下幾多之水、豈待微眇之金氣而後生乎、水生者木固有此理、然土能生木、非其初生皆特自水而生木也、且五行之相克亦必不然、如木克土無此理、木資土而生、不可言土克、土克水、此以隄防而言耶、或水中加土而混雜、則水忽汚濁、久而後乾涸、是以謂之土克水耶、然水之生土中、由至陰之氣聚潤而出、猶木之自土而生、然則謂土生水惟可也、蓋土之克水者較小、而水之自土生有常多矣、唯如水克火分明是如此、然火煎熬則水亦耗尽矣、謂之火克水亦可也、如火克金亦固如此、然金以火鍛鍊而成、則金亦有資火而成、不可偏言火克金也、如金克木、固是如此、然火之焚木也尽滅形質、可謂火克木也、夫生克之理、古人之說、固有必然者、復有必然者、只是四時相生之序、而非万物自然之常理、以此為常理、意思是術者之說、附会牽合之論而已、恐非聖賢至当之達論也、

*1 『自娛集』「冬水、冬水又生春木……、東大本、都城本は景図本に同じ。

*2 『自娛集』「水生木者……、東大本は「水生者木^F」とあり「者木」を転倒するよう指示。都城本は「水生木者」。

*3 『自娛集』「克土」。東大本「土克^{F上}」と転倒するよう指示。都城本は修正。

二二・一九

予知死日論

篤信

往昔之名士、如葛稚川陶弘景孫思邈邵康節陸象山之輩、皆予先知死日、釈氏之徒亦往々能如此、本邦緇徒亦有知死日者焉、程子曰、釈氏平生只学此事、学者不必事此、愚謂、苟燭理明者能知死期、則聖賢必能知之、然未聞古聖賢能知死日也、如孔子有^{*1}尊^要於兩楹之間之夢、而知殆将死也、蓋寢疾七日而没、然未言其死期在何時日、此亦不可謂聖人予知死期也、如其余群賢、亦不言死期、是可以為君子不要知死日之証矣、若夫葛稚川陶弘景孫思邈皆是為術士之流、邵陸二子雖俊傑、復未可為純乎聖学、然皆能知其死時者、蓋其平生習靜純一之功、至此增專一無他念慮、故其死期之日時、予有^{*2}非^元朕先入夢而不愆耳、如常人亦明日之事夢寐間先得者多矣、亦不足為怪、若非夢得、則雖有神智、豈特有先見之明能到如此之理乎、是理之所無、不可誣罔也、意者是術者及浮屠誠心修練積久之効、乃念慮所專精神所格也、然則予知死期者皆是異學術者之所独能、非所以聖賢明睿燭理也、又豈可為至誠、可前知之明乎、誠君子之所以不敢也、

- *1 東大本、都城本「奠」。
*2 東大本、都城本「兆」。

二二・二〇

他姓為後說

古昔聖人有作焉、立姓以別其系、嚴宗以正其紀、是以万民有條而不紊、親親而和睦、是亦循天理之自然而矣、以此防民、春秋之時猶有身為諸侯而立異姓、以□祭祀如鄒子之為者、故聖人書曰、莒人滅□、謂以他姓為子滅其宗也、夫他姓者非吾祖先之血脈、□氣類自不同、故不可使彼繼我後而主祖先之祭祀、蓋神不歆非礼、民不祀非族、古人無子者挾五服親族之中而養之為嗣、無養他姓之子弟立其後之礼、吾亦不可承他姓而繼人之後、是以雖初為養子、後知其非而引義而返其宗者亦有之、左伝云、棄同即異、是謂離德、此道理固昭晰、而為万世不易之法、不可有異論也、然而天下之事有常有變、故処之之道有經有權、不可執一而論、古人無子則挾親族之子弟而為後、是常也、今也有不得已而処變之方、蓋天下無男子者亦多矣、苟無同宗之子弟而不以他姓為後、則其家無繼嗣、鰥寡孤独老弱悉至于寒餓、而家門滅絶矣、世間有男子而少財祿、不足多分与之者、恐窮餓無衣食、且無家室之可居、又有無男子而多財祿者、恐至家門滅絶、而親屬失其所、然則以子多補無子、以財有余助財不足、是亦仁君之養民、救窮平政為治之方也、恐是可為処變之道矣、古人有家貧子衆則出而贅之言、家礼服制亦有為人後者之法、是不得已之事、苟固執古法、不達時宜、則恐天下多窮民、飢餓而不得其処者不寡矣、是豈聖人養民之道乎、且姓氏之乱也久矣、古來改姓易氏者、又幾變乎、自千歲之後、欲正千歲之前、亦甚難哉、只自今而往、不得已而

有為他姓之後者、須隨養父之氏用本宗之姓、改氏而不改姓則可矣、何也姓者本也、經也、至万世不可變易矣、氏者末也、緯也、隨時宜而雖改移亦可也、自古以其居処官職封号為氏者多矣、不□殫記、□古人雖□為人後、兄弟異氏者亦往々有□、如本邦新田与脇屋、三浦与左原之属是也、然則変氏猶可也、至変姓則乱其族、是背本忘祖之人、不可長也、世俗無子者有本族之子弟而不為後、反養他姓之子弟為後、是不知之甚者、不足論而已矣、孟子曰、不孝有三、無後為大、故娶妻無子者宜買妾広嗣、雖養本族之子而為後、然其人復悖逆不德則有敗家亡族而不如無子者、今也養他姓之子弟為後者、不幸之至、不得已而処變之道也、凡守礼雖貴於方正、又以順時宜為美、故流于世俗而失礼義者固非、而拘乎古法而不知時宜者亦不是矣、所謂生乎今之世、反古之道、如此者、裁必及其身者也、管見如是、未知是也否、姑記之以待君子之是正而已矣、

- *1 『自娛集』、東大本、都城本「而已矣」。
*2 『自娛集』「世間有多男子而少財祿、不足分与之者」。東大本、都城本は「多」を「有」の下に引き上げるよう指示。
*3 『自娛集』「広嗣、復雖養本族之子而為後、然其人悖逆」。東大本、都城本「復」を引き上げるよう指示。

二二・二一

楠公教子図贊

篤信

勒^{*1(勅)}王之志、千歲有光、還子遺訓、百世流芳、

- *1 東大本、都城本「勅」。

二二・二二

自賛画像

篤信

樸陋之質、衰朽之軀、引鏡窺影、彷彿画図、玩古不倦、至老増娛、千慮有得、斯語庶乎、

二二・二三

答問書序

本多忠統伊予守勢州神戶城主

子遷所校徂来先生答問書成、子遷蓋謂、經生家專修心為教、浮屠氏何別、人皆曰、天下国家、惟聖人生知不可尚已、自非聖人則何以哉、礼樂刑政、以至百尔所具、六經所載、窮年不可尽、若以修心足矣、則曇摩氏可*1〔矣〕、必読書然後行道、世之耳學者、亦復經生家是守、即稍々取古經視之、皆□經生家附以為說者、乃謂聖人之道、六藝之奥、亦惟如此、而後邈与古違矣、則亦不知聖人之道雖百世無不可行□、即以□□私慕□□□者、亦不得窺之、則猶尚以□□經〔生觀之〕□□、見以為迂事情、子遷蓋憂之也、余語子遷曰、伝焉哉、登高必自卑、此書雖以国字行、豈不裨益後世哉、且夫非入其門、不可觀室家之美、雖先生之門牆大高哉、如我与吾子、亦皆得与聞其說、而如先生他所著、亦未可遽以暗投人、則此書庶乎為先容*3〔焉〕乎、以余忝在邦君之末、不得延後生而一論之、乃序其端、以善子遷之舉、且以言志之同、乙巳之春、西台滕忠統撰、

*1 版本、東大本、都城本「可矣、何必読書」。今補う。

*2 版本「世之學者」。東大本、都城本は県図本に同じ。

*3 版本「容焉哉」。東大本は「焉」を頭書。都城本は県図本に同じ。

二二・二四

読朱子書弁

篤信

朱子輔翼六經發明義理、其惠後生之功大矣、可謂繼往聖開来学而其功不在乎孟子之下也、後世之學者知經義者皆朱子之功也、然則後学之於朱子也、有罔極之恩、豈可辜負其恩而遺忘之乎、宜乎先儒之宗師之而服從其教也、吾輩不逮之質、雖不能窺其藩籬、然心窃嚮往之、故於其遺書也、尊之如神明、信之如著龜、然而聖豈易得哉、孔子之後雖有顏曾思孟周程諸大賢之繼作、猶未能入聖域、然則如朱子固雖振古豪傑学行大備、未可以為聖人、古人有謂、人非聖人誰無過、信此言朱子之明哲、雖則後学之非所可輕議、其所言不可為全無過誤、且其所註釈編述、何翅數十萬言而已哉、然則其中恐不能無偶然之失者亦固当然之事也、故後学之於朱子也、尊信而不阿諛、是可謂得公正而無私也、

*1 東大本は「功」を見せ消ちにして「力」と頭書。都城本は「力」と修正。

*2 『自娛集』「信此言則朱子之明哲、雖後学之」。東大本は「則」を引き上げるよう指示。

二二・二五

舜水先生画像賛

大学頭藤原信篤

節因危見道困亨居危之節処困之道、自古至今固難矣哉、常人□較利〔計〕害枉志矯情有所折而不守其操也、志士唯植綱常不論得喪、仁之所在殺身成之、義之所在捨生取□、大明□□舜水朱徵君、通習經伝、發明旨趣、辭謝官□、高尚□□、生衰弊之世、遇艱險之時、切齒清

兵、竭誠魯王、飄軫安南、耿介不屈、寄寓日本韜晦有待不以存亡、而不改其志也、困封之象曰致命遂志、蓋其所庶幾者乎、因題肖像云、
龜山雲氣降豪英、時世屯難義志亨、皇運何當開寶曆、虜塵不敢汗冠纓、魯連憤恥踏東海、枋得精忠事北行、異境術空人亦去、汗青長照寸丹誠、

*1 東大本、都城本「卦」。

二二、二六

題普賢画像

朱舜水 下同

我欲言其妙、我與尔不同調、我欲言其非、尔之徒莫能知其微、
我欲言其無、丹青業已繪此圖、我欲言其有、荒唐迷謬之談、學士大夫安敢出諸口、尔之号自謂普賢、何如我堯舜之道可法而可傳、

*1 東大本、都城本「微」。

二二、二七

題安積覺逐日功課自実簿

學者用功、須是漸進而已、日計則不足、歲計則有余、若一暴十寒、進銳退速、皆非學也、子夏曰、日知其所亡、月無忘其所能、是亦可乎、騏驥一日千里、駑馬十駕則亦及之、儼自矜捷而弗馳弗驅、則駑馬先之矣、今為尔嚴立課程、自非疾病及不得已禮際忘酬之外、須逐日登記、朔望則溫習前書、必令成誦、若其中無故曠廢、亦□朔望之次日、稽考答責、名曰逐日功課自実簿、□□送簿□注、毋違母怠、

二二、二八

与小宅生順

頃聞价者走逸、今有消息否、蚤間曾有他物携持否、或者失物、懼而潛躲、恐尚未是脫逃、或者小僮為不良者所誘、過時不歸、懼而趨、尚當於平昔往還之家、細々搜索為是、特此走問、不一、

二二、二九

墓祭議

本月初四日、儒臣板垣矩、臣中村顧言、恭承明命到瑜寓所、問古昔有無寒食墓祭并祀土神之礼、之瑜謹對諸候之礼、久已無傳、惟古者卿大夫支子庶子、望墓而祭、礼則有之、近來卿大夫士庶、無有不墓祭者、謂之祭掃、及祀土地、輕重三等、分別詳陳、量已上聞、今按、唐玄宗開元勅曰、寒食上墓、礼經無文、近代相沿、寢已成俗、宜許上墓同拜掃礼、歐陽永叔則謂唐許士庶之家行之、而人君無此礼也、又考五代會要云、人君奉先之道、無寒食野祭、後唐莊宗、每年寒食出祭、謂之破散、故襲而行、之瑜謂、二說皆非也、過家上冢、漢晉宋齊皆有之、唐晉史官、循行數墨、拘牽文義不足深責、獨惜歐陽文忠一代儒宗、立朝日久、乃亦輕為此義、夫天子有陵、或亦有園、々陵皆有寢、新葬者有宮人、有宦官守陵、朝夕上食、朔望特設、謂之月祭、時物薦新如獻冰薦含桃嘗麦之類、与廟寢等、記曰、先薦廟、是也、久者朔望有祭、更久者四時及歲墓有祭、其祭品節、俱殺於宗廟、但以守陵官員及太祝行事、非特祭奉告奉慰、不別差官、如此何佞於暮祭、然天子有謁陵之礼、謁陵非上暮乎、陵園有寢、不可謂之野祭、至於後唐莊宗亦□有說、其曾祖為朱邪執宜、葬於沙陀、其大父及父曰李国昌李克用、葬於太原、雖有七

廟、亦在晉陽莊宗倉卒遷都於雒、無廟無陵、萃渙合漠、於何展敬、感時興思、于野望祭、亦人子之情、何可深加議議、故曰、二說皆不得其要領也、天子諸候、^{*6}降損以兩、^{*7}諸候墳塋有寢、有寢必有祭、自可類推、之瑜寡昧無似、區々所見若此、并祀土神者、為五等之凶奉復、惟祈上公酌議而行之、

- *1 東大本、都城本「問」。
- *2 東大本、都城本「候」。
- *3 東大本、都城本「士」。
- *4 東大本、都城本「義」。
- *5 東大本、都城本「暮」。
- *6 東大本、都城本「候」。
- *7 東大本、都城本「候」。

二二、三〇

与諸孫男書

我離家三十三年、汝輩之生也、尚不得知、況能育養成長、汝父教授餬口、前箸里堰楊姓者來云、我孫甚多、食指繁則家道益致難艱^{*1}矣、然汝曾祖清風兩袖、所遺者四海空囊、我自幼食貧、蠶鹽疎布、年二十歲、遭逢七載饑荒、養贍一家數十口、無有不得其所者、汝伯祖官至開封、今日罷職、不及一兩月、家無余人、宗戚過我門者、必指以示人曰、此清官家以為嗤笑、非讚美之也、豈但我今日獨薄於汝輩、勿怨可也、我今年七十八歲、衰憊不可勝言、思欲得一子孫朝夕侍奉、汝父雖無恙、年將六十、不可遠行、且又一家資以為生者、汝兄弟中、挾一性行和順拳止端謹者來、有才者不可來、留以力養父

母、主持家門、年十五六歲以上即可、汝輩既貧窘、能閉戶讀書為上、農圃漁樵、孝養二親亦上也、百工技藝自食其力者次之、万不得已、傭工度日又次之、惟有虜官不可為耳、古人版築魚鹽、不虧志節、況彼在安平無事之時耶、髮黃齒豁、手足胼胝、來亦無妨、漢王章為京兆尹、見其子面貌蠹惡毛髮焦枯、對僚屬、便黯然削声、我則不然也、為貧而仕、抱閔擊柝、亦不足羞、惟有治民管兵之官必不可為、既為虜官者必不可來、既為虜官、雖眉宇英發氣度嫺雅、我亦不以為孫、凡事但稟命十七叔公、同汝外祖而行、亦須各討一親筆書以為驗、勿謂我無書遂不答也、十七叔公及汝外祖姚親翁、皆盛德君子、敦重溫和、理當有壽、十七叔婆無恙為慰、為汝姑娘、數年痛傷、哭泣不已、恐或因此致疾不可知、十七叔公今年七十四、汝外祖与我同年生、若得回籍、叙述興亡、足為一樂、未知有此日否、祖宗墳墓託汝、亦力不能及、來時須往汝姑娘殯前辭行、直言所往、汝姑娘性至孝、且魂氣無所不之、或自隨來也、十七叔公書、略則不可、詳則恐為渠家累、故不為也、即以此書送看、汝來時須得二人跟來、我家旧僕、老者凋零、壯者星散、阿鐘、大招、小招、雖最小亦將六十、隨行亦自無用、且亦不知在否、聞汝表姑哭汝姑娘、每祭必致哀慟、數歲何能如此、今適誰氏、伯祖尚存否、汝從伯幾人平安、往年呼汝二伯、此書曾到否、今來亦不能見矣、姚親翁家不待訪問、自然知悉、馬渚陳四太叔婆尚健否、惟庶出一子今如何、西門南城下鄒元美一家、此我自幼同窓、其東隣斗東叔公、元美長我一歲、斗東少吾一歲、亦同窓、俱無恙否、東門成我葉年伯諱大受者、其家無恙否、大約住黃山橋園中三畝田頭、恕銘先生諱錦者、其家無恙否、其余欲問者頗多、但汝來不宜昭彰、止問此數家最相切者而已、外閣部陳木叔老師、諱函輝、原名煒、台州臨海人、乃我本房座師、与我

相契、今有子孫否、子孫何如、住寧海亦不可知、礼部尚書吳纘釋老師、諱鐘轡、常州武進人、此我恩貢座師也、我貢筭為開來国第一、乃吳老師筆也、今其子孫何如、吏部侍郎朱（開）遠老師、諱永佑、松江華亭人、其子望侯今何如、我欲携其幼子某官來、老師見識不明而止、留得一人斯幸已、已上三家、汝不能親往、須汝兄弟一人特去、或不能及待汝行後、問得的確、寄書亦可、常州五六日程、台州三日、若至松江、順便問閣部張鯢淵家何如、鯢老諱肯堂、松江華亭人、欲与我相親、我三次拒絕之、是以与我極不相好、然其臨死一節可取、不料其能決烈至此、其子張至大無恙否、住松江東門外張塔橋北、胡鐘有家何如、令尊号慰余尚健否、住寿星橋下塘（即張塔橋東）、四月二十一日書、此書本与汝父元楷（字是士則否、今忘之已）、旧年有一盧姓者、来云已物故、我雖不信、然五十七歲人、死亦常事、故寄与汝輩耳、

*1 東大本、都城本「艱難」。

二二・三一

三槐堂銘

東坡

*1（待）

世之論天者、皆不得其定而求之、故以天為茫々、善者以怠、惡者以肆、盜跖之寿、孔顔之厄、此皆天之未定者也、松柏生於山林、其始也、*2困於蓬蒿於牛羊、厄而其終也、貫四時、閱千歲而不改者其天定也、善惡之報至于子孫、則其定也久矣、吾以所見所聞考之、其可必也審矣、

*2 『正文章軌範』「困蓬蒿、厄於牛羊、而其終也、……」。東大本、都城本
本は「厄」を引き上げるよう指示。

*1 東大本、都城本「待」。

〔義〕
□彙編

答遊佐氏書	鳩巢先生
答青地氏書	
答屈景山書	物徂來
鳩巢文集後編序	植木金
答和田氏書	
惟明字說	河靜齋
唔咿堂記	雨芳洲
送春庵序	
題登竜墨跡後	浙水沈樊庵
又	江天錫
答牧野先生書	鳩巢先生
祭堀江夫人文	植木金
君祥名字說	河靜齋
莊子論	雨芳洲
適齋記	
義犬記	鳩巢先生
西村正陽字說	河靜齋
徂來墓誌銘	大寄純 ^{〔義〕}
孟子論	
国分新府記	釈文之
修蓮金院記	

二三・〇一

答遊佐次郎左衛門書 鳩巢先生

直清再拜、去歲以來前後所賜、有未竟其議者、又有命不復者、属公事^{*2}困、仍皆闕然不報、足下無以見其發問之端緒、則雖欲見教亦不能也、今撰其可先報者、以請教於左右、惟足下察之、直清嘗謂、人患不遇明師良友而已、幸遇其人矣、宜吐露情實、自無所隱、以急於求益、故初通問後、奉書自叙其為學始終、而足下不厭棄之、乃辱復書、所以慰藉而獎誘之者甚至、且諭以師友淵源之所自并評論當世之人物、欲使固陋之愚知所取舍、而不迷於所趨、又使直清試言其心之所存、將以復見教也、顧足下之□亦厚矣、足下之賜亦大矣、直清當以何報、窃^{〔義〕}足下之書、知其蚤歲好學之篤与求師友之急、此皆古人之遺美、君子之素行、使他人能之、將反復嗟嘆之不暇、而於足下得之不足称也、至其所^{*3}曆^{〔義〕}、舉數子者、世之所推以為儒宗也、其學行之高下、造詣之深淺、直清亦嘗窃聞而知之矣、不知此數子者於古人若是班乎、其於道孰得、孰失、此有志於格物之學者所当弁也、直清聞、君子取師之道亦多端矣、有以道德師之者、所謂人師是也、有以術業師之者、所謂經師是也、其余有一事之師、有一行之師、雖其所得有淺深□□、□謂之非師則不可也、今足下所言始從操軒与惕齊而遊其所得者未深、及其後得山崎氏師之、遂能断然而有信以為終身之歸、然不知足下於山崎氏所以師之者、道德耶、術業耶、觀其所以褒揚之實、亦不過謂講論經典脩緝簡編、則是術業而已、遂以此推尊之至、以為朱子之後一人而已、則其視朱子何如哉、聖人之學以明明德為体、新民為用、止於至善、為体用之極、而博文約礼、為進脩之法、若朱子博文約礼、兩極其至者也、故其克而為德行也、睟面盎

背、周旋中礼、其發而為事業也、政脩事舉所至嚮風、考之行狀則可見矣、及其晚年義精而仁熟、德盛而礼恭、声名溢於四海、施及蜚貌、豈殆入聖域者歟、其注六經皆以其行而得於心者施之文字、以附於經、雖名為傳註之書、其實與聖經並以与日月争光者也、朱子之□以為朱子者如此、則近世之諸儒雖稍有以文字樹立者、豈足以望其藩牆哉、朱子之後、宋有西山真子、元有魯齋許子、明有敬軒薛子、其言論風旨比之朱子、雖有慙德、亦非近世之諸儒所能企及也、今皆蔑視西山以下、独推山崎氏而上之、欲使以繼紫陽之統、得非尊山崎氏而卑紫陽乎、昔杜預之註左傳、顏師古之註漢書、皆能使丘明孟堅之旨明於後世後儒乃推其功、以為二子之忠臣、未聞有以杜顏為二子之後一人而已、今足下所称山崎氏數事、亦要皆有功於朱子云尔、視夫注易四書傳詩修礼編小学近思錄等事、亦殆蚩蠟之於大陽、涓流之於河海也、而謂之朱子之後一人而已可乎、此足下尊師之盛意、不自知其言之過美也、豈君子之過常失於厚者耶、然道者公天下者也、師者所以求道也、故君子之於師也、雖愛且尊之、亦不至於阿其所好、若以一二有相近似、遂以其小者信其大者、強比之古之大賢以為快焉、則非直清之所知也、若山崎氏逃仙而帰儒、尊朱氏而黜百家、嚴師道而誘後世、其有裨於斯道、有不可誣者、亦近世豪傑之士也、足下選於諸儒而師之、亦宜哉、然聞、山崎氏自處太高、待人太嚴、少含弘之度、不容人過失、其授受之間無能平心、虛懷從容委曲以尽彼我之情、此其所短也、足下所謂聖賢之氣象者、□恐不如□、詩曰、温々恭人維德之基、山崎氏□不之思耶、至其晚節好神道、使人失望、為之嗟嘆不能已、但此事其說長、當俟他日論之耳、操軒惕齋二子、雖未知其為人之詳、然足下親見而知之、以為君子之儒、其或然乎、然惕齋隱居惡接人、有來執贄者、固辞不見、彼欲求志独善故如此、亦

一道也、然明^{*(6期)}來者君子之所樂、麗沢之益、相觀之善、自古有志於學者皆急之、今偏於絕物距人、而以遁思自遂、則是得罪於大中正之教、而不自知也、去歲見足下粗開言端、足下言其人好為謙遜、不欲以師自居、故有來見者辞、當時以始受命、不敢復請、其不以師自居可也、独不得相友耶、若謂避好為人師之嫌、云尔則是無師人之德者、必絕友乃可耶、此直清之所以不免疑也、至於谷氏二山氏、雖未見其人、耳聞之熱、蓋亦操軒惕齋之亜也、足下以為篤行君子者得之、此四子者知所自守随分有為其志行之美固有足尚、然朱子有曰、顏子非衰善之人、李延平亦曰、學者之病在於未有灑然冰解凍积処、雖有力持守、不過苟免顯然悔尤而已、若此者恐未足道也、自世衰道微、其有志而自守者、非狷介之士、則衰善之人若其僅々怯惡避咎、不失為一世好人、則有之未能大胆勇往而進於高明広大之域、其負重取遠也、可冀乎、此皆李延平所謂不足道者也、伊藤仁斎駁經書而非程朱、則我徒之倒戈者亦異端也、其他以博識著述鳴於京師及東都者、則所謂記誦詞章之學皆俗儒也、此二者固不足論、而独於前數子猶不免云云者、亦責備賢者之意也、嗚呼直清何人乃敢以晚進小器、舉一世之耆儒、而是非之、固知僭踰之罪無所逃、又恐區々之見決不為高明所許也、然足下見論云、觀近代人物如何、今已奉命乃曲徇^レ苟合^レ自諛以同則所不敢也、君子不道人過、先輩不可輕議、此士之常行所當慎守、至其與師友評論人物賢否、則有不然者、必當達其詞理尽其軒輊、曲直各極其趣乃已、不然則無以為講學之益質疑之地、故肆其狂率之言、略不辭讓、願足下矜其愚而教之、若直清、幼方事記問之學、未嘗遊於諸賢之門、既長奔走官途、服職役之勞、則無復接於當世之士、固陋寡聞甚為可醜、足下不知其然、以取友之多少為問、既不能有所称引以塞厚意、則逡巡不自安、徒增慙懼耳、來論又

謂、近世以来典籍流布文学日盛、乃千載一時、學者之大幸也、此恐不然、書雖多、皆俗書也、學雖盛、皆俗學也、近世書多而學盛者實學者之不幸也、嘗考書有印本流行於世久矣、然宋元之間俗尚朴實、儒者多謹厚不妄著書、不得已而後有所著、其書非有理義可觀、則有事實可考、故宋元之儒著述雖寡、然其立言有源委、自不可少、及明中葉、猶然、自王氏之學興儒風大變、談經者競新義、論學者誇空言、苟競新義誇空言、其於義理何所底止、人以所見立言、家以所傳著書、降及万曆崇禎之間、四海氣祲、盜賊公行、於是儒者退而買田宅蓄圖書以為樂生之計、日以逸居多暇、則專以著書纂言為事、若王鳳洲陳眉公之徒其尤也、率以浮靡無實之言、駕新奇可悅之說、欲以銜世駭俗釣名要譽以謀不朽之業、其最輕薄者又欲以己名託古人之書、則妄自改作更為新製、使夫先賢之遺書無復見全編、可勝嘆哉、於是簡帙漫漶紛紜委積、以至於清其弊未息也、近年商舶載至本邦者不知其幾數、而世儒好說之、乃強記駁難之說、多識猥瑣之事、由是得博聞之名為世所尚、自羅山林氏首、以此名家而世之學者翕然鄉慕邇相師祖不復知有理義之學聖賢之事業、故書愈多而文愈弊、學愈盛而道愈衰、此吾儒之蠹賊、其害十倍異端矣、若有王者起、必聚海內之籍、悉取其叢雜無用之書而火之、然後詔天下之學者、專務體察踐行、不事空言、抑虛文剝浮華、正人心距邪說、如是數年、則天下靡然復歸於正矣、足下又以經學不達於王公大人為恨、此固是也、然經學不自達、必有之達者、^{*10}今王公大人所以待儒臣備顧問者、不過前所云者、而儒臣所以奉公供職者亦以此視其投上所好僥倖求容、言行去就之間不見可畏可信、雖武人俗吏、亦易而侮之、況王公大人乎、夫王公大人不下士久矣、是固為好勝自用者、而聖賢之言多触忌諱、今便自用之人就所侮之人而聽所忌之言、宜其忽焉不經於心也、

欲經學之行、其可得乎、窃謂、儒者寧為主之所忌、無為主之所侮、則其所得多矣、夫惟不侮、然後能信者至、能信者至、則吾學可漸達於上矣、然達與不達命也、侮與不侮我所自為也、顧其立志高卑何如耳、故曰、人必自侮然後人侮之、然則非人主之侮儒者、儒者之自侮也、來書有云、苟祿以肥妻子、意氣揚揚誇於閭里者、不待識者而後醜之、此古人所常言、直清所嘗聞而今世絕無為此等語者、惟足下實有此心、故能言之、其所以自立於國者亦可知已、苟使世儒皆如足下之言激昂自進、則身不卑而道尊矣、安有受侮之患哉、此皆世所厭聞、未嘗遽以語人自取怨咎、願足下勿以示他人、儻有与足下同志者、亦無隱焉、此難以一途論也、想足下有以處之、直清頓首再拜、

*1 『鳩巢文集』は「有有命不復者」とある。東大本、頭書で「有」を追加。

*2 東大本、都城本「因」。

*3 東大本、都城本「歷」。

*4 東大本、都城本「齊」。

*5 『鳩巢文集』「而已也」。東大本、都城本は「而已也」。

*6 東大本、都城本「朋」。

*7 東大本「於於」とし、上の「於」を見せ消ちとする。

*8 東大本、都城本「齋」。

*9 東大本、都城本「氛」。

*10 東大本、都城本は「氛」。

二三・〇二

答青地貞叔論封事別幅 前賢

所示封事、援古論今、皆得事情、但每条引朱文公封事之文、似過

多、又有与後之断案不応者、此特挙其要而節去之可也、至於輔翼世子一事最為要務、若夫薄賦斂以制民產設學校以成人材、雖不可棄此而為治、然今時之弊、在土木之功、不息驕奢之風日競、欲不傷財害民亦不可得、宜務崇儉素抑^{*1}葉^{*2}侈、然後賦^{*3}斂^{*4}可得而薄、教化可得而施、所謂衣食足而知礼節者事、莫急焉、而封事中不及此何也、論其學術一条、不甚明切、今欲為人主論學、当以大學之道立言、拋程朱之言為信、庶幾人主一觀之、亦瞭然矣、今徒歷舉世儒、而論其學之同異、亦何所開益、其所舉数子、皆鄙猥偏曲之儒、其學与德本足無^{*4}称者、諺曰、国無鳥也、蝙蝠其禽、此之謂也、南學之号、未聞世有以此称焉、近有大高清介者其學、祖小倉野中、乃為其師弟、立伝以南學号之、此等人与事、豈足為人主道哉、大抵人臣建言之法、務^{*4}惡^{*5}簡約、根著大体、若明理之文雖長、何傷、至於不急之弁無用之談、不容一句冗長以煩上聽、此可謂善於章疏者也、山根敬心亦錄所見在此、粗如僕意、今併封寄、惟足下察之、

*1 東大本、都城本「華」。

*2 東大本、都城本「斂」。

*3 東大本、「論」を頭書して「也」と「其」の間に入れるよう指示する。

景図本もこれにならうが、『鳩巢文集』は「其論學術一条……」。

*4 東大本、「無」を頭書して「本」と「足」の間に入れるよう指示。

景図本は、位置を誤る。『鳩巢文集』は「無足称者」。

*5 東大本、都城本「要」。

二三・〇三

答屈景山書

物徂徠

東都物茂卿、謹復書西京屈君足下、七月中元日、李陰菅君、致足下所賜書、拆封読之、具言欲一造艸廬相見、而藩法嚴不能者^{*1}將^{*2}、縷々幾乎千有余言、其降挹之恭、傾倒之懇、優渥特至、誦其辭、則雄渾雅健、不乏采綰、不覺令人起敬嘆喟弗已、余不佞髫年時、聞之先大夫、昔洛有惺窩先生者焉、其高第弟子、若羅山活所諸公者五人、名聞海内、皆務以弁博相高、而屈先生者、獨為温厚長者、乃詘然於四人之間、退讓自將、不求名高、其來東都、先大夫亦嘗一二接見云、夫儒者^{*3}斷々、自古為然、而乃能尔者、千百人中一人耳、安得從其徒若子孫戚屬、以聞其行誼之詳耶、藏諸中心、時々憶之弗忘、及乎菅童子西游也、聞足下周旋甚勤、李陰君喜以見諗、且言足下亦有意於不佞^{*4}「焉」、固扣之、以識其為屈先生之裔、則予不佞亦喜甚、及聞足下從^{*5}五馬東下也、懸榻以俟者久之、詎意竟外之交、足下不得斯須以請乎、是日乃得接尺一、愈益信遺範之弗泯、而幸素願之有愜哉、書中又言文章好尚之異、而欲聞不佞之一言、乃以無爭心見告、亦何詳悉顧慮之至于此也、夫人心如面、好尚各殊、雖然、徒自信而不問、將何以知其未知、而広己之見乎、故學之道、問為大焉、問者弟子之事也、發難相切磋者、朋友之事也、故非有師友之素、而輒相問難者、爭之道也、臣諫君、子諍父者、榮辱休戚之相関也、故非有君臣之義、父子之親、其心如秦越人相視肥瘠、而諫其不見者、亦爭之道也、爭者、訟之事也、訟者、陳己之是於不信己者之前、以求其信己者也、吁亦難矣哉、雖然、有官^{*6}監^{*7}之、庶乎足以斷已、今學問而用訟者之道、乃無聖人之^{*8}監^{*9}上、將孰聽而孰斷之乎、若或欲以天下之所同是而斷之邪、則播諸衆而欲訟己之是、欲訟己之

是、則暴人之非、亦不情之甚也、況獨得之見、有衆所不及知者乎、夫學問者、君子之事也、君子無所爭、爭斯害乎德、問者、弟子之事也、秉弟子之禮、而用訟者之閱、閱斯害乎禮、害乎德與札者、君子不由也、自孟子好弁、鬬楊墨、雖其時之不得已乎、亦非古之道也、不佞竊^{*7(德)}焉、尔後稷下市學、田也^{*8(德)}、一日服千人、流風所扇、是非蠡涌、紛呶乎百世、悲哉、若彼浮屠有勘弁、則亦聽訟者之道也、儒之黠者、陰操其術、以窺人而自喜、乃名教之罪人也、不佞懲其若是、凡每值非有師友之素、而來相問難者、一切不置對、是不佞之常也、不佞往歲作護園隨筆、其時識見未定、爭心未消、然隨筆之作、自書以自翫、聊以消閒、初非以示人也、独奈謾墮剗之手、遂公諸海內、々々諸君子、因謂不佞好弁者、非不佞之心也、今觀來喻、亦在不置對之例、雖然、足下既以無爭心見告、而君家先生、乃不佞自髫年時、私心所嚮往、則何必怱然乎、亦唯人心如面、不佞豈能喻諸足下哉、但言不佞取李王之故、以酬來意、如其取舍、乃在足下、唯足下扞之、夫六經辭也、而法具在焉、孔^{*10(德)}問而後先秦西漢諸公、皆以此其選也、降至六朝、辭弊而法病、韓柳二公倡古文、一取法於古、其^{*9(德)}細辭、矯六朝之習也、然非文章之道本然、故二公亦有時乎修辭、如韓進學解、毛穎傳、諸碑銘、柳天對、段太尉逸事、永州諸記、何其絢爛乎乃尔、宋歐蘇、學韓柳者也、但不求諸古、而求韓柳、所以衰也、其文以理勝、不必法而其細辭者自若、夫文以道意、豈患無理、西漢以上深矣、俾人思而得之、宋人乃欲瞭然乎目下、是以淺矣、蹊逕皆露、其所長議論耳、縱橫馳騁、肆心所之、故惡法之束也、況辭乎、細辭、故不能叙事、夫明^{*11(德)}是務、欲瞭然乎目下者、注疏之文非邪、是以末流之弊、語錄不啻也、明李王二公、倡古文辭、亦取法於古、其謂之古文辭者、尚辭也、主

叙事、不喜議論、亦矯宋弊也、夫後世文章之士、能卓然法古者、^{*12(德)}「唯」韓柳李王四公、故不佞嘗作為四大家集、以誨門人、而其尤推李王者、尚辭也、雖然、不佞所以推二公者、不特此耳、夫學問之道本古焉、六經論語左國史漢、古書也、人孰不誦、然人苦其難通、古今言之殊也、故必須佗注以通之、猶之佞倭訓以誦華文邪、尚隔一層髣髴已矣、且佗注之作、出於後世、古今言之殊、彼亦猶我也、彼且以理求諸心、而不求諸事與辭、故其紕謬、不可勝道、且如明德異端、其解豈不美乎、然至於詩左佗家語、有不合者焉、里仁者、居仁也、主皮、非貫革也、何有於我哉、謂謙辭也者、其說至^{*13(德)}於康衢之謠而窮焉、君子人與、君子人也、作問答解、亦至於戴記而悖焉、夷狄之有君、素以為^{*14(德)}絢分、皆枉辭以從己之見焉、凡如此類、更僕何聲、不佞從幼守宋儒佗注、崇奉有年、積習所錮、亦不自覺其非矣、藉天之寵靈、暨中年、得二公之業以誦之、其初亦若難入焉、蓋二公之文、資諸古辭故不熟古書者、不能以誦之、古書之辭、佗注不能解者、二公彙諸行文之際渙如也、不復須訓詁、蓋古文辭之學、豈徒誦已邪、亦必求出諸其手指焉、能出諸其手指、而古書猶吾之口自出焉、夫然後直與古人相揖於一堂上、不用紹介焉、豈如鄉者徘徊乎門牆之外、仰人鼻息以進退者邪、豈不愉快哉、且二公之文主叙事、而于鱗則援古辭以証今事、故不諳明事制者、雖熟古書、亦不能誦焉、夫六經皆事也、皆辭也、苟嫻辭與事、古今其如詠諸掌乎、於是回首以誦後世之書、万卷雖夥乎、如破竹然、辟諸良工、必先攻堅木焉、吾之刁試諸盤根錯節、而其余脆材柔木易々耳、世人乃扞其易者誦之、習以為常、古書則束之高閣、辟諸古鼎彝之可貴重、而不可狎用也、仁齋之言、豈不然乎、夫學者載籍極博、然其出於宋以後者、十八九、故愈誦愈憚古書之難、習之罪也、其謂典謨論語為易誦者、

乃緣自幼習誦傳注之久，是以覺其易耳，段使無傳注而驟視之，豈易乎，如二公之業，俾不習者驟讀之，亦心假訓詁，粗通其指，其以謂故為難誦者，不亦宜乎，宋儒傳注，唯求理於其心以言之，夫理者無定準者也，聖人之心，不可得而測矣，唯聖識聖，宋儒之所為，豈不倨乎，不佞則不敢，夫道則高矣美矣，譎劣之資，不可企及，故卑々焉求諸事與辭，其心謂儒者之業，唯守古聖人之書，以詔後世，其斯可也，後賢之說，雖高妙乎，其於事辭有不合也，何以知其於聖人之心與道必合哉，君子於其所不知，蓋闕如焉，且聖人之教，被諸天下，天下之人，愚與不肖亦夥哉，故卑々焉者，何必整於聖人之指，是不佞之心也，如陽明仁齋，亦排宋儒者也，然唯以其心言之，而不知求諸辭與事，亦宋人之類耳，故不佞不取焉，李王二公沒世用其力於文章之業，而不遑及經術，然不佞藉其學，以得窺經術之一班焉，是不佞所以俾從游之士，學二公之業者，亦以其所驗於己者，教之也，豈有它意乎，足下既以文章見怪，不佞乃旁引經術以復之，是足下之怪且尤我者，將愈益甚已，亦唯人心如面，各陳所見耳，初未嘗与足下爭，亦豈必求俾足下信邪，且古言簡而文，今言質而冗，雅言之於俚言也，華言之於倭言也，亦猶如是歟，夫華言之可詠者意耳，意之可信者理耳，其文采燦然者，不可得而詠矣，故宋文之与俚言倭言，其冗長脆弱之相肖，亦必從事古文辭，而後可*16 倭人之疾，是來喻所云，適与不佞意同也，來喻又以二公為淺易，亦唯人心如面，非不佞所知也，不佞以為深，足下以為淺，其足下之以為深者，不佞則謂淺，豈不冰炭之相反乎，亦習異耳，來喻又似謂文不必學者，孔子固曰，有德者有言，然又曰，言以足志，文以足言，修辭尚辭，於*17 傳有之，文學之科，其謂之何，故拳一而廢百，孟子所惡，然非必足下之言焉，世稱道學先生者，多藉此文其陋，*18 〔足下〕過取耳，來喻

又以模擬剽竊病二公，以自古*18 〔今〕自今立論，是乃當二公之時，妒忌者之言也，非足下之言也，明以經義策士，必以朱注，非此則不得第進士，其文必以八股，非此則亦不得第進士，是時王之制也，以時王之制，故謂之今文，非專指韓歐也，韓歐亦自称古文，其謂之今文者，自我言之也，足下何不深考乎，夫士之生其世，非此則不能出行其道策功，立名以顯其父母，雖無千秋之志，是亦可恕已，二公之倡古文辭，皆在第進士之後，而二公之与，從游過於時師，所以來時師之妒也，然二公不能勝朝廷之功令，亦不能勝人人功名之心，故人之非笑之，猶如韓公，而二公不顧人非笑，寧不見知於世，藉此得禍，而俟千歲之鐘期者，亦猶如韓公，是其心獨何邪，學問之道，本諸古也，夫立志如此，豈模擬剽竊是為乎，以此觀之，非妒口而何，且學之道，倣倣為本，故孟子曰，服堯之服，誦堯之言，行堯之行，是堯而已矣，而不問其心与德何如者，學之道為尔，礼樂之教，左則左，右則右，宮則宮，商則商，必如其師，而不敢違以分，故孔子拱尚右，則門人亦拱尚右，孔子謂之嗜學，可以見已，習書者，必摸蘭亭黃庭，豈求為贗乎，學之道為尔，謂吾既得其心，吾既得其理，不必抱*20 其似不似者，莊禪之遺也，故方始學也，謂之剽竊模擬，亦可耳，久而化之，習慣如天性，雖自外來，与我為一，故子思曰，合内外之道也，故病模擬者，不知學之道者也，況吾邦之學華文，段使學韓歐，非模擬而何，其必惡模擬乎，国字之文可耳，且此方之儒，不与國家之政，終身不遷官，如贅旒然，豈有立功策名，顯其父母之願哉，治經為文，各從其心所欲為，而官不為之制，豈復有利害之切於己，如鄉者所言明人哉，豈復有所謂今文者哉，而猶且以古今立說者，吾未知其何故耳，豈以媚時師歟，豪杰之士決不尔，不佞雖寡交乎，然以其所嗜，頗得窺今世作者，洛有伊原臧，海西有雨伯陽，閔

以東則有室師礼、未聞有足下、知有足下者、自此書始、是足下之葆光自晦、不競營于時、何其家風之未衰也、是豈有阿時之心乎、祇人安其所習、其所不習者、怪而尤之、亦常情為尔、則足下以非其所習、而怪尤之先存乎中、是以驟見妒者之言、以為当理而取之耳、且足下所称仏骨争臣本論朋党諸篇、皆争論之言也、足下既以無争心見告、而其所愛乃尔者、不佞亦未知其何故也、然其無争心者、豈誑我乎、意者足下之貴在氣、故不自覺其言之如是已、且何得已云者、孟子闢楊墨之言也、而足下之為此言、其崇信韓歐、比諸聖人之道、亦何甚也、亦不扞言之過也、世儒崇信程朱、過於孔子、猶之今仏氏崇信法然日蓮、過於釈迦、豈不類乎、足下思之、不佞僻情一病夫、与世相遠、所朝夕唯一二從游之士、未嘗以勸人教人為事、況与人争哉、而足下乃謂海内從風而靡者、雖不佞亦怪焉、豈耳食之士、初未識不佞之所為學者、伝響雷同歟、不尔、亦時運之使然也、豈不佞之所能知哉、亦惟人心如面、陳所見以酬來意耳、如其取舍、足下裁之、時暑涼雜、至伏惟自重、即月二十一日、

※1 東大本【頭注】「斷々ハ是非ヲ争フコト、史記ニ出ツ」

※2 【頭注】「古太守五馬ヲ備フ從五馬トハ太守ニ從コト也」

*1 東大本、都城本「状」。

*2 東大本の頭書「焉」を県図本落とす。今補う。

*3 東大本、都城本「因」。

*4 東大本、都城本「見」。

*5 東大本、都城本「臨」。

*6 東大本、都城本「臨」。

*7 東大本、都城本「竊」。

二三・〇四

鳩巢先生文集後編序

植木金

形於上日月星辰天之文也、形於下山川動植地之文也、天地有文而道行乎其間矣、聖人則之制礼樂、立政刑、作詩書、与教化道亦行於天下、遺沢施於後世矣、是聖人之文也、夫天地而無文、聖人何以得成開物成務之大業乎哉、聖人而無文、生民何以得知明命所以付於我者、而昭彝倫遵綱常乎哉、蓋文之与道相須、未嘗相離者也、然文者末而道者本也、故道行焉而文著文載焉、而道存所以文武之道未墜于地、在人者其文焉、頼自孟子没學夫其伝異端之説日熾、聖人之道不明、天下之人不得知聖人大道之要、而陷溺異端者亦多矣、其所謂学云道云者、唯在誦說詞章之間而止、未嘗知道之与文有本末之弁、終所以無得於已者以是也、彼所謂文者与聖人之所以為文者異矣、方宋

*8 東大本、都城本「巴」。

*9 東大本、都城本「憲」。

*10 東大本、都城本「門」。

*11 『徂徠集』「絀辭者」。

*12 東大本の頭書「唯」を県図本落とす。今補う。

*13 東大本は衍字を見せ消ちにするが、県図本はそのままとする。

*14 東大本、都城本「兮」。

*15 東大本、都城本「齋」。

*16 東大本、都城本「暨」。

*17 『徂徠集』「足下過取耳」。東大本は頭書で「足下」。今補う。

*18 『徂徠集』「以古自古今今立論」。東大本は頭書で「今」。今補う。

*19 東大本、都城本「興」。

*20 東大本、都城本「抱」。

之時、周程張朱之數君子挺生於千歲之後、覽聖人之文以得聖人之道、炳焉、蔚焉、其猶披雲霧以觀日星、登太岳以眺九州也、可謂明矣、可謂盛矣、後世學者欲觀聖賢之道者舍乎是、則將焉求我東方有聖人之文尚矣、然誦說詞章之間而於聖人之道概乎弗之聞也、中葉以降、盡掃縑素之門、時之士大夫不知有學、方國家創業之際、惺惺藤先生始唱其說於天下、天下之人如響之應、無不爭趨以宗之矣、自是而後、聖賢之文稍稍明于世、然近世京師伊藤氏始發異論而排擯程朱、自稱古學以誘其徒、後生少年喜其新奇而雷同、景附者不亦鮮矣、江都荻生氏繼作、殊作一層高論以壞千古之典刑、叱道學為糟粕、罵經生為奴隸、既已如是、於是天下之學者奔馳、爭先各欲勝于前人而譏之焉、洵焉、誠淫邪遁無所不至、而聖賢之文復庶乎熄矣、鳩巢室夫子為此深懼退而講程朱之說、脩聖賢之文以俟來者、而其所以為教、則本之道德而末詞藻約之躬行而抑名利問有來學者皆隨其材循々雅飭議論講說、厚信師說、而雖不敢輒發臆見、亦不敢妄棄人之言、與彼固護其門、而力不容他說者、何啻霄壤易所謂君子同而異者、蓋此之謂乎、故聞其言語、視其容止、則不問而足知為室子之門人教化之所以薰陶者其如此、澹齋靜齋兩先生、實其門之醇乎醇者也、金也辱嚮下風操几杖而受教誨者二十余年、于此其誘掖諄々、豈言之所能盡哉、然靜齋先生既沒、而我黨之所賴、獨澹齋先生而已、烏虜正學之難興其何如此、蘭林中邨君嘗欲梓其遺文、而公之天下啓正學之塗而曜盛德於無窮、惜哉、不幸即世、不能果其志矣、澹齋先生受其遺屬事既成功、繡梓且有日、備藩公聞之欣然曰、善哉斯萃也、夫先生者為一代儒宗、故四方英才不得不奔走、就之以受其教令也、則亡其就不憾焉、此編一旦行于世、則雖不得親接、其德容光輝、而因此以得其意、則不亦庶得夫子之道乎、是則而百世之師也、

遂命有司以終其事云、既而後編之撰又就其緒、於是先生使金序之、金也固陋而不識所言、如其德業事歷前集序跋既足之矣、金復何言哉、然先生之命不可辭、因為之謹述道文本末之論以贊其文之非、世俗之文云尔、

寶曆癸未十三年秋八月、築峯植木金謹序、

*1 『鳩巢文集』「而」なし。東大本、都城本はあり。

二三、〇五

答和田伯高書

前賢

前月廿三日朝、宕麓之邸獲 足下之書於墨川氏、意指愍懃、且審興居清健舉家無恙、曩者所呈文集之序 足下論甚為詳密、而不佞者亦至矣、眷厚何勝再來家事紛冗、加以会友之繁、以故不得急裁書、以報答盛意多罪、々々已來書曰、駿台雜話毀仁齋徂來之學而不敢指名、然而今顯二氏之姓、恐非先生之本意、足下信先生之厚、豈不敢佩服哉、然彼二氏斥思孟、非程朱、則是儒流中倒戈者、亦非我徒也、彼既非我徒矣、則雖鳴鼓而攻之、而亦何難之有矣、然先生毀二氏而不敢顯名、蓋有故矣、何則荻生氏者先生之所以何朝也、而伊藤氏之出也、雖在于先生之前、及其子東崖、則完同時矣、同時同朝而毀之以姓名、則是起爭端也、且推先生待二氏之意以為彼本曲學阿世之徒、非実求聖賢之道者、則雖辭而闢之、而不可化以歸于正与譏々与彼爭是非、孰若自脩以待來者此非盛德之所為、則焉能得如此矣、又引訊文類例曰、百年以來諸儒曾不辭讓、欲言其說之誤、而顯其人之姓名字号、極口以毀之、恐非厚道、予嘗謂此等學者素非弃學問之是非、惟揚其人之誤耳、要之不過銜世駭俗鉤名要譽耳、固是不厚之

具、宝曆癸未冬、

*1 東大本、都城本「同」。
*2 東大本、都城本「義」。

二三・〇六

葦田惟明字說

河靜齋

書曰、視遠惟明、人唯不明、故尋常之間、旦暮之頃、而常失乎不察、古之明者、四海之內之外、千載之前之後、瞭焉如設鑑於此、而取象於彼、何以能然哉、亦得其要而已、天下之務雖多、孰非人之事乎、天下之書雖多、孰非人言乎、苟得其要、則古今遠近何不歸乎一之有、葦田君重遠銳志好學、夜以繼日、古人一物不知以為己恥、葦田君有焉、一日問字於予、々請之以明君也、有心乎其要乎、凡所謂人之事人之言、猶取諸室中而用之也、此予所聞乎人、而竊以為然者、因記其說以贈、癸丑十一月廿二日、白河河口光遠仲賓識、

二三・〇七

唔咿堂記

雨森芳洲

近之我師父之罪人也、今也序言及二子之姓氏者、豈為之也哉、惟說朱學之衰自彼載耳、未敢破彼說焉、亦何諱避之有矣哉、若於毀其說、則宜避之姓名矣、然孟子有言曰、能言而拒楊墨者聖人之徒也、彼二子牽天下而禍仁儀者也、雖顯姓名稱字号以毀之、不亦可哉、然鳩巢先生以來、我諸先生亦專脩德以待來者而已、未嘗出一言而與彼論是非、是亦非盛德之事乎、諸先生既已如此矣、宜哉、足下之疑及于此也、顧足下之於諸先生也、信之每原不佞每失于薄、所謂人之過也、各於其党者歟、故失于薄者人之所以深恥也、宜削二子之姓以從文意之穩順、然草稿既付剞劂勢不可止焉、終至虛賢誨矣、惟恐不免過而不改之責也、不佞才朽文拙、不能罄所懷、幸高明亮察、不

夫聖人之道、以修身為本、舉而措之天下國家之上焉耳、其教有四、以文為首、文者何、讀書之謂也、蓋書之為教也、上自天地日月鬼神陰陽之奧祕、下至人事之得失、世運之隆替、以及草木禽獸蠕動肖翹之理、莫不渟渟瀦瀦、淵藪於其中、是以古之君子、多識前言往行、以蓄其德者、於是乎取焉、然則唔咿之功、其可廢乎、此中將小倉公堂名之所由起也、公生於簪纓之家、位非不高矣、官非不大矣、然世之所謂與馬宮室、六博声伎、曼衍之戲、^{*1}鞠藁之嗜、一切無所概

於心、屑々焉從事於寂寞之業、惟典籍之是娛、其見卓矣、日寄書
辺陬、徵某為之記、彼其累瓦結繩以為文、風雲月露以為詩、博古
〔待〕^{*2}以為學、斯之謂尸誦、固知公之必不然矣、而唔咿之号、於堂
不於齋、不亦踳乎、某也樗櫟小材、將知而毫及於蟹魚僻陋之鄉、不
能往謁斯堂、飫聽緒論、以開茆塞之心、其為遺憾如何哉、於是乎記、

*1 東大本、都城本「鞠」。

*2 東大本、都城本、景因本いずれも欠字（一字分空白）。『橘臆文集』
により補う。

*3 『橘臆文集』は「將」の前に「老」あり。東大本、都城本にはなし。

二三・〇八

送春菴序

前賢

中川春庵子、有難江之行、求言於予、予告之曰、夫君子之存心也以
道、鄒魯之所教、濂洛之所傳、与夫考亭之所集以大成、昭々乎如揭
日月而行於天者、春菴其嘗學之矣、誠能竭力覃精、講之念之、淬之
勵之、待之以歲月、持之以端慤、何患乎道不成、雖然荀子有言曰、
學莫便乎近其人、學之經莫速乎好其人、師資之功、其可廢乎、今夫
難江者天下一大都会也、上之執事在官之人、下之閭閻闔閭山林巖穴
之士、不可為量數、誠能挾其可師者而師之、見其所未見、聞其所未
聞、吾意道之成也、必有日矣、然則此行也、安得不賀且禱乎、而春
菴業医者也、医者以濟人為務、明學以脩身、治病以衛生、原無一致、
舍道乎奚求、故曰君子而後善医、其可不勤乎、今世之所謂医者、率
皆厚言深貌、炫其服、盛其徒、騁其智而逞其弁、廉恥道喪、而銜鬻
之務、其於濟人乎惡在、是当戒而不可效也、或曰古之人有得道而進

乎技者、吾子之所以倦々於春菴者、安知其非此意乎、予曰此亦一說
也、然而非吾所謂道也、春菴其有以識之矣、遂序述其言、以為送行
之贐云、

二三・〇九

題登竜墨跡後

浙水沈榮庵

朱紫陽夫子為宋代理學大儒、不但文行、推為第一、即其書法遒勁、
古雅筆々不苟一望、而為知端人正士、今薩陽 登竜社兄撰摹紫陽大
學序一篇、結構精嚴、^(筆力)頗得其秘奧、雖吾聊之工於臨池者亦不過如是
雋才何叙、

二三・一〇

又

江天錫

天下事未有不學者、即以字言、古蒼頡為作字之祖亦字鳥跡、然後
為字即聖人學、万物之謂也、字之好處難以言尽、大約不外於學難
〔以〕^{*}古之名家、如王張顏柳輩擅技、一時伝名後世、必酌之於七參
之於古、乃可尽善、楷不外端正有韻致、行不外流動有丰神、今此看
來佳處是緊硬缺處少活動已有一半功、夫尚未至十分地位急取法帖習
看如何直、如何橫、如何點、如何口筆、如何帶筆、如何收筆、久之
得心応手、可与古之名家並軀耳、

右二篇、登竜志賀氏、書朱文公大學序、司馬溫公獨樂園記二篇、
大行二帖、達諸大清国求妙手之批評焉、於是江沈二公作文章回
報云尔、

* 東大本により補う。東大本は「以」を頭書。

答牧野先生書

鳩巢先生

辱示岡崎氏碑陰記、此人云亡條已期矣、每与同志言、尚使人憤悶不平常有無窮之感、嗚呼世無董狐久矣、孰能為國家直筆而書之、所望於一世鉅儒文人者、在能紀述忠烈之行、使其有所託以伝於世、而不湮晦焉、則彼凶暴之小人亦將有所畏避而不敢為、亦吾徒之任也、在胡越、猶將表而録之、況親出於交游門生乎、今誦惕齋之報、大使人缺々、岡寄生從惕齋遊有年、惕齋在京師、其學行頗為人所信、宜樂為此人立言以伸其忠憤之志、何忍逡巡遜讓而不敢任此責乎、碑陰記高明、恐猶有駭人耳目以招明石氏之禍、今取而誦之、必不至以激彼之怒、北地十月而後雨雪日甚、立牌^{*1}為難、此高明所知也、請早移書明石氏、令刻石、想岡寄生之靈亦望於地下矣、

岡寄氏 凡以族稱者略取於識別而已、未嘗斥其人而言之、若斥其人之言之、唯婦人為然、

近世忠孝之士 近世之為言、非去今三十年以上者、不可非所以稱同時交游之人、若程子稱韓愈曰近世豪傑之士、亦謂在隋唐以來近世中為豪傑之士耳、非謂近世以來豪傑之士也、山根敬心曰、若謂近世以來此人專忠孝之行、則其稱岡寄生太過、此言亦有理、直清欲去此二字、若不可也、或作海北忠孝之士為得、

子之忠孝、直清欲獨改忠孝作忠烈、如何、

記於天下之人口 記字不穩、豈託字之誤乎、天下二字亦頗過當、若作四方之人口、何不可之有、今別妄撰如左、

岡寄子海北篤學之士也、生不為良臣、死而為忠臣、嗚呼此子之不幸也、雖然子之忠烈、天知神知、國人伝稱施及四方、其高風清節將歷千載而愈彰、夫如是則所謂不幸者在子耶、在他人耶、後世必

有弁之者矣、

魏徵告太宗曰、願使臣為良臣、而勿使為忠臣、稷契皋陶所謂良臣、童逢比干所謂忠臣、今良臣忠臣之言本此、惟高明斟酌其宜可也、

*1 東大本、都城本「牌」。

*2 東大本、都城本「隨」。

*3 『鳩巢文集』「近世以來此人專忠孝之行」。

二二二

祭堀江夫人文

代人 植木金

維明和元年甲申冬十月廿日、松田某敢明告于旧人君之配堀江夫人之靈曰、嗚乎天之生民也、有物必有、則故民之秉彝也、必好是懿德、是故聖人教之以五常之德、使之脩而復其初、此人道之所以明於天下也、然世衰道微、而明哲之識、賢能之才、求之丈夫相當者蓋鮮矣、況於婦人乎、我堀江夫人生有異質、端莊誠一自其在家好書慕古、声色紛華不接、心術愔愔慢邪避之氣、未嘗設於身体、其適夫家也、瑟琴和調矣、其事舅姑也、秉必惴々焉、故居於其室、事其舅姑、未嘗有違命、撫婢僕如子姪、賑貧窮如利己、寬裕慈惠惟德之行、嗚呼哀哉、一朝罹疾不起、奄忽逝矣、某曩事其家蒙恩惠甚深矣、追念往事、泣涕漣々、歲月過不留焉、方再期之周、寄哀於一爐之香、仰靈於蒼穹之上、伏惟神靈監此愚誠、嗚乎哀哉、尚饗

二二三

君祥名字說

河口靜齋

麟之名出詩与春秋、他書亦班々載焉、其為王者之瑞、天下之祥不待言矣、而昧者或以不世見疑其有無、然問麟于其形則雖有善図吾不得而問麟于其時与人、則雖未必真為麟、然或庶幾焉、豈無非麟而可以為麟者乎哉、然今有物焉、其出也得其時与人、則謂之祥可也、果非牛尾而麕身者、則不得謂之麟、唯人也不然、朝為庸衆人、暮為天下之僞、則可謂之天下之僞、不知麟必牛其尾麕其身、而後信其名甚哉、人才之祥愈於麟矣、君祥生九齡、敏悟絶人、材氣峯穎、觀者驚異、目為神童、因取其名曰祥、以伯麟為字、若他日果能成為天下之祥、則斯文之与、不在異人、今之所望是也已、

* 1 東大本、都城本「興」。

二三、一四

木君名字説

前賢

夫子曰、人之生也直、直也者万物之所以立也、予友木君旧名櫟、以出莊周之書嫌其不經、請予改焉、予愛其用心一於正而不惑乎他岐、視異端之説、如將汚己、可謂直矣、乃命之曰敬直、君其勉旃、夫子之時、列国唯衛為多君子、故夫子称之曰、祝鮀*1(活)、宗廟、王孫賈治軍旅、而鮀失於佞、賈失於權、以直許者特一史魚耳、漢武帝之時、朝廷盛矣、而自公孫丞相以下疵瑕可數、能以鱣直自立者汲黯之外未之見也、直之為德自古難之、君其勉旃、因以希古為之字去、

* 1 東大本、都城本「治」。県図本は「活」を修正しているようにも見える。

* 2 東大本、都城本「云」。

二三、一五

莊子論

雨芳洲

吾読莊子一書、觀其言論浩々乎如江海之不知其畔岸、未嘗不倜然自失也、凡夫子之所罕言而諸弟子之所不得而聞者、举皆反覆宛轉、津々乎言之不已、可不謂豪傑之士乎、然其所以不免於為異端者、其病盖有二焉、一曰避事、一曰畏禍、而二者之病、俱出於強忍自私之心、故与聖人不合也、聖人之於天下也、有不忍人之心、故有不忍人之教、有不忍人之教、故有不忍人之政、仁義礼樂以治其内、耕稼蠶*1(蠶)統*1(蠶)以養其生、要將建兆民之極、嚴万世之防、以安民濟物共躋於壽寧之域、而其為教也精粗本末、森然備具、而常先乎其卑者近者、惟恐其躋等也、雅言之間、聖人之意、豈不昭然明白乎、彼莊子者、惟強也、故敢言而不顧、惟忍也、故遺世而不恤、死生大矣、猶有鼓盆之歌、唯虫能虫、*3(唯)惟虫能天、則其於国勢之強弱、政事之得失、与夫人心之邪正、風俗之美惡、固將皆以為不可知而附之於無可奈何、避事以就安間、畏禍以成已私、天下之純良者寡、而乖悖者衆、苟用斯言也、豈不胥率而入於夷狄禽獸埒乎、觀於西晋、從可知矣、雖然自斯道之衰也、天下之學者尚巧偽而飾礼法、誇声名而貪顯富、藉聖人之言以濟其姦、居然至于詩礼發冢者、未必無之、彼莊子者抉摘貶剥不遺余力、亦可謂快矣、陳同甫嘗曰、天下不可以無此人、亦不可以無此書、蓋以此矣、

* 1 東大本、都城本「統」。

* 2 『橘隠文集』は「雅言罕言之間」とする。

* 3 東大本、都城本「惟」。

* 4 東大本、都城本「矣」。

適齋記

前賢

對有一畸人焉、衰朽憔悴、年將耄耄、蓬髮垢面、三月不梳頭、優游愉逸、忘事接物、未嘗見其喜愠之色、常自言曰、衣未必狐袖豹襦禦寒足矣、食未必淳母熬膾飢足矣、而居室未必連甍重棟高門大圍、擣頭容膝亦足以安矣、有暇焉乘虛無之車、駕芒芴之馬、翻然游於無何有之鄉、旬月而不知返、不復識天地之為大、歲時之為旋轉、與夫山河之一流一時、或為陵或為谷、回視世之豪富繁榮、威焰勢力、不啻如風聲之觸耳、鳥影之過目、澹乎無所喜好、漠然不以為意、在昔漆園子言適甚悉、其深遠幽奧、雖未盡識、大率亦不過乎此也、乃終日閑居、自誦其言、休々焉而兀矣、天童大愚、名齋為適、徵余為之記、遂紀述畸人之言、以償其債、夫師乎禪門之巨擘也、其於至道也必得、嗚呼斯言也、果中於意耶、抑或未中耶、我莫之知也、噫、延享丙寅二月穀旦、雨森東、七十九歲書、

* 1 東大本、都城本「峙」。

* 2 『橋臆文集』「芳洲雨森東」。

勢州大杉村義犬記

鳩巢先生

人之所以為人者以貌耶、曰、否、木偶芻靈亦人貌者也、而謂之人可乎、人之所以為人者以言耶、曰、否、鸚鵡猩々亦人言者也、而謂之人可乎、人之所以為人者以有情耶、曰、否、好生惡死就利避害、雖禽獸亦有之、然則人之所以為人者何以、曰、以美不以形、以性不以情、孝弟忠信人之美者也、仁義禮智人之性者也、心乎忠信、行乎

仁義、故利有所不就、害有所不避、而人道行焉、心不忠信、行不仁義、故見利必就、見害必避、而獸道行焉、世固有人貌而獸心者、謂之獸可也、亦將有獸形而人行者乎、則謂之人可也、吾知以其實觀之、庸知其形之是与非耶、吾聞犬之為獸守家不忘主、最近人者也、若夫憂主之遇害而先銜衣以留其行者、謂葛恪之犬也、哀主之羈旅而遠伝書以歸其家者、陸機之犬也、至於張然之狗為然殺在家之賊、楊生之狗為生救療原之火、則其事亦甚偉矣、普門禪師嘗飛錫勢州、居田引村禪源寺、出寺循山而行六里、又得一村、曰大杉村、有編戶民淺井虎助者、其先以士族世為土豪、官特許其佩劍、自異於平民、大杉村為多氣郡屬邑、在紀伊侯封內、治紀之若山、万治元年春邑民有爭訟事、虎介不告邑宰臬令、自詣若山訴之、竟坐踰位犯分辭亦不直下獄、家人未嘗知之、畜一犬白色□大、遶舍悲鳴不已、家人恠之、他日始聞虎助有罪收繫、乃知嚮之悲鳴者為此也、虎助家素無余產、至是妻子窮困、朝不及夕、斯犬入山日昨殺鹿一頭、銜之至家、或生而逐之入村、使人殺之、家人壳鹿取其髓以給衣食、由是得自全活、又有一小狗亦白色外來、日与家犬相從、并力逐鹿、而犄角之、其獲鹿而歸也、又相与守家日夜不去、邑人呼其大者為大白、小者為小白、如是者三年、未嘗以一日廢也、会官赦虎助出獄、二犬在家亦知之、遽而奔騰且鳴、其声甚歡、頃之虎助歸家、二犬出而迎之、五六里外見虎助、低首掉尾、若不自勝者、是日二犬又入山獲鹿而來、積為庭寬以明相慶、既而向虎助及家人大作声、若辭別之狀、然後奔逸而去、莫知所往、邑人追而迹之、遂不見、其後虎助門戶零落、不能自立、乃祝髮幽居以自老、元祿某年以疾死于邑、云今茲夏、普門師使人以此事來告曰、盍伝諸、嗚呼斯犬也、尽忠其主亦至矣、豈吾所謂忠信其心仁義其行者歟、君子見人之善必愛而伝

之、愛人而及物、則善之在禽獸者如之何其没之、夫仁義忠信人而能之、猶以為難焉、今也獸而能之、豈易得耶、矧夫有功不処其名、有勞不望其報、卓尔高蹈、邈乎遠去、亦庶乎古之知進退而與時消息者矣、此皆不可不傳也、普門師有道行為衆所稱、決非妄語者、其言可信也、已遂為之記、

- *1 県図本は、「謂」の下に「而」を挿入する指示があるが、東大本は「謂」の上に挿入を指示する。『鳩巢文集』は「而謂」。今、改める。
- *2 東大本、都城本「弟」。
- *3 東大本、都城本「諸」。
- *4 東大本、都城本「佩」。
- *5 東大本、都城本「助」。
- *6 東大本、都城本「訢」。
- *7 『鳩巢文集』は「若喜不自勝」。東大本、都城本は県図本と同じ。
- *8 東大本、都城本「笑」。
- *9 東大本、都城本も「今今茲」。『鳩巢文集』は「今茲」。

二三、一八

西村正陽字説

河口子深

筑後人西村子、自称其名曰晴白、予奇而問之、乃言取薛文清氏之語以自勵、予既嘉其用音超然出乎俗情之表、及定交已久、聽其議論切實、益信其為人、因贈之以字為正陽、父且告之曰、天地之道一元氣而已矣、分而為兩、乃曰陰陽、故以其兩言之、則一左一右、固不可有此、而無彼以其一言之、則一賓一主、亦不得同視而並稱、聖賢扶抑之旨微矣、然非寬広明静之士、不足語此、嗚呼晴天者至大也、白日者至明也、正陽者至善也、西村子顧名与字、豈得不凜々惴々常若

君親之臨^{*1}士也哉、勉旃、丁巳春三月十九日河口光遠仲賓父書于何思慮齋南窓、

- *1 東大本、都城本「士」。

二三、一九

郡山故記室荻生氏墓誌銘 大宰春台

先生、諱茂卿、姓物部、荻生其氏也、其先居三河大給、^{*1}寬荻生、因氏焉、累世材官、父方菴君、諱篤、憲廟侍医、母兒島氏、生三子、先生其中子也、為兒岐嶷、五歲自識字、幼不与群兒遊、昂々焉、十余歲能属文辞、喜与長老談論如成人、十四、從父播遷南総、不隕穫於貧賤、執志弥固、為学弥勤、雖祁寒盛暑乎、篝灯炯々、未嘗知倦、居無何、文章大進、在総一記而反東都、從遊者衆、故甲斐^{*3}候之与^{*4}也、人或薦先生焉、乃辟掌書記、^{*5}當是時也、^{*6}憲廟与世子更過^{*7}候邸、則必召見^{*8}候家諸從文学者、令進講經書、輒有賞賜、而先生為之魁、^{*9}候好編修、先生每為總裁、用是累益其食、^{*8}比^{*9}候之損^{*10}館舍、至五百石、嗣君今郡山候亦優待之、先生少学于其家、後讀古文辞家書、而悟文章之道、乃尽棄其学、而治古文辞、及成、益知其旧所為文之非是、因歎曰、豈惟我若是哉、滔々者天下皆是也、豈惟今日哉、千古以来皆是也、遂不復属目於東漢以後書云、晚節郊居養病、英才自遠方來者、從遊如雲、号曰徂來先生、先生嘗言道者、文章而^{*11}已矣、六經亦唯是物、舍是而他求、後儒所以不知道也、故先生之治經也、炳若日星、使先王之道、可行于今者、^{*12}實自先生始也、先生学甚博、才甚富、卓乎有識、觀其所著可見矣、尤長長經濟、惜也不得行耳、若夫雅樂、象胥、軍旅、法

律、旁及百尔名物、莫不精覈、是皆其緒余已、享保六年、國家命
句詭清帝六諭、成則 召入、賜衣於闕下、後數以文学之事応 教、
十二年三月、再有入 朝之 命、四月一日、寔 召見、未有後
命、今茲正月十九日庚午、以疾没、自生寛文丙午二月十六日至是
為年六十三、元配三宅氏、生一女、夭、次配佐々氏、亦先没、無
子、兄子道濟嗣、月日、葬于東都城南三田原長松寺、先考墓側、遺
命純銘其墓、銘曰、
南方之原、長松之下、之子于婦、于安其土、勿覲勿覿、君子之字、
虫獸攸去、永固門戶、

- * 1 東大本、都城本「実」。
- * 2 東大本、都城本「紀」。
- * 3 東大本、都城本「侯」。
- * 4 東大本、都城本「興」。
- * 5 東大本、都城本「候」。
- * 6 東大本、都城本「候」。
- * 7 東大本、都城本「候」。
- * 8 東大本、都城本「侯」。
- * 9 東大本、都城本「損」。
- * 10 東大本、都城本「候」。
- * 11 東大本の頭書「已」を景図本落とす。今、補う。
- * 12 『春台先生文集』「長経済」。「東大本は衍字を訂す。都城本は景図本と同じ。」

一三二・二〇

孟子論^{*1}

大宰春台

昔〔者〕^{*2} 苟卿立言、非十二子、孟子与焉、漢王充仲 住 氏著論衡、
中有刺 孟篇、刺 孟軻也、二子所譏、軻之言行、違道悖理也、其
言悉中軻病、嚮使軻也聞之、其未必不受以為過矣、余嘗因二子之言
以閱孟子七篇、則軻之過失、不止二子之所譏也、蓋軻之所以出言多
過者、其故有二焉、其与国家君言、則冀見聽、其与学士諸子弁、則欲
服人、冀見聽、則務為可悅之言、欲服人、則牽強持論、務為可悅之
言、如為齊王言好貨好色之是已、牽強持論、如与告子論性之是已、
夫斯二者、軻之患也、軻有斯二者之患、宜其出言多過也、夫仲任
之論、精矣詳矣、而未盡孟子也、仲任之所置而不論、余請得而論
之、夫好貨好色之非美德也、不待智者而後知之、宣王既自以為疾、
而孟子不敢因之以陳其戒、謂之陳善閉邪可乎、且以公劉為好貨、太
王為好色、是誣古人也、君子之言、万世之法也、縱使其言之果有補
于王政、然固所謂不通之論也、況未必有補于王政乎、孔子对定公
曰、君使臣以礼、臣事君以忠、孟子告宣王曰、君之視臣如手足、則
臣視君如腹心、君之視臣如犬馬、則臣視君如国人、君之視臣如土
芥、則臣視君如寇讐、夫君子不仕則已、仕則必敬其君、語曰、君雖
不君、臣不可以不臣、父雖□父、子不可以不子、言尽其道也、故臣
人者、不以不夷陰渝其心、乃若為其君之無礼而對焉、是不臣也、
仲尼之言、可以語君、亦可以語臣、故謂之通論、如軻之言、唯可以
聞于君、決不可使人臣聞之、則亦不通之論也、仲尼嘗称管仲曰、如
其仁、如其仁、又曰、微管仲、吾其被髮 在 衽矣、仲尼之称管仲
也、可謂盛矣、孟子乃以管仲不足為、不亦異乎、子貢曰、夫子之言
性与天道、不可得而聞也、孔子曰、性相近也、習相遠也、夫子之言
性、唯此一言、既已明矣、亦又何言、孟子乃道性善、及其与告子爭
論也、告子三易其說、以明相近、彼其意在誨孟子、而軻終不能悛、

惑之深也、人心、能動之物也、故孔子曰、操則存、舍則亡、出入無時、莫知其卿、^{*9}其心之謂与、孟子^{*10}則曰、我四十不動心、心豈能終不動乎、是以樂正子之將見用於魯也、孟子曰、吾聞之、喜而不寐、是則軻之動心也、若心果不動耶、則与莊用^{*11}之欲死灰其心、何以異哉、此万々無之之事也、孟子曰、我善養吾浩然之氣、夫養氣者衛生之術也、君子之養氣也、曰礼樂而已矣、礼以養其陰、樂以養其陽、故曰、礼樂不可斯須去身、此先聖王之教也、古之道也、古者君子習礼樂、而養氣在其中矣、故仲尼不言養氣也、子貢問曰、伯夷叔齊何人也、孔子曰、古之賢人也、孟子謂伯夷、古之聖人也、又曰、伯夷隘、柳下惠不恭、隘与不恭、君子不由也、又曰、伯夷、聖之清者也、柳下惠、聖之和者也、夫軻既違仲尼而謂伯夷聖人、又於夷惠、或謂之隘与不恭、或謂之聖、是何見之不定也、且礼記曰、作者之謂聖、夷惠非作者、孟子乃謂之聖人、不亦妄乎、王天下之謂王、長諸侯之謂伯、所事大小之異耳、非有二道也、高以卑為基、大積小而成、天地之道也、王業亦然、是故、伯、王之未就也、王、伯之大成也、不能伯、未有能王者也、是故、三分天下有其二以服事殷、西伯之伯也、九合諸侯、一匡天下、桓公之伯也、西伯能由伯以馴致王業、故孔子謂之至德、桓公終于伯而已、故孔子惜之、嘗嘆其相曰、管仲之器小哉、仲尼固不言伯、亦不言王、不言王者、非不言也、其所言皆先王之道也、不言伯者、非惡之也、言王而伯在其中也、夫仲尼之時、周之衰世也、於其時、諸侯有能行先王之道者、則孔子必起而相之、及其事濟也、大者王、小者伯、吾知孔子必不以伯為不足為也、何以言之、嘗觀孔子之応聘於四方也、不国君、雖公山佺之以陪臣召之、而夫子尚欲往、夫子之欲往也、将有以行其道焉、其道者何、先王之道也、嚮使仲尼得其君而相之、其能成王耶、伯耶、是

未可知也、孔子豈惡伯哉、要之能伯者、王之漸也、至於孟子絀伯而專言王、然後王伯之分、遂成涇渭、豈不痛哉、孟子曰、予未得為孔子徒也、予私淑諸人也、又曰、乃所願、則學孔子也、若是、則孟軻固學孔子者也、然其所著書三万言、而違孔子者、不止十五、以孔子之言觀之、猶執規矩以正方圓也、茲舉其大^{*12}而道之、余不可勝論也、夫苟卿仲任者、知言也、後唯宋司馬君實、亦不悅孟子、自漢趙邠卿注孟子而後、推尊孟子者、莫若唐韓退之氏、然退之特推軻衛道之功而已、未始以軻道為至也、蓋有所見也、至宋程氏兄弟、尊孟子尤甚、品之以大賢、因以配孔子、於是乎有孔孟之稱、以其書配論語、於是乎有論孟之目、且其言曰、孟子性善養氣之論、皆前聖所未發也、其徒從而和之、及朱仲晦注孟子、尊其人若聖人、信其書若六經、嗟乎、惑哉、夫人必有倫、故竝稱人者、美惡必以倫、如堯舜之德、桀紂之暴、伊傅之相、周召之公、管蔡之乱、成康之治、幽厲之昏、桓文之伯、或同時、或異世、而其為倫則一也、皆天下之公論也、至若後世言孔墨、則其人其道、皆非等倫、徒以其教之行于當世、適与儒者相敵、故有是稱耳、至於孔孟之稱、予嘗於馬季長賦中一見之、蓋非公論也、是稱之行、自程氏以來也已、夫宋帝尊孟子、詔孫奭疏其書、遂列諸九經固已其矣、迨程氏學作也、孟子乃書、与論語並行于宇內、豈非幸哉、夫孟子苟子、後仲尼而立言、各一是非、俱未達乎道、而二子不可優劣、如其文辭、則孟子实卓越于諸子云、

*1 『春台先生文集』後稿卷八では「孟子論上」「孟子論下」が収録されているが、『通昭録』に収めるのは前者のみ。

*2 東大本の頭書「者」を県図本落とす。今補う。

- * 3 東大本、都城本「任」。
- * 4 東大本、都城本「刺」。
- * 5 東大本、都城本「刺」。
- * 6 『春台先生文集』「譏軻之言行」。東大本、都城本は景図本に同じ。
- * 7 『春台先生文集』「不以夷險」。東大本、都城本は景図本に同じ。
- * 8 東大本、都城本「在」。
- * 9 東大本、都城本「郷」。
- * 10 東大本、都城本「則」。
- * 11 東大本、都城本「周」。

二二、一一

国分新府記

釈文之

大隅故州国分新府、路通日向、地接薩摩、襟清水而帶大津、顧其後背、有億丈之城、其為主將者、不振兵威以戒不虞、望其前面、有万頃之田、其為人民者、有勤農業、以樂有年、其食足兵足者、又非治国之具乎、此則新府之所兼有也、若夫 八幡正宮之有乾門也、有護国靈驗之名、霧島*1(嶋)權現之在良闕也、有安住不動之勢、地已盡而人未饒者、為可惜矣、慶長六年辛丑夏之仲、竜伯尊君相攸、鑿山通江、以欲營府第於此地、其用人力者、非物情之所欲、蓋避其地之低湿也、去歲甲辰八月、遣佐多宮内少輔忠増公遠至洛陽、扣陰陽博士正五位上*2(賀)加茂朝臣在信公之室而問其地之臧否、在信修鎮地鎮宅之秘法、坐措府第之四維於泰山之安、加焉、為 尊君祈身宮康健、祝寿筭綿延、忠増公帰国之後、綿絶於野外、以分街巷、予觀夫新府勝状、東西之衢、其数九者、盖象于陽数也、南北之陌、其数五者、盖象于五行也、士大夫之家于九衢者、三百、盖取*3(于)于礼義三百也、其營中之延袤方九十余間、而不滿百者、虧盈而益謙也、尊君之為

人、有其德而不居其德、非特国家之士民仰其德、尽日本国中無処而不称其謙德者也、所謂虧盈而益謙者、尊君之所素有也、以此謙德接于下、衆庶之帰也、豈復有有限量乎、是故不日而 華第創造之功成、士大夫迨庶人之新居亦其功成矣、於是英雄霧列、俊傑星馳、尊公*4(尊)之願既滿、衆人之望亦足矣、不幾而新府為一都會之地、不亦盛哉、且復、東有惠果弘法之末裔、鎖金剛之閼鍵、以演秘密之教、西有洞山曹山之的派、立五位之旌旗、以伝直指之印、何止於此、有役小角之流、執錫以念不動明王、有积一辺之流、鳴鼓以礼無量寿仏、是亦為 尊君祝無量之寿、為新府安不動之地者也、豈不為無意哉、若予之輩、世之賸人也、雖不得為刀筆之吏、觀此德之至与業之成、忘其固陋、記勝概之万一、以告在野外者之欲往觀而不能徧觀者云、

- * 1 東大本、都城本「島」。
- * 2 東大本、都城本「加」。
- * 3 東大本、都城本「于」。
- * 4 東大本、都城本「君」。

二二、一二

修復高野山蓮金院記

前賢

紀州高野山金剛峯寺者、真言秘密之道場、而仏法最上之靈境也、少弥惟新
少将家久景仰之余、素欲創一字之梵刹以為未來宿因善根、因茲、令成正院頼真遥上其山以拱其地、雖曰山之高野之曠、有数千余員之増房、以故無可挿草之地、頼真可奈之何哉、於是之時、宝生院大僧正政遍為一山之檢校、々々感我帰依之志也、相攸於蓮金之院、欲改之

一新以為我寺、寺也*1(地)、雖寸、其価直百千金*2、於是以檢校之命、告主於蓮金者、買其院之地以三千兩白銀、然後如渡得船、如暗得灯、即勵土木之功、命匠氏之有棟梁材者、以創建數間新寺矣、曩昔祇尊出世之後、有須達長者挾地而布八十項黃金、以草創祇園之寺尔来、震旦扶桑創建精舍者、無州無処而不有之矣、我之於須達、其富之大小雖不同、而帰依之志、豈復有淺深乎、仰冀、彼一院与山齊其高、与水度其長、為我島津氏之寺、永不退転、仮使雖有乱劇之及於斯山、檢校与我金石之約、何敢違之乎、且復、住於此院者、至尽未来際、無長無少、学侶之繞挑法灯者可也、誓莫令行人之輩徒奪其席、件々書以告於闔山之学侶、々々亦勿違失之達也*1(書)、

- *1 東大本、都城本「地」。
- *2 『南浦文集』「百千両金」。東大本、都城本は景図本に同じ。
- *3 東大本、都城本「島」。
- *4 東大本、都城本「幸」。

通昭録卷之二十四

藻藁編

鉄炮記

积文之

寄附屏風高野山記

呈大明使書

与明商客書

与福建軍門書

答呂宋国王書

答呂宋人書

答南蛮船主書

答南蛮四国老書

寄呂宋国船主書

答安南国書

答琉球王書

呈琉球王書

呈琉球王書

吊戦亡文

祭本郷義則文

兵術書跋

与重位書

願成寺鐘銘

浄光明寺上梁文

朱氏詩伝膏盲後序

読朱氏詩伝

太宰春台

聖學問答序

論語古訓序

朱氏小學論

誦義人錄

誦古今學要

誦大疑錄

書徂徠遺文後

藻彙編卷之

二四、〇一

鉄炮記

代種子^{*1}島久晴

釈文之

隅州之南有島、去州一十八里、名曰種子、我祖世々居焉、古來相傳、島名種子者、此島雖小、其居民庶而且富、譬如播種之下一種子、而生々無窮、是故名焉、先是、天文癸卯秋八月二十五丁酉、我西村小浦有一大船、不知自何國來、船客百余人、其形不類、其語不通、見者以為奇怪矣、其中有大明儒生一人、名五峯者、今不詳其姓字、時西村主宰有織部^{*2}亟者、頗解文字、偶遇五峯、以杖書於沙上云、船中之客不知、何國人也、何其形之異哉、五峯即書云、此是西南蠻種之賈胡也、粗雖知君臣之義、未知禮貌之在其中、是故、其飲也杯飲而不杯、其食也手食而不箸、徒知嗜欲之愜其情、不知文字之通其理也、所謂賈胡到一處輒止、此其種也、以其所有、易其所無而

已、非可怪者矣、於是織部亟又書云、此去十^{*3}有^(二)三里、有一津、々名赤尾木、我所由賴之宗子、世々所居之地也、津口有數千戸、々富家昌、而南商北賈、往還如織、今雖繫船於此、不^{*4}苦^(三)惡津之深而且不漣之愈也、告之於我祖父惠時与老父時堯、々々即使扁艇數十竿之、至於二十七日己亥、入船於赤尾木津、丁期之時、津有忠首座者、日州竜源之徒也、欲聞法花一乘之妙、寓止津口、終改禪為法華之徒、号曰住乘院、殆通經書、揮筆敏捷、偶遇五峯、以文字通言語、五峯亦以為知己之在異邦也、所謂同声相応同氣相求者也、賈胡之長有二人、一日牟良叔舍、一日喜利志多侘孟太、手携一物、長二三尺、其為体也、中通外直、而以重為質、其中雖常通、其底^{*5}惡蜜塞、其傍有一穴、通火之路也、形象無物之可比倫也、其為用也、入妙藥於其中、添以小团鉛、先置一小白於岸畔、親手一物、修其身、眇其目而自其一穴放火、則莫不立中矣、其發也、如掣電之光、其鳴也、如驚雷之轟、聞者莫不掩其耳矣、置一小白者、如射者之棲鵠於侯中之比也、此物一發而銀山可摧、鉄壁可穿、姦宄之為仇於人之國者、触之、則立喪其魄、況於麋鹿之禍於苗稼者乎、其用於世者、不可勝數矣、時堯見之、以為希世之珍矣、始不知其何名、而不詳其為何用、既而人名為鉄炮者、不知明人之所名乎、抑不知我一島者之所名乎、一日時堯重詛謂二人蠻種曰、我非日能之、願學焉、蠻種亦重詛答曰、君若欲學之、我亦^{*7}声^(四)其蘊奧以告焉、時堯曰、蘊奧可得聞乎、蠻種曰、在正心与眇目而已、時堯曰、正心者先聖之所以教人而我之所以學之也、大凡天下之理不從事於斯、動靜云為、自不能無差矣、公之所謂正心、豈復有異乎、眇目者其明不足以^{*8}独^(五)遠、如之何、而眇其目乎、蠻種答曰、夫物要守^{*9}編^(六)、守約者、以博見為未至矣、眇目者非見之不明、欲守其約以致之遠也、君其察之、

時堯喜曰、老子之所謂見小曰明、其斯之謂歟、是歲、重九之節、日在辛亥、涓取良辰、試入妙藥与小団鉛於其中、置一小白於百歩之外、放之火、則其殆庶幾乎、時人始而驚、中而恐而畏之、終而翕然亦曰、願學、時堯不言其価之高而難及、而求蜜種之二鉄炮、以為家珍矣、其妙藥之擣篩和合之法、令小臣篠川小四即學之、時堯朝磨夕淬、勤而不已、嚮之殆庶者、於是百發百中、無一失者矣、於此之時、紀州根来寺有杉坊（其）^{*10}公者、不遠千里、欲求我鉄炮、時堯感人之求之之深也、其心解之曰、昔者徐君好季札劍、徐君雖口弗敢言、季札心已知之、終解寶劍、吾島雖偏小、何敢愛一物、且復我不求得、喜而不寐、十襲秘之、而況求而不得、豈復快於心歟、我之所好、亦人之所好也、我豈敢独私於己而韞匱而藏諸、既遺津田監物亟持以贈其一於杉坊矣、且使之知妙藥之法与（於）^{*12}火之道也、時堯把玩之余、使鉄匠数人熟視其形象、月鍛季鍊、新欲制之、其形制頗雖似之、不知其底之所以塞之、其翌年蜜種賈胡復来於我島熊野一浦、々名熊野者、亦小廬山小天竺之比也、賈胡之中幸有一人鉄匠、時堯以為天之所授、即使金兵衛尉清定者、學其底之所塞、漸經時月、知其卷而藏之、於是歲余而新製數十之鉄炮、然後製（造）^{*14}其台之形制与其飾之如鍵鑰者、時堯之意不在其台与其飾、在乎可用之於行軍之時也、於是乎、家臣之在遐迹者、視而效之、百發百中者亦不知其幾多矣、其後和泉界有橘屋又三郎者、商客之徒也、寓止我島者一二年、而学鉄炮者、殆熟矣、帰旋之後、人皆不名而呼曰鉄炮又矣、然後幾内之近邦、皆伝而習之、非翅幾内関西之得而学之而已、関東亦然、我嘗聞之於故老、曰、天文壬寅癸卯之交、新貢之三大船、将南遊大明国、於是幾内以西、富家子弟、進為商客者、殆乎千人、搦師篙師之操舟、如神者数百人、艤船於我小島、既而待天之

時、解纜齊檣、望洋向若、不幸而狂風掀海怒濤捲雪、坤軸亦欲折、吁、時耶命耶、一貢船檣傾擗摧、化島（島）^{*15}有去、二貢船漸而達於大明国寧波府、三貢船、不得乘、而回我小島、翌年再解其纜、遂南遊之志飽載海貨蜜珍、将帰我朝、大洋之中、黒風忽起、不知西東、船遂飄蕩、達於東海道伊豆州、々人掠取其貨、商客亦失其所、船中有我僕臣松下五郎三郎者、手携鉄炮、既発而莫不中其鵠矣、州人見而奇之、窺伺倣慕、有多学之者矣、自茲以降、関東八州暨率土之浜、莫不伝而習之、今夫此物行乎我朝也、蓋六十有余年矣、鶴髪之翁、猶有明記之者矣、是知、嚮之蜜種二鉄炮、我時堯求之学之、一発而聳動於扶桑六十州、且復使鉄匠知製之道、而偏於五畿七道、然則鉄炮之權輿於我種子島也、明矣、昔者採一種子之生々無窮之義、名我島者、今以為符其識矣、古曰、先德有善不能昭々於世者、後世之過也、因而書之、

*1 東大本、都城本「島」。以下、本文の「島」はすべて『南浦文集』では「嶋」。

*2 東大本、都城本「亟」。『南浦文集』では「丞」。

*3 東大本、都城本「有」。

*4 東大本、都城本「苦」。

*5 東大本、都城本「捷」。

*6 東大本、都城本「要蜜」。

*7 東大本、都城本「聲」。

*8 東大本、都城本「燭」。

*9 東大本、都城本「約」。

*10 東大本、都城本「某」。

*11 東大本、都城本「既遣」。

- * 12 東大本、都城本「放」。
- * 13 東大本、都城本「制」。
- * 14 東大本、都城本「製」。
- * 15 東大本、都城本「島」。

二四・〇二

寄附高野山屏風

前賢

此孔子聖蹟圖者、我曾祖父前相州刺史日新翁為之屏障、置之座右、以其備其觀覽矣、予幸繼其芳躅、將広曾祖父之業、因命画師等林摹之、以欲使我孫子仰聖蹟於百千年之後、今寄附之於高野山、所冀、此圖之設、与山弥高、与水弥長、聖道之伝、垂諸無窮、寄附之志、在茲而已、

二四・〇三

呈大明使書

前賢

日本国薩摩州刺史藤原家久、謹上書 大明国天使両老大人鈞座下、
伏以 天使奉 詔命、不憚万里鯨波、遠至於琉球小島、^{*1(總)}我雖未接光霽、望盛德於千里之外矣、先是、華人茅国科在朝鮮与日本者三四年矣、我恭敬皇朝之余、遣船并差喜右衛門尉、送還於中華之地、未審、^{*2(舊)}国華勇健否、迄今令人起此思矣、今幸官船招喜右衛門尉、忻甚々々、想是両地不通商舶者三十余年、頗以為慊矣、恭惟天使両老大人感我恭順之誠、自今以往、年々使 ^{*3(舊)}中恭商舶來於我薩摩州、阜通財賄、何幸如之、然則皇恩德沢、当永矢而弗諼矣、謹此拝献金屏二双小篋三重二箇、伏乞、各々笑納、臨楮不勝瞻恋、仰祈 尊照、不宣、

- * 1 東大本、都城本「島」。
- * 2 東大本、都城本「華」。
- * 3 東大本、都城本「華」。

二四・〇四

与大明商客

前賢

大明泉州商客許麗寰留滯於我邦者、一寒暑矣、今年艤舟於我久志浦、回於大明、明年再渡之時、不幸而舟雖至他州里、使我一小吏至於其地、子亦待吏之至以定器皿貨財之価、其自利利子者、全無毫釐之差、^{*1(舊)}是今子之志、而我之所望亦在茲而已、其盟之堅者、金石膠漆、物莫能間、子其念之、

- * 1 東大本、都城本「今」。

二四・〇五

与大明福建軍門書

前賢

琉球国王尚寧、上書 大明国福建軍門老大人閣下、恭審、小邦去日本薩摩州者、僅三百余里、以故、三百年来、以時獻不腆方物、修其隣好、頃有不肖齎夫、緩其貢期、是故薩摩州進兵於小邦、^{*1(舊)}々々荒墟者、誠天之所命、而我亦以無苞桑之戒也、不幸而為其俘、^{*2(舊)}因在薩摩州者三年矣、州君家久公、外好武勇、内懷慈憫、待我以待賓安之礼、^{*3(舊)}々遇之原者三年一心、加之送還我於小邦、於是吾民之歌於市、拊於野者、茲非幸歟、州君寄言於我、其之言曰、夫邦国在四方也、有金玉者、或不足乎錦繡、有粟木者、或不足乎器皿、若有余

而不散、不足而無聚、民用不足、而其貨亦腐、惟坐而待腐、不如、通其有無、各得其所矣、日本非無金玉器皿、其土宜質素而不及於中華之文質彬彬、是故使我參謀於兩國、一以使日本商船許以容之大明辺地、二以使大明商船來我小邦、交相貿易、三以使一遣使年々通其貨之有無者、匪翅富兩國人民、大明亦無為倭寇嚴備兵衛矣、三者若無許之、令日本西海道九國數萬之軍進寇於大明、々々數十州之隣於日本者、必有近憂矣、是皆日本大樹將軍之意、而州君所以欲通兩國之志者也、伏冀、軍門老大人、於斯三者、許一於此、我小邦大沐大明之德化、且遂日本之夙志、是亦天朝恤遠字小之仁心也、若然則永守*5薄*6職無生貳心、遐方嚮化之念、沒世不忘也、伏楮伸鄙忱仰祈、

- *1 東大本、都城本「囚」。
- *2 東大本、都城本「安」。
- *3 東大本、都城本「厚」。
- *4 東大本、都城本「木」。
- *5 東大本、都城本「藩」。
- *6 『南浦文集』はこの後に「尊炤不宣」とある。東大本、都城本は県図本に同じ。

二四・〇六

与蛮君書

前賢

日本国薩摩州刺史藤原義弘、謹復書于 呂宋国王郎敝洛黎勝君迎足下、周易曰、日中為市、致天下之民、聚天下之貨交易而退、各得其所、聖人之言、百世豈可廢哉、我聞、呂宋之為地、国富民豊而南

商北賈往還如織、不亦繁華之地哉、我日本与貴国遙雖隔大洋、仰光華於千里之外、是亦山厨羅明教院巴礼之所能知也、前年憑伏巴礼、求貴国商船載貨來、而富我国家、非翅欲富国家、若其迂貨之有無、国家之人民各得其所、聯遠之交、亦豈有離貳哉、夫玉之為美也、韞匱而藏之、則不為天下之用、海貨蛮珍、無不皆然、不以其所有易其所無、則其用不均、而其貨亦終是腐而已、伏乞、足下圖之、去歲所發之一双船大洋波穩而着我一島*1、繫纜者有日矣、非不思患而予防之、逆風俄起、折樹木揚砂石、吁、時乎命乎、船忽破矣、我不忍見之、新造一船、順風揚帆令商客歸焉、惟願、足下憐我愚誠、來歲薰風自南之節、使一船載貨來貿易、所須各得如意、若然、則我国山川草木亦蒙其光彩、況国家人民乎、伏冀照亮、不一、

- *1 東大本、都城本「島」。

二四・〇七

答蛮君書

前賢

日本国薩摩州刺史藤原義弘、謹復書于 呂宋国王巴礼王揭順微积囊郎輝来綿倪黎明勝蜜挨氏、政此仰慕忽辱雲翰、展玩再回、宛然如拜貴面於千里之外、甚幸々々、茲者山厨羅明教院巴礼止息於陋邦者、有年於此矣、我觀其為人、智慧過人、風標拔俗、是故我敬信焉、一諾之信、終始豈有渝乎、恐是陋邦僻地、難久処約、念茲在茲耳、吾子朝 国王之日、其亦以是語之、去歲一船大洋不揚風波着我陋邦、不幸而狂風怒濤搖動坤軸、船亦為之飄蕩、我不忍視之、新造一船、以為船客歸国之計矣、伏願、自今以往、歳々使一船載貨來而貿易、是亦兩地聯遠之交、豈復有絕期乎、又蒙送来緞子一端、烏陀羅

氈一卷、拝而受之、愧無酬厚意、今也臨紙惘然、伏乞、照亮是祈、

二四・〇八

答南蛮船主書

前賢

去歲拝別之後、不問安否、非敢怠之、海雲万里、便不的也、不意賜一書信、匪翅拝視吾子之書信、国司四老亦辱賜數行書音、蛮字件々、重訳以頗解其理、未敢不為慊矣、去春我国商船、將赴安南大洋過風、檣傾^{*1}楫摧^{*2}、幸而到於広東之地、辱蒙蛮君之深恩、修檣与櫂、前月回於我日本肥州五島^{*3}、雖未回我州、舟人無恙、是亦出於蛮君之仁心、且復有絲緞之賜、何以謝之、即憑伏吾子、以呈報書於四老、吾子其詳説之、自今以往、若有求於我者、使通事者報之、我亦有來於貴邦者、他日使一价以告之、貴邦安泰、陋^{*4}邦亦無事、珍重不宣、

*1 東大本、都城本「遇」。

*2 東大本、都城本「楫」。

*3 東大本、都城本「島」。

*4 底本は挿入の印(○)のみあつて、文字を頭書せず。東大本によつて補う。

二四・〇九

答南蛮四国老書

前賢

胡越天涯、未通音書、不意芳信、數行蛮字、不知其旨趣如何、使人重訳以漸解其理者十而一二、其八九未能解之、是故無由詳謝之、去春我国商船將赴安南路、遇黑風、飄隨於広東之辺地、幸蒙国司四

老之深恩、舟人無恙、前月回日本肥州五島^{*2}、是亦国司仁心之所及也、仄聞、貴邦上下各得其所、我陋邦亦士農工商之四民不闕其一、貴邦商客之所得而能知之也、今也雖雖欲諄諄然説之、夷語難酬、伏乞亮察、

*1 東大本、都城本「墮」。

*2 東大本、都城本「島」。

*3 「雖雖」、東大本、都城本も同じ。『南浦文集』は「今也雖欲」。

二四・一〇

寄呂宋国船主書^{カシケン}

前賢

一別之後、已闕三霜、思慕之心、未嘗頃刻有忘之也、先年吾子在我一島^{*1}之日、俄有狂風而破其船、災厄之所及、非人之所可得而測也、豈可遯乎、所送之一船、大洋無事達於貴国、甚慰所望、不勝忻抃、去秋使一船主復來於我陋邦、想是、旧盟不渝者乎、且復一封之書、我雖未解貴国文字、開緘頗覺其情之厚、忻幸々々、我聞商之為言、商也、商其遠近通四方之物、以聚之、伏希吾子使貴国商船年々商陋邦之所無通貴国之所有者、何幸如之、我之所求在茲而已、巴礼道体康健、人之仰其德者、風行草偃、吾子其察之、今吾子并婦人所投贈者、皆難得之貨也、一々拝受焉、我今呈吾子、以金屏風一双、寄婦人、以酒肴之一器、雖不腆之物、々々以遠至為珍、伏乞併以笑納、恐懼不宣、

*1 東大本、都城本「島」。

二四・一一

答安南国書

^{*1} 日本薩隅日三州太守藤氏家久復書于 安南布政州右奇副將北軍都督府都督同知華郡公、我聞 貴国土宜土風、而仰慕者年尚矣、今^{*2} 展雲翰、展玩再回、宛然如拜貴面於千里之外矣、幸甚々々、伏蒙珍貺、却之不恭、件々領焉、我國未嘗一有之、誠不意之芳慧也、且復有都元師總国政尚文平安王之命、而欲通好交隣、兩地雖隔万里滄溟、交信之約、豈有渝乎、伏願自今以往、歳々以其所有易其所無、則兩國所須、各得其所、是亦兩地聯遠之交、豈復有絕期乎、今也使船主洪玉山夥長郭慧田二人、艤一隻船、裝載方物、且贈以戎衣拾領、長劍拾枝、弓韌各拾具、硫黃壹万斤、所愧少些之儀聊伸通問之忱、伏惟笑留、

*1 『南浦文集』「日本国薩隅日」。東大本、都城本は異図本に同じ。

*2 東大本、都城本「辱」。

二四・一二

答琉球国王書

前賢

遣国使之次、書音及予、々今隱遁、久不干国家之事、貴国之所得而知也、豈受書音并珍貺乎、欲固辞之、則伝書者、数臨門以請納之、濫受之、則不當於理、終辞之、則似違於礼、無奈之何、強而拝受書信者也、羽林次將忠恒知国者、殆乎十余年矣、自今以往書音無絶、永不爽旧約者、予之幸也、他後書音、縦及予之隱扉、終辞焉、況珍貺乎、伏乞思之、余無可言者、不宣、

二四・一三

呈琉球国王書

前賢

貴国之去我薩州者、二百余里、其西^{*1} 島東嶼之相近者、僅不過三十^{*2} 拾余里、以故時々有聘問聘礼、以修其隣好者、其例旧矣、就中、我宗子之嗣而立、則面青雀黄竜於其舟、以使紫其衣者黄其巾者二人為其遺^{*3} 使、篋厥玄黄來、而結髻於右髻之上者、奏衆樂於庭際、蓋致嗣子之賀儀也、今也遣崇元寺長宜謨里主、載其方物來、以賀我家久之嗣而立、又攀旧例也、我今寄言於国君、勿以我之言厭之、日本六十余州有源氏一將軍、以不猛之威發其号令、尺土無不献其方物者、一民無不歸其幕下者、是故東西諸^{*4} 候、莫不有朝覲之礼、我今雖去覲府之任、每歲使親族之在左右者、行以致其聘礼、況家久為国之宗主、豈不述年々之職乎、貴国亦致聘礼於我將軍者、豈復在人之後哉、先是我以此事告於三司官者数矣、未聞有其聘礼、是亦非三司官懈於内者乎、今歲不聘、明年亦懈者、欲不危而可得乎哉、且復貴国之地隣于中華、々々与日本不通商舶者、三十余年于今矣、我將軍憂之余、欲使家久与貴国相談而年々來商舶於貴国、而大明与日本商賈通貨財之有無、若然、則匪翹富於吾邦、貴国亦人々其富潤屋而民亦歌於市、扑於野、豈復非太平之象哉、我將軍之志在茲矣、是故家久使小官二人告之於三司官、々々々不可、將軍若有問之、則家久可如之何哉、是我夙夜念茲、而不措者、古者善計国計家者、雖大事小者、有隨時之宜而為之者、況復小之事大者、豈為之背於其理哉、其存焉、与其亡焉、共在国君之舉而已、伏乞図之、

*1 東大本、都城本「島」。

*2 東大本、都城本「十」。

*3 東大本、都城本「遣」。

*4 東大本、都城本「侯」。

*5 『南浦文集』「不措者也」。

二四、一四

呈琉球国王書^{*1}

前賢^{*2(巻)}

貴國之去我薩州者、二百余里、其西島東嶼之相近者、僅不過三十余里、以故時々有聘問聘礼、以修其隣好者、其例旧矣、就中、我宗子之嗣而立、則画青雀黄竜於其舟、以使紫其衣者黄其中者二人為其遺使、^{*1(遺)}筐厥玄黄来、而結髻於右髻之上者、奏衆樂於庭際、蓋致嗣子之賀儀也、今也遣崇元寺長宜謨里主、載其方物来以賀我家久之嗣而立、又攀旧例也、我今寄言於国君、勿以我之言厭之、日本六十余州有源氏一將軍、以不猛之威發其号令、尺土無不献其方物者、一民無不歸其幕下者、是故東西諸候、^{*3(候)}莫不有朝覲之礼、我今雖去魔府之任、每歲使親族之在左右者、行以致其聘礼、況家久為国之宗主、豈不述年々之職乎、貴國亦致聘礼於我將軍者、豈復在人之後哉、先是我以此事告於三司官者数矣、未聞有其聘礼、是亦非三司官懈於內者乎、今歲不聘、明年亦懈者、欲不危而可得乎哉、且復貴國之地隣于中華、々々与日本不通商舶者、三十余年于今矣、我將軍憂之之余、欲使家久与貴國相談而年々来商舶於貴國、而大明与日本商賈通貨財之有無、若然、則匪翅富於吾邦、貴國亦人々其富潤屋而民亦歌於市、扑於野、豈復非太平之象哉、我將軍之志在茲矣、是故家久使小官二人告之於三司官、三司官不可、將軍若有問之、則家久可如之何哉、是我夙夜念茲、而不措者也、古者善計国計家者、雖大事小

者、有隨時之宜而為之者、況復小之事大者、豈為之背於其理哉、其存焉、与其亡焉、共在国君之舉而已、伏乞図之、

*1 二四、一三と同文ながら若干の異同がある。なお、東大本、都城本にもこの文章は載る。

*2 東大本、都城本「島」。

*3 東大本、都城本「遣」。

*4 東大本、都城本「侯」。

二四、一五

吊戦亡文

前賢

通昭按川上久国翁記曰、邦君泗川大捷明日聚斬首三万八千七百十七、和平成之後、会明客三人及寺沢志摩守内藤飛驒^{*1(驒)}守於泗川本營、義弘公問明兵泗川死亡之数、明客答曰八万人、故建石碑於高野山之時誌銘曰、斬敵八万、蓋此文歟、

大相国秀吉公武勇過人、聰明尽性、自壯歲有括囊四海、并吞八荒之志、是故日域六十余州、尺土無非其有、一民無非其臣矣、天正壬辰之春、征伐朝鮮、々々八道悉属我封疆、独全羅一道、革面而不心服、於是 大相国令日域諸軍相攸築城、守其藩籬、我薩隅日三州士卒亦以其命守要害之処矣、夫以師旅之興以殺伐為事、不無傷財害^{*2(風)}人、死生存亡繫焉、可不慎乎、受命以来、風夜憂慮、恐其命不效、故除戎器械不虞、以使衆士少不怠於防嚴、丁酉之秋、諸軍合兵、再攻全羅道南原、伏尸者数千余、使我軍斬首者四百二十余級、是皆以相国之命也、戊戌之秋、大明率数十万之兵、来求和睦、日域諸軍亦相議、以和、我泗川亦欲挾日而修会盟、小春之朔、大明兵偽攻我泗

川、不得已、以戰、當其兵刃既接也、棄甲曳兵而走、我軍士乘勝追亡、逐北伏尸八万、流血漂鹵、我軍中無亡矢遺鏃之費、是天之所与、而非人力之所能測也、大明諸軍矢竭弦絕、終乞降於我、々獲其將茅國科為質、共載全師而歸、自壬辰至戊戌、在朝鮮經寒暑者七、其間我士卒之死者不知幾百千、況朝鮮乎、嗚呼時耶、命乎、^{*3耶}人未可知、天地為愁、草木淒悲、若吊祭不至、精魂豈有依乎、不勝哀傷之至、循猗氏之法、造立浮圖、以吊自他之精靈、且復祭以卑詞云、天假援兵、令吾解難、提三尺劍、坐定胡漢、伏八万尸、不終一旦、造立浮圖、以起悲歎、看他万靈、遍到彼岸、

*1 東大本、都城本「驛」。

*2 東大本、都城本「夙」。

*3 東大本、都城本「乎」。

二四、一六

祭亡友義則文

前賢

維慶長二十年乙卯三月朔丁未、同二十五日辛未、前予州刺史本鄉義則公、不幸而示滅於寢室矣、心友^{甲某}不勝哀悼之至、謹獻香華、祭以卑詞、々曰、

嗚呼公之為人、内含剛直、外重禮義、其先播州赤松氏之一族、而事薩州元帥、人皆稱其才以為不器、惟天付公、以瑰奇俊偉之材、胡為不付以令子令孫之嗣公之狷介、不求聞達以進諂容、公之勇氣、不誇富貴以逞私智、學道無倦、其義理靡一而不明弁、讀書無厭、其終始靡一而不聞記、若夫挽千鈞之強弩、不屑李將軍之射於其石、書八法之永字、不異王右軍之拔乎其萃、是故、常帶筆黑、更手拾遂、或入

禪匠之室、直舉話柄、或窺儒閣之奧、親携經笥、恭行於己、己不伐、德信於人、人皆醉、嗚呼、我昔未逢公也、吾徒之在門者、無一助我者、今自得一識於公、公裨補闕漏、使我老而曉事、今公作方外之遊、以枳形骸之累、國都之人、識與不識、聞其訃音以莫嘆惜、況於朋友之同志乎、今我倚柱尋思、耿耿不寐、將謂盛化於異邦、豈意埋玉於此地、追之無及、西望灑淚、挽詞一章、香烟一燧、靈如有知、鑒我誠至、嗚呼哀哉、尚饗^{*1耶}

*1 東大本、都城本「饗」。

二四、一七

跋兵術書後

代羽林公

本邦武家者流、學文講武、以為我業、蓋世治則以文愛民、大服國家之衆、世亂則以武威敵、全衛封疆之界、由此觀之、文武豈可偏廢哉、予自少之時、學孔孟之書、雖未窺仁義之原、頗探札藥之緒、且復學韜略之書、聞權變權術之說、行有余力、則以學兵術之奇正、是亦武家之一藝也、是故四方之士、鳴於此術者、經歷此國、則吾未嘗不得見也、雖然、無出群拔萃之士、於是以為兵術殆熟、無當我鋒者矣、小臣東鄉藤兵衛尉學此術者年尚矣、平素雖聞之、未見其術之至与否、慶長甲辰之仲春、使尉揮劍、其揮在自得、而其妙出于自然、予謂尉曰、學之之師、誰人乎哉、抑亦尉之自得之妙、可得而聞歟、尉曰、曩昔在京師之日、遇一道人說兵術奇正之理、語高而旨遠、輒不得解之、數加工夫、晨夕不怠、一旦豁然貫通、得其直指、不覺手之舞之足之蹈之、始覺此術之出于自然、々々自得之理、道人昔年不以語僕、々亦今不能為主君告之也、鞠躬而去矣、是知、向之所學

者、局於一藝、而今之所伝者、遠出於言意之表矣、宋儒所謂學不言而自得者、乃自得也、有安排布置者、皆非自得也、其斯之謂歟、号之示現流者、取示現神通力之金文也、自今以往、若欲得此妙理者、潛心近求於掌握之中、莫驚虛遠、至於優游涵泳之久、自然得此妙理、勉旃、々々、勿半途而廢可也、

二四、一八

与重位書

前賢

^{*1}島津氏之侍臣、重位公者、生於薩州甕島^(島)之府、長於君臣礼義之郷、予知公者、殆乎十余年矣、其為人也、生今之世、慕古之風、是故無儒無穢、有講古之道者、未嘗往而不倍^{*2}其席也、仕而優、則点雪花雨脚、以嘉賓於茶室、詠而帰、則画春蘭秋菊、以得精神於筆端、加之、学人丸之詠島陰舟、学叔夜之巧柳下鍛、不啻名一藝貪多務得、夜以繼日、常之言曰、我以道之所存為師之所存也、亦何常師之有、其所志之厚者可知也、公素嗜兵術、極其蘊奧矣、一日茶話之次、予謂重位曰、公之所学真無常師、学兵術者亦無常師乎、公曰^{*3}、先是、天正年間、大相国太閤殿下秀吉公、東西一征之後、築聚落之城於京北、以為天下壯觀也、四方諸候爭先朝之、我島津氏竜伯尊君亦在聚落者有年矣、和尚之所得而知也、若我之輩亦随侍、尊君以在京華者數回矣、於是之時、遇一道人自東関而來、説兵術之奇正、言近而旨遠、所謂精義入神者乎、於是温故知新之心、欲罷不能、見道人之志不從、又敬而不違、頻敲道人之関者、一寒暑也、道人曰、如子之才、可謂美矣、然而自古才之美多、才之成者寡、学能為己、而終日乾々者、能成其才、学惟為人、而汲々於利者、豈能成之乎、孔子曰、才難、不其然乎、子其切問而近思、兵術之妙、在其中矣、至

於心術之微者、如輪扁斲輪、不徐不疾、得之於手、而応於心者也、有海之口、何以説之、有溪之舌、何以弁之、若夫鹵莽厭煩速成亟走者決無有成之理、子其勉之、我聞道人之言、夙夜思之、工夫不怠、一旦豁然默契其指、如夢而寤、如醉而醒、始覺此術之無窮尽也、予聞公之語嘆曰、富哉、道人之言甚哉、子之能勤而造其道也、宜乎、識者之以子為極兵術蘊奧也、是歲甲辰之仲春、予侍坐^{*4}羽林尊公^(公)於甕府公宮、尊君講學之余、告予曰、我素好兵術、見善於此術者数人学焉、以為殆熟、近使重位揮劍、其自得之妙遠出于言意外矣、我封内得兵術之妙者、惟重位一人而已、予謹聞、尊君之言、喟然歎公之妙于此術也、尊君有一劍、々々中刻南無大悲觀世音菩薩之九字、賜公以褒其術之有成、公珎戴以領之、予觀此盛事、欽服有余、人之瞻望咨嗟者、駢肩累迹、豈止夸一時榮一郷哉、公之子葉孫枝億万年之榮也、於是乎、人皆相聚而言曰、公之深秘此術者美玉之韞匱而藏諸之比、而今蒙、尊君之恩寵者、待其賈者也、可嘉尚耳、重位謂誰、東郷藤兵衛尉也、

*1 東大本、都城本「島」。以下「島」については同じ。

*2 東大本、都城本「倍」。

*3 『南浦文集』「重位公曰」。

*4 東大本、都城本「君」。

二四、一九

隅州願成寺鐘銘

前賢

隅州帖佐郷願成寺者、前薩隅日三州太守惟新尊君所草創之精廬、而運譽上人修念仏三昧之道場也、草創未幾、殿堂門廡漸成、庖廩井

竈具備、於是乎安千仏於宝座、香灯不怠、百尔器備僧宝亦足、特以無洪鐘為闕典矣、尊君命治^{*1}工之善於範圍者、新鑄洪鐘懸之小樓、以令諸僧驚晨香夕誦之時而鞭其後者、可謂其志深矣、諸士之各有其業者、聞此鐘聲自起吹灯勤之不忘、莫不成其業矣、若夫農与工商放於利而行者亦聞聲而遠塵離垢、偏赴仏地、加之、人人勤其業、而庶且富者、是皆尊君信力之所致也、雖曰後五百歲、人皆樂其遺化沐其余沢、愈久而人愈思慕焉、愈遠而人愈欽仰焉、大覺世尊之所謂、現世安穩、後生善処、金口要文、復奚疑、銘曰、

我君威武、能屈人兵、帰依三宝、意抽至誠、草創精舍、掃棘擺荆、命巧治者、新鑄華鯨、声問^{*2}兩岸、響徹八絃、警發蒙昧、引接迷情、六窓深閉、一擊忽驚、南商北賈、日々送迎、霜晨月夕、浦々鏗鉤、下自士庶、上至公卿、聞者遺世、何願不成、今此蓮社、不虛其名、一鐘之德、安国安氓、何止孫子、千万年榮、

*1 東大本、都城本「治」。

*2 東大本、都城本「聞」。

二四・二〇

淨光明寺上梁文

前賢

釈教之書曰、息縁俟務是至人之大量也、縁者外物也、外物非色欲、而何息色欲者、勤儉者之所為、而至人之大量也、儒教亦曰、以德服人者、中心悅而誠服也、德者得也、行道而有得於心也、非有得於心者、何以有其中心之悅而何誠服之有哉、人有威猛、則無不服者矣、咸服者面革而非心服也、歲月久而不變者、非心服而何敢當之乎哉、

薩摩州覽^{*1}島郡淨光明寺者、無量寿仏之道場也、山名松峯、島^{*2}

津高祖忠久公領此三国之時、与一遍上人之流垂宣阿俱共来而同居此国、權輿於無量寿仏之本堂、其權輿不知幾年月之久矣、先是 忠国公有修造仏堂者、其完葺之板、漫生其翼、十一代住持不忍視之、雖有修補之志、然未敢果矣、尔来歷年月者久、而匪甞板之生其翼、材木亦腐朽矣、十三代之住持又不忍視之、修補之志、造次顛沛、未嘗忘之、然而短臂不及痒処、思而未果者、殆^{*3}矣、十年、寸積尺累至於今年戊午、歷十一年歲月、而其功成矣、我素以俟而易、足為其用矣、二三有司聞之於 薩州殿下家久公、々々本有修補之志、与住持之志如合符節、使完葺之板十二万而寄附之於本堂、於是我願既滿、衆望亦足、伏願、上梁之後、燕雀喜成、竜象接武、法道隆替、接待由人、精廬廢興、進止在我、或勞手藝、或勞心力、自誇其功、或執斧斤、或執刀鋸、各審其技、画藻於梁上、刻山於柱頭、寺前寥々、山入白樓、潮生滄海、庵頭寂々、僧帰夜月、竜出曉堂、四時無一点之災、八節有太来之慶、至祝至禱、々々至祝、

*1 東大本、都城本「島」。

*2 東大本、都城本「島」。

*3 東大本、都城本「乎」。

二四・二一

朱氏詩伝膏^{*1}盲後序

太宰春台

詩無古今而有古今焉、有古今者辭也、自三百篇、歷漢魏六朝以迄于唐、所異者辭、而其所以道性情者、未始不同也、宋儒不知詩、見三百篇之列于六經、則視三百篇之詩、如聖人之言、於是說詩者、一句一字、必求其義、其疾也固、遂以三百篇詩為經、漢魏以後詩為

詩、自是古今之詩、岐為二途、學者惑焉、殊不知六經者、聖人所以治天下之具、而詩其所以達人情也、夫人情無古今之殊、則詩之所以達之、亦豈有古今之殊哉、宋儒之於詩也、可謂謬矣、純少從宋儒之說以治經、又好唐詩、略能為之、後見徂來先生而問詩焉、先生曰、今之詩猶古之詩也、知言哉純退而思之、久之忽悟詩無古今、有古今者辭也、苟得其辭、則三百篇可為于今也、其所以道性情而咨嗟詠歎者、極宇宙無以異也、大哉詩乎、予既有得於唐詩、遂沿流而上、至於風雅頌詩、則視三百篇猶唐詩也、於是顧視旧所為宋儒詩說、譬如執繩墨以臨曲木、不待睨而見其曲焉、豈不媿快哉、夫宋儒唯朱氏為大家、而朱氏之學、枳氏之學也、朱氏之書、唯詩傳為其所不甚用心、故比他所著、猶為寡過、予故著此以示同志、初學幸得是一隅、而能以三隅反、則庶乎其可與言詩已矣、

*1 東大本、都城本「盲」。

二四、一二

讀朱氏詩傳

前賢

甚矣仲晦之晦^{*1}于詩也、夫詩者何也、人情之形於言者也、人無不有情、而情各不同、人君有人君之情、士大夫有士大夫之情、庶民有庶民之情、奴婢臧獲^{*2}有奴婢臧獲之情、男有男之情、女有女之情、父母有父母之情、子有子之情、兄弟有兄弟之情、君子小人皆有其情人、無不有情、惠子曰、人而無情、何以謂之人、情者實也、無偽之謂也、君子不知人情、不可以蒞民、為政而不知人情、必有不行、是故、古之君子、患不知人情、而必欲知之、然人情難知、人情之所以難知者、蓋以自王公以下、至於家人父子男女之間、為情各殊、必也

身處其地、親為其事、然後有以知其情、君子正其衣冠、尊其瞻視、安居華屋之下、苟以求知小人之情、不亦難乎、又況人主在九重之內、而欲知閭巷人情、難之難矣、今夫詩者、人情之形於言者也、三百篇其盡之矣、天下人情于何有不有、君子誦詩、不出戶庭、可以知天下人情、知天下人情、然後可以施政蒞民、此詩之所以有用於政事、而知人情者、為政之大經也、六經之有詩以此、仲晦乃以天道人事、皆備於此、而無一理之不具、豈不謬哉、鄭康成譜、謂二南為風之正經、大序云、變風發乎情、止乎禮義、自邶以下十三國為變風、此固傳說也、雅亦有正變、所謂正變者、以詩人所處順逆為言也、仲晦乃以邪正是非言之、豈不謬哉、如果以邪正是非之弁、則詩者孔子所刪、君子教人、以其正而是者足矣、何為存其邪而非者乎、仲晦必以勸懲言之、夫懲惡勸善者、春秋之旨也、春秋者、實錄也、故善惡皆書之、惟仲尼因而修之、明褒貶、行賞罰、以勸懲之、所以立王法之大經也、仲晦乃以是說詩、豈不謬哉、夫詩無定義、以為勸善、則三百篇皆勸善也、以為懲惡、則三百篇皆懲惡也、詩之不可為典要邇尔、古人立言引詩、傳記所載可見矣、莊子曰、詩以言志、趙成子曰、詩書、義之府也、言天下之義、盡藏于此也、皆知言也、夫子稱子貢子夏可與言詩、其旨在斯、韓嬰之作外傳、亦是物已、仲晦乃一切以善惡判之、何其固也、^{*3}辟之如滄浪歌、仲尼聞之、以為自取之、漁父賦之、以喻其不凝滯於物而與世推移之意、孔子所謂是、則漁父所賦非也、漁父所賦是、則孔子所聞非也、不識仲晦以為何如、孔子曰、其為人也、溫柔敦厚、詩教也、若持是非之論、而偏乎好惡、則豈溫柔敦厚之意哉、夫事必有因由、詩之有序、且言其所由作耳、非有深意也、若執以說之詩、尤非聖人所以垂教之意也、仲晦必以邪正是非斷詩、見序說或不通、因疑之以為不足信、亦其固也、

史記所稱、孔子刪詩云者、如後世所謂選詩也、詩者君子所諷誦詠歌也、故不可不美其辭、孔子所刪、々其不美者也、仲晦以刪其善之不足以為法、惡之不足以為戒者、豈不謬哉、夫先王之道在六經、而詩居其一焉、六經者所以為天下也、六經各有其用、六經闕一、不可以為邦、仲晦說詩乃曰、修身乃家、平均天下之道、不待他求而得之於此矣、豈不謬哉、果如仲晦所云、則聖人之道、唯詩之一經而足矣、何以立六經為、信仲晦之言者、必將廢他經、是何異於釈氏執一經、而曰仏法畢具於此哉、三百篇詩、多不詳其作者、有士大夫所為焉、有出於閭里細民之口者焉、^{*6}惡之其人豈皆君子哉、惟其言也、善惡皆出於情美、故能尽天下理義、後之君子有取焉、豈可概為孝弟忠信礼義之譚哉、仲晦不知詩、以為不道孝弟忠信礼義之言、非詩也、豈不謬哉、夫務治心者、釈氏之道也、聖人不必、仲晦乃以心語道、及其說詩、亦必以心為言、惑矣哉、夫詩者、人情之發也、豈可以心言哉、非徒不可以心言、亦不可以道言、必以心与道言、仲晦之所以為不達于詩也、不啻仲晦為然、大都宋儒皆然、詩之衰于宋、職此之由、哀哉、此不特詩之厄、廼道之厄也、有志于復古者、可不為痛哭乎、客問曰、然則今人學詩如之何、曰、從毛鄭及尔雅訓故、以求其義、不問作者之賢否、不議言之邪正、但誦其辭、朝夕諷詠、以求其為人溫柔敦厚而不愚、可以興、可以觀、可以群、可以怨、可以事父、可以事君、可以多識於鳥獸草木之名、与夫可以言、可以達於政事、可以使於四方而能專对、可以不牆面而立者、此古人學詩之方也、孔子之教也、若仲晦者、非徒不知詩、惡之乃不知聖人之道者也、余故書此、以示二三子學詩者、仲尼復生、不易吾言也、

*1 景岡本、東大本、都城本いずれも頭書「昧」。ただし、挿入あるいは変更の場所を示さず『文集』により「晦」を「昧」に変更する意とする。

*2 東大本、都城本「獲」。

*3 東大本、都城本「譬」。

*4 東大本、都城本「謂」。

*5 景岡本は「執詩以說。詩」とあり、上部欄外に「之」を書く。『春台先生文集』では「執之詩以說詩」。東大本は「詩」を見せ消ちに於て「之」を頭書。

*6 東大本、都城本「要」。

二四・二三

聖學問答序

前賢

自孔子没、而聖人之道、古今有二大厄、曰、秦皇焚書一厄也、宋儒說理、二厄也、然秦皇之焚書也、當時天下咸知其非、宋儒之說理也、人不知其非、矧乎書雖焚於秦、猶有匿之者、且道存乎人、是以漢興、人^{*2}与書出、而道由是興、易所謂不遠復、無祇悔者也与、自宋儒說理而來、至於今七百年、天下夢々、人不復觀仲尼日月之光、而其末流或為浮屠、或為天主、或為鬼神、譬猶陵舄得蔭棲而為鳥足、々々之根為蟻蟻、其葉為胡蝶也、变化至是、人復誰知其所自來者哉、邈矣乎聖人之道也、由此觀之、宋儒之禍道、過焚書也、我日本學者、亦人^{*2}宋儒理窟而不得出百有余年、往者有伊藤氏、独能出理窟而首鄒魯之道、實為豪傑、惜其所見狹小、未達先王所以道民之故是猶未免為義理之學也、及至徂來先生、超乘而上之、以六經為學、以孔子為歸、以論語為規矩準繩、而不取孟子以下、遂能俾先王之道、昭晰乎万世之下、其功豈不大哉、雖然、三軍之走、非匹夫所

能止之、雖勤何益、不如卷而懷之以俟智者也、純少之時、亦嘗一入理窟、心實未安焉、後從徂來先生、聞先王之道、退而熟讀六經論語孝經、皆得其旨、廼知仲尼之可尊可信、而自孟子以下、非尽孔氏之道也、於是下視宋儒之學、猶飽太牢而後就糟糠、無所下箸也、可厭可惡、莫此為甚、廼有客來投吾間、問以古道、予不得已、答以所聞、客悅曰、善哉、願子遂筆之以為贈、予廼悉次其語、釐為一編以授之、書以國字者、苟便初學也、此為序、

* 1 東大本、都城本「萃」。

* 2 東大本、都城本「入」。

二四・二四

論語古訓序

前賢

先王之道、存乎六經、而六經傳自孔氏、則仲尼之所以有功於先王、而有德於來世者、六經其至矣夫、嗚呼、^{*1}微仲尼、六經其亡矣乎、六經亡、則先王之道不可復見已、夫刪詩、敘書、記禮、正樂、贊易、修春秋、此仲尼之所以奉答天命也、至其平日所與門弟子言者、廼六經之奧義、聖人之秘旨也、門人更記而傳之、其一為孝經、其二為論語、其三為家語、漢時其書皆出、孝經有二本、曰古文也、今文也、古文者孔安國傳之、今文者鄭玄注之、後雖有說者、不得不依二家、家語唯有王肅注、至於論語、自安國而下、諸儒率有注解、及魏何晏作集解、於諸家本書、取一遺百、由是諸家遂廢、而集解獨行於世、其後梁皇侃作義疏、唐陸德明作音義、宋邢昺作正義、皆宗何氏、不訪其他、然後古訓存者寢微、^{*2}及宋中葉、二程唱道於河洛、則以心法為教、以窮理為學、夫然後仲尼之教、始與程氏相亂、先王

之道、竟為山林獨善者之所行矣、朱熹氏繼作、而其說大行於宇內、於是論語獨有朱氏集注、為學者所宗、而古訓遂廢、豈不哀哉、純聞諸師曰、先王之道、論定於仲尼、故名其書曰論語、仲尼非先王之法言、不敢道也、然則論語者、非孔氏私家之言、廼先王之法言也、自朱氏學行、而先王之法言、與程氏同歸、所以然者、違古訓也、芒々宇宙、豈無明智之人哉、廼為邪說所亂、莫能撥之者、蓋六百有余年矣、夫天下之道、一治一亂、率有常數、今吾道之亂、已過其數、天豈有意邪、我邦治平百年、道藝之士、起者相望、於是自有徂來先生者出、實能出乎其類、拔乎其萃、超末師而直師聖師、取微於六經傳記而不詭、式古訓而有考、其於仲尼之道、猶披雲霧而覩青天、及其指而示之也、苟有目者、皆能見之、雖有愚者、曷疑其非是乎哉、子貢曰、仲尼如日月也、非虛言也、夫仲尼如日月、而雲霧蔽之、不亦厄乎、徂來而除之、功莫大焉、純幸得從先生而問論語焉、退而潭思專精二十余年、廼略有得於古訓、遂以為為人言、莫不悅者、或勸錄之以遺學者、蓋徂來既有微之作、而其書不載正文、^{*3}賢者以為不便、予今為此者、專為正文明古訓、以便論說、若有為王公說論語者、與吾同志、或有取焉、此區々所以忠仲尼而佐先師也、

* 1 東大本、都城本「微」。

* 2 東大本、都城本「微」。

* 3 東大本、都城本「覽」。

二四・二五

朱氏小學論

前賢

謹案漢志稱古者人生八歲入小學、々六甲五方書計之事、六甲者、所

以紀日也、始于甲子、終于癸亥凡六十日、自甲至癸、十日為旬、六旬則六遇甲、終而、復始故謂之六甲、五方者、東西南北與中央也、學之則知中國及四夷之名矣、書謂作字也、計算數也、此四者人生之急務而萬事之本也、是以天下之人無貴賤凡童子皆學之、然童子之學、僅止于此、他如灑掃應對進退之節、曲礼少儀所記、乃子弟之職、係父兄之所教、不^{*1也}心受諸師也、若夫誦詩讀書雖亦小子之事、則余力所及、實君子之事、非凡學童之所務也、故雖曲礼少儀內則弟子職諸篇所記、多為成童以上之事、豈得概謂之小学乎、朱子以為小学之支流余裔、可謂誤矣、夫既以為是為支流余裔、則其所謂本源領袖者、果何謂也、朱子既不知小学之所以為小、遂著一書、命曰小学、其書六篇、分為內外、內篇有四、曰立教、曰明倫、曰敬身、曰稽古、外篇有二、曰嘉言、曰善行、余嘗讀之、以為朱子所撰非也、夫小学者學也、其書宜記學者之事、今觀朱子所著、首篇曰立教、而其所記皆教者之事也、夫教誨子弟者、父兄之事、非所以告童子也、且篇首所載、胎教之法、乃為人母者之事、童子聞之、將焉用之、朱子以為小学之事、其謬一也、明倫所明者五、一明父子之親、二明君臣之義、三明夫婦之別、四明長幼之序、五明^{*2用}用友之交、父子之親、孝也、長幼之序、悌也、孝悌者、子弟之道、固童子之所宜聞也、仕而后有君臣、男娶女嫁而后有夫婦、既冠而后有^{*3用}明友、此三倫者、皆成人之道、非童子之所急也、夫五教者、司徒之所布、凡民終身之守也、豈可專責之童子哉、況語之以成人之道乎、朱子以為小学之事、其謬二也、敬身之目有四、一曰心術之要、二曰威儀之則、三曰衣服之制、四曰飲食之節、夫敬身者、孝子之道也、童子而聞之、不為無益、惟心術、聖人之所弗道、以非修身之要也、威儀乃礼之所成、而可觀望者也、君子行礼、則威儀在其中矣、安有舍礼而特

修威儀者乎、且童子、事父兄者也、其道以溫恭和順為尚、威儀非事尊長之體也、服、身之章也、君子小人之所以別也、是以先王教人修身、衣服居先、然衣服自有先王之制、弗可踰也、故孝經曰、非先王之法服、弗敢服、君子苟服法服、壹遵先王之制而已、豈得議之乎哉、朱子乃語童子以其制、非所宜也、礼始於飲食、々々之節、人事之急者也、雖童子、不可不講也、惟在童子、則講曲礼中一二節目小者而足矣、若夫食饗燕飲賓主之礼、乃成人之事、非童子所急也、夫治心、積氏之道、非先王之教也、威儀、君子之所慎、非卑幼之宜也、衣服、家長之所授、非童子之所自為也、故敬身之目、惟飲食於童子為近、然亦多係父兄之所教、非小学之所先也、朱子以為小学之事、其謬三也、稽古篇載虞夏殷周聖賢之行事、以實前三篇之言、欲使人有所興起也、意亦不惡、然稽古者君子之事、如尚書所錄是已、小学童子而稽古、亦非其宜也、若必欲令童子記誦故事、當如李瀚蒙求、朱子所著、不若蒙求之便、而篇目亦失其義、其謬四也、外篇載自漢至宋、賢人君子之言行、以廣內篇之意、嘉言廣立教明倫敬身、善、行、稽古、夫內篇既失小学之旨、外篇之謬、從可知也、夫古之小学、如漢藝文志所載、自尔雅而下、史籀蒼頡爰歷博學凡將急就元尚訓纂諸篇、及九章算法、皆所以教童子也、安有如朱子所著小学內外篇者乎、志曰、八歲入小学、學六甲五方書計之事、始知室家長幼之節、十五入大學、々先聖礼樂、而知朝廷君臣之礼、今朱子所^{*4著}者略於學而詳於教、且載大學之事居多、豈不謬哉、又況外篇多載伊洛諸子之言行、不啻文辭驕駁、不便記誦、其道戾乎孔氏、尤非所以訓于童子也、夫朱子本不識先王之道、亦不知古者小学之所以為學、而妄意擬作是書、以誤天下後世之人、其罪不亦大乎、昔柳子厚著非國語、余亦嘗欲著非小学以闢朱氏而未果也、茲論其大綱、以詔同志、

- * 1 東大本、都城本「必」。
- * 2 東大本、都城本「朋」。
- * 3 東大本、都城本「朋」。
- * 4 東大本、都城本「著」。

二四・二六

讀赤穂義人錄

前賢

義人謂誰、謂故赤穂侯孤臣大石良雄等四十六人、攻殺故大行人吉良義英也、孰謂之義人、博士鳩巢先生室君直清也、何以義之、以其殺吉良子也、何故殺之、以為君仇、故殺之、何故仇之、以為赤穂侯之死、由吉良子致之、故仇之、赤穂侯不堪*1②、廷傷吉良子、是大不敬也、雖身死國除、其所自取也、吉良子豈赤穂侯之仇哉、良雄等乃仇吉良子、何其謬也、昔漢高帝無札於趙王敖、趙相貫高趙午等皆怒、陰謀殺帝*2、雖不克殺、天下稱其義、帝亦不敢誅、赦之、以為人臣不當如此邪、夫赤穂侯之死、非吉良子殺之、則吉良子非赤穂侯之仇也審矣、赤穂侯廷傷吉良子、而上賜之死、不為立後、則為刑過當矣、嚮使良雄等拋赤穂城以固請為其君立後得報則已、不則背城與使者一戰、兵盡失窮、然後縱火身與城偕焚、何不可之有、彼果以其刑死於東都者、戰死於赤穂、豈不烈々大丈夫哉、良雄等不知出此、拱手授使者城、惑矣哉、後雖攻殺吉良子、則仇非其仇、不類妒婦之情與彼特為身謀、而微幸萬一耳、何義之足稱哉、夫良雄等既已失之、尚何責焉、室子宿儒、以仁義談說士大夫之間、行年七十、猶尚嗜學、古稱斃而後已、夫子有焉、余獨怪其嘉良雄等所為、而目之以義人、且詳錄其事以示後世、是何見之謬也、室子而不

知義如是、世之憤々者胡足論乎、或曰、鳩巢先生以良雄等死之年著是書、時年四十余、後三十余歲乃沒、我未始親見其人而聞其余論、安知其晚年不自知其非而改之乎、雖然是書已行、而士大夫高先生之義者、誦而伝之、是其為害也博矣、縱有改說、何能救之、哀哉、

- * 1 東大本、都城本「小」。
- * 2 東大本では「殺帝雖」見せ消ち。

二四・二七

讀東厓古今學變

前賢

昔者孔子沒而七十子離散、當是時也、老氏之徒以自然為道、恬澹寂寞虛無為々能、謂仁義道之廢、謂禮聖人之偽、子思嫉之、故著中庸、盛稱仲尼之功德、以明其道可尊也、其意在闢老子之徒、故首謂性為天命、卒以至誠為成德之極功、其所立言、固不可謂不然、惟其因与老氏之徒爭弁、遂言仲尼所弗言、以求勝焉、此其過也、及後世、先王之道、降為儒家者流、其禍實胚胎於此、及其徒孟軻生於戰國、客遊於從衡力爭之間、而以雄弁求知於時君、故其道性善、道誠、皆依子思也、他如曰養浩然之氣、曰人皆可以為堯舜、曰王者霸者、曰良知良能之類、皆非先王之法言、仲尼之所弗道而軻道之、自是厥後、先王之道遂降為儒家者流、而与諸子爭衡、豈不哀哉、夫道自堯舜至文武聖主之所以道民也、六經者、道之所存也、孔子生於衰周而好古、博訪旁求而有得焉、其所稱述、罔非先王之法言、迨其末也、知道之不行於當世也、於是修六經、以伝先王之道於來世、此孔子所以為有功於先王、而有德於來世也、非聖人而能如是哉、宰我子貢有若等、所以盛稱夫子、其意在斯、近時仁齋先生、徒知尊孔子、

而不知孔子之道、乃先王之道、而先王之道、存乎六經、六經伝自^{*1}、故但信論語、而不信六經、以為古書唯有論語、足以尽聖人之道、何問其他、且信孟軻猶孔子、至於謂孟子七篇為論語義疏、可謂惑矣、東厓先生、以家督親受業於庭闈三十年、父没而奉遺訓、讀遺書、反復研究、且二十年、然後達觀古今、而見周季已後、學術之變、不止一再、乃著書三篇以發明之、名曰古今學變、其書成於享保壬寅、復十三年、元文元年東厓没、四年己未、予始得見其書、大意以為聖人之道、一變於漢、再變於宋、觀其為說、自漢歷唐宋諸儒、以至明王氏學、莫不詳論而明弁、我徂來先生則以為洙泗之道、至於子思而小變、孟子而大變、仁齋父子、未始知之、是未可与言學變也、夫六經者仲尼所修也、論語者弟子所記也、故有六經然後有論語、若但有論語而無六經、則後死者何從而得觀^{*2}生^{*3}王之道乎、後有作者、何以為邦乎、吾誠知其不可也、仁齋廢六經而不講、專以論語為教、謂論語為最上至極宇宙第一書、是何異於程氏立宗門者、必執一經而廢他經乎、孟子曰、盡信書、則不如無書、吾於武成取二三策而已矣、此孟子有為言之也、軻他日又曰、說詩者、不以文害辭、不以辭害志、此誠良法也、非唯說詩、於書亦然、仁齋乃信孟子有為之言、遂尽疑六經伝記、以為不如論語之實、此亦所謂矯枉過直者也、余嘗歎反孟子之言曰、盡疑書、則不如無書、豈不然哉、仁齋既廢六經、以為聖人之書唯有論語、可以治天下、故欲令天下之人咸讀論語、舟子車夫奴隸廝養之卒、皆服仁義、此特閭里父兄憂其子弟之心、未可以治天下也、何則以其廢六經也、夫仁齋能奮起於理學滔々之中、而遡洄於洙泗之流、真所謂豪傑之士也、東厓能繼先志而弘其業、古人所謂是父是子者也、然其學不本詩書札樂、則未及孔子之門、一足猶在理窟、此其所見有未尽者也、余故曰、東厓未可与言學變、以其信孟子也、

- *1 『春台先生文集』は「自孔子」。東大本、都城本は異図本に同じ。
*2 東大本、都城本「先」。
*3 東大本、都城本「献」。

二四、二八

讀損軒先生大疑錄

前賢

筑前貝原損軒先生、博學洽聞、海內無比、生平所著書、已刊行者凡數十部、皆有益於斯世、其未刊行者猶有數十部云、蓋先生少學程朱之道、以篤實之性、竭力專精、至老弗怠、其所造寧淺乎哉、及晚年忽疑二氏之言、有異於先聖之道、反復思之、不得其解、卒成大疑、所錄且二萬言、分為二卷、名曰大疑錄、先生謙恭、未敢示人、由美子善少逮事先生、幸得見之、因寫而藏之、及子善之再遊東都也、予与之有旧、子善嘗見我徂來先生、而問古文辭焉、徂來亦善視之、今徂來亡矣、子善視吾二三兄弟、有加於往日、則猶以徂來故也、於是予就子善而求一見大疑錄、三請乃見許、予而後得借而讀之、始知損軒先生信程朱之道如斯其篤、而疑之如斯其大、先生所疑者、自周茂叔著大極圖說以太極本無極、主靜立人極、二程朱氏繼作、盛唱理氣心性之說、其言曰、性即理也、曰、有天地之性有氣質之性、曰、理氣二物、曰、身有死生、性無死生、曰、一陰一陽非道、所以一陰一陽者是道、曰、明德虛靈不昧、曰、天理沖漠無朕、且教人靜坐、此皆老仏之道、非我聖人之道也、又茂叔所云無極而太極、伊川所稱体用一源、顯微無間者、並程氏之言、二子取之以發明易道、非当行也、諸如此類、皆古聖人所弗言、而宋儒言之、此損軒所以大疑之也、夫損軒以宋儒之徒而能疑宋儒、誠奇士也、然疑之而已、未

能排之、且其所論弁、猶在宋儒範圍之中、推尊孟子以配孔子如故、則未能及洙泗之流也、夫仲尼之道、至子思而小差、至孟軻而大差、所以差者、與楊墨之徒爭也、軻之道性善、其実亦苟且教導之言耳、軻急於教導、不自覺其言之違道也、宋儒又不知軻之違道、以為軻實得孔氏之傳、遂以其書配論語、迨其解性善之言也、不能不置氣質而別說本然之性、所以謬也、夫仲尼教人不以心性理氣、心性理氣之談胚胎於子思、萌芽於孟子、而後長大於宋儒、則與公老同其歸、何足怪哉、今^{*3(指)}揖軒雖能疑宋儒、而未能疑孟子、則其所疑宋儒者、何以^{*4(指)}積哉、易自有易之道、不可以常道論之、宋儒未始知之、揖軒亦未之有見、則其所疑宋儒者、何以^{*5(指)}積哉、公之與老其道相反、猶冰炭不相容也、其有相似者、特其末耳、宋儒之道、倣公者者十八九、倣老者十一二、今^{*6(指)}揖軒疑宋儒、概以為公老之遺意、亦未深考也、夫六經者、仲尼所定、昭々乎如日月之在天、孔子之言、如規矩準繩、是故凡天下之道、照之以六經、臨之以孔子之言、則其是非邪正、可立而定、自子思孟子、不能逃其過差之罪、況其他諸子乎、而況後世諸儒乎、然諸子毀仲尼者、其非易見、宋儒似而非者、其非難見、自非善說孔氏之書、而深信仲尼之言者、未有能排宋儒者也、雖揖軒猶坐是尔悲、夫雖然損軒之疑宋儒、由博覽故也、何少其晚哉、若天假之以年、必有所發明焉、豈徒疑之而已哉、近世朱氏學者流謂仲晦賢於仲尼、非朱氏之書弗說、所說不過數部書、則何從生疑哉、若然者、終身不覺悟、所謂醉生夢死者也、豈不哀哉、由是觀之、損軒之疑宋儒、可謂天誘其衷也、純之少也、亦說程朱氏之書、弱冠見程氏二性之說而竊疑之、又因說易及札記而得拳錯字、乃^{*7(覺)}學論語朱氏之解謬、自是遂大疑宋儒、卒至排之、然後仲尼日月、無復雲霧之蔽、余生而見之、是幸也已、余故沾々自喜、以為得天之寵靈、豈不然乎、

予觀損軒先生、其學不可及也、至排宋儒、予無畏於先生云、

^{*8} 靜齋河口先生曰、所謂大疑錄者偽書也、益軒有博綜之名、故徂來之徒竊著特託其名耳、昭按、益軒先生說朱子之書弁曰、朱子振古豪傑學行大備、其所註釈編述何翅數十萬言而已哉、然則恐不能無偶然之失者故後學之於朱子也、尊信而不阿諛、是可謂得公正而無私也、於是彼異說之徒遂著大疑錄、託其名乎、且益軒有言曰、朱子之書尊之如神明信之、如著龜也、自誤集中晚年八十余歲著述不少、一語無疑程朱者、尊信終始如一也、靜齋先生之語余深信之、

*1 東大本、都城本「太」。

*2 『春台先生文集』「然特疑之」。

*3 東大本、都城本「揖」。

*4 東大本、都城本「揖」。

*5 『春台先生文集』「倣公者十八九」。

*6 東大本、都城本「損」。

*7 東大本、都城本「覺」。

*8 以下『春台先生文集』になし。

二四・二九

^{*1} 書徂來遺文後

前賢

徂來先生以命世之才、絕倫之識、發明古道、使先生之道、^{*2(主)}仲尼之教、彰明於千載之下、功莫大焉、然其人有好奇之癖、而又悅近世古文辭家之言、故其所為文不免有出乎法度之外、以純所見、凡文、異言同訓者、如是与此、尔与然、識与知、莫与無、稽与考、距与去、俾与使、昉与始、畢与終、觀与見之類、有可任用處、有宜斥用處、先生概乎任用、所以致用不當而害於意義也、又字有古今、如知之為

智、説之為悅為脱、亡之為無、道之為導、段之為仮、大之為太、共之為供為恭、辟之為僻為避為譬之類、古字通用、今文別用、古人用古字、後人從今文、然論語有譬字、孟子有智悅太供字、司馬氏史記、班氏漢書、多用古字、而智悅太供、猶從今文、蓋文之今古在造語、不在用字、雖書以今字、不足以累古文也、何則誦誦在声、不在形也、先生乃概用古字、文不必古、而徒使人苦其難誦、亦好奇之過也、夫人之為文也、必有所好用字、古人皆然、雖今人亦然、先生素有是癖、其文是以難誦、亦是以易誦、其病在茲、而其所以名家亦在茲、純等後生、指其瑕疵、則不敢、縱得指之、亦不可勝指、所以依違而卒於已也、雖然、先生之言滿於海内、而悅者益衆、純等又以一日之長先後生、苟無以告之、謂後生何、予今言此者、欲使誦先生之書者不惑而已、然先生者、所謂豪傑之士也、其立言著書、務在明大義、若夫文字章句之細、初不甚用心、往往有出乎法度之外者、其作詩亦然、實皆豪氣之所為也、庸詎傷乎、故誦先生之書者、要在知先王之道、不可見其瑕疵、然後字為文者、以先生所為為法則、又恐其誤、此不可不知也、

* 1 『春台先生文集』では「書徂來先生遺文後」。

* 2 東大本、都城本「王」。

* 3 『春台先生文集』では「又恐其有誤」。東大本、都城本は果図本に同じ。

通昭録卷之二十五

藻彙編

読韓愈拘幽操	鳩巢先生
内外教弁	太宰春台
書弁疑録後	
文論	
深淵紀事	雨森芳洲
火術論	
靈芝記	
続名数序	人見鶴山
答安澹泊書	荻生徂來
文論	太宰春台
与子遷書	
倭楷正訛序	
与子和書	
答剛伯書	鳩巢先生
示修行氏	雨森伯陽
復子允書	太宰春台
復小倉中将書	
自警文	鳩巢先生
登富嶽紀事	太宰春台
読于鱗文	
読論語古義	
策問	植木金

春台墓碑

服部南郭

春台墓誌

稻垣長章

藻彙編卷之

二五・〇一

讀韓愈拘幽操

鳩巢先生

衛有七子之母、不能安其室、而其子作詩自責曰、母氏聖善我無令人、今退之言、天王聖明臣罪當誅、其意亦如此、伊川以為退之能道文王意中事、前後之人言不到此、寬永中有點僧^{号派}、以善說禪游公卿間、頗為世主、所寵乃敢大言曰、退之之言妄矣、文王囚于羑里、不過樂天安土也、以紂之惡為聖明、以己之無罪為當誅、如此則聖人痴者也、不然矯情自誣也、正叔取之亦可謂謬矣、余謂此意誠之極也、當是時紂君也、文王臣也、以臣得罪於君、義在自責而已、文王之心惟知有君臣之分、無復較量是非之念、故退之之言如此、非謂曾不知紂之惡、亦非心知已無罪強以大義自制云尔、惟其念自不闕此耳、蓋意誠則心能一於所向矣、象喜亦喜、象憂亦憂、以常情觀之、舜疑於偽喜者、延平李先生曰、兄弟之親天理人倫、蓋有本然之愛矣、惟聖人尽性、故能全体此理、雖遭橫逆之變幾殺其身、而此心湛然不少搖動、今以此觀退之之言、其所以為伊川所取者、意可見矣、浮屠之學不足知此、其以退之為妄、宜哉、

二五・〇二

内外教弁

太宰純

釈氏之徒、自謂其道為内、謂儒者之道為外、儒者怒之、以其外吾道

也、予謂釈氏所命是已、儒者怒之、過也、蓋嘗聞釈氏之說曰、域外治心、謂之内教、域中修身、謂之外教、此言誠然、無可譏者也、夫吾所謂道者、仲尼所詔、古之聖帝明王所以治天下之道也、然天下之本在国、国之本在家、家之本在身、孟子固言之、礼大學記云、自天子以至於庶人壹是、皆以修身為本、孟子之言止於身不及心、与記之言、合而觀之、可以見古訓也、孔子曰、操則存、舍則亡、出入無時、莫知其鄉、其心之謂与孔子之說心、唯此一語、他不經見、亦可以見先王之道、不務治心也、孔子特語心之居無定処尔、夫人心者、善動之物也、其動伊何、感之亦興、不感亦興、有欲有思、与夫喜^{*1(喜)}怒、愛惡哀樂、無非心之動者、唯其若斯、是以難治、聖人明知心之不可治、故不教人治心也、然則聖人果弗治心乎、曰聖人未始不治心、而不必治耳、仲虺之誥曰、以義制事、以礼制心、此先王之法言也、聖人之道廼尔、夫人心有欲、見色則悅之、見財則欲之、賢愚所同也、然弗敢戲人之婦女、弗敢^{*2(苟)}取者、礼儀所制、而士君子所守也、詩云、出其東門、有女如雲、雖則如雲、匪我思存、縞衣綦巾、聊樂我員、此守礼義之言也、是故、守礼義者為君子、犯礼義者、王法所誅也、聖人既立礼義以治人民、視其守之与犯之、而行之刑賞、不復問其心何如、宋華父督見孔父之妻于路、目逆而送之、曰、美而艷、遂殺孔父而取其妻、夫見人妻于路、目逆而送之固非、殺其夫而取之尤非、其謂之美而艷、豈非乎哉、假使他君子見之、而人問焉曰何若、則君子亦且曰美而艷、何則美不可揜也、若觀孔父之妻而不見其美、則無目者也、若見其美、而告人曰不美、則詐也已、見美者目、美之者心、雖聖人、豈有以異哉、但制之以礼義、弗敢縱欲、斯之謂君子、心目之罪、在所不問、先王之道廼尔、釈氏則不然、務在治心、雖身不敢行非度、^{*3(苟)}苟心有不善、即以為罪、故其篤行者、雖

親毛嬙西施、則閉目想其腐肉朽骨、以內自禁其欲、難矣哉、人心之靈、何所不至、苟身弗為不善斯可已矣、更問其心之所思、過矣、聖人以礼制心、心不須治而靡不治、积氏以心治心、予以為非治之、乃乱之也、何則所治固心、治之者亦心、一而不二、治之而治者、雖治矣、其治之之擾、不可勝言也、予故曰、治之所以乱之也、雖然、积氏有固守其道、至死不變者、亦可謂善其道矣、夫内外之称、积氏所命、予以為当矣、然浮屠無家、彼其治心也、止于潔其身耳、吾所謂修身者、將以治天下国家、則其道之殊異、不特小大之分、復何内外之可論哉、凡儒者言心性、自鄒孟子始、至宋儒而盛、程氏朱氏為之魁、而二氏皆以心法為學、要之陽學聖人之道、而陰慕积氏者也、當時學者、靡然從之、無覺其非、乃若陸九淵氏、雖見異於朱子、而以心法為學則同、明王守仁氏亦然、夫自程朱心法之說作、迄于今六百余年、儒者皆為积氏之徒、後之人復誰從聞聖人之道乎、近時我日本独有伊藤氏之學、能闢宋儒而倡古學、海內好古之士、皆為之吐氣、惜也所見之小、廢六經而弗讀、尽取孟子之言以解論語、且信孟子之甚、至以配孔子而不疑、焉知心性之談、始於孟子、非復洙泗遺訓乎、原佐嘗謂宋儒為禪儒、当矣、然其所見如是之小、而其學亦以心性為本、則猶未出宋儒之党也、何得屏积氏治心之教乎、夫以自宋以來、儒者皆以心性為學、則是為内教之徒、其与积氏所爭、特名物之異耳、然則醜外教之称而怒积氏、亦宜矣乎、仲尼曰、君子博學於文、約之以礼、亦可以弗畔矣夫、此仲尼之教也、宋儒不奉文礼之教、而以心性為學、是名為仲尼之徒而実畔之也、及我荻生氏之學作、力排宋儒心法之說、而以詩書礼樂為教、則仲尼所傳、先王治天下之道、既隱復顯、炳如日星、豈不愉^{*4(德)}快哉、由此觀之、积氏所命、内外之称、為得其実、彼謂我為外、於我庸詎傷乎、

- *1 東大本、都城本「怒」。
- *2 東大本、都城本「苟」。
- *3 *2に同じ。
- *4 東大本、都城本「愉」。

二五・〇三

書東厓弁疑錄後

前賢

弁、分別也、疑、不信也、弁疑、猶云弁惑也、是書也、元藏以其所信、分別其所不信也、元藏所信者何、曰、論語也、孟子也、元藏所不信者何、曰、六經也、孝經也、史記也、漢儒訓故也、唐儒疏義也、宋儒經說也、然宋儒治經、必以理氣心性為說、元藏奉其家訓、務排宋儒之說、固所謂善繼人之志者也、殊不知理氣心性之說、起自孟子、遂為万世厲階、而尊孟子猶仲尼、信七篇猶論語、謂性善為至論、是乃依然宋儒之徒也、其排宋儒也、固非^{*1(德)}証源之論也、孟子曰、尽信書則不如無書、原佐信軻之此言、遂尽疑六經以下、而謂論語為最上至極宇宙第一書、嗚呼謬哉、夫有六經然後有論語、原佐乃廢六經、而專以論語為教、殊不知六經者、孟子所謂先王之法也、所謂規矩準繩也、原佐以為唯一部論語、可以治天下矣、六經何為、試使原佐行国政而得其志、則举国細民咸為君子矣、若然、則国無小人、国無小人、則君子失輿、君子失輿、則政廢、未有政廢而国不乱者也、噫、原佐逝矣、元藏不改家學、豈知而不改歟、抑將不知也、予亦疑焉、因反軻之言曰、尽疑書則不如無書、

*1 東大本、都城本「澄」。

自古文辭之學作也、屬辭家一句一字、必取諸古人、汪伯玉笑長焉、今吾党學者、纔知弄筆、即言古文辭、觀其為文、乃抄古人成語、而聯綴之而已、文理不屬、意義不通、譬如衆坐之中、東西南北、賓客雜選、士女群居、言此言彼、或笑或泣、勦說雷同、紛々擾々、不可適聽者狀、噫、亦可厭哉、夫斯弊也、豈唯後生輩有之哉、齒長字成、而自謂能文者、亦不免焉、若此之類、吾嘗戲目之為糞雜衣、客曰、何謂也、曰、予聞諸浮屠氏、身毒之國、其俗好潔、凡病人死人產婦之衣裳、及火燒之余、苟有污穢不潔者、皆收而棄諸糞壤、浮屠則不織而衣、故取人所棄衣裳於糞壤、割去其污、洗以皂角水、令極清潔、然後依法裁割綴緝以為衣、命之曰糞雜衣、一名衲衣、釈氏法服、此為第一、其為衣也、數十百片布帛斷合成、故一衣而有錦者、有繡者、有縠者、有綺者、有羅者、有綾者、有縐者、縐者、縐者、布者、忽見若斑斕可悅、就而視之、則非特文理不屬、而精麤美惡、駁雜不一、令人厭惡、釈氏取其為人所厭惡耳、今夫取蜀錦斷數百片而聯綴之、采色之美、使觀者悅、然以文理不屬、与其聯綴界縫、不可泯滅也、比之二匹錦、未始裁割、則其高下寧同日之論哉、人亦誰舍一匹錦而取聯綴者哉、夫六經尚矣、自檀弓考工記禮運樂記諸篇、左氏公羊之釈經叙事、孟軻荀卿莊周列御寇之論道立言、屈平相如之騷賦、戰國諸策、呂氏淮南菟羅宇宙、司馬遷^{*2}班固之紀傳、凡此雖其体与法各殊、而均之皆古文之雋也、譬之如數十匹錦、^{*3}菜各殊、而要皆出自機杼者也、夫錦之美惡在精麤、其同異在文采、而織之有法、今有美錦於此、使工人擬織之、但得其法、精麤同等、文采相若、則黼黻易處、更玄為黃、何不可之有、此以其機杼由

己、文章位置得所而条理不紊故也、故織文錦者、有所則效、而機杼由己、作文辭者、取法於古人、而發諸己心、出諸其口、然後命諸筆、著諸篇、苟得古人之体与法以修辭、雖今言、猶古言也、是謂自我作古、故善屬辭者、取諸古人、而出諸己口、令讀者不覺其為古辭、此以其文理条貫、有倫有要故也、夫文之有理、猶人身之有血脉也、人苟或血脉不屬、則手足不用、謂之廢疾、謂之不成人、文辭而無理屬、其為不成文亦明矣、書曰、辭尚体要、余亦曰、文在理屬、故善屬辭者、猶織工也、取法於古而機杼由己也、不善屬辭者、猶縫人也、以聯綴為務也、今試使縫人聯綴數百斷綿^{*4}、以成一匹錦、雖極其裁縫之工、何及新織下機之一匹錦哉、此何以然、無理屬也、夫以一匹錦、則縫之工尚不若織、況織之不工乎、又況聯綴羅綺雜帛、精麤美惡、^{*5}班駁不一乎、此豈吾所謂糞雜衣者非邪、夫古今者時也、逝者固不可追也、惟人万物之靈、今而可以及古者、其惟學乎、學有二焉、德行也、文辭也、然德行難、文辭易、故學而可以及古者、莫近於文辭、今雖善學者、其所以不能及古者、患在要譽与貪多也、苟去此二患而唯古是好、何不及之患哉、彼為文辭而為糞雜衣者、又何足与言文哉、

*1 『春台先生文集』後稿卷七の「文論二」に当たる文章。

*2 東大本、都城本「迂」。

*3 東大本、都城本「菜」。

*4 東大本、都城本「錦」。

*5 東大本、都城本「班」。

二五・〇五

深淵紀事

雨森東

或謂余曰、夫士之處於世也、以有用之學、忘國家之務、遭遇賢主、名顯身榮、大丈夫志願足矣、吾於深淵君見之、君者筑州產也、少好讀書、兼通武藝、至於火箭遠射之法、探頤窮幽、術理俱至、焯為諸家之冠、既而跋涉閩河、客寓東藩、遵養晦、不以窮困自屈、一旦名聞諸官、俾與力於折衝府標下、又命親臣軫稟解數于上、溫言勸獎者有加焉、因使在鎌倉、檢狹寬廠之地、試演火術、衆莫不健羨之、豈非一丈夫哉、余聞之曰、此所謂有志者事竟成也、固非碌々者所能望焉、不可以不傳、遂錄、延享甲子芳洲雨森東七十七歲、

*1 『橘廳文集』「遵養時晦」。

*2 『橘廳文集』「芳洲雨森東七十七歲」なし。

二五・〇六

火術論

前賢

余友大島氏者、忠信篤實人也、一日還自東藩、与余相見、未及叙澗、欣々然而言曰、吾行也、往反數千里、跋涉之勞極矣、然謁一良先生於浪華、学得火術之說、誠足以為衛國之具、豈非幸耶、先生字右、姓大野、名某、範武衛門成寶、又伝火術於其叔吉規、佐五右衛門、用古制創新見、器械之精、運用之妙、求諸近世、未見其比、惜乎世人之不尽知也、然先生不以貴富汨其性、不以窮匱變其操、諄々然惟広其伝之是務、嘗有言曰、兵者不祥之器也、聖人惡之、雖然國非武則威不立、備無預則變難防、夫对之為地、実為辺要之衝、吾今得先生之術、乃將上献乎我

君、下行於有司、其於憂國之責、庶幾有裨于万分之一乎、余聞而趨之、因為本州之有火術、始於大島氏、大島氏之業、原於深淵子、經久之後、安保州人之無忘其所由耶、窃自割記、以遺後昆云、

*1 東大本、都城本「論」。

*2 『橘廳文集』では「吾之此行也」。

*3 東大本、都城本「泪」。

*4 『橘廳文集』では「地也」。

二五・〇七

靈芝記

前賢

余聞闔家能和、則靈芝必為之生、蓋嘉瑞也、延享乙丑五月晦日、浪華邸第生三本於庭樹之下、迸管駢頭、含秀飛香、璇穹玉葉、燁々焉、煌々焉、庶乎与琪花瑶艸相並、可謂奇矣、夫天道幽遠、難以窺測、其致感之果有由耶否耶、余懵未之知、顧桂谷氏、方掌邸事、必有以自驗矣、適徵余記、遂書此以贈云、

*1 東大本、都城本「艸」。

*2 東大本、都城本「氏」。

二五・〇八

統名數序

人見友元、姓小野、名宜卿、晚年号竹洞、羅山高弟也、鶴山先生是也、仕公朝

古之王者建國君民教学為先、乃幼而不教長而難成故有小子之学鄉党州序其設固広、及周之衰、教道稍微、如内則少儀諸篇僅存耳、我本朝亦教学隆於古時衰於後世、有志者不可不思之、吾友損軒貝原翁、

以儒業鳴于筑紫、教人之道酌古酌今無不尽心矣、往歲觀小學紺珠群書拾唾等書、以卷帙之多為不便於家訓、採其切要者加之、以本朝之名數分類為一卷、名曰和漢名數、而刊行之、以隨童蒙之求、間嘗拾其所遺作統名數一編、剗刪氏復請梓之、於是諱余題卷端、余有感翁之覃思教誨、因為之序、斯書之行也、施於國家、延及天下、必然乎、所謂幼吾幼、以及人之幼者也、翁之用心無所苟而已矣、元祿五祀壬申奉^{*1}正月竹洞野節序、

*1 東大本、都城本「春」。

二五・〇九

答安澹泊書

物 徂來

岡君致足下前月書、捧讀知^二其矍鑠者狀^一、欣慰曷勝、書中又言及文章之業、諄々弗已、下問數事、何其謙虛之至于此也、夫文章者、經國大業、不朽盛事、抗^レ顏為師、豈譴劣如不佞者之所企及乎、前承以貴亭記見^レ徵、欲勉強塞命、而有所不能、故敢陳己見、以明其所以不能之由、然文章之道、亦多端焉、人各有所好、豈容強乎、故曰、非^三以為^二它人作文之法^一云尔、足下盍察諸、如護園隨筆者、不佞昔年、消暑漫書、聊以自娛、本非以公諸大方、君子、誤墜剗刪、遂背本心、且其時、旧習未祛、見識未定、客氣未消、自今觀之、懊悔殊甚、忽承獎借、不啻^レ泚^レ頹、蓋不佞少小時、已覺宋儒之說、於^二六經^一有不合者、然已業儒、非此則無以施^レ時、故任口任意、左支右吾、中霄自省、心甚不安焉、隨筆所云、乃其左支右吾之言、何足論哉、々々々々、中年得李于^{*1}鮮、王元美集以誦之、率多古語、不可得而誦之、於是發憤以誦古書、其誓目不涉東漢以下、亦如于鱗氏之

教者、蓋有年矣、始自六經、終于西漢、終而復始、循環無端、久而熟之、不啻若自其口出、其文意互相發、而不復須注解、然後二家集、甘如噉蔗、於是回首以觀後儒之解、紕繆悉見、祇李王心在良史、而不遑及六經、不佞乃用諸六經、為有異耳、然六經殘缺、其不可得而識者、亦復不鮮、君子於其所不知、蓋闕如也、豈足以為恥乎、而宋儒句為之解、字為之^{*2}話、是強其所不知以為知者也、其謬不亦宣乎、不佞則以為道之大、豈庸劣之所能知乎、聖人之心、唯聖人而後知之、亦非今人所能知也、故其可得而推者、事与辞耳、事与辞雖卑々焉、儒者之業、唯守章句、伝諸後世、陳力就列、唯是其分、若其道、則以竣後聖人、是不佞之志也、大氏漢儒注、雖亦有紕繆、距孔子時未甚遠、其說皆出於七十子門人相伝授者、如宋儒之時、則歷世弥久、且自昌黎去陳言、而古辭之不伝於世者久矣、皆以今言視古言、且不識古文體勢、是以穿鑿甚多、又疎於礼、如濮議、諸儒聚訟、雖程朱二公、莫有明弁、今求諸儀礼、不^二疎^一多言^一、本自了了、又如家礼神主制、長尺有二寸、象十二月、凡礼用十二、唯天子為然、祭四代唯諸侯為然、伊川乃用諸庶人、豈非僭邪、大氏孔子時學問、專用力於礼、而宋儒不尔、其所主張理氣之說、六經無之、唯易有形而上下之言、然所謂器者、亦制器尚器藏器之器、本文可証、豈氣之謂乎、天理人欲、出於樂記、而不言去人欲以尽之、夫人欲淨尽、豈人之所能為乎、克己之己為己私、然六經無此例、且下文由己、乃人己之己、孔子一時之言、豈若是乖張乎、解^{*3}格物為窮到於事物之理、是加窮理二字、其義始成、殊覺牽強、且窮理、本贊聖人作易之言、豈可望之學者乎、且天下之理、豈可窮尽哉、明德之解雖美乎、至於詩左伝、而有不合者焉、且使天下之人皆有以明其明德、雖堯舜之世、豈有此事哉、本然之性、氣質之性、本為^{*4}若孔孟

之言不合而設焉，然胚胎之始，氣質在焉，故古無此言，而孟子性善，亦大概言之耳，舜何人也，吾何人也，本言循聖人之教以行道於天下，則聖人之治不難也，而宋儒乃求身為聖人，然程朱既不能為聖人，而孔子之後無復有聖人，則是懸空言以強人所不能也，至於變化氣質，亦經無此言，氣質天之所賦，豈可變乎，人各隨資稟，以達材成德，用諸國家，辟諸刀鋸椎鑿各殊其用，以成大廈，雖三代亦然，豈必須變乎，如札者，經所言皆札樂之札，程朱以為性，仁齊以為德，豈非強乎，六經之言，本自平穩，故聖人之道，万世可行，至於宋儒，則務為新奇之說，以強人之所不能焉，要之昌黎好議論，務言理，其風至宋益盛，程朱二公生于其世，習以為常，不知求諸事與辭，亦不自覺其與古背馳耳，上之所言，皆宋儒之說，且舉其綱要者，亦万分之一，其它紕繆，不可枚舉焉，不佞直捫經文，以事與辭証之，不復須訓注，故其所見與隨筆時，大有逕庭也，夫不佞以宋儒為新奇，而足下少服文恭先生之教，意者必習於宋說者，則必以不佞為異端邪說，唾而罵之，是以不佞之為此書，握筆踟躕者久之，然是而不言，足下必以隨筆為不佞終身之見耳，匿其蘊以阿人者，不佞於交義恥之，故敢陣之，^{*5(陳)}乃以此而獲罪於足下，亦所不辭也，惟足下亮之，如處弘氏之說，不佞近有對問一篇，附覽，又如詛筌一書，不佞二十四五時，從學之士，錄不佞口語，其後十年許，頗有增損，現今印行，若夫寫本，則旧稿耳，要皆兔園冊子，豈足掛齒牙乎，又承問，雖字法，及猶尚、尚猶、不祥莫大焉、無不祥大焉、不佞竊意，其義全同，但語勢異耳，凡學文章，要識體，故學左氏文，則用左氏法，學孟子文，則用孟子法，若混而用之，則緝錦以布者類也，柳儀曹論石鐘乳，^{*6(鍾)}其與左氏異同亦如此，隨筆中西京，乃指西漢，大体謂治道大体也，時殘暑尚在，伏以自愛，不備，八月十三日、

※【頭書】「太宰純文論云，古文辭之患，在用古人成語，不其然乎，李王尚以是取敗，況其他乎，大抵古文中有奇辭奇語難誦，後儒不得其解者，彼豈必有所本哉，恐亦多出其自撰耳，韓文公，蓋窺此秘，故務去陳言，而捫新言，豈不可哉，要在不失法耳，」

- *1 東大本，都城本「鱗」。
- *2 東大本，都城本「話」。
- *3 東大本，都城本「格」。
- *4 東大本，都城本「苦」。
- *5 東大本，都城本「陳」。
- *6 東大本，都城本「鐘」。

二五、一〇

文論^{*1}

春台

夫文有三要、一曰體、二曰法、三曰辭、體者何也、曰、體者裁也、制也、經伝子史、體之大分也、誓誥訓命序記銘誄之等、體之細分也、然斯數體者、文之經也、猶詩有國風雅頌也、又有二體、曰、叙事也、議論也、斯二體者、文之緯也、猶詩有賦比興也、法者何也、曰、字法也、句法也、章法也、篇法也、斯四法者、諸家皆有、此法之細也、如言法之大者、則左氏有左氏之法、司馬有司馬之法、諸子各有其法、決不可混用也、辭者何也、曰、辭者、言之文也、辭有古今、有短長、短者一字、長者十余字、今古者、時世也、修辭家必取西漢以上、欲其文似古人也、然修辭家專務捫古辭、而不捫行辭之法、故得於辭而不得於法、行古辭以今法者有之矣、其病在好用古人成語、夫古人之語、必有所以出之、今修辭家但用古人成語、而不問

其所以、故辭雖典雅、而文理不屬、且古辭而行之以今法、高者而入六朝、下者俳矣、且六朝人有歇後語、後人遂以為套語、今修辭家用古人成語、或拏首而匿尾、或拏尾而匿首、此不亦歇後之類乎、又所用古人成語、有其首有用於今、而其尾無用者、有其尾有用於今、而其首無用者、修辭家必用其全句以達己意、不亦套語之屬乎、夫古文辭家、開口言左氏司馬、左氏高矣尚矣、初無所倣倣、司馬則有取於前世、彼其百有三十篇文、寧有用古人成語、如今修辭家者乎哉、善讀史記者知之、此韓退之所以務去陣言也、後之修辭家、見韓氏之末弊而欲改之、於是務拏古辭、李獻吉首倡此道、汪伯玉李于鱗王元美繼作、然後大行于世、夫四子者、豪傑也、于鱗之奇崛、元美之宏博、皆一世之儒也、今觀四子之文、無非古辭、然其行文、獻吉伯玉尚遵古人之法、于鱗元美則用今法、獻吉時去陳言、猶退之也、元美好變用古辭、以見其巧、于鱗伯玉即用古辭、不敢裁割、于鱗又好險其語、以為古文辭當如是、嗚呼、古文固難讀、不亦有易讀者哉、左氏司馬之文、豈盡難讀哉、雖尚書之尚、其尤難讀者、唯商盤周誥為然、其亦不必佶屈聱牙、他諸古文、何獨不然、故余以為于鱗之文、未全古、況其行文以今法乎、吾友次公嘗與余論文曰、于鱗之文似俳、可謂知言哉、夫修辭家學左氏司馬、而其文乃不能起六朝、此無他、徒拏古辭、而不取法於古人耳、夫退之不屑陳言而去之、後之修辭家非之、唯宗子相在修辭家數、而特立独行、元美序其集曰、當其所極意而尤不已、則理不必天地有、而語不必千古道者、亦間離得之、此則子相之卓見、所以度越同時諸子也、豈不偉哉、余嘗與人論文、以為文辭當先弁俳、其次明法、其次拏言、若徒拏言、而不明古人行文之法、未有能成古文者也、先賢且尚坐是、況今學者乎、近因覽于鱗等文、指摘其中一二失古法處、以示小子、庶幾幼學知古文辭

之病、嗚呼、古文之難成如此、吾不能不欽慕昌黎、

純曰、六朝人有作歇後詩者、屬辭家亦有之、如謂人主遺屬曰貽厥、稱大臣勲勞、曰微管之類、後儒嗤之、蓋詩之歇後笑戲諷也、文而歇後、謂之何哉、夫歇後固近於俳矣、後之作書牘者、廼有套語、如謂主人曰東道、原物還人曰完璧、親近賢者曰御李、初相識曰識韓之類、是謂套語、々々者、唯俗間書牘用之、以達其意而已、

*1 『春台先生文集』後稿卷七「文論五」に相当する。

*2 東大本、都城本「陳」。

*3 『春台先生文集』「亦未全古」。

*4 東大本、都城本「超」。

*5 以後『春台先生文集』「文論五」に見えず。

二五、一一

与子遷書

久矣不見子遷、新年余寒、未審萱堂平安否、足下近來若何、純有所欲私於足下、而面晤未日、茲命毛穎略錄余言、致諸左右、一覽幸甚、純近得見徂來先生贈于李子序、蓋始歎其屬辭之工、讀之反覆、終而不悅、曰、是序通篇與人爭、語不和平、文無婉曲、純則以為君子無所爭、乃若所爭則有之、曰德義之事也已、安有以文辭與人爭者乎、夫文、道之興也、辭之不可以已也尚矣、雖然、聖人有不言之教焉、文辭之於道末也、是以孔門四科、莫先於德行而文學最後、孔子恒言德、歴々可考、至称南宮适則曰、君子哉若人、尚德哉若人、言弟子之職則曰、行有余力則以學文、子夏亦曰、雖曰未學、吾必謂之學矣、凡此皆德行為先之說也、今先生與人爭、不以君子之道、而修

章句以求勝人、何其汙也、是与曲藝之師譽己毀人、唯恐其技之不售者、何以異哉、序稱洛人無恒祿、儒生之寄其間、亦難為生、則舌耕開肆、百千成群、日不遑給、語性語天、率非宋籍不可也、故雖有聰儻若仁齊、猶率其所習、洛之所以陋是已、此又大不然、夫洛儒信難為生、東儒果皆不寒耶、且士無田祿者、未能為農工商賈、則粥其技以給衣食、固其宜也、古人有僕賃力作者、當時識者不以為賤、今為書生而無升斗之祿、則亦舌耕筆耕、唯其所為、何不可之有、先生何獨、惡之乎、且先生之未仕也、嘗教授于芝浦、人所知也、後遇柳沢氏之勃興封侯、召先生掌書記、先生於是乎始積褐於侯門、然其祿尚微、尋柳沢公累益封、先生亦以公之寵靈、累益其秩、至五百石、雖以命世之才、而有勤勞于侯家、自非柳沢公之知遇、先生之窮達、未可知也、先生之不久舌耕、天幸也、乃以是卑人之舌耕乎、先生門人、高弟如足下、今見以教授為業、先生將謂之何、其余舌耕以食、如純也者尚多、不足道已、若有外人見先生之序、而難之、其何以答之、純竊為先生慮、夫足下、同門之翹楚也、先生常稱其文、門人皆信之、今其見先生所云、以為然否、純之在社中也、碌々者已、先生之於純也、得非雞肋視之乎、雖然、區々未嘗不傾心於先生、著者子路每不悅於孔子所為、雖不見取於孔子、實為孔氏之禦侮、純之愚也、竊自比焉尔、故先生所為、而純或不悅、時時爭之、此純之所以不見取於先生也、先生好著兵書、言刑名以干諸侯、純皆嘗譏之矣、今此一事、純亦竊不悅之、惟成事不說、且不可數以重吾罪、是以不敢請問、敢布腹心、致諸足下、惟足下亮察、

*1 東大本、都城本「齋」。

*2 東大本、都城本「侯」。

- *3 東大本、都城本「侯」。
- *4 東大本、都城本「侯」。
- *5 東大本、都城本「第」。
- *6 東大本、都城本「著」。

二五、一二

倭楷正訛序

前賢

書莫難於楷字、夫自蒼頡始造文字、歷世其体數變、籀篆科斗、既失其伝、後世無能識之者、及李斯作小篆、實為万世同文之祖矣、然秦時官府多事、吏厭繁文、於是變篆為隸、以便常用、亦遂為万世之法矣、漢末以隸文猶繁也、因又變之為楷、以從簡省、以便急遽倉卒之用、自是以來、天下同文之治、壹用楷字、自天子至庶人、内外大小、簡札注記、無不楷正、故文字以楷為真云、次則行字、是書家所毀楷而作也、又次為中字、是書家所毀行而作也、然行在真草之間、而兼真中二体、有帶真者焉、俗謂之真行、有帶中者焉、俗謂之中行、夫行字本於楷者也、於楷得法、則可以作行字、不必更問法、中字則有本於楷者、有本於小篆者、有本於古文者、其体雖若委蛇屈曲任意行筆、務從簡省者、要之無不有法、皆有所本、所以為可識也、故中書而無法、不可說也、夫行中之書、皆本於楷、故學書者、必自楷始、東坡論書法、以為真如立、行如行、中如走、不學真而作行中、猶不能立而行走也、其不顛踣者鮮矣、文衡山稱祝希哲工楷法亦曰、蓋楷法既工、則中自然合作、若不工楷法、而徒以草聖名世、所謂無本之學也、此皆先賢格言、不可不知也、夫書有古今、古之書不可知也、今之書以楷為本、而書之難莫難於楷、々之難、小字為甚、小字未善而能作中字大字者、未之有也、是以先達評品人之

書、率以小楷定優劣、正本也、夫中夏之人、自天子以下至庶人、不學書則已、苟學書者、必先學楷、以其為常用之書也、若不能作楷字、則為不能書矣、故常人皆能作楷字也、若夫草隸古篆八分、唯薦紳學士余力所及、而或好之、或善之耳、非小学所先也、在我東方、古唯有楷書而已、古人楷書之工、如多賀城碑、直可以參晉人矣、豈不善哉、中世雖不及古、然國字猶未盛行、而法書猶未失華人規矩、可以示華人而無慙矣、晚近以來、國字盛行、俗書鋒起、而法書浸廢、以予所見、數十年來、世之書工為小学師者、略知效華人而不得其美、措楷字而習行中、行中未善、而兼學篆隸八分、彼其學如^(註)是、而其教人亦如是、今之俗工者固不足道也、其為華人者、未始學楷法、而唯行中^(註)是習、是東坡所謂未能立而行走者、衡山所謂無本之學、安得無差乎哉、予嘗觀今之書工所作中者、筆法嫩弱、全無骨力、且其運筆亦多不如法、此無他、不習楷書故也、夫今之書工、自稱學華人者、猶不知楷法、況俗書工乎、予每見今人所作楷字、惡其無法、因指摘其失之大者、以示兒輩、且告以楷法、暇日輯而錄之、得二百八十余字、名之曰倭楷正訛、又俗書工有好作奇字異体者、雖非訛舛、然為大雅之累、則猶訛之屬也、童子輩不可不戒也、故因附之、又字有省文、字書所不載、特為細書及勒石之用、幼學之所當知、而亦有妄謬之患焉、今因附錄於篇末、冀童子輩作楷字者、免於倭俗之謬訛云、

*1 東大本、都城本「中」。以下、「中」の部分は同様。

二五、一三

与子和書

前賢

足下每与純書牘、自称愚老、々々、尊称也、故呼先生長者曰老、礼也、若自称曰老者、以齒高人、倨傲之辞也、故与門人小子言、或時以之自称耳、其於朋友、雖已年長於彼、然猶自称曰弟、亦礼也、先賢所行可見矣、純雖不才、未委質於足下、且犬馬之年、亦在足下之先、足下与純言、不宜自称曰老、於純尚可、若与他人如此、必将謂足下不知礼、純窃為足下恥也、純好直言、敢布区区、多罪々々、

二五、一四

答五十川剛伯書

鳩巢先生

前日辱書示、及書簡稱謂之式、嚮已面諭略得聞之、當時倉卒不敢請、今復賜教不已、乃見吾兄眷愛之厚与為人謀之忠、直清不知所謝、属家母感風疾痰咳寒熱久之、未愈、日夜侍奉無有余力得以裁書、以故不能速報、伏冀亮察、來書謂、明朝贈答之書、凡卑幼奉尊長、則称以尊丈、尊長与卑幼、則称以足下、未聞有尊丈足下連下之称、窃謂、吾兄所聞者明朝一代書式也、唐宋書自不如此、自今以往有繼明者亦可知、況本朝未嘗奉中国法令、乃欲捨唐宋而独取明、不亦惑乎、若有好文之君能定一代之制及此等事、必将参取唐宋明之制而斟酌之、今縱未然、吾徒当通考古今從其是者、身非明人、安能屑々倣明以為法乎、又按、近世書有大德望老人等種々称謂、唐宋以来所未聞也、冗雜已甚、且欠典雅、皆明朝中葉以来文勝之弊、此其一端也、何足法哉、何足法哉、且如尊丈二字、固自非卑幼之称、至如足下之称、唐宋以来以為同輩通称、明人書中復往々見之、今明人文集不在傍、几上偶有振雅雲牋、便呈一本去、此書近年中国商舶所載來者、多集明人書簡、其称足下者什八九、豈悉皆卑幼哉、蓋除陛下外、殿下閣下亦不可為常人称也決矣、是漢唐以来如此、今不得

而易之、足下亦是致書其人足下之義、本非賤稱、故同輩用之何不可之有、其在同輩以下用之亦謙恭之意也、至尊丈足下連下者、未記的、偶見楊升庵與人書、有以先生尊丈連下者、其書中又以兄稱其人、則明人亦不必拘泥如此、今別寫取呈去來書、又謂弟子崇師之外未聞有稱先生者、然嘗考明人與尊長書稱先生者不可勝數、所呈雲牋中亦有一二處摘出、此何必其師而後可、蓋先生本為齒德尊稱、然其學行頗足欽慕者、或稱先生亦無害、是書簡通例、不與他文同也前升庵書亦可見、凡此皆不可概論、吾兄待暇日博考之可也、家母服藥有效、病患頗安、莫勞尊念、但天氣鬱蒸不可病體、是以瘳稍晚耳、不宣、

二五、一五

示修行氏

雨伯陽

修行氏之子、略曉字、將學醫、函丈於打它翁、改号元泰、余因而告之曰、醫之道豈易哉、凡人有病、惟醫之是賴、望聞問切、少失其度、則毒藥之害甚於陷穽、刀圭之慘過於斧鉞、其為不仁也孰甚焉、汝欲為良醫耶、古人或曰山中相業、或曰不為良相、必為良醫、当正其心寡其欲、精其學而謹其術可也、儻不能然則寧可*1輒軻終身、毋為莽鹵苟且流害世人、以損陰陽於冥々之中、先正有云、學書紙費、學醫人費、嗚呼其勉旃、

*1 東大本、都城本「輒」。

二五、一六

復子允書

太宰純

不見子允數旬、不在鄙吝、聊賦采葛以自広、則辱賜書、讓純緩於求繼嗣、辭意惻惻、累數百言、雖告同胞、蔑以加之、純雖頑愚、能不感激乎、夫人老而無子、天也、無如之何耳、故古之先王、未有以處之、後世乃有乞養他人以為子者、輒近弥多、中夏人於是立之禁、而犯者有常刑、我東方未有此禁、是以世俗有捨同姓而取異姓以為子者、其多子者、或悉其子予人、而已卒乞養他人者、雖諸侯、亦有之、其極有 國家有祿之士而貪貨賄、乞養市井賈豎、粥祖宗於非類、僕素惡此輩、嘗有所持論、然又每見世人有無子乞養他人者、親父子不如也、私心笑黷之、足下恤僕老而無子、勸僕乞養人子、其言諄々、其義甚精、僕不敢不從、惟僕宗族、今無可乞之子、故因親戚故旧以旁求可者於遠近、歲余未有應者、蓋有以也、凡今之人、出其子過房者、豈恤人之無後哉、特利其產耳、僕無祿無產、唯恃一小侯餽粟僅食數口而已、宣乎人之不肯予我其子也、若夫士之窮約不能子其子者、率以予人、要在苟紓一時之患、不暇慮其後、則或應僕之求歟、僕待若然者、而未之有得也、此亦天也、如之何哉、足下以僕緩於求繼嗣也數、為僕言之、且責以仁孝、嗚呼、足下愛僕之無已、一至於斯哉、僕固不敏、然於足下之教命、豈能頑然無所省哉、既省矣、則汲々求之、若負建鼓而求亡子、于今歲余、未之有得、豈非天歟、僕於是乎雖獲不仁不孝之罪不辭也、近日尚賢有所為僕計、頗似可者、足下命子惟時、趣使尚賢為媒介、尚賢便為僕言之詳、僕喜而語一二所親、皆曰、可、僕乃報尚賢、令遂議其事、尚賢許諾、然未知成否云、僕曰、計議者、子之忠也、成與不成、天也、吾與子亦如之何、事情如此、冀足下諒察、惟時及尚賢之書、覆讀完上、多謝足下忠愛之至、感銘勿忘、時方改歲、欲得余間與足下把一盃、足下不惠來、僕則往已、万容面尽、

復小倉中將宣書

前賢

十一月十四日、東武処士太宰純、頓首再拜復書大邦望小倉中將藤公執事、去月既望、狎近任書至、則於函中獲執事賜書、盥洗捧誦、見執事傾注鄙人之無已、弗勝感戴、恭惟台候起居万福、務修令德、欽仰在茲純也碌々者、不意承徵詩及文、純本無詩才、加以病嬾、每因興感、欲言志而不能沈吟、亦不能多作、自前十年、殆乎廢詩、即有矢口之言、歲不過數章、且又不佳、何敢錄上、謹謝不敏、至於文辭、一二書牘若叙論、唯取達意、殊無足觀者、亦何足以叨電覽、謹謝不敏、承求先師物茂卿及先友山田生手書有印者、純家皆無有、即故紙中有之、乃一応国字書札、潦^{*1}中者、不足以塞厚望、伏冀炳諒、來教曰、執事悅茂卿之道、有因獲茂卿之門人孝孺之清煥明京国等詩若文而珍藏之、嗚呼、執事、何好事之甚也、悅茂卿而愛其徒、古人所謂愛及屋烏者、執事有焉、純聞 皇朝故有紀伝明経諸博士、皆守古訓、未敢說新義、想執事嘗學焉、又何所不足而更訪問於山^{*2}莽乎、純窃謂執事豈徒好事哉、是乃真所謂好古者也已、純雖鄙陋、無任欽仰之至、謹獻古風一篇、奉謝渥惠、併祝前途、叱留幸甚、其所懇求、一不応命、負罪寔大、惶怖無已、顙祈降恕、時方齋免、伏以大德为国自重、純恐懼再拜、

*1 東大本、都城本「中」。

*2 東大本、都城本「山」。

祈菅神自警文

鳩巢先生

維延宝辛酉二月壬寅、武城布衣室順祥謹告于 菅相公之靈、維相公生以道德忠義顯於當時、死有 神靈、以 廟食于百生、方今天下衆庶莫不尊信、矧維 相公實我儒之 先師、為 本朝文学之 祖、在順祥等、尤當依頼、順祥自幼時以儒為業、窃不自量欲立義行道不負所学、而氣質昏弱、不能自勝、因循苟且以至於今、然自料区々之志、不可終已、夫雖為仁由己不可他求、然使人有所畏有所信而不敢自欺焉、非 神之聰明正直者、其誰能之、自今以往身心動靜維 神是依莫所顧慮、願垂 庇庥、監護弱質、使能自成立以終素志、不勝大願、敢布懇迫、 神其鑒之、 自警条目、○每朝卯前後可起、○每夜子前後可臥、○除賓客或疾病及難避事、不可一日懈怠、○每朝对案、先整衣帶、乃一坐了、非有事故、不可妄動、○对案之間惰念將生、呼起正念可痛懲之、暫時不可忽、○不可妄語、雖下人、不可接無益之言、○飲食須充飢渴、不可過節、及不可不時食飲、○色欲之念一萌、便可遏絶之、不可有時放之、○雜念不問善惡、最害於讀書之間、戰々兢兢可預防之、○讀書之時凝定志意、不可急速、又明張心目、不可嗟過、○卑^{*3}竟不過尽己職分以終一生、則修行之間不可有功利之念、

右十一條、欲銘心肝而操守之、一一在 天之 照覽、敢昭告于 百神之靈、

*1 『鳩巢文集』では「一」。以下、同じ。

*2 東大本、都城本「嗟」。

*3 東大本、都城本「卑」。

義勇師者、峽人、浮屠也、^{*2}將省其父母於峽中、謂余曰、^{*3}今子不欲登富嶽乎、即欲之、盍与我偕、我且東道主、余曰、偕哉、六月己巳朔、越戊子、黎明發東都、道多麻、抵駒城閣下而宿焉、己丑早出關門、過小仏嶺、徑相地三十余里、而入都盧、是謂郡內、有都盧河焉、^{*4}辛卯抵谷邨、郡內之治也、^{*5}遂行、到暮地里、得勇師之家而主焉、^{*6}自谷邨暮地、二十里而近、暮地去富嶽、不能数十里、而其間無有丘山為之屏障、其崎嶇曲折、殆可以詳之、其与平昔在東都、望諸数百里之外者、豈不万々哉、^{*7}雨累日弗止、且地乏佳味、麦飯之外、時噉麪而已矣、^{*8}七月己亥朔、^{*9}越翌日庚子、乃得晴因趣治裝、辛丑早發暮地、^{*10}与勇師之弟、及一隣人俱、一奴裹糧齎酒以從、主人送以二馬、皆有馭夫、余与勇師騎之、西南行十余里所、得一聚落、曰吉田、有富嶽廟焉、木華表甚高大、署曰三国第一山、皇子某沙門書云、廟頗壯麗、過此西披荊榛行二十余里、其地名鈴原、有廬舍十余所、皆具飲食以待客、過此入大麓、余与勇師舍馬而徒、茂林蓊鬱、徑路崎嶇、^{*11}上有枝柯交加、藤蘿蔭翳、下有神木梗塞、根祇^{*12}偃蹇、仰恐^{*13}狗礙、俯恐蹉跌、或僂僂、或跳躍以行、可十里而得一仏閣焉、乃祀役小角所也、俗謂之室、^{*14}中有僧僧守之、上下山者皆惕于此、過此而上、猶行林中、塗則漸峻、又可十里所、林尽而帖矣、帖峴之際、俗謂之中空、山下之民、於此為倚廬以待客、是日向晚復雨、比至中空雨甚、日亦暮、乃投宿廬舍、舍葺以簾、甚矮、偃而入、藉以柴、席而坐、於是人各出所齎糗餼餅飴酒漿、任意食飲之、然後枕肱而臥、屋漏、則以笠蓋首、撥衾蓋身、夜寒、且寢不安、故雖体寔疲而弗能寐、輾轉反側以待旦、壬寅、天晴、遂行、自中空以

上、無復草木、唯有石楠、叢生高数尺、往々而在、巨石巉崑、塗愈益峻、土乾燥、色赤如焦、循岡度嶺、遷迤而躋、愈躋愈峻、山上無水、行客乏飲、有齎水者、民於巖側為倚廬而壳飲、乃雪水也、客患渴者就而求飲、一碗直数錢、自中空之上十余里而得平处、可以息足、有池焉、周匝数里、中多鯿魚、過此而上、巖險不可言、胸喘口渴、蹣跚焉、勃窣焉、前不顧後、魚貫而行、又十余里而尽、則絕頂矣、八峯環列、若芙蓉狀、中一大坎、是昔出火颺煙者也、臨之不見底、有氣如霧、客多投錢於其中者、坎上嶺道、崎嶇尤甚、一登一降、旁臨深谿、或緣巖角以上、或跳躍以過、或者梯之、或者梁之、衆相扶持、前者唱于、隨者唱喁、乾喉焦脣、蹙蹙以行、蓋周行十余里而復故处、于時天晴、四面無雲、日方禺中、自嶺上而四望、薄海內外、可一目而尽也、特恨無離朱之明耳、觀其衆山在数百里之內者、譬猶登丘陵而瞰田壟也、不能復審其大小高下也、於是乎同人坐石上、而酌酒以助疲、因皆題名字於巖側、余独賦五言詩以自娛、訖則首歸路、降非登之所由也、其為道也、比向者不甚艱險、而峻則甚焉、且也沙土攢攢、隨履隨頽、足下如流、可走下、不徐步、故唯降者由此云、不食頃而尽二十余里、比登之艱、其勞不特三之一、於是還反中空、則亭午矣、過廬而惕焉、遂下行、復過大麓而抵鈴原、就前舍^{*15}〔而〕息、且食飲焉、下山至是、則俟阻既遠、無復烈風雷雨之虞矣、同人因皆逞顏^{*16}〔色〕欣然、相勸以酒、乘醉趣行、從故路還暮地、曠黃至勇師之家、主人問故、具以答之、主人曰、吾聞之、凡高山之巔、陰晴不常、風雨暴作、況乎富嶽之高也、触石而出、膚寸而合、太山之雲不啻、俄尔而起、則六合昏冥、加以急雨如泻、大風飛沙礫、客若遭之、跬步不可行、且沙礫撲面、或立而顛仆、或輾谿谷、莫知死所、即幸而免者、尚多昏眩卒倒、故遊客見風雲之起、則

旁尋廬舍而投之以避害、舍人則乘急索錢、〔此〕^{*20}遊客之患也、是故、登富嶽者、至山下必占陰晴、必待天色晴朗、四無雲氣、乃可發、然山中事猶不可必也、此登嶽之所以有遇不遇也、今公等一發至崔嵬、究覽諸勝而帰、可謂遇矣、我是用賀、余曰、然、余少在東都、每望富嶽於數百里之外、而願一遊陟、非旦夕矣、今年何年今日何日、迺得酬平昔之願、無復遺憾、^{*21}翌日癸卯又雨、^{*22}於是息足、^{*23}甲辰乃晴、乙巳天色甚佳、余乃見主人〔而〕^{*24}告辭、遂与勇師同発、^{*25}從谷邨城下、過猿橋、涉都慮河、抵芳野駅而宿焉、是駅也、西距暮地百里所、而東去武都百余里云、丙午、早過小仏嶺、而入駒城関、薄暮帰東都、

*1 「日本之国多名山焉：是豈非特異与、有」を前略する。

*2 この後「姓高山氏、与余素相善、歳甲申夏、勇」を略す。

*3 この後「吾知子好遊也」を略す。

*4 この後「勇師省其姉於巖殿：新宿而行」を略す。

*5 この後「勇師之兄、仕為邑宰、勇師省之」を略す。

*6 この後「是日也雨、午後雨止」を略す。

*7 この後「至則日方下春」を略す。

*8 この後「於是雲散天霽、挿天者焉、且」(百二十字)を略す。

*9 この後「余謂勇師曰、越翌日壬辰、又」(三十一字)を略す。

*10 この後「重陰冥冥、流潦縦横、雖林泉在數里内者、尚不得尋討、」を略す。

*11 この後、「而已矣」の前まで、「銜杯酒於茅屋下、以消日」を略す。

*12 この後、「越翌日庚子、乃得晴：辛丑早發暮地、」(二十八字)を略す。東大本にはあり。

*13 東大本、都城本「抵」。

*14 東大本、都城本「狗」。

*15 『文集』は「中有僧守之」。東大本、都城本は県図本に同じ。

*16 『文集』「不可徐歩」。東大本、都城本は県図本に同じ。

*17 東大本によつて補う。『文集』は東大本に同じ。

*18 『文集』は「顔色欣然」。東大本『文集』に同じ。今、補う。

*19 「勇師之家」のところ『文集』では「高山氏」。

*20 東大本により補う。『文集』は東大本に同じ。

*21 この後「雖曰天幸、実亦主人之賜也、敢謝嘉恵、是夕也、沽酒而張宴於高山氏、高歌談笑、尽飲而罷」を略す。

*22 この後「余与勇師高枕而臥、因相謂愈益喜昔之遇」を略す。

*23 この後「三日以得晴」を略す。

*24 東大本により補う。『文集』は東大本に同じ。

*25 この後「高山氏」を略す。

二五、二〇

読李于鱗文略

前賢

自古文辞之説作、而好為之者、莫如李于鱗、余觀于鱗文、務為難読難解、前言未既、突出後言、説甲未尽、旁及乙事、且多撫古人成語、而連合成章、是以言無条理、語無貫串、譬之猶童子争鬪、有人問其故、答之疾言妄語、此則余所嘗言也、先師徂來先生、中年好古文辞、最悦于鮮氏^{*1}、夫古人文辞、如商盤周誥、先儒称其佶屈聱牙、及諸子書中、固有難読者、然亦不甚多、其他自左氏司馬以至西漢諸人之文、豈不坦然平易哉、于鱗一生務為難読難解以自高、終身不自覺其異乎古人、可惜已、徂來先生有好奇之癖、中年好古文辞、由是遂通古訓、奇矣、遂守之不変、十余歳歿、余惟先生豪傑之姿、自至少老、學術知識數變化、若仮之以年、不久必覺古文辞之非、決不終好之、則其文亦必一変、惜也天降年之不永、不及最後一変而歿、吾二三兄弟、從先生受業者、率好古文辞、今未聞一人覺其非

者、他日若有善説先秦西漢之文、而達其法者、必有悟焉、則信余言之不妄云、

*1 東大本、都城本「鮮」。

*2 この後、中略（千七十四字）。

二五・二一

讀仁^{*1} 論語古義

前賢

甚矣古道之難復也、夫聖人之道、一禍于秦皇、再禍于宋儒、天下之人、芒々然不知所嚮者、五百有余年矣、仁^⑤齊先生生于我日本、以聰明之資、獨得之知、而覺宋儒理學之非、立言著者、以闢邪説、警後生、誠可謂豪傑之士、不待文王而後興者也、純昔遊平安、幸逮先生之世、因修刺就見焉、觀其為人、溫恭君子也、未幾先生歿、不復得聞其余論、及歸東都、得見徂來先生、而學古文辭焉、先生教人讀六經古書、當是時也、仁^⑤齊先生所著書、如語孟字義、童子問、語孟古義、悉行于世、布于海內、余方讀古書、以為必明六經、然後可以說仁^⑤齊書、至今二十余年、不暇及之、年垂五十、略通古書、於六經旨、若有所得焉、庚戌春、客有講論語者、使余通之、余為博考古訓以通之、因及伊荻二先生之説、於是乃先取仁^⑤齊所著論語古義而説之、纔卒一章、廢書而歎曰、甚矣、古道之難復也、夫仁^⑤齊先生者所謂豪傑之士也、彼其紉^{*2}宗^②儒、以為非聖人之道者、誠卓然之識也、余嘗謂仁^⑤齊既知宋儒之非、則其所為説、必能復古道、及与徂來先生論道、數聞徂來非仁^⑤齊、窃謂其然、豈其然乎、今觀仁^⑤齊之解字而章也、乃以字為傲也、覺也、時為時々、習為溫習、喻説、以大寐頓覺、跛者忽起、謂人不知、為人不知而輕賤之、君子為成德之稱、

凡此皆宋儒旧説、仁^⑤齊特變其文云尔、夫古人所謂學者、學詩書礼樂而已、時謂及時也、古人之學、皆有其時、如内則所云可見矣、孔子曰、少成若天性、學記云、時過然後學、則勤苦而難成、故學欲及時也、習、肄也、慣也、孔子曰、習慣若自然、口詩書、身礼樂、習慣若自然、是為學之成、夫人肄業、未能則悶、能之而説、所以説者、無所勤苦也、知者、知而用之也、如湯之知伊尹、高宗之知伝説之類、古人學道而成、必遇知己者、而後可以行之、然此有命焉、不可求而致也、故雖人不已知、而已亦不愠之、士之志道、當如是也、故謂之君子、孔子他日又曰、不知命、無以為君子也、是乃仲尼之本指也、夫所謂學者、學先王之道也、先王之道者所以均天下之道也、仁^⑤齊以道為吾人所常行、學為治心、是其所講道學、無以異于宋儒也、非唯無以異于宋儒、其所謂大寐頓覺、跛者忽起者、禪家悟道之談、何以異哉、仁^⑤齊嘗謂此章為一部小論語、蓋亦見其所稱、与後世儒家者流、不為世用、窮處市中、日^{*4}數^④授生徒、舌耕以食者相類、而説之也、仲尼特言當時士君子之事耳、焉有所謂儒家者流乎、夫先王之道、戴在六經、有六經、斯有論語、仁^⑤齊乃舍六經而專用論語、所以謬也、徂來之非仁^⑤齊、亦非其非宋儒而已自為宋儒也、始余以仁^⑤齊之道為邇古、乃今如是、何足恃哉、甚矣、夫古道之難復也、嗟乎、吾誰適從、適從徂來先生与、

*1 東大本、都城本「齋」。以下「齊」については同じ。

*2 東大本、都城本「宋」。

*3 『文集』は「与禪家……」。東大本、都城本は果図本に同じ。

*4 東大本、都城本「教」。

對備陽頓宮策問

植木金

問、時有古今道無古今、故唐虞三代之治、雖文質殊尚其道則一矣、獨及周室東遷世移風變王者迹熄、強霸互興、舍德教任刑法、彼商鞅李斯非先王之道、然秦政循是、卒合六王、豈惟是已、漢文景任黃老、海內人安、致刑措之風、武帝尊儒術幾接蹠亡秦、所任未得其道、而其收功若彼之隆焉、所尊若此其正、然終不足以補國家衰耗之弊、是其故何也、願諸君明弁之、

對曰、道有邪正、人有仁暴、仁而正者其致治也、殊無古今之異、二帝三王是也、暴而邪者其為亂也、亦無古今之殊、桀紂幽厲是也、由此推之、三代以降治亂得喪未有不出于此二者之間者也、秦政暴惡、而任刑法、合六國王天下、雖然猶僥倖一時之功耳、及劉項舉兵而西也、感陽之地盡為焦土、其有國也、不過二世三世、而七廟隳身死人手、為天下笑焉、孔子曰、知及之仁不能守之、雖得之必失之者、秦政之謂乎、文帝恭儉節用、寬仁御下、天資既如此、是故雖用黃老之術、而群臣獻謀、百姓悅服、致刑措之風不亦宜也哉、雖然至禮樂教化、則猶未能使此民為堯舜之民、而所蒙者亦此非至治之沢、使帝易黃老之術、以堯舜之道、則豈止如是而已哉、此乃論者所以恨文帝也、景帝刻薄任數、詐力御下、是以倫理不明、而遂至乎傷道焉、其遵前業者、獨節儉不妄費、育民以致富耳、比文帝則不及甚遠矣、古來以景比文同稱其德者、則可謂過矣、故文景之治其効雖最隆、而稽諸夫子之言、則亦但富之庶之云耳、未聞所以教者也、武帝繼文景之後、首興賢良方正之舉、得一代之大儒、以為首舉、於此罷黜百家、推尊孔氏、此皆高祖以來所未發者也、使帝遂得用其說、則豈不足補國家衰耗之弊邪、數年之後情勝欲熾而宮室神仙聚斂征伐之事紛然交

起焉、此雖陽尊儒術、而非自出于躬心得之余者也、汲黯亦曰、陛下內多欲、而外施仁義、奈何欲效唐虞之治乎、宜也哉、殆繼蹠於亡秦也、故其道雖正、而其人^{ハナハ}不仁、則不足以與為治也、孟子曰、五穀種之美者也、苟為不熟則不如^{ハナハ}稗者其此之謂乎、其道雖不正而苟其人仁則亦以足救時矣、雖然終非聖人之道也、昔者管仲於齊孔子特取一時之功耳、非全許其仁也、文景之於天下亦類于此也歟、孟子嘗說齊梁之君治道、必稱堯舜征伐必稱湯武、議者曰、治民不法堯舜則是為暴也、行師不法湯武、則是為亂也、孟子又曰、大匠不為拙工改廢繩、墨翟不為拙射變其穀率、是故治亂得喪不準之以聖人者蓋又非定論也、寶曆九年己卯夏某月、

*1 東大本、都城本ともに同じ。

春台墓碑

服子選^{*1選}

太宰先生諱純、字德夫、号春台、物夫子嘗為其考栢樹翁作墓碑、載在集、考以上具焉、先生生于信陽飯田、幼隨考東、稍長仕出石侯、數年疾乞骸骨三、不許、乃自去藩、々々輒去錮之、西游京畿十年、是時物夫子唱復古學于東都、滕東壁臬次公相助修業、而次公西歸、東壁乃顧夫子之門、從游日多、然俊傑可與適夫子道者、猶未至、東壁幼嘗已同先生受書據謙野先生者、服其敏學、因思先生數書招之、會錮亦解、先生遂東、至則見物夫子、說其學、以為得所歸、乃事夫子、與東壁二三子講習古學、博文約禮、敦尚經典、物夫子沒、益詳究先王之道、孔氏之書、鬱為大師、弟子諸侯^{*2大}太夫至草野士、日益進、先生既勵已行、以直方自居、從游之徒、莫不奉名教唯謹尔、畏

如大府、前後所見諸侯甚多、未嘗枉己而求見焉、進退必以礼、安貧樂道、終不復仕、然其志則曰、儒者之學、折中孔子、孔子所祖述、

先王歷聖政治之道具存焉、用之則行、如有用我者、何以哉、故又未嘗忘經世之用、故沼田侯好學愛賢、礼遇先生、々々亦深相得焉、侯在政府、嘗從容語侯曰、方今遭不諱之朝、然時制所闕、無路居下上疏^{*3(陳)}陳事、純雖微賤、幸因侯而得言一二得失、或又觸聞、以賤人妄犯上被嚴刑、万一身有補於濟衆、亦志所願已、不識可否、侯曰、試乃可也、遂上封事、不報、然世已異其特立、而益敬仰其非記聞浮華之學、先生幼受孝經論語於^{*4(太)}大翁、及學成、益尊尚焉、漢孔氏伝古文孝經、久亡彼方、而独存吾邦、因校訂諸博士家所伝、作音注而刊之、復因沼田侯獻諸朝、政府諸公聞之、爭求於侯、々々為並貽焉、又本師説、更加所見、作論語古訓及外伝、又作家語増注、以為此三者、庶見孔子遺則、故用意特勤焉、先生強記、且於事精詳、其考究書籍、^{*5}「不」一字苟過、必歸正然後止、佗所著書凡數十、亦皆學者伝尚焉、書題併平日規行、門人稻垣長章為誌、松崎惟時狀行、詳于二文、延享丁卯五月晦逝、年六十八、葬東都北谷中天眼寺栢樹翁之兆、初娶末松氏、無子、再娶前^{*6(川)}田氏、亦無子、子養阿武家之子名定保、元喬以同盟相識三十余年、乃顧夙昔物夫子与二三子、已先逝矣、天復不慙遺先生、哀哉、因作銘曰、

學之道、師嚴然後道尊、先生之敬教成人、學立道存、

*1 東大本、都城本「選」。

*2 東大本、都城本「大」。

*3 東大本、都城本「陳」。

*4 東大本、都城本「太」。

*5 東大本により補う。

*6 東大本、都城本「川」。

二五・二四

春台墓誌

稻垣長章

延享四年丁卯之春、処士春台先生臥病於城北之礪川里、朝之賢士大夫、往問疾者、騶呼屬路、諸侯之使者、及故旧門人、相踵不絶、過其門者、咸驚曰、茲宅所居大人誰邪、何致客之多也、無何、五月晦日己未、先生卒、享年六十有八、自賢士大夫以下、又走弔哭如前日益多、而其最親者、相聚商其後事、諸侯之愛敬先生者、皆以賻卹其家、越六月二日辛酉、葬于谷中天眼寺其先人墓右、会葬執引者、蓋三百有余人、春台別号也、諱純、字德夫、^{*1(姓)}娃^{*2(世)}太宰氏、信陽飯田人也、本姓平手氏、五^{*3(姓)}姓祖、諱政秀、仕織田氏、為信長傳、食祿二万石、以諫死名顯天下、高祖父、諱汎秀、嗣封為騎將、戰死于三方原之役、曾大父、諱秀言、汎秀之少子也、及信長弑、秀言奔播州、後落魄于加能之間、王父、諱言親、号雪江、仕加賀大夫横山氏、生四子、季為考空谷君、諱言辰、娶太宰謙翁之外孫女、而為謙翁之嗣、仕飯田侯菅親昌、由是冒太宰氏、生三子、長重光、因廢疾為僧、名守鑽、次先生、季女、婦甲斐侯火器隊將匹田尚重、先生以延宝八年庚申秋九月十四日庚午生于信陽飯田、元禄元年、空谷君致仕、將妻子出東都、先生幼穎敏、年甫八歲、空谷君口授孝經論語、尔後能自誦書、不復受句誦於人、長益好學、年十五、初仕出石侯源忠德、非其好也、去如京師、游學數年、聞有徂來荻生先生倡復古學于関左、負笈千里來於東都、質曾所疑、渙然氷积、退教授生徒、弟子弥衆、礼曹生実侯源重令召為記室、五年、謝病而去、諸侯聞其

賢、而重聘崇礼、乃見之、若緩其礼、輒不肯行、京保中、執政故

通昭録卷之二十六

沼田侯丹墀直邦一見奇其才能、而厚遇焉、居數歲、因上封事、論時

政及災異、考訂古文孝經、獻之平兩宮、晚年尽辞諸侯所餽粟、恬

耳、清貧、不以行藏介意、断然自信、持志益堅、築園于礪川上、以

紫芝名焉、專務修經術、著書數百篇、每文章一出、為人所傳、海內

聞其名而慕、見其所傳而喜、往揖其貌而竦、聽其論而驚以服、久之

就叩焉、鏘然能鳴、其博弁淵識、不可得而測知矣、特長乎經濟、旁

嫺音律象胥之学、各至其妙、文集二十卷、其余所撰書題、詳于行

狀、先生初娶末松氏、先卒、再娶前川氏、無子、以阿武安次之子定

保為嗣、以長章之於先生、從游有年、社友奉遺命、以總裁遺文、且

銘其墓、余不敏、雖不堪其任、義不可辞也、因銘之、銘曰、

其昇也遐、其孰克逐、其降也淵、其孰克畜、哲人之萎、永懷茲谷、

於焉勒銘、德行維馥、

* 1 東大本、都城本「姓」。

* 2 東大本、都城本「世」。

* 3 東大本、都城本「京」。

* 4 東大本、都城本「宮」。

* 5 東大本、都城本「甘」。

藻彙編

春台行狀

松崎維時

与徂來書

太宰春台

壻死女不嫁議

鳩巢先生

再嫁議

祭論

伊藤維楨

弁虛齋鬼神說

鳩巢先生

觀游亭記

雨森芳洲

永賀亭記

白雲樓記

誠信堂記

研山記

小峨眉記

是其山石記

鳩巢先生

答稻若水論朱文公丐祠官書

与稻宣義書

答青地貞叔書

答青地貞叔論封事別幅

論孔子不言性善

伊藤仁齋

附徂來說

与大野書

雨森芳洲

春台行狀

松崎惟時

先生諱純、字德夫、姓太宰氏、本姓平手、不詳所出、自其先嘗居尾州愛知郡平手里、為平手氏、五世祖中務太輔諱政秀、仕織田氏、為信長傳、食祿二万石、信長立不君、中務君驟諫、弗聽、作疏自殺、信長感懼臨喪、及發引、手執引云、高祖監物諱汎秀、為信長騎將、三方原之役、神祖請救於尾州、信長遣三將往救、監物君其一也、君受命、失死以出、尾兵失利、遂死焉、曾祖諱秀言、及織田氏亡、移于加賀、祖諱言親、仕加賀太夫橫山氏、考空谷府君諱言辰、以季子出為姻族太宰謙翁之嗣、仕飯田侯親昌、遂冒太宰氏、歷事三世、督火器隊、致事而退、巧武藝、最名善槍、^{*1} 妣清水孺人、謙翁之外孫女也、配空谷君、生三子、長曰重光、因廢疾為僧、次為先生、次女、適匹田氏、延宝八年庚申九月十四日庚午、先生生于信陽飯田、元祿元年戊辰、先生年九歲、從空谷君去飯田、入東都、七年甲戌、先生年十五、^{*3} 故出石出仕侯忠德、久之以痞疾疏乞骸骨者三、不詳、^{*3} 十三年庚辰、致為臣而去、侯怒錮之、乃如閑宿、去還東都、無何適京師、遂如浪華、^{*2} 厄困於五畿間、十年始得解、正德元年辛卯乃還東都、是時生実侯重令為礼曹、召先生、々々起応聘、五年乙未謝病而去、年三十六、自是終身不復仕而退、脩六藝古文、弟子稍益進、先生幼而明敏、疆記絕人、空谷君雖武人乎、性好讀書、八歲則親時授孝經論語、遂研精群書、十余歲、已尽記海内諸侯世系封邑記号、朝士官爵姓名、稍長從中野攝謙先生者而游、為性理家之言、既而有疑宋儒論性本然氣質之說、由是益博覽古書、稍悟宋儒訓話微諸六經有不合者、是時徂來先生始倡古文辭、先生見徂來而大悅、因

受業焉、徂來先生言曰、孔子之道、先王之道也、先王之道、安天下之道也、其教則詩書礼樂四術是已、自子思孟子而降、為儒家者流、益下益衰、至宋儒而極矣、言有古今、不學古文辭、無以知古言、宋儒之謬、皆坐是故、徂來持此說以教人、必自脩古文辭始、其致帰明先王之道以成其德、從游之士、名振一世、然往々文辭成家、用力於經術者幾希、独先生一意奉其教、慨然以斯文為己任、欲距邪說、承先聖、不能行諸當時、必伝諸來世、^{*4} 徂來先生晚年以教育英才為務、不設師道、社中皆以文名相尚、而先生独以方正周旋其間、以為徂來禦侮自許、寧獲罪於其党、不忍惡言入於耳、先生与徂來講論不合、必再三爭弁、弗明弗措、少年每有過失、唯恐先生知之、不數日、先生書必至、隨事規箴、社中皆嚴憚先生、然退未嘗不服其言也、先生以為先王之道在六經、大可以治天下国家、小可以脩身、以礼制心、以義制事、脩身之道、斯尽之矣、宋儒以窮理為学、以心法為教、以二帝三王治天下之道合諸积氏之說、欺天下、惑後世、天下之人滔々無知其非、六百有余年、雖有六經、猶無有也、実吾道之大厄也、必闢之而後可入道、明千載不伝之学、弁百家橫議之惑、使先王之道粲然可行於今世、先生為学夙夜晷晷、終食之外、手未嘗釈卷、天下之書無不讀、天下之事無不通、其義出経伝、事涉子史、上下數千歲、^{*10} 歴々如視諸掌者、^{*9} 讀其所著可知也、今不具論、若乃天文律曆、算数字学、音韻書法、象胥之言、浮屠巫祝、医方駁雜之說、莫不旁通、洞究精微、^{*11} 其讀書、必從校訂、字縷句画、鉛槧不苟、義疑者簽貼、理謬者塗抹、字訛者改正、音韻必和、字画必正、先儒未有及先生之精蜜者、^{*12} 其属文、千言立成、筆翰如流、語不加点、大小筆墨、刊行著述、皆親繕写、遠近書疏、莫不手答、博綜音樂、最善横笛、加有巧思、嘗截竹造笛數管、皆為識者嘉賞、其記

事、仰取俯拾如嗜欲、若人告之以其所未聞、事雖至卑瑣、必傾耳聽之、詳其終始而止、秦漢以至元明、制度法律、天朝文獻、國朝沿革、及其耳目所見聞、俗樂里謠、公卿大夫士廢興存亡、遷官移宅、食貨諸物貴賤輕重、五方所尚、其所以平僦通利之方、皆循々言之有序、先生絕口財利、不言家之有無、嘗與門人論鹽政、語天和以後至今時鹽僦、不有遺漏、因問他物、亦各從語其僦、佗日亦未聞其言物僦也、至所經山川城柳、^{*13}指而言之、不失尺寸、至曰其橋長於其所幾尺短於、其所幾尺、先生稟性剛毅、能勤小物、進退容止、非礼不動、处事安詳、不疾言遽色、應接多事、千緒蟬起、未嘗差失、從先生而遊久者、未見其肄業之日起而更衣也、先生接人、忠信不貳、尊卑以等、長幼以序、送迎應對、嚴如石画、久而人益敬之、時或賓客屬至、日昃不食、語之諄々、不有倦色、動作有文、不欺暗室、人遺之物、雖微必改容起敬、以手加額、如其人在前、其寢疾、服藥必捧之、門人侍疾者扶持四体、雖褻必變、困甚猶少举手作辭謝容、比没不衰、其於貴人、交際甚嚴、取予不苟、中厄於禁錮、其窮益甚、其守益固、自幼至老、未嘗一謁見貴人、諸侯受業問道者前後數十人、非致敬尽礼、則未嘗得見焉、其人有過、知無不言、改而後止、未嘗為權貴少屈也、諸侯餽粟者、今神戶侯忠統、故甲斐子侯刑部少輔經隆、故沼田侯直邦三人也已、神戶侯初聞先生之窮而餽粟、後礼節稍衰、先生辭而却之、刑部君早卒而其養不繼、惟沼田侯厚待以礼終始不改、侯為執政增封、退朝即日益餽粟、侯為政以尊賢愛民為先、先生悅侯之賢、深感其知過、^{*15}侯卒後如加治中山謁其墓、後嗣侯直純以国用不足減所餽、先生因尽辭之、先生学吹笛於大神景豐、日光王好樂、嘗問景豐曰、弟子孰為善音、景豐對曰、有太宰、^{*16}其者其人也、王欲召見先生、景豐以告、先生曰、其儒者也、王若命以文

学之事、敢不謹述所聞、若奏薄技以供其燕樂、其不能也、如有復我者、吾其破笛、終身不復操音矣、景豐從容為王言之、王乃止、^{*17}京保中 朝廷命小野田国光詳定琴曲、国光故与先生善、於是從先生討論李之藻樂書、鴻臚筦間侯正之因召先生、与同詳定、先生固辭、因陳儒者進退之義、終不受命、後琴曲成進奏、官賞賜国光及与其事者白金、先生独不与焉、上嘗讀先生所著經濟錄、命侍中八田侯久通以私求其真本、侯使小林延年「來」^{*19}求假本、先生曰、善、為我謝曰、手写本作字潦草、不可以冒公侯之覽、某老憊不能復正書而進矣、遂私於延年曰、布衣之士、以言進於 朝、義必因執政大臣、若夫因内官以達、則君子不為也、侍中之需、不可応也、其守正不撓皆如此、親故時々以此為先生懼而、^{*20}先生処之夷然、至接俗人、終日与之語、一言不及黃卷、人不覺其為儒者、而皆畏敬之、雖婦人女子、聞其言莫不服其為人也、先生治家、嚴而有法、閨門之内肅如也、妻子僮僕、畏而愛之、遵守其法、不以先生在否為變、蓋其至誠有以感之、雖在陋室、家人言笑之声、不聞棚外、先生憂世、発於中心、憂天下之憂、樂天下之樂、聞時政闕失、憂見於色、享保癸丑春、因沼田侯獻所刻古文孝經於 朝及西城、於是諸列相參政皆請侯求覽、侯並贈一本、其秋又因侯上封事言災異、不報、先生居恒称漢世急取士、布衣得信其志、賢良方正、則吾豈敢直言極諫、則不多讓古人、恨不生於其世一救蒼生之患、嘗從容謂沼田侯曰、昔者谷一畝當 憲廟時、因稻葉公上封事、々秘不伝、中蓋有遷都之事云、事雖不行、為有識者取、先師数称一畝、々々雖有志、不得稻葉公、無以自達、其因稻葉公、可謂幸已、今臣幸得生不諱之世、又蒙君侯下顧、窃有所欲、為蒼生上言、某等微賤、言無由見采用、有如其言僭妄處嚴刑、是臣以身殉天下万民之急、人生百年、忽如過客、若死而有少輔

於民、幸莫大焉、不知果可得上言乎、侯然其言而許之、遂有此舉云、先生教人、先之以孝經論語、次之以六經、其論學大要以勉強^{*22}為主、教以恭敬勤敏、慎而寡言、博聞強識^{*23}、務成有用之才、深思

世之學者、貪名好勝、終身用力文辭、以淫靡柔悞為風流、以放曠無度為高致、一代學者、翕然宗之、徂來先生之道、得先生而大行於宇內、後進之士、不陷記誦詞章之流者、皆先生之力也、徂來先生嘗謂門弟子曰、詩書義之府也、古人論事、必引詩書以徵之、先王之義因見矣、學者合古人所引而觀之、庶乎不失古義矣、先生曰、某願勉從事、乃類聚西京以上之書引詩書者、從篇次之、徂來沒後十年、其書乃成、為卷凡三十四、徂來在日、命之名曰詩書古伝、先生謂孔氏之書有三、曰孝經、曰論語、曰家語、孝經有古今文、古文出自孔壁為真本、而孔安国伝文亡于中国、独伝于日本、尤可宝也、乃因我

邦博士家所伝孔伝、校訂數本、為作音注而刊之、後世學者皆用力於論語、而說者多不得其意、至宋儒說心法、聖人之道、与釈氏相乱、徂來先生揆而反之、聖人之道、始明于世矣、然其說成於晚年、日不暇給、猶有一二可疑者、乃為正文明訓話^{*25}、為論語古訓、又論其取舍微旨、別為古訓外伝、其載師說、間有与論語微不合者、為其它日所親聞、又因王肅注家語、補其遺漏、名曰家語増注、先生平日潛心

覃思、此數部為最、先生上繼先聖之業、下思化斯民、嘗曰、朱泚漫覃千金之家、而学屠竜、技成而無所試之、今学先王之道、無由行諸其世、徒如屠竜之技耳、猶不得已、筆諸書以俟其人、乃作經濟録、当世急務具焉、人主用之、大可以治天下、小可以治其国、欲觀先生之志者、覽此書足矣、佗所著有紫芝園前後稿、紫芝園漫筆、詩伝膏盲^{*26}、易道撥乱、周易反正、易占要略、春秋曆、六経略説、律呂通考、産語、独語、斥非、弁道書、聖学問答、親族正名、倭説要領、

倭楷正訛、三王外紀、乱婚伝、和漢帝王年表、新選唐詩六体集、諸未脱稿者、猶教部、延享四年丁卯、寢疾、以所著書授門人某々、各有所属、命子弟書遺言、疾病辟婦人、以是歳五月己未晦卒、享年六十八、門人合、賻葬于東都城北谷中里天眼寺先塋之側、先生再娶、元配末松氏、次配前川氏、皆無子、養長州人阿武安次之子定保為子、謹狀、門生篠山松崎惟時狀、

*1 東大本、都城本「槍」。

*2 『春台先生文集』は「出仕故出石侯忠徳」。東大本「故出石」を頭書して「仕」の後に入れるよう指示。県図本は頭書をそのまま行頭に組み込む。

*3 東大本、都城本「許」。

*4 県図本は東大本の頭書「時」を誤って行頭に入れ込む。正しくは「十余歳時」。

*5 『春台先生文集』は「歳時已」。

*6 東大本、都城本「詰」。

*7 東大本、都城本「徂」。

*8 東大本により改める。

*9 県図本「其義出載経伝」。東大本の頭書「載」を混入。今改める。

*10 東大本、都城本「歳」を見せ消ちにして「載」と頭書。

*11 東大本、都城本「微」。

*12 東大本、都城本「密」。

*13 東大本、都城本「柳」。

*14 県図本はこの前に東大本の頭書「其所幾尺短於」を混入。今改める。

*15 東大本、都城本「遇」。

*16 東大本、都城本「某」。

*17 東大本、都城本「京」。

* 18 東大本、都城本「求」。

* 19 『春台先生文集』「求求……」。東大本、都城本は「来」を頭書で補う。

県図本はこの頭書を行頭に組み込む。今、改める。

* 20 県図本は東大本の頭書を誤って混入。今改める。

* 21 東大本は衍字を見せ消ちにする。

* 22 東大本、都城本「強」。

* 23 東大本、都城本「強」。

* 24 『春台先生文集』「不陷為記誦……」。東大本は頭書で「為」を補う。

* 25 東大本、都城本「話」。

* 26 東大本、都城本「盲」。

二六・〇二

* 1 与徂来書此書未發來疾
遂不果致

太宰春台

* 2 純聞先生其徒其輯錄社中諸子之詩、上之木、因先取昔年以來諸

子集子。西台侯邸所作之詩、而編諸卷首、純窃拊曰、盛哉此舉也、

於是次及而徵純詩、純生而不才、愧播詩名於四方、況乎自先君子下

世而後、無復所来于斯世、年而方駕又幾五十、尤不欲以罷驚於逸足

者、且西台侯既絶純、々恐、不敢踵門以請罪、聞先生此舉也、窃以

為既獲罪於西台侯、今而列賤名於其集中、恐重吾罪、不如逃之、故

請於先生、願除純詩、不意先生告純以狭巾小量、為純大病、此言誠

中純膏盲、純雖不敏、敢不服膺鼎言、務広其狭、大其小乎、然純之

狭中小量非病也、性也、得之天、受之父母、不能変之、五十年于茲

矣、自今以後、血氣垂衰、雖奉嚴教、恐不及化、且純狭中小量、固

可患也、而能亦在此、所謂鳧脰不可続者耶、先生及欲令純広之大

之、得非続鳧脰者比乎、純若変其狭小為広大、恐喪其性、喪其性、

則將併与其能喪之、且先生嘗非宋儒變化氣質之說、以為聖人之道所

無純深信之、如純之狭中小量、非所謂氣質乎、先生乃斥以為病、而

欲為治之、豈欲使純變化氣質耶、何其言之矛盾也、純也惑、敢請聞

帰一之說、幸勿吝慈誨、夫先生自以大量能容、人亦以此称之、然以

純觀之、能容學者、而弗能容庸人、能容文藝之士狂簡者、而弗能容

礼法之士、能容其人、而弗能容其言、是則先生亦有所不容也、人亦

有以是議、先生者、雖然先生則一代之豪傑、命世之英雄睥睨以下

四百余言非西台侯略之睨宇内、蚊虻世人、其容与不容、何所論哉、

略

* 1 『春台先生文集』では「与徂来先生書」とし、「此書既成、而未発属

／先生疾篤、遂不果致、」と割注する。

* 2 『春台先生文集』の冒頭部「純再拝、新年尚寒、貴恙何若、属」を

略し、「純」を補う。

* 3 東大本、都城本「某」。

* 4 『春台先生文集』「将上之木」。東大本、都城本は県図本に同じ。

* 5 東大本、都城本「于」。

* 6 『春台先生文集』「年又幾五十、尤不欲以罷驚而方於逸足者、且西台

侯既絶純」。県図本は東大本の頭書「而方駕」の挿入位置を誤る。

* 7 東大本、都城本「乃」。

* 8 東大本により補う。

* 9 『春台先生文集』「睥睨宇内、蚊虻世人其容与不容、何所論哉」。県

図本は東大本の頭書（傍線部）を誤って本文に組み込む。

二六・〇三

昏礼壻死女不嫁議

鳩巢先生

礼婦人適人之法壹与之醮終身不改、故昏義有夫死不嫁之文、君子有

寡婦不可取之言、此天下之大經、古今之通誼也、自三代之衰、風教廢弛、人情日趨於涼、於是有以寡婦更嫁者、雖其間有欲守節者、然其父母兄弟皆疆之以嫁、嗚呼、可謂亂札害義之大者、此其嫁者與取者皆有罪、但有昏議既定未嫁墮死其女適他人者、世之守札者概以札經之言斷之、以為不可嫁、又罪其取者、以為違乎寡婦不可取之義、直清竊議、以為、此當嫁也、其取之亦於義無害、蓋先王制札、貴於得中、揆之天理、考之人情、必得輕重之倫、必得名實之當、然後可通而行之於天下、故能得先王制札之意、則雖札經之所不載、亦當以義起焉可也、若徒區々泥其已然之迹、以執一偏之說、則行之必有塞而不通者、今詳札經與君子之言、所謂夫死不嫁者、謂既嫁者也、寡婦不可取者、謂既為婦者也、昏札墮親迎、女至家三月而廟見、乃始以婦稱女、未廟見而死、則不遷於祖、不祔於皇姑、婦葬于女氏之党、夫以親迎之後三月之前、猶生不稱婦、死歸女家、況於親迎之前、未嫁之女乎、其無夫婦之義也、章々明矣、今責未嫁之女以既嫁之札、疆匪婦之人以寡婦之義、必使其不嫁以終身、此乃非札之札、非義之義、大人所弗為也、揆之天理不合、考之人情不從、其於輕重之倫與名實之當皆失之矣、難者曰、君子行札、寧失之於厚、無失於薄、昏札先嫁有行媒之言、有納幣之札、日月以告君、齋戒以告鬼神、夫既通二姓之好、慎夫婦之始也、如此而墮死輒嫁、雖無害於義、亦於人心有所不安、其視守約終身不嫁者、失於厚、則有之不猶愈於薄乎、曰、不然、札不可過厚、又不可過薄、中而已矣、苟不知義以處中、而惟厚之務、則其所以為厚者不過矯激之為耳、吾恐往往過中離道日遠、何足以言札哉、大抵婦之於夫與臣之於君同道、故臣不事二君、婦不更二夫、臣為君服、斬衰三年、婦為夫亦如之、蓋臣之於君、婦之於夫、恩義之至重者也、恩義至重、報札從之、不事二

君、不更二夫、天下之報札莫加焉、故為之服斬衰三年、乃与情相称、若夫臣去君而不絕者、為君服齋衰三月、至於婦人則無去夫而不絕者其約昏而未嫁者、為夫服齋衰、既葬而除之、由是觀之、去國而不絕者、不成臣者也、不成臣者主亡、可以事他君、約昏而未嫁者、不成婦者也、不成婦者夫死、可以適他人、此二者義同、故服同也、聖人於是斟酌其宜而處之、亦已精矣、今議定女約昏未嫁墮死者、女家主昏之人、當俟三月之後、以事祭告宗廟、又告亡人之靈及墮氏之党、然後嫁、庶幾於札為當、此雖經無明文、以義起焉、亦可以無疑矣、遂著于篇以授吾党之士、使其遇焉者取以為法、又俟天下後世制札者得焉、

二六・〇四

再嫁議

前賢

喪服札、有繼母嫁為之服、又有為繼父同居者服、近世議者、因以為婦人再嫁札之不能禁者、遂謂程子孀婦不可取之言為非、而其固守程子之論者、以儀札為不可信、直清竊謂、此皆執一不通之論也、札有經有變、婦人夫死不嫁者、札之常經不可易也、其再嫁者、聖人有時而許之、以通情勢之變、安得以此亂夫常經乎、今按、喪服札、父死為母三年、繼母慈母如母、出母為之期、若有婦人有子適人者、其子宜如何服、進而同之於母乎、降而同之於出母乎、是其嫌疑之間、聖人當必舉而叙之、以別同異、其於繼母慈母出母之類、既皆列举而無遺焉、則此不忌獨略于經以缺喪服之典、故直清之意謂、經無為嫁母服之文者、以婦人有子無適人之札也、其無子者適人、則有之、又必出於情勢之不得已、然後聖人許其再嫁、而繼母之嫁獨有父前妻若婢妾之子為之服耳、蓋婦人以夫為天、夫死以子為天、所謂三從之道

者此也、故其為亡夫守貞、惟從子為大以義、則先人之孤以恩、則骨肉之親既寡之、不負子、猶昔時之不負夫也、安有棄先人之孤、背骨肉之親、違其所天而去之、以從他人、此禽獸之所不忍為、而謂聖人許之乎、若其早寡無子大婦父家、雖在夫家、子非所生已為繼母、死不配夫、凡此於夫婦之道猶若無成就者、比之前所言者為甚輕、而夫家無宗族可依以終身、加之父母^衰々之念與諄々之言、如此者於礼得嫁至於婦人有以子嫁者、伝曰、夫死妻穉子幼子無大功之親、得與之適人、此言妻穉子幼、則無以守孤自立、子無大功之親、則無以同財共活、如此者於礼得以子嫁、此二嫁者聖人固已察其情勢而許之、又從而制之喪服、嗚呼其慮事之深、待物之広、一至此哉、然皆不許婦人去子適人、而許其與子適人、亦可以見聖人重人世恤人孤、而婦人報夫之義於子為重、亦已明矣、宋范文正公為義田以賑族、而有再嫁之恤、程大中有從女兒、寡既而女兒之女又寡、公懼女兒之悲思、取甥女以歸^嫁之、程子雖有婦婦不可取之言、然大中事著之行狀、以為義而朱子於近思之錄亦取之、皆可謂能得儀礼之遺意矣、其於夫死不嫁之義、初不相害也、難者曰、衛共姜亦無子者也、共伯死、共姜守義、父母欲奪而嫁之、共姜以死自誓、其余貞婦烈女、雖無子不嫁者無世無之、今以吾言子論之、豈嫁者未必非而不嫁者、未必是耶、曰、不然、聖人於寡婦之嫁、雖察其可許者許之、未嘗以不嫁為非礼、其或有守死不嫁者、固聖人之所予也、況如共姜之徒、雖無子亦不至窮無所歸、而使其嫁未必為聖人之所許也、曰、然則寡婦有為礼之所許而嫁者、我取之乎、曰、在彼有可嫁、則在我有可取、固無不可者、然此難預論也、先王之世、礼制明於天下、人惟礼之從、當此之時、寡婦有不得已而嫁者、天下固知其無犯於礼、若至後世以私乱公以欲害義、恐有名謂礼之所許實有不得已者、夫必使婦

父兄主嫁之人為范文正程大中也、可取、不然則不可取也、蓋嘗窃謂、此事雖小、實有關於名教者、故述此議焉、

* 1 果図本は東大本の頭書「為」を本文冒頭に組み入れる。今改める。

* 2 東大本、都城本「缺」。

* 3 東大本、都城本「衰」。

* 4 『鳩巢文集』により補う。東大本はこれを脱し頭書で補う。

* 5 『鳩巢文集』「吾子之言論之」。東大本は朱で「言」を頭書。

* 6 東大本はこれを脱し頭書で補う。果図本は「義」を誤って別に補入。今改める。

二六・〇五

祭論 論語 古義
祭如在 在註

伊藤維楨

祭祀之礼人道之本、於是不尽其誠、則人道缺焉、其復何言、夫人本於祖、万物本於天、豺獾之賤皆知報本、報本之心人之至情、故聖人因其不得已之至情以立之宗廟、具之犧牲、陳之簠簋籩豆、以伸其報本、反始之情、若於外神之祭、或崇其德、或報其功、皆尽吾不得已之至情而已尔、豈問其享与不享、祭如在祭神、如神在聖人、事神之誠如此、礼曰、齋三日乃見其所為齋者、又曰、祭之日入室儼然必有見乎、其位周還出戶肅然必有聞乎、其容声出戶而聽儼然必有聞其嘆息之声、皆衰世失道之論而非聖人崇德之言也、識者以祭義篇為乱道之書、可謂有見矣、

二六・〇六

弁蔡氏鬼神說

鳩巢先生

余嘗讀蔡氏所著論語蒙引、至祭如在章、觀其論鬼神之事、頗詳矣、其大要以謂凡祭祀無祖考來饗之理、但子孫報本之心自有不容己者、^{*1}於是宗廟祭祀之事有自出焉、則其來饗者是主於子孫誠敬之心、而有是也、嗚呼蔡氏而為此言也、古之聖人制祭祀之礼、必設主立尸、燭蕭灌鬯、求之於陰、求之於陽、夫如是何也、以其有來饗者也、苟如蔡氏之說、則是皆為虛說而欺人也、豈其然乎、且程朱發明鬼神祭祀之理、亦無余蘊矣、其明言祖考來格之義、亦不一而足蔡氏篤信程朱者也、何其於此大義所繫、反自擊斷拂戾而無所顧乎、蔡氏乃謂、古人之意自有所屬、其不與吾說相戾、然但可與仁人孝子言、而不可與薄夫俗子道、正恐得罪於古人耳、此其意謂古人心知其不然、而姑假此以導人於厚也、^{*2}古之聖賢立心以直、待人以誠、未聞其用知術設教有如此也、或問程子曰、枳氏地獄之類皆為愚人設此、欲怖之令為善也、程子曰、至誠貫天地、人尚有不化、豈有立偽教而人可化乎、知聖人之心者如此、蔡氏豈不之思乎、且其末有曰、郊天用特性、若天神真能來饗、則一特性、豈足以供天神之祭哉、夫祭尚氣也、非食味之道也、黍稷血牲皆報其氣、何必問神受食之量、而後供之、知死而致生之智、知死而致死之不仁、故聖人必將以二者之間待之、所以交於神明也、於人鬼^{*4}且然、況天神守^{*5}、蔡氏豈謂神之來也有容貌嗜欲如生人乎、而從其肥瘦大小以求飽乎、此最見其論之卑下也、曰、然則祭祀必有來饗者乎、曰、此古今之所傳、聖賢之所言、不可誣也、曰、其詳可得聞乎、曰、朱子答廖子晦書論之詳矣、朱子答廖子晦曰、性只是理、不可以聚散言、其聚而生散而死者氣而已矣、所謂精神魂魄有知有覺者、皆氣之所為也、故聚則有、散則無、若理則初不為聚散而有無也、但有是理則有是氣、苟氣聚乎、此則其理亦命乎此耳、鬼神便是精神魂魄、程子所謂天地之功

用造化之迹、張子所謂二氣之良能、皆非性之謂也、故祭祀之礼、以類而感、以類而応、若性則又豈有類之可言耶、然氣之已散者、既化無而無有矣、其根於理而日生者、則固浩然而〔無〕窮也、^{*7}故上蔡謂、我之精神即祖考之精神、蓋謂此也、

而其謂氣之根於理、而日生者固浩然而無窮也、則一篇之要旨也、此見氣之在天地之間、万化一原古今一貫、則彼祖考之氣、雖已散而無有、然即此與祖考之氣同根而生者、而求之所以無不感通也、^{詳其說下}但觀於日生之言、則其日日新生、不必以前氣為後氣、亦已明矣、然既曰氣、則必以類而感以類而応、故謝氏以為、我之精神即祖考之精神、亦謂吾氣常與天地之氣相通、而有以類而感焉、則其日生者以我之精神為苗而生、是其応也、乃祖考之精神也、朱子引謝氏之言以結之、其意蓋如此也、

朱子又答門人曰、來伸有非是已屈之氣來伸、是祖宗之氣別新生也、又曰、只思上蔡祖考精神便是自家精神一句、則可見其苗脉矣、亦皆此意也、

至其門人勉齋黃氏祖述師旨、亦可謂言約而義精矣、自朱子而後所未聞也、

黃氏曰、祖考之氣雖散而所以為祖考之氣、未嘗不流行於天地之間、祖考之精神雖亡、而吾所受之精神即祖考之精神、以吾受祖考之精神、而交於所以為祖考之氣、神氣交感、^{*9}則洋洋然在其上、在其左右者、蓋有必然而不能無者矣、學者但知世間可言可見之理、而稍幽冥難曉、則一切以為不可信、是以其說率不能合於聖賢之意也、

而其謂稍幽冥難曉者一切以為不可信、則豈蔡氏之謂乎、其他諸儒之說率皆不出此、但恐微妙之理不容多言、疑似之間小失大差、學者當

以前兩說、反復體察而熟思之、則其言所不能尽者、庶皆得之於心矣、然余謂先儒皆詳於說神、而略於說鬼、豈以鬼之有無有難深言者乎、朱子曰、祭祀之礼以類感応、是有氣類可求也、又曰、祖考之精神魂魄雖已散、而子孫之精神魂魄自有些小相属、祖考之精神魂魄已散、則所謂些小相属者、何所属乎、又曰、子孫世次遠者、氣之有無不可知、遠者不可知、則是近者可知也、而曰不可知、則雖遠者其有無猶有未決也、是必有其說矣、且若謝氏謂祖考之精神即我之精神、祖考之氣隨化而尽亦已明矣、然猶曰祖考之精神者、是其氣類之感、必有寓我之精神以生者也、若直以我之精神而巳為祖考之精神、則恐復陷於蔡氏之誤矣、朱子答人問鬼神有曰、大抵人之氣伝於子孫、猶木之氣伝於実也、此実之伝不泯、則其生木雖枯毀無余、而氣之在此者猶自若也、此等處從実事上、推之自見意味、今因其言而推之、凡雖氣之在此者自若也、然不祭則不格、不種則不生、故種実於此、以求發生、猶聚我之精神以求祖考之來格也、蓋天地之氣生々無窮、不必以去年已枯之氣為今茲方生之氣、但木之氣雖枯毀無余、其所以種類相感之機、則固伝於流行之氣、而有未嘗息者、故氣之日至必与実之性相応、桃杏梅梨自有界限、而木之生如去年然、雖已枯之氣來伸可也、即此而觀、則祖考來格之理亦可默而識矣、若曰祖考之氣、伝於子孫者自聚而已、無別有氣類之感也、是猶曰木之氣伝於実者自生而已、無別有氣類之感也、夫江南之橘樹之江北、則化為枳、若使実之發生無待於氣類之感也、則其樹之江北者、亦將如実而生矣、何嘗為地氣所変乎、以其為地氣所変觀之、則知実之發生有資於氣類也重矣、蓋嘗論之謂、靜而知者鬼之德也、動而感者神之德也、惟靜而知、故能識音志下同於往、惟動而感、故能応於來、然不知無以感、不感無以知、其実相須而見耳、若夫祖考之氣、既散而無余矣、然嘗有是

人、以生且死於天地間、皆莫非実理之所為、則其実然之迹必為鬼之所識、亦何疑乎、故其聚散之機、関係於理、而有以伝於天地之氣者、雖世次之遠与幽陰冥漠之間、苟有以感之、未必無端倪之可發、此雖不可以為決有、然謂之絶無亦不可、故朱子謂、氣未散尽、又謂有些小相属者、蓋皆指此而言之也、

些小相属見前、又朱子註楚辭大招云、春氣既発、幽暗氷凍之地、無不周浹而流行、故魂魄之已散而未尽者亦隨時感動而無所逃、於是及此時而招之、欲其無遠去而帰來也、祭義春雨露既濡、君子履之、必有怵惕之心、如將見之、故禘有楽以迎其來、意亦如此、今按禘春祭也、

及夫使天下之人齋明盛服以承祭祀、則彼隨感而生者即此子孫之氣、發見昭著如在其上、如在其左右、此其応有不可誣者矣、而以其未發言之、則鬼之識於往也、以其已發言之、則神之応於來也、而其機緘之妙、則必感而後見耳、周子曰、靜無而動有、亦此之謂也、易曰、顯於仁蔵於用、顯於仁神也、蔵於用鬼也、此可以論聖人、亦可以論鬼神矣、又嘗以人心之妙推之、亦有事理可通者、蓋觀人心之応物乎、物既往矣、則其所用之氣与物之規模形象、未嘗留於思議之間、然物往而魄識之、人不自覚耳、及夫事類相感而精神注之、嚮之規模形象、猶在心目而得之、然未感之先、固未嘗有、而其感也忽焉、而有、既而失之亦忽焉而無、此人心之妙用者、即祭祀感応之理也、由是言之、則凡所履歷之事、可以思而得、凡所嘗生之人、可以祭而格、故程子曰、天下事有即有、無即無、無古今前後、

程子又曰、如有人平生不識一字、一日病作、却念得一部杜甫詩、却有此理、天地間只是一箇有、一箇無、既有即有、無即無、如杜甫詩者、是世上有杜甫詩、故人之心病及至精一、有箇道理、

自相感通

蓋有即有、無即無、是実理也、有理則有氣、故有者必感、無者不感、且如程子又有一說引人記杜甫詩事、杜甫詩有何形象、然天地間既有是、則不外乎氣、所以係於感応之機也、亦見鬼神之体物而不可遺也、惜夫蔡氏之精於理而不察乎、此因援先儒之說而論之、遂以私所見附其後、將俟夫窮理之君子相与議焉、元禄十一年十二月十九日、室直清書于賀府鳩巢之舍、

物徂来曰、剖樹以求花於其中、鳥能見之、謂之無花可乎哉、易曰、知鬼神之情狀、是聖人之事也、後世儒者皆理學鳥能之、

- * 1 県図本では「…無祖己考来襲之理、但子孫報本之心自有不容者」。東大本では「己」を脱したため、「己」を頭書。今、東大本の指定の位置に「己」を補入。
- * 2 前項と同様、県図本は東大本で指定した脱字の挿入位置を誤る。指定の位置に補入。
- * 3 東大本、都城本「知」。
- * 4 東大本、都城本「且」。
- * 5 東大本、都城本「乎」。
- * 6 「性」の字、県図本は東大本の挿入位置を誤る。依つて、東大本の指示する位置に改める。
- * 7 『補遺鳩巢文集』「而無窮也」。東大本、都城本「無」を頭書。
- * 8 東大本、都城本「者」。
- * 9 県図本は「交而感」。東大本の頭書「而」の挿入位置を誤る。今改める。
- * 10 「因」の字、挿入位置を誤る。東大本の挿入位置に改める。
- * 11 県図本は「其何嘗」。東大本の頭書「其」の挿入位置を誤る。今改める。

* 12 「春」の字、挿入位置を誤る。東大本の挿入位置に改める。

* 13 東大本にある頭書「惜夫蔡氏之／精於理而不／察乎此因援／先儒之說」を、県図本は誤つて挿入。今本来の形に改める。

* 14 東大本、都城本、前項の頭注あり。

* 15 以下、『補遺鳩巢文集』には不載。

* 16 東大本「鳥」。都城本「鳥」。

* 17 * 16に同じ。

二六、〇七

観游亭記

雨森芳洲

夫知観之為観、游之為游、折々然以自喜者、恒人也、万物皆可観、万物皆可游、知其所以游而観者而樂之危矣、猶有待于外者其於恒人也咫尺之間耳、若夫達人之於観游也、不出戸而窺天下之大、不過一瞬而撫四海之外、弥滿六虚、揮斥八極、廢之憮然莫知其所、何必物乎、可謂至矣、竜田氏門六左衛門如則作一亭於家圃、海溟之空濶、山岳* 3 嶽之龍葱、与夫街衢之旁午、莫不举皆矚目、而又攬乎花木禽虫之衆且盛、于々然游于斯観于斯、余故立其名曰観游、附以壺丘之意、* 4

* 1 東大本、都城本「折」。

* 2 『橘隠文集』には「咫尺之」なし。

* 3 東大本、都城本「岳」。

* 4 『橘隠文集』では「意」の後に「云」あり。

二六、〇八

永賀亭記

前賢

別業在州南久田道上、編茅為宇、構成一亭、命之曰永賀、不佞公退之暇、或乘欸段、或駕籃輿、徐々然、于々然、未嘗不与二三同志歡笑宴樂于斯焉、坐花於春、納涼於夏、賞丹楓於素秋、吟白雪於玄冬、夕陽沒、皎月出、拋梧背燭、或焚香以澄慮、或啜茶以消悶、其樂豈有既乎、此地也尤接府港、右通野村、前則白城之祠、松檜陰森、仰肅神靈之遺威、後則宝滿之嶽、鶴唳驚翥、恍如羽客之盤旋、於是穿林度徑、登縮遠之台、延明精舍、鈴鐸響于霄漢、安知其無高行之僧、超三界而獨立者乎、若乃謁海神之宮、涉苔磯、下沙岸、試投釣竿於淪漪、漁歌互答、塵囂冰積、加之滄溟万頃、渺茫無極、波濤之洶湧、魚竜之出沒、足以壯士夫之瞻、既而天晴風恬、平如鏡面、則壹岐五島以至筑紫諸山、聯絡蜿蜒於蒼煙杳靄之間、誠可以知宇宙之大、觀万物之盛、非独遺幽懷已也、余因而語於客曰、此亭之為名、子知其故乎、吾儕之所以樂于此者、無一而非上之恩沢、嚮使烽燧警於辺陲、兵鏑交於原野繼之以飢饉、重之以癘疫、嗟怨之声、盈於道路、吾儕雖欲樂此、焉能得乎、然則此足以為君上永賀昇平、亦足以為吾儕永賀遭際、吾之命名、不亦宜乎、客曰然、於是乎記、

*1 県図本は東大本の頭書「渺」を誤つて行頭に組み込む。今改める。

二六・〇九

白雲樓記

前賢

夫福岡之為地、固九筑一大都會也、而藩侯居焉、城池金湯之雄、閭閻黔赤之盛、連袂為帷、揮汗成雨、人肩摩、車轂擊、髣髴於古所謂臨淄者、東溪^{*2}小野子、以藩府之官族、少而雕竜繡虎、呈材藝苑、曾与韓客闢伎於侯賓之館、衆靡不称其敏、既而以医国為心、疲癯殘

疾、起廢回春者、不知其幾千百家、今也置別莊於臨海之埠、以為休憩之所、又起一樓、外施勾欄、內設簾幃、命之以白雲、豈有所慕於老陶所謂只可自悅之遺言耶、余乃展其圖而觀之、右有箱崎之宮、甕桶聳空、松檜成列、在昔聖母神后之豐功偉烈、攘戎狄而尊区宇、遂成格天之大業、可追想焉、左有荒戸之津、西邦徹侯之述職朝宗、蜚商越賈之獻琛來貢、往來絡繹、相望於木道、国家全盛威德之遠被、從可卜焉、前攬藍島之勝、後靠州城之殷、岡巒之逶迤、浦淑之縈紆、魚竜出沒於洶湧、煙雲變幻於頃刻、与夫漁榜游舫、浮動悠揚於花晨月夕之間、皆為此樓之所有、稱為小西湖、孰曰不可、獻巧廻奇、左顧右眄、応接之不暇、於是乎徘徊焉、徜徉焉、又從而盤桓焉、其為於樂也大矣、夫有厚德之積者、余慶必行未裔、有淳良之教者、美名亦存於齒碣、東谿子又有賢胤、箕裘勃興、其所以繩武而垂裕者、举皆在於斯乎、東也鮫背鶴髮、年方八十、偃蹇伊優於蕞尔榛莽之鄉、觀於東溪^{*6}子之於世也、恢々乎有余地、安得不羨慕而歆艶之、於是乎記、

*1 東大本「固」を頭書。県図本は「固」を誤つて冒頭に置く。今改める。

*2 東大本、都城本「溪」。

*3 『橘隠文集』では「藍」なし。また、「島」に割注「緒按島字左右疑有脱」。

*4 『橘隠文集』に「於」なし。県図本、誤つて東大本の頭書「於」を補入。

*5 『橘隠文集』では「衍於未裔」。東大本、都城本「行」。

*6 東大本、都城本「溪」。

誠信堂記

前賢

草梁之有癖也久矣、歲淹月深、風剝雨蝕、將有傾圯之患、錦谷玄君蒞任之明年、來問四顧、慨然而嘆者久之、曰、此何足以揚國輝而尊官瞻耶、廼捐貲鳩財、督工修葺、堂欲其高、唯恐或陋也、墻欲其堅、唯恐或壞也、其他厅房門廡、以及厩庫之小、靡不煥然一新、於是乎人之過者、輒然^{*1}觀^上悅、相与告曰、如此方可稱也、既而以誠信名堂、夫斯堂之設也、北有釜山開雲之区、南有竜台絶影之勝、前俯滄溟、後倚岡阜、邑宇之饒富、漁樵之歌呼、与夫^{*2}煙^上嵐^上之開闔、魚竜之出沒、以至春禽秋月之变换、蓮沼松逕之逶迤、可以悅耳娛目、形諸吟咏而適乎心志者、莫不皆華於軒窓之間、而玄君善詩者也、曾不一取於此、而名堂以誠信、其故何也、蓋交隣之道、誠信為先、而後可以保其無恙、雖然久著之信、可以及^{*3}〔豚魚、暫且之誠、不足動孺子、凡居斯堂而任交隣之責者〕焉得泛然罔或深思乎、万一用智逞巧、規利自私、小而致隣人之懟、大而開辺事之釁、則卑梁之桑、梁亭之爪、禍福之間相去何啻天淵也哉、玄君之為人、処心沈邃、奉公勤慎、所以自警于己、又将欲勸於後人、可謂切矣、己酉之歲、余適奉差於此、觀其事而嘉其志、実有不能以自已者、遂書以為記云^{*4}、

庚戌仲秋十四日

*1 東大本、都城本「觀」。

*2 東大本、都城本「煙」。

*3 県図本は以下「任交下当有隣字豚魚暫且之誠不足動孺子凡居斯堂而任交之責者」とあり、誤って東大本で頭書（挿入）の「任交下当有隣字」を本文に組み込む。「上」は『橘廳文集』（東大本も同じ）。

*4 『橘廳文集』は「云、庚戌仲秋十四日」なし。

研山記^{*1}

前賢

觀於洿而知江海之深、觀於垤而知泰山之高、凡物雖有大小之弁、而其原於一者不貳也、古之人匡坐默運、会諸方寸、愴然以達万物之情、若然者、淳濬之所抵、滋潤之所注、固足以驗夫江海之深、況於阜婁之小、独不足以徵夫泰山之高者耶、吾嘗觀乎域内之山、唯富嶽為最高、蜺螳磅礴、綿亘於豆駿數百里之地、上聳乎霄漢、下蟠乎坤軸、屹為衆山之宗、而岡巒聯絡、雍容委蛇、巍々然如大賢君子之肅容正色、翱翔乎群辟之上、可謂宇宙之壯觀也、彼其樂於山者、儼遼遠而未之由造焉、則面諸屏障、築為假山、或取拳石而象之、徘徊顧瞻、未嘗不神遊於其間、觀大於小、良有以夫、峩山桂師、德邁行特、為時之名衲、一日獲小石於丹陽之崖、高不過六七寸許、形如琬琰、不仮雕琢、三峯全具、上有皓質、凝瑩如雪、儼然一小富嶽也、^{*2}耗^上之以漆光盤^{*3}之、籍之以爛華之礫、置諸^{*4}凡案右、朝焉夕焉、賞玩之不已、飄々然如凌空駕氣、往還於穗原清利之際、其興果何如也、師素善詩、時乎操觚而对吟之、則恬澹之心、遙与山間之明月相照、朗詠之声、洸将溪上之清風互答、非独觀大於小、而其瀟洒脱俗之状、皆可歆焉、夫有奇賞而後有奇珍、有奇珍而後有奇興、吾於師乎見之、適徵余為之記、遂書此以相贈云、

*1 『橘廳文集』では「峨山桂洲 伯研山記」と題する。

*2 東大本、都城本「耗」。

*3 東大本は「盤」を頭書で補う。県図本は挿入位置を誤る。

*4 東大本、都城本「凡」。

*5 県図本は、東大本が頭書で補った「独」を、行頭に入れ誤る。今改める。

二六・一二

小峨眉記

前賢

龜山有一君子、号蝶閑、嘗獲一石於江磧之間、命之曰小峨眉、而其為狀也、高不過六七寸、上尖下広、皓巖玄質、隱然一小山、而峨眉天半之雪、可想而見焉、命之以此名固宜、吾聞峨眉之為山也、上凌霄漢、下蟠地軸、瑤花琪草蒙被陵岡、神靈之所窟宅、羽仙之所盤旋、僻在西蜀、名高天下、蝶閑子其亦有憑虛御風、冷然往游之志、因寓意於一石、而莫之忘也耶、其嗣小野田君、貞慎好學、有名箕裘、一日貽書以告余曰、蝶閑子帰天已十年矣、然平昔之所愛、羹牆之所存、吾不能不倦々于此、東華豪英、如李洪諸賢、俱各有詩若文、以贊揚之不已、子乃吾家之故人、豈得無一辭、余以為礼不云乎、父没而不能読父之書、手沢存焉尔、或以手沢而不能読、或以遺愛而不忍棄、事雖異而情則同、非篤於孝者、孰能如是乎、雖然石者微物也、在外者也、凡吾身之所存、自夫秉彝之性、以至於肢体髮膚、皆天之所与、而父母之所遺、其為重且大、固非石比、苟能巾以礼楽、箚以誠懇、淬濯弘拭、真積力久、蘊之為德行、著之為事業、将使声名赫奕屹然与峨眉並高、其為孝也、不亦大乎、小野田君必有志于此、不在其身、必在子孫、吾於是乎有重感焉、安得而不識、元文四年仲春初四日、

*1 県図本は東大本の頭書「也」を誤つて行頭に組み入れる。今改める。

*2 県図本は東大本の頭書「棄」を誤つて行頭に組み入れる。今改める。

*3 『橘隠文集』「元文四年歳在己未仲春初四日芳洲雨森東七十二歳記」。

二六・一三

是其山石記

鳩巢先生

天下之山水如其多也、天下之人物如其衆也、而世之以愛山水聞焉者如其寡也、其故何哉、蓋世有豪蕩飄逸之人、地有幽遐蕭散之境、苟有其人而無其境、則不能得其所愛而愛之、有其境而無其人亦不能知其可愛而愛之、是故人与境相遇、然後能檀山水之愛、不幸而不相遇、則曠一世而無聞焉、宜其愛山水者寥寥而如落星也、今夫士君子出仕於朝者、未必皆饕餮貪祿之人、亦有豪蕩飄逸不以富貴利達蒂芥於胸中者、雖馳思山水之遊而寄迹台閣之上、不得一至其境、耳聞而目見之、以發其風雅之趣、此有其人無其境者亦士君子之遺恨也、若夫樵人漁子之徒、日夜升降乎林丘之際、朝夕摇曳乎烟靄之中、然頑然与木石共居、漠然与麋鹿同群而已、曾不知山水風月有何可樂而愛之、此有其境無其人者、亦山水之遺恨也、夫山水清曠之士、不使一世高潔之士居之而反為漁樵無知之所有、雖非治乱興廢之所関、然凡世事之齟齬往々如此、亦不得不使人慨嘆於斯也、六羽松浦君使其弟存心君以其所蓄石仮山之図、來請余記之、余披其図而一覽之曰、奇哉石也、何其形之似富山也、大馮君奚自而得之、存心君曰、是石也、得之於播州室津之浜、寔吾家兄所生之土也、以故特珍而愛之、嘗請名於北村季吟翁、々名之曰是其山、蓋取請菅為長詠三上山之歌云、余曰、淡海之三上山、蓋京師人望之以為三輔之富士山者非邪、然則余之所見与翁之所名亦不甚相遠、夫松浦君以大雅宿儒之選、受論思獻納之職、日夜与竜蟠鳳逸之士出入端閣宿直溫

室、而其耿介之標瀟灑之想、將脫塵俗而直出与山水而同歸、然其所觀者不過金城湯池之壯麗、其所遊者不過彤庭玉階之深邃、欲得夫幽遐蕭散之境而遊之、不可得、不亦所謂有其人而無其境者乎、於是常置是石於几筵之側、而觀之以髣髴乎山水之遊、亦足以遠遺世之情矣、夫三上山移富士山於環京三十里之近、而是石移三上山於樽俎咫尺之間、亦已奇矣、況復出於所生之土者乎、君之眷々於是也亦宜哉、嗚呼余老矣、幸而得遊東都一見君於其第、將指是石於座隅、而曰袞冠逢掖翛然隱几而坐者（是其人也、奇峰魁岸亭然側席而立者是其山）也、夫然後、知是石之与是人相得而不偶然矣、豈非此生之一快事哉、於是乎書、宝永元年十二月初七日、英賀室直清記、

*1 東大本、都城本「檀」。

*2 東大本、都城本「土」。

*3 東大本、都城本「土」。

*4 東大本、都城本「諸」。

*5 巢圖本、脱落あり。東大本により補う。

二六、一四

答稻若水論朱文公丐祠官書 前賢

直清頓首再拜白若水稻（^{*1}）大執事、前日得吾兄所賜書及伊蒿先生藤微君所著文一篇、伏承藤微君与客論朱文公丐祠官事、不敢自決、具錄客難之言、以与直清令議之、詩曰、先民有言詢于芻蕘、微君有焉、蓋以先賢出處之間非後学所輕議、在微君齒德之尊、猶不敢、況如直清諛問薄識、何足以奉盛意塞厚望乎、然既辱尊長之眷、許以獻疑請益、而徒事無用之謙退、自遠於師友之益、顧於直清平昔之心、有不

自安者、謹因其所錄客難之言、就加弁斷之說、旁通不曲議敢不尽不自知其言之過煩也、惟微君与吾兄察之、大抵論前世之事、當斟酌時宜、孝覈事實、然後委曲而察之、變通而論之乃可、若徒挹已然之迹而守一定之說、往々有窮而不通者、此所謂刻舟求劍、膠柱鼓瑟者也、欲以斷天下之疑通天下之情、亦已難矣、今按、宋朝自真宗以來、建宮觀、雖出於尊崇道教、然其設祠祿之官以佚老優賢也、凡老而自陳賢而廉退者皆以祠官處之、使食宮觀之祿以示優礼之意、自王魏公富鄭公之徒亦然、至於香火齋醮之事、蓋有官法度（^{*}）人為道士以克之、此朝廷之意初不以香火之事瀆朝臣、而朝臣居此官者亦徒以奉香火自稱而已、未聞有周旋其間身預其事者、猶近世嫁女之人自以奉箕箒為名也、直清竊謂、君子不仕于朝則已、苟仕于朝則朝廷常員之官皆当擇者也、若宋朝祠官、自国初有設焉、以待凡齒德之臣、則其曰使、曰副使、曰判官、曰都監、曰提舉、曰主管、皆朝廷常員之官也、朱文公以在朝之臣拜常員之官、其於儒者之義固無所輕重、而難者遽以名不正議之何也、若謂儒臣帶祠觀之銜故云尔、恐不然、名之与实相須而成、此当先論朝廷所以設此官之意、其实在、实之所在名之所在也、夫祠官之設实為佚老優賢者也、使朝廷名為佚老優賢、实以香火齋醮之事煩之、此官固為虛設、謂之名不正可也、苟如是、在凡朝臣稍識義理者、將辞而不受、況於一世之大儒者乎、今太一冲霄等名号、雖甚無謂、然其於朝廷優礼之意、無所妨害而独規規於名字之間、必辞而卻之、以傷朝廷之美意、此乃狷介自矜之徒、矯激之為尔、非所以論天下之大賢也、若夫名為祠官、而無祠官之实、实為朝官而失朝官之名、朝廷官政分之謬、致此名（^{*3}）文（^{*4}）不正、非所得而預也、君子之処世与衆、惟義之視而已、故易有以同而異之語、孔子有從衆違衆之言、今難者以為文公平生關異端、若斯之蔽也、今乃任

其官受其祿、不敢違衆而獨異、焉用夫關異端之嚴乎、直清謂、君子之道固有隨事而時中者、所謂義也、設使當時^{*5}特置祠官必屈儒臣為之、以舉崇道之典、辭之為義、受之為不義、所謂違衆而獨異者、宜施於此乃可、今宋朝置祠官、非為崇道、又非專以寵儒臣云尔、自熙寧以來、待凡在朝閑退之臣、皆以此處之、係國家之故事、為拜除之通例、吾安得遽然生取舍於其間、違衆而獨異乎、曾子不食羊棗而食膾炙、何者羊棗親之所獨食之、有以害吾不忍之心、膾炙衆之所同食之、未必害吾不忍之心、若以其嫌於食親之所嗜欲、并膾炙不食、天下其孰以為是、豈足以稱達孝乎、今祠官雖名為崇道通為朝廷優礼群臣之官、以其嫌於党異端、欲距而絕之自異於天下、是不食膾炙之類也、本朝近世有以儒受僧与官者、使所謂法印法眼者納言侍從之類通為朝官之名、雖使儒者受之、何不可之有、然朝廷專以此寵儒者、而儒者甘受之、是乱名傷義自同於浮屠之徒也、豈可与祠官之事同日而語哉、難者又以為、文公於祠官有不得已、則不辭猶可、至於丐之已甚、直清謂、受之無害於義、則丐之不為已甚、亦辭尊居卑辞富居貧之意也、且宋時祠官雖亦優礼之意、實為閑散之官、故凡諸宮觀皆為力講^{*10}而後授、文公丐祠、以從當時之法也、難者又以為、文公居祠官、一無所預、唯以著書授徒為務、此其所以自為、則善矣、奈其有素餐之譏何、此雖直清亦疑之、君子居是官、則思脩其職、未嘗以一日徒食、故其在朝而不得志也、則退而隱於抱關擊柝之吏、以為猶有可以恭其職者、今祠祿雖朝廷之所優食其祿不得其職、得非無事而食乎、其後徐而思之、此殆難概以常人之度論也、昔孟子以躬孝弟之行、守先王之道、以此伝食於諸侯、後車數十乘、從者數百人、自以為非無事而食者、今文公學孟子者也、明先王之教、開生民之道、成就人材、裨補風教、嗚呼君子之不素餐也、孰大於是、文

公於此亦自知其有以副朝廷優礼之意、故寧受祠祿而不辭也、文公答陳同甫書有曰、就其不遇、独善其身、以明大義於天下、使天下之學者皆知吾道之正而守之、以待上之使令、是乃報不報之恩者、亦豈必進為而撫世哉、文公所以答同甫者、孟子所以告彭更也、亦見聖賢所以自處者、前後如一、而所謂報不報之恩者、与夫任官守之責者、蓋亦有道、並行而不相悖焉、豈得執一而論^{*2}乎、窃謂、文公丐祠、不足以為大賢之累也、直清又聞、徵君平生尊信文公甚至、今丐祠一事、不敢遽以為是、詳議之余旁及不肖、蓋將尽夫衆論不同之極、而後取衷也、是可謂不阿其所好者、而其用心之公偏自養之寬裕為何如哉、使世之好智自用者聞之、亦可以少愧矣、此直清之徒、所当師法也、他日徵君如賜一言、以斷可否、又煩吾兄、以書報、使直清得与聞焉、万々希望在此耳、直清頓首再拜、

*1 東大本、都城本「丈」。

*2 東大本は、「不」を頭書して補う。県図本は、頭書の「不」を本文に組み込み「…不敢尽不…」とする。今改める。

*3 東大本、都城本「文」。頭書して「分」。

*4 『鳩巢文集』「非我所得而」。東大本、都城本は県図本に同じ。

*5 東大本、都城本「特」。

*6 東大本、都城本ともに衍字だが下の「施」を見せ消ちにする。『鳩巢文集』は「施於此」。

*7 東大本で「与」を挿入するよう頭書するのを、県図本は当該行の冒頭に組み入れたもの。『鳩巢文集』では「官者使其所謂法印法眼者与納言侍從之類…」。

*8 『鳩巢文集』では「与納言侍從之類…」。東大本、都城本「与」を頭書。

*9 東大本、都城本「示」。

二六、一五

与稻宣義書

前賢

近誦吾兄雜錄數篇、見其文辭簡潔議論出人意表、且如孝女伝、揄揚側陋之潛德、甄錄鄉閭之異行、其心眷々惟恐、使人不得為善之利、亦仁人之用意也、非若世之儒者習浮靡尚華藻作為無用之文以悅人觀聽也、僕謂吾兄此文有補名教、豈特文辭之美哉、嚮已作詩以贊之、蓋感嘆之情自有不能已者、又如胡枝等錄、正時俗承襲之誤、資學者多識之益、援古証今、使人考信、亦非虛作之文也、然吾兄不敢自是、旁聽異議、詢及愚陋、因錄數事、以請左右挾之、今辱賜書、礼恭意勤所以慰藉不肖者甚至、僕何以報之、僕少年時抱不羈之志、謂男兒不得志一世、則當周覽四方名山大川徧与海內豪傑游、以尽天下奇聞壯觀、寧能從俗俯仰局促如轅下之駒乎、惟親老家貧遂為祿仕、尔来遠跡北陬、不与世聞二十有五年於今矣、慈母在堂、僕亦漸老、無復四方之志、於是退而讀書詠詩、從一二朋友而游、相与上下其議論以樂我志、而遠地所聞見不广、無以開發耳目、使人鬱々耳、前年吾兄自京師洋々而來、顧僕於陋巷之中、一相見如旧相識、數年以來日聞所不聞、不自知身被羈縻落莫之久、此吾兄之賜也、国人皆云稻君善為本艸之學、僕応之曰、稻君學広而聞多、実不易得、若本草其余事也、国人或信、或否、僕自恥素行之不立無以取信於人、然其信与否、豈於吾兄有所加損乎、若僕材朽文拙學出已見、自知不為時賢齒錄、不料今日過蒙吾兄之稱譽、雖以眷愛之厚、実非固陋之所當、徒增愧耳、州国二字之義、來書尽之、前日倉卒不深考、以為今六十六州多為藩封、殆与春秋列国無異、与其称日本為国者、自不相

妨、非謂日本之号可以州称也、然今而思之、六十六州本非封建之名、不宜称国、此亦來書得之、無復可論、独其以夏九州而比之、欲更於其下建国焉、則僕未免有疑也、昔在堯時、禹平水土以山川定經界、分天下為九州、舜撰帝位、肇十有二州、夏后氏又為九州以統万^{*1}国、而商周因之、及秦并六国、罷^{*1}置守、分天下為四十郡、離析六国之地、分隸於郡以為県邑、漢興制天下為十三州、置刺史以統郡県而歷代因之、夫以州統国者、唐虞三代之制也、以郡統県者秦之制也、以州統郡者兩漢之制也、然漢十三州存禹旧号、而郡猶三代之国、則猶有疆界山川、統領万国之遺意焉、自東晉之後、海内分裂、日相侵掠、競置州郡、至隋一統、天下州郡皆以百數、後又罷郡為州、夫画野分州、上応列宿、豈可紛々濫為建置分析猥瑣如此、唐承隋後、患諸州地小勢分無以經理天下、於是因山河形便分為十五道、厥後宋改為二十六路、明改為十三布政司、以統諸府州県、而遂不能按禹跡復九州之号、雖其勢有不可者、亦可謂^{*2}矣、今我東方疆域分為幾内七道、列為六十六州、亦唐之遺制也、至其謬以州為国以刺史為守者、史氏之陋固不足論、然州有上中下之差、刺史有別駕司馬之属、天子命朝臣出守、或以親王遙領、凡此皆襲隋唐州郡故事也、由是觀之、六十六州隋唐所謂州郡也、而以夏九州漢十三州比之、恐有不合者、自鎌倉御天下初建藩国、大者以州、小者以県、逮至近世諸侯之国多、以州受封、々大州小者、至以一国跨有数州之地、若來書所謂一州容数国之封、其至小者也、今乃例考九州建国之制、欲以一州数国者均之、則須有割裂大国之封分為若干国乃可、此決不可行者也、且国封域之名也、何常名之有、漢封諸侯皆比一郡之地、其命国名多仍郡名、国除乃復郡之、若中山国長沙国河間国之類是也、僕謂、当今之世、欲定国名、莫若^{*3}隋封疆大小立以為国、有一州者以

一州為一國、二三州者以二三州為一國、數県者以數県為一國、然後制國名以統之、其制國名、率以都邑若名山大沢為拠、

先生自注云、以都邑名、如伊達氏為僊台國、島津氏為鹿児島^{*5}國、又如近江州有琵琶湖、駿河州有富士山其他、國名別有処置亦可、

其州郡如故、若國除則以州郡治、亦与漢制合、僕又謂、今之諸侯有分茅胙土之実、而猶仮刺史守令之名、有朝覲述職之曲、而反授黃門羽林之官、輕重無倫、名実素矣、宜倣周家五等之列、制為諸侯爵位、各以國名配之、其兼朝官者必因材德之選任國家之重、如周公攝政王室、鄭衛武公為周卿士、及漢東平王為驃騎將軍、然後以為可、其餘除去、以示從古、不亦善乎、吾兄留意經世之学久矣、意此等事皆在所講、必有義例詳備可舉而行之、僕願与聞焉、方感知遇之深、而妄論當世之故、略不辭讓、伏以亮察、

*1 東大本、都城本「侯」。

*2 東大本、都城本「惜」。

*3 東大本、都城本「隋」。

*4 『鳩巢文集』『先生自注云』なし。『通昭録』では一字下げて鳩巢の注が書かれているが、『文集』では割注の形をとる。

*5 『鳩巢文集』、東大本、都城本ともに「鹿児島」。

*6 東大本、都城本「典」。

二六、一六

答青地貞叔書

前賢

直清頓首再拜復書於青地少公足下、僕曩者以疎愚之質備顧問之職、

不能奉命承令以遠罪咎、反以狂直之言自犯僭踰之誅、明主既不擯斥無人之境以絕妄言之蹤、又使其全身而退得以優游閑散之地、明主之恩亦已深矣、於是猶因故態而不知自變、則恐自招不測之禍為知士之所笑、自去年喪母之後、益無心於人間之世、一聞公庭之議肉食之謀、忽如風雨之過耳、無復留意於其間、豈可与論當世之故哉、属足下陪侍近要、視聽國家利病得失、乃欲上疏而論諫之、恐一旦有變以貽大夫人憂、以為与其卜筮決之、寧取決於僕之一言、乃千里裁書并以封事草稿來附、雖荷相知之深欲以自効其誠、然內顧無著龜之明足以取信焉、吉凶從違在所不審、又何以報盛意而塞厚望乎、雖然足下幼学古人之道、長欲行之、僕雖不敏亦知足下之意、非吉凶禍福之間而義之可否是問、是足下以古人自処也、僕亦何心独不以古人相与之道而報之乎、蓋言路不通久矣、朝有過举而不得諫焉、國有闕政而不得議焉、君以權位自尊、臣以阿諛取容、流弊相因習俗日深而膏肓之病不可藥矣、可勝嘆哉、所頼直言諫讜之士或有出焉、上以疎動人主之聽、下以策励^{*1}郡臣之心、庶幾廻狂瀾於既倒矣、此非望於吾党之士而誰望乎、足下固其人也、僕亦不得以太夫人慈念之故抑其立身行道之孝而止之、宋哲宗以寵立妃劉氏為皇后、鄒浩上章諫之、其未發也以告其友王回、回曰、事有大於此者乎、子雖有親、然移孝為忠亦太夫人素志也、及浩得罪而遷其友田画迎之於塗、謂田、願君母以此举自滿、士所當為者、未止此也、浩^{*2}范然自失謝曰、君昵我厚矣、僕誦宋史到此、未嘗不慷慨流涕、以為鄒浩從義之勇二子輔仁之忠可謂兩得之矣、請以前王回之言為今日^{*3}獻、以後田画之言為後日之贈、則僕所以報足下^{*4}止於此矣、尚其勉之、僕又謂、國俗好武之^{*5}於人心、交游有睚眦之怨至於推刃相戮以為快焉、雖君臣之際、小獲咎責亦有不待命而自尽者、往々蹈病狂喪心之迹而不悔、嗚呼亦

陋哉、意足下亦嘗非笑之、但風俗之弊耳目所習、雖有學術者亦不免尤而效之、此僕所為足下深慮而預防之伏以足下察之、

* 1 東大本、都城本「群」。

* 2 東大本、都城本「田」。

* 3 東大本、都城本「茫」。

二六、一七

答青地貞叔論封事別幅 前賢

所示封事、援古論今、皆得事情、但每条引朱文公封事之文似過多、又有與後之斷案不応者、此特舉其要而節去之可也、至於輔翼世子一事最為要務、若夫薄賦^{*1}以制民產設學校以成人材、雖不可棄此而為治、然今時之弊、在土木之功不息驕奢之風日競、欲不傷財害民亦不可得、宜務崇儉素抑華侈、然後賦^{*2}可得而薄、教化可得而施、所謂衣食足而知禮節者事莫急焉、而封事中不及此何也、其論學術一條、不甚明切、今欲為人主論學、當以大學之道立言、拋程朱之言為信、庶幾人主一觀之、亦瞭然矣、今徒歷舉世儒、而論其學之同異、亦何所開益、其所舉數子、皆鄙猥偏曲之儒、其學與德本無足稱者、諺曰、國無鳥也、蝙蝠其禽、此之謂也、南學之号、未聞世有以此稱焉、近有大高清介者、其學祖小倉野中、乃為其師弟、立伝以南學号之、此等人与事、豈足為人主道哉、大抵人臣建言之法、務要簡約、根著^{*3}大体、若明理之文雖長、何傷、至於不急之弁無用之談、不容一句冗長以煩上聽、此可謂善於章疏者也、山根敬心亦録所見在此、粗如僕意、今併封寄、惟足下察之、

* 1 東大本、都城本ともに「斂」。

* 2 東大本、都城本ともに「斂」。

* 3 果図本は「大体」は、「建言之法」の前にあり。東大本の頭書「大体」の挿入指定位置を誤ったもの。東大本に従って改める。

二六、一八

論孔子不言性善

伊藤維楨

孟子稱倡性善之說、為万世道學之宗旨、而孔子不言之者何哉、蓋人能從教、則隨其所志、所勸、皆可以至於聖賢、而性之美惡不暇論焉、故雖無性善之說可矣、故曰性相近也習、相遠也夫自衆人至於堯舜其間相去奚翅千万而夫子謂之相近者、則孟子所謂人皆可以為堯舜之意、故雖不言性善而性、善自在其中矣、謂夫子不言性善者非也、孟子本以仁義為其宗旨而其所以發性善之說者、蓋為自暴自棄者、立其標榜使知所本耳、蓋道至尊而教次之而其尽道受教者、性之德也、若使人之性如雞犬之無智焉、則雖有善道莫得而入、雖有善教莫得而從也、惟其善故能尽道受教而之善也、輕此孟子所以為自暴自棄者發性善之說、而亦莫不以教為要、何者倘專任其性、而不學以充之、則衆人焉耳、愚人焉耳、其卒或為桀紂而止、故曰、苟不充之不足、以事父母、又曰、苟失其養、無物不消、皆言性之不可恃也、專謂孟子倡性善之說、為道學之宗旨者、後世學齷虛遠視性甚高之所致、而非孟子之本旨也、

徂來曰、自孟子有性善之言、而儒者論^{〔性〕}□□訟^{〔性〕}千古、遂以為孔子論性之言、□不知^{〔性〕}□□學之言也、蓋孔子没而老莊興、專倡^{〔性〕}□□然而以先王之道為偽、故孟子發性善以抗之、孟子之學有時乎失孔氏之旧、故荀子又發性惡以抗之、皆爭宗門者也、宋儒不知之、以本然

氣質斷之、殊不知古之言性、皆謂性質、何本然之有、仁齋先生弁之者是矣、然仁齋又以為孔子孟子其旨不殊焉、其言曰、人之性質剛柔昏明、雖有不同然而至於其有四端、則未嘗不同譬之水焉、雖有耳苦清濁之異、然其就不則一也、故夫子以為相近、而孟子專以為性善、可謂善解孟子者已、然孔子之意不在性而在習、孟子則主仁義内外之說、豈一哉、且孔子以上知下愚不移、而孟子則人皆可以為堯舜則孟子亦豈非以理言之邪、大氏孟子之言皆与外人爭者、豈可合諸孔子哉、

二六、一九

与大野書

芳洲

辱惠書、莊誦數四、因知足下有志於保邦之術、娓娓數百言、可謂辭直而理明、論確而憂深矣、健羨々々、夫天下有四民、曰士、曰農、曰工、曰商、四者相扶相持而論^{*1}理行乎其中、故士士、農農、工工、商商、君君、臣臣、父父、子子、夫夫、婦婦、兄兄、弟弟、然後養立教明而至治得矣、我嘗驗諸古今、農之於耕^種也、工之於器械也、商賈之於貨^貨也、未嘗不各執其業、塵々自^塵□、惟士^{則不}□□、□皆貪恋爵祿、誇恃顯耀、大者儉安玩^小□、□□隨波逐流、処治人之位、無治人之学、取便目前而乏經遠之謀、此為士不士矣、信乎治世之難逢也、方今賢良在職、国家全盛、雖然豈無禍乱^{*2}此時一本作此之際之機、伏於隱微之間者哉、^{*3}此時、儻有賈誼其人者、誠能流涕痛哭長大息、獻徽猷於廊廟、存念慮於民瘼、務使銷禍於将形、防乱於未萌、則万年不拔之基、可馴而致焉、惜乎未嘗聞有其人也、对之為州、僻在西陲、地礪土瘠、風俗朴而人物少、雖有所見、莫可与語、唯与二三子佔畢於函丈之間、聊遣悶懷耳、安得有志如足下者、相与

^{*4}楊 推以為樂乎、來書云、不為世用、困乏次骨、夫君子之於禍福得失也、一如寒暑風雨之序焉、吾知足下毫不動乎心、惟有才弗使、有能弗薦、真為斯世歎慨尔、山河遼^{*5}、徒切仰慕、夕照如飛、竟無相觀之期、臨楮不勝歛歛之至、大島子屢言足下不置、輒以弗能親炙為憾、時属初炎、万惟調攝自愛、謹此不宣、

*1 東大本、都城本「論」。

*2 東大本の頭書「此時一本作此之際」が本文に紛れたもの。『橘隠文集』では「雖然豈無禍乱之機伏於」と続く。

*3 『橘隠文集』「此之際」。東大本、都城本は県図本に同じ。

*4 東大本、都城本「楊」。

*5 東大本、都城本「失」。

*6 『橘隠文集』「遼」の後に「濶」あり。東大本、都城本は県図本に同じ。

通昭錄卷之二十七

藻彙編

紹述先生碣銘	內大臣常雅公
論子哭慟	伊藤仁齋
答鈴木貞齊書	鳩巢先生
答堀正修書	前賢
答小林道本書	前賢
書長田忠致論後	前賢
題偽字論	前賢
戒子孫語	前賢
新井源公碑銘	鳩巢先生
題白石余稿	前賢
誦鬼神略論	前賢
答山仲淵神恠	河靜齋
書將進酒篇後	鳩巢先生
題江閨筆談後	前賢
題燕樂筆語後	前賢
送子善序	河靜齋
題立儒宗門疏	鳩巢先生
答學者問	前賢
弔大石良雄文	鳩巢先生
祭小谷勉善文	前賢
陶靖節贊	河靜齋
題管公祠	前賢

勸學說

山文蔚

弁復讐

前賢

天狗說

物徂徠

蝦夷記

河靜齋

藻彙編卷九

二七、〇一

紹述先生碣銘

內大臣藤原常雅公譔

嗟乎、東涯先生已矣、先生名長胤、字元藏、号慥慥齋、東涯亦其所自号、竟以号行、海內皆知有伊藤東涯者、而今已矣、嗟乎、蓋自孟子没、遺經僅存、而聞知之者、世無其人、西方之傑、遂投間隙、舉世傾動、靡然從之、碩儒巨儒、雖痛排之、然浸淫其說、以解說聖經、我古學先生、勃興於本邦、得不傳之學於遺經、以倡天下、而升堂觀奧、称高弟者、又不鮮矣、先生其冢子、而緒方氏之出也、生長膝下、趨庭之訓、異聞居多、故校訂遺書、公諸世、至以回人之視聽、蓋不有繼志与述事、則曷能障川廻瀾耶、資稟甚異、三四歲能知字、長而博學強記、最善屬文、為世所称、孳屹種學、淳渟涵浸、人莫能測、沈靜寡默、恭儉謹慎、口不言人過、不事表襮、不設防畛、終身不仕、講學於家、剖析經義、蠶絲牛毛、然未嘗^{*3(題)}以語人、而就問者日衆、遠近尊之、無他嗜好、祁寒暑雨、未嘗手枳卷、每有所得、則輒筆之、故其書滿家、既稍登梓、文集三十卷周易通解等未刊布、生於寬文庚戌四月二十八日、死於元文紀元七月十七日己酉、享年六十有七、娶加藤氏子、男三人、曰世俊、曰世論、俱夭、曰

善紹、今纔八歲、女一人、其弟及門生、經紀喪事、遂葬于先塋之次、私諡曰紹述先生云、其存日、令季弟長堅需余序其集、頃長堅再拜謹泣以告曰、集序亡兄在日既蒙見允誌其墓、願亦*6(舊)籍*7(弟)補哀之手、地下若有知、拜辱有余、回上台之光下耀草莽巖穴、仰公之德永世罔極、且曰、吾家兄*7(弟)第八人、先人死日、坐食在家、人或勸其出贅為人之後者、亡兄一不省与俱啖苦攻淡、日勵学行、以要似統、昏頑之質稍有所成、皆出就仕、女嫁有室、生我者父母而長我育我者皆亡兄也、今獲鴻文而使其言与行之不朽、我報亡兄亦稍足矣、吾祖公曾知其父之業文、余亦景慕先生、則豈可孤其請耶、*8(逐)逐系之銘曰、

淳謹之質 汪々巨量 耿潔甘節

休声遠揚 克續先志 篤崇聖賢

文辞純正 典籍精研 居家孝友

厥德惟馨 遺名千祀 堅珉勒銘

元文二年歲次丁巳夏六月望日 子善韶建

子從南勢負笈來輦下、而受業於紹述先生也、回顧既歷年所去秋忽見背、欲報之德*9罔極、今茲夏日復來古誼堂、物是人非寔傷于懷、賢弟諸友同謀碑事、請銘於前内府花山藤公、先生之德名、得

公大筆、与此石俱永世不朽、其碣高四尺云、唐六典七品已上立碣、圭首方跌々上不過四尺、若隱淪道素、孝義著聞者、雖不仕亦立碣、從其制也、坊城黃門俊將卿篆額、八条羽林隆英朝臣書文、予小生輩不勝感戴之切捧誦再三、上塚向碑、淚先為之隨矣、遂写一本授諸厥人、將以貽同好之士在遠者云尔、

元文二年秋九月 門人度会末濟謹書

*1 題は篆書体で表記。

*2 東大本、都城本「儒」を見せ消ちとし「師」と頭書。

*3 果図本は、東大本で頭書「強」を挿入する場所を指示した「○」のみを写し、頭書「強」を落とす。

*4 東大本、都城本「問」。

*5 東大本、都城本「倫」。

*6 東大本、都城本「籍」。

*7 東大本、都城本「弟」。

*8 東大本、都城本「逐」。

*9 東大本、都城本「閔」を見せ消ちにして「哭」と頭書。

二七・〇二

論子哭慟

伊藤仁斎

宜哀而哀、宜樂而樂、皆人情之所不能已、而雖聖人無以異于人、故人情者聖人之所不廢也、苟中其節、則為天下之達道、不中其節、則為一人之私情、求之人情而所不安者聖人不為也、故滅情与縱情其為罪也均矣、大学書曰、心不在焉、視而不見、聽而不聞、食而不知其味、宋儒繇此、遂以聖人之心為靜虛、為無欲、為明鏡止水、而不知聖人之心以仁愛為体礼義為所為天下万人倫之至也、若以大学視之、則夫子哭顔子不自覺其慟不免為心不在焉、故予嘗大学為非孔氏之遺書者、為此也、

【頭書】「鳩巢先生曰、前聖□言示教有精切、而後賢發明其旨始無余蘊、

近來鄙儒曲学横生異論妄儀*大学好毀朱子、亦可嘆也、詩云、胡不相畏不畏于天、此輩之謂矣、」

* 東大本、都城本「議」。

二七・〇三

答鈴木貞齋書

鳩巢先生

魯齋仕元、明儒丘瓊山之徒深非之、率皆左^祖□、劉靜修以為、胡元革命之際魯齋決不可仕元、蓋明人往々誇太祖^{*2}議、胡元復中國、其醜元之甚、及當時之賢者、有凡出仕者、則衆口鑿起而攻之、後人不察乃同而和之、遂排魯齋以為失身夷狄之人、今來喻云、世祖為湯武、魯齋為孔孟、則出而利天下可也、世祖非湯武、魯齋非孔孟、則終身不仕如劉因可也、此先儒所謂入危邦居亂邦在聖人、則可者歟、□□^{其意}未必以仕元為不義、則異乎明人偏執之論矣、然其言曰、仕元唯孔孟為可、則高明亦是劉而非許也、僕嘗論魯齋之學、以為議論精微規模宏大、則吾不知也、至其明允篤誠德行成就、則自程朱以後不見其倫也、薛文清推尊魯齋以為朱子後一人而已、誠知言□^矣、若其仕元之事、直清未嘗置疑於其間焉、世固有足稱為大人者、其人雖未必聖、亦已近於正己而物正者、出處去就不可以常度律之、唐之狄梁公、元之許魯齋是也、夫仕胡元之污、孰与仕武墨之朝、梁公以唐臣仕偽周、未聞有以此罪梁公者、然則魯齋以中國之人仕胡元、獨可罪乎、梁公仕周以存唐之社稷、魯齋仕元以存中國之道、其義一也、況魯齋之篤學、非復梁公之所及者乎、其於出處大節、必有謀之於道、自信而無疑者、恐不可輕^{*4}儀而遽非之、自古大聖賢莫不以世道之責自任、未嘗以一日忘天下、觀孔孟遑々於衰周戰國之世、可見矣、魯齋學孔孟者也、若夫懷抱道德果於仕^{*5}不^也、世之独善取^足自潔^一者為^レ之、豈魯齋之志哉、元自滅金尽有中原之地、中國之人莫不臣屬、其得天下、非以篡奪取之於宋、魯齋又非素仕宋食宋祿者、其仕

元於大義固無所害、而世祖豁達大度、有足与為善者、魯齋豈不曰中國之地寧為夷狄、不可無中國之道、吾將以華變夷以正養蒙、使左衽為禮義之俗乎、觀元君相感孚其德、容納其言、皆知嚮學尊孔孟、遂使中國之道不墜於夷、魯齋之功也、而議者以春秋大一統之義罪之、則過矣、春秋時、周室猶為天下之共主、而吳楚之國船腹僭^王□猾夏、故孔子作春秋、尊王室、絕夷狄、以明一統之義、此古今之常經也、當胡元之初、宋保辺徼、亡在朝夕、天命人心已去、不可復回、而世祖膺運、天下嚮風、魯齋不仕、則已苟欲仕而行道於天下、舍元何適矣、若以此罪魯齋、則孟子於周存之日勸齊梁之君以王、是孟子亦犯春秋之義、而司馬光李觀之論為得耶、若拋春秋嚴夷夏之分、以為胡元不可仕、是又不然、春秋絕夷之嚴、以其僭王猾夏也、今乃欲以革命迭興之日、合論而一之、亦可謂不知時識勢者、豈可与論易道哉、昔孔子欲居九夷曰、君子居之、何陋之有、韓子曰、孔子之作春秋也、夷^{*6}日進於中國、則之、魯齋之仕元、是居夷而進之於中國者也、亦合於聖人之意矣、其他紛々之議皆不免為吹毛求疵、不必論可也、

一、學而不厭、誨人不倦、夫子以是自言、論語中兩出、前則曰何有於我哉、後曰可謂云尔、若以前章為聖人之謙辭、則近於偽謙者、此為一難義、或人疑之、固当矣、賢明以為早晚之異、此固不可知、若直清所見、則不然、聖人心胸之度、不可以常人之心測知、蓋其心常視道之無窮、不以其所得自足、若此二事者、亦不自謂己能之、及人以聖仁稱之、自觀於己以其德之易能者、自居亦不自知^三其事在己不^レ足^レ道、又忘^三嚮者不以此自居也、若其心自許而謙曰不能、又曰我既謙矣、不當復曰能之、是皆出於安排作為者也、豈可与語易簡之德哉、窃謂其以此自居、亦誠心也、不以此自居、亦誠心也、舜知象殺

己、有以処之而象來則喜以常情、觀之似偽喜者、与此事異而心同、凡聖人之心如此尔、

仁齋曰、何有於我言、此二者之外何德能有於我也、

※¹ 徂徠曰、何有於我哉言其不容我力也、我者我學者也、如日出而作、日入而息、鑿井而飲、耕田而食、帝之力于我何有哉、人多謂不假帝力也、殊不知作息食力協韻力字句絕作息飲食皆帝所使也、莫所容我力也、正与此章同、詰朱註以為孔子自謙之言非矣、孔子語學問之方何謙之有、

※【頭書】「孟子曰、父母之不我愛於我何哉、」

* 1 『後編鳩巢文集』収載の「答鈴木貞齋第二書」および「答鈴木貞齋書」の抄録。

* 2 東大本、都城本「攘」。

* 3 県図本のみ衍字。

* 4 東大本、都城本「議」。

* 5 東大本、都城本「不仕」。

* 6 東大本、都城本「而」。

* 7 『後編鳩巢文集』、東大本、都城本はこの前に「中国」がある。

* 8 以下、「答鈴木貞齋書」。¹ただし、「二」はなし。

二七・〇四

答堀正修書

鳩巢先生

四月十二日、英賀室直清頓首再拜、復書堀君足下、僕昔從恭靖先生于洛陽之綿里、¹與其愛壻蒙窩君遊、乃恂々篤學人也、当日交未

熟、心既親之、既而聞之傍人云、君為名家子、所謂尾之大儒杏庵先生者、君大父也、於是知其家學之有伝、益鄉慕之、僕時年最少、未能与之儀、²論往復以窮其淵源、而私自語以為天將復興夫人之家乎、杏庵先生學行之懿至今為人所稱、而我先生又以道德文章為世儒宗、今兩家婚媾合美毓秀、他日生児心、³英傑之人、事固有不偶然者、天將復興夫人之家乎、其後北還藩国、日夜役々就職、顧念錦里交遊之盛、夢寐不能忘、未幾、我先生遽捐館舍、蒙窩君亦先下世、由是益与同学諸友絕問、不相通二十年于今矣、去歲被召至東都、見菊潭兄於其家、問無恙、外先及錦里交遊事、菊潭兄云、蒙窩有胤子某、我自出也、⁴僕於是始識足下之名、知故人之有後、輒復感念往事、悲喜交集久之不能已、又自嘆、僕老疎懶日加、不敢自求於賢者、而賢者亦宜無求於僕也、何由得与足下相識乎、今也賜書千里致言、礼意殷勤所以假借不肖一甚至、僕材腐行荒而老及之、環顧其中、⁵□以少異於人、何所有而受足下之知至此哉、但区々故情所□⁶蒙窩君慶者、足下以盛壯之年、能好學求益如此、其必昌大乃祖之業乎、是僕之所見於昔者、不謬於今也、足下之書以為僕文有可觀者、遂信之篤執之固、往々於宗族交游、間稱之甚矣、足下之見愛也、足下誠非佞譽之徒、而言之如此、其於僕之文或有所取焉然耳、僕少年時學為文、又時々撰著以自驗、其視古之作者立意命辭、不甚相遠、至於舉一篇一而觀之、音響節奏絕不相類、於是復取古人之文誦之有年、然後、知文章先知結構之法為要、工拙其余事也、夫為文、猶為屋也、經子百子採材之林也、至於結構之法、則在作者之自得耳、今夫梓人匠氏善於結構之法者也、其採材於山也、斧斤之所伐、牛馬之所負、充牣倚量如丘如陵、而用之以成屋、則竊而深之以為室、巍而敝之以為堂、以暨壺闥之內通廊廡之旁囿、前後左右高低広

狹、各得其所無不周偏、而嚮之如丘陵者無一遺焉、若□^三內堂而外室、下棟上桷、前後失位、広狹失制、間架參差衆材紛糾、雖究天下之奇麗、亦不足觀也已、自唐以來獨以文章名百世者、唯韓柳歐蘇為然、蓋其識趣之高、巧力俱到、先得結構之法在已、所以變化百出無不可也、何者合衆理而經緯之、綜群言而条貫之、如五色之在組、相雜而不紊、如八音之在樂、並奏而不乱、行於其所當行、止於不得不止、天下之至文者也、今之為文者、異於是、務為馳驚乎空蕩、不知結構之有法、其措意也、輕易其尚辭也、浮靡輕重無倫、長短不裁、闕功於斧鑿之余、競爽於分裂之後、非素条貫之所達、無復經緯以成之、閃爍而合離、披而散、忽觀可喜咀嚼無味甚者、摘凡經伝中、奇語難字、布瀆填補於其間、徒取悅俗人之目、以為得之、嗚呼亦鄙矣、凡若斯者、豈足以為文乎、尚何工拙之有故曰、文章先知結構之法為要、工拙其余事也、僕固非善文辭者、庶幾知而好之云尔、說足下之書、知其志遠思深、与僕同好、故其所得於平昔者、不得不為知己言之、足下試觀之、不以人棄言則幸矣、直清頓首再拜、

※【頭書】「姉妹之子曰出」

- * 1 東大本、都城本「綿」。
- * 2 東大本、都城本「議」。
- * 3 東大本、都城本「必」。
- * 4 東大本、都城本「嚮」。

二七・〇五

答撰州隱士小林道本書

前賢

僕前日始聞賢^{*一}夫姓名、未知其為何如人、病中取來書讀之、所論皆係国家政治事、乃知賢丈有志於英雄事功之學、亦宋陳竜川之徒也、伏審賢^{*二}夫初意欲以此投府中受書函、又聞四方投進之書多為中使所焚、故欲^{*三}恃^{*四}因僕以其說上進、夫賢丈以布衣章帶之士、洋洋自千里外來、欲為国家論天下事、其志可謂壯矣、而其以僕為依歸焉、則事有大不然者、僕年老材腐、官途崎嶇進退坎軻不与世偶、僅々不過以文字共其職而已、賢丈乃欲以茅^{*五}茹^{*六}彙征之義責僕、々豈其人哉、意者辺地遠境人、不達時勢、不審事情、忽聞僕近者屢有進見侍講之事、以為深得

君相之知者歟、顧賢丈亦謬聞耳、來論以韓愈之託于頤、為比是亦誤矣、夫于頤拋藩鎮之重、声威嚇^二烜一時^一、自足以軒輊天下之士、韓愈欲以身託、亦宜矣、今如僕窮^{*七}卷^{*八}一貧儒也、豈可与此等人比乎、且僕聞之、有司人云官設受書函者、蓋欲使言路歸於一途、不許依託他門一別生事端、但其僥倖^二身計^一及造作浮虛者举皆火之、以絕妄言、初非不經沙汰玉石俱焚、自斯函一置後草莽献言者、必当由此、若夫薦遺逸之賢、達壅蔽之言、則当路之人固其任也、僕何人之敢從旁、而冒為之、則是所謂代大匠斲者也、得無^{*九}徒^{*十}為傷手而取世笑耶、君子思不出其位、縱無招咎取辱、踰位犯分其罪已大、是僕所不敢也、來論又戒僕以勿吝避鉄鉞、僕雖不肖、自知其非貪祿苟免之徒、然蹈^二襲^{*十一}「矩腐儒之常態也、自賢丈觀之、必以為^{*十二}「齷^{*十三}齷阿世人^一、亦所不辭也、安有畏人之譏、違己之志、而于百姓之譽哉、僕觀來論、論

東照神君創業之盛与今

大君節儉之美、此皆在衆耳目不待吾人举而論之、至於散財富民振厲士風、最為当世之急務、然此亦天下有識者所共知也、今肉食者多含

默取容、然都下士大夫如是其衆也、安知其無一人及之而必得於草莽之言乎、今設使執政之人聞賢丈之言、將為之聳動以為空谷之足音乎、將以為陳腐為煩瀆而厭棄之也、是未可知已、鄭詹尹曰、夫寸有所長、尺有所短、^{*9(短)}用子之心、行子之意、僕於賢丈亦云、雖然僕有所聞於古者、請為賢丈言之、古之聖賢未嘗無倦々憂世之心、然其隱而在下常難於進而易於退、常見求於人、而不求於人、豈敢為自重哉、以為不如是道輕於己而不信於人、伊尹耕於莘野、^{*10(後)}諸葛武侯耕於南陽、當時若無湯之三聘先主之三顧、則將終身不出而老死於畎畝之中不悔、豈敢自媒於世而求售其說乎、今賢丈既号稱撰洲隱士、非素仕而有官守言責者、宜守義樂道、独善其身以^二席珍待聘之士^一、自處乃可、而汲々焉欲鼓瑟於齊王之門、何也隋王通隱於竜門、一旦詣闕、献^{*11(大)}大平之策於文帝、々々之不能用、罷歸、先儒謂、文帝不求於通而通自献、失君子自守之道矣、豈所以養世主尊德嚮道之心哉、嗚呼若通也急於得志、而自取詘辱、可以為戒矣、今僕之所為賢丈忠告者、亦止此耳、既不能副來意塞厚望、又不得黙々而已、敢罄所懷、不知世之英雄以為何如、

- * 1 東大本、都城本「丈」。
- * 2 東大本、都城本「丈」。
- * 3 東大本、都城本「特」。
- * 4 東大本、都城本「茹」。
- * 5 東大本、都城本「巷」。
- * 6 東大本、都城本「徒」。
- * 7 『後編鳩巢文集』、東大本、都城本により補う。
- * 8 『後編鳩巢文集』、東大本、都城本により補う。
- * 9 東大本、都城本「矩」。

- * 10 東大本、都城本「候」。
- * 11 東大本、都城本「太」。

二七・〇六

書和角某長田忠致論後 前賢

門人河光遠以和角氏所著長田忠致論來、就余議其当否、余嘗說栗山氏保建大紀、見其論長田忠致事、不能無疑、今得此論於我心有戚焉、^{*1}其所欲言者和角氏既已尽之、然猶有一二可論者、請為同志道之、近世儒家有好為神道之學者多、論 本朝歷代事迹、概以春秋大一統之義、務明逆順之分、其用意近於厚矣、然其勸於帰順也、雖反側之子必褒焉、以為忠^{*2(如今所論)}忠致事、其惡於從逆也、雖死節之臣必貶焉、以為賊^{如伊賀判官光季為、北条氏死承久之難、}不量時勢、不審事情、軒輊予奪率以一統之義、斷之、故其論常偏而不平、皆坐^レ是耳、若長田忠致殺源義朝、古今以為弑逆之賊、今保建紀論之曰、聞忠致為国誅賊、不聞以臣弑君、乃書于策曰、長田忠致誅源義朝及鎌田正清、余始見愕然、徐而思之、是無他也、以惡義朝之故、遂忘忠致之罪、顧以誅賊之功^{*3(加)}如弑君之人、豈足合公論厭人心使百世之下無異議乎、^{*4}自源賴義征奥州以來、關東豪族凡以武名家者莫不世属源家麾下、觀忠致之見義朝、執君臣之礼甚恭、自其父祖而臣属之、無疑矣^{保建紀以忠致先祖班次高不足以為証左也、和角氏論之已詳矣、}、不然當時為史者^{如平治}、既以忠致為義朝世臣、又以忠致為弑君之人、豈無^レ由而然乎、後世取信者莫如史、今其載忠致事、始終動輒從君臣之辞、不一而足、安得举史伝之言為妄乎、夫義朝一旦為敗亡之虜、以身託於忠致、而忠致視其故主、為奇貨^一乃誘而殺之、以邀^二不訾之賞^一貪^レ林肆^レ毒^レ覲然無恥、豈有人心者所為耶、大逆無道莫甚焉^{或概釈慈円愚管抄、以為義朝正清^{*5(就忠致)}家自殺非忠致賊殺之也、慈円与義朝同時、其所記宜、若可得事実者、然平治物語載忠致与其子景致、謀使力士}

拉殺義朝于浴室甚詳、且義朝本志、欲過内海走東国、當時六波羅不知義朝所在、追兵未及、義朝何以忽尔自殺、恐愚管抄未必信也、若果信也、亦由忠致迫之、令自殺耳、其與賊殺之、何異、後世

執史筆者、在此等人一將貶斥之不暇、其書法最宜嚴焉、不可假借、

今乃為之解說而反以誅賊予之、使其莫大之罪不暴白於天下後世、違於春秋誅亂賊之意矣、但義朝党平信賴叛王室、是亦賊也、保元中殺父為義、雖由朝旨、弑逆之罪在法、亦不可赦、今若書曰、長田忠致弑其君源義朝、則是使義朝同於無罪之人、恐未可也、且忠致之於義朝、猶漢時郡將与故吏、雖君臣之分已定、不可易、亦難遽以見仕^{見去}食祿之臣例之、若直称義朝、以君其命辞頗失於重、亦未当也、然則奈何、曰、史思明安慶緒之臣也、其殺慶緒、朱子綱目書「殺、不書」弑、其意不曰慶緒亦賊也、以賊殺賊、豈足「書」弑乎、漢劉虞故吏鮮于輔攻其主仇公孫瓚、綱目必以劉虞故吏四字、冠之、以見不忘故主之義、今倣此等書法、當書曰源義朝故吏長田忠致殺義朝及鎌田正清、又或書曰長田忠致殺其故主源義朝及鎌田正清、亦可也、如此則忠致弑逆与義朝叛国之罪、皆見於書法之間、章々明矣、庶幾得之、未知老耄之見於義当乎否、姑録于茲、以俟識者捫焉、享保乙巳春二月十三日、

*1 『鳩巢文集』、東大本、都城本「戚戚焉」。

*2 『鳩巢文集』、東大本、都城本の割注「如今所論忠致事」。

*3 東大本、都城本「加」。

*4 『鳩巢文集』、東大本、都城本、衍字なし。

*5 東大本により補う。

*6 東大本により補う。

二七、〇七

題高木氏偽學論

前賢

自古邪說之害道多矣、然其誕妄羸惡無所忌憚、未有若今世之甚者、或有称古學者、曰、大学非孔氏之遺書、又曰、我能塞伊洛之淵源、或有矜文學者、曰、道不出於天、又曰、道非事物当然之理、其他淫辞浮言不可勝数、若使此等之說出於數十年前、雖庸人孺子亦知其妄而非笑之、今也不然、自世之称師儒者、皆為之所動莫不崇其說而信之、況於後學晚進者乎、宜乎其靡然趨而歸之也、吾於是知世道之日下人心之日偽、亦可悲矣、雖然彼釜鳴瓦合之徒、何足道乎、吾意儻有能守規範而不變者、先後輩出乎其間、則邪說左道之熾於一時者熄矣、古人有曰、千人之諾々、不如一士之諤々、吾故嘗聞世有正学不屈之人、則私心深以為喜為此也、今觀高木某著論距邪說、其義正、其辞嚴、吾雖未識其人、然以其言觀之、蓋能守規範而不變者歟、嗚呼其志可嘉尚也已、遂為之題數語而貽之、又使夫滔々者知世有老学之儒与之同心戮力、亦足以為衛正距邪之一助矣、豈独為高木氏之謀而已、^{*1}皆享保十九年正月上澣、七十七翁鳩巢室直清識、

*1 『後編鳩巢文集』は「已哉」。東大本、都城本は異図本と同じ。

二七、〇八

戒子孫語

前賢

凡為人子孫者、当体祖宗之心、思繼述之難、日夜孳々惟不勝負荷之重是恐、大抵勤儉二字足以興家、驕肆二字足以亡身、自入事父兄出事君長、及三朋友交接起居動靜之間、莫非人生当務之所在焉、宜其戒飾服勤不敢自佚、有余力則講文藝習武事亦其分也、豈可以一日荒

靡乎、至於衣食室屋服御之物、其志有不暇及、但務崇儉素戒驕奢為要耳、此勤儉之行也、若夫沈湎酒色玩揭歲月、小則廢事闕務、大則敗行損名、在家為不肖之子、在國為不忠之臣、嗚呼可不懼哉、古諺曰、自由不成人、成人不自由、此言雖淺近、最為切要之義、亦可以鑒矣、富松君基春、天性質直人也、預思為燕翼之謀、廼乞余言以貽子孫、可謂有遠慮者矣、遂書此以塞其請云、享保丁未仲春朔旦、鳩巢老人室直清撰并書、

二七・〇九

朝散大夫筑後守新井源公碑銘 前賢

朝散大夫筑後守新井源公、諱君美、字在中、初名璵、白石其号也、其先上野人、為新田族、新田大炊助義重曾孫新^{*1田}曰二郎某削髮為僧、因其所居称荒居禪師覺義、其子孫遂以荒居号其家、後又易新井、蓋我邦方言与荒居同訓也、覺義之後、世仕南朝、南朝既亡、荒居族流寓上下兩野之間、元龜之初有凶書允某、拋有上野勢多郡女淵城、公其後也、祖勘解由某、方遭世ノ屯亡土地、卒往常陸、從多賀谷脩理大夫平宜家、多賀谷家敗、去隱河内郡、其宅門外有古橋、里人号為古橋殿、父与次右衛門正濟、母藤原氏坂井某女、正濟幼喪怙恃、年十三来江府為武州人、及壯為土屋家臣、甚〔為〕民部君所任用、民部君卒後、有故而去、公生而岐嶷穎悟、夙成三歲時、能書大字、民部君愛其幼慧、召置膝下、比及十歲、常在民部君側、代書殆若老成云、延宝三年從家君辞去、天和二年公仕於堀田筑前侯、会朝鮮〔来〕^{*2}聘、廼詣客館与其學士等唱和、韓人序其陶情集、是歲丁家君憂、居無何辞仕去、隱居府下、元禄六年冬十二月、起就甲府之避、^{*3〔辭〕}始至以儒職召侍講筵、優待日渥、後数年^{*4}特旨

進公資格^{*5}、列為寄合衆、宝永六年夏四月、文廟如繼大統、秋七月賜采地、歲租^{*6五}吾百石、七年冬十一月、以事使京師、八年春二月還報称旨、冬十月初鮮来聘先期、命公掌其事、多有所建白、皆施行、是月叙從五位下拜筑後守、十一月^{*7倍}位賜采地、与前所食并為千石、公以職在顧問、每出入風議必論事、剴切動中旨、將順匡救所裨益不少、正德中、国家不幸仍遇大喪、而公漸老、無意当世、廼杜門謝客、日夜以典籍以樂、卒以此終、公以明曆三年丁酉二月十一日生、享保十年乙巳五月十九日疾卒、享年六十九、娶日下氏朝倉長治女、生二男、長明郷今克家、次宣郷先卒、二女、長適市岡正軌、次適石谷清實、公少時自負胆氣不羈、既而折節讀書、通經史百家之編、中歲始遊於順庵木先生之門、以該博見称、最善唐詩、豐腴馴雅、直与開元諸名家相頡^{*8}頏、由是四方爭伝以逮海外之國、而公之詩名擅天下、其所著書藏於家、後世必有伝之者、銘曰、

公昔鴻漸 羽儀巖廊 晚節豹隱
蔚乎其章 國有一老 天不慙遺
朝野共慨 若亡著龜 佳城新卜
山阿環周 既安且固 何啻千秋

- *1 東大本、都城本「田」。
- *2 『鳩巢文集』、東大本、都城本いづれも「聘」の前に「来」。今補う。
- *3 東大本、都城本「避」。
- *4 闕字を示す。
- *5 東大本、都城本「始」。
- *6 東大本、都城本「五」。
- *7 東大本、都城本「倍」。
- *8 『鳩巢文集』、東大本、都城本いづれも「頡」の後に「頏」。今補う。

二七・一〇

題清鄭任鑰所序白石余稿

新井筑州使君白石詩草有朝鮮使臣序題者、為正德辛卯歲、君友人高天濤所撰次、既已印行而世傳之、前一年冬、琉球來貢、天濤與其記室會于薩侯藩邸、因錄君詩若干首、以与其人而觀之、且属以行李往來達之燕京、使大清人評之以報、其人諾之、既還會進貢使趣燕京、以君詩自隨遂託琉球引礼通官鄭恪齋、逕至京邸、請^二其姪翰林編修鄭魚門^一評且序之、魚門得君詩珍翫不已、更為写一本、自撰序文、而品論之、至以君兼盛唐作者之長、琉球人得之^三齋^{反其國}、至甲午冬、琉球尋復入貢、往与天濤會者以魚門所序詩稿、附薩州人輪送達東都下、書法適秀墨痕藹然、蓋魚門所親写也、第其序若謂君為琉球人者、可恠已、豈琉球諱其兩属日本、不敢告清人以夷乎、抑鄭氏以^一日本不与^レ清通^一、姑為婉曲其辭以避外交之嫌乎、嫌乎、觀詩中係^一日本者、皆除不錄、独存飛梅詩一首、亦似微視其詩之為^二日本耳、其称君曰新公諱堪者、君當時称勘解由、是^一本朝官名也、近世以官名自命、人亦以此呼之、雖未嘗拝其官者亦然、而清人不知、乃倉卒得之琉球人口語、輒以勘為君名、又誤聽於音響之近、遂以勘為堪也、頃君与余語次及此、謂^レ余曰、子蓋為我記之、庶使我子孫知我嘗遭逢不諱之欠^一朝、以文事^一往来如此、余謂、君詩光華國家、溢美四方、其余波覃^二及海外者、北至朝鮮、南至琉球、又至堂々清朝文化之國、莫不同然一辞所至称善、譬如荊璧隋珠、天下之宝者也、溫潤之色、淵然之光、有目者見而知之、是故秦吳同^レ視、胡越合^レ愛、初不以絕國殊俗而有異論焉、欲揜而藏之得乎、晋劉琨有言曰、天下之宝固当与天下共之、於今乃知君詩不負為天下之宝也、此固不待余言云云、而其事始終曲折有不可不記者、遂為之叙次

以附其後、正德五年乙未冬十月室直清識、

二七・一一

讀山田定經鬼神略論定經備前山田家儒臣

余姻家高階經和、以山田某所著鬼神略論示余曰、此論於吾子之意為何如、余乃取而讀之、其議論卓然不溺異端恠妄之說、余雖不識其人亦可見其學術之正矣、然其論曰略、則猶有未詳焉者、請以余所聞於古者詳之、余嘗謂、鬼神矣為陰陽之為威福者、蓋陰陽之氣屈伸往来於天地之間、亘古亘今未嘗止息、而日月寒暑与夫人物之生死、無一不由陰陽者、其生也為陽之伸、其死也為陰之屈、是則二氣之良能而天地之功用也、豈非陰陽之為威福者乎、其在人也魂為陽之靈、魄為陰之靈、為之精神氣血、為之呼吸視聽、而斯有生焉、則陽之伸也、及其魂升魄降而死焉、則陰之屈也、而祭祀之感格、則屈中之伸也、亦安往而非屈伸往来之理乎哉、然陰陽之運、天命之流行也、古今人物無有情^一、無^二無情^一、莫不自大化中流出者、譬如一原之水愈出而愈無窮、初非以既屈之氣為方伸之氣、如积氏輪廻之說也、积氏憐於天命、不知陰陽本原、以為人死神識未滅随復受生、殊不知陽生陰殺如火必熱水必寒、是天地之誠也、今謂人死神識未滅、則是殺而未殺、如世俗所云半殺者、豈足語天地之化乎、苟如是陽不成陰、陽不陰不成陰、又安能為造化之功乎、夫死之為言漸也、漸然而尽之謂也、君子事天之心、一息生則一息存、及其死則此心与身俱尽、而無復毫髮之遺恨、故曰、生吾順事、没吾寧也、今死而有未尽者、豈可謂没

*1 東大本、都城本「齋」。

*2 衍字。果図本のみ。

吾寧乎、若夫沈魂滯魄接人耳目、則亦有故焉、或有冤氣之結、如吾之申生、或有精魄之強、如鄭之伯有、雖死其氣未遽散盡、恍惚為形象之可見、亦無足怪焉、然一見之後寂無聞焉、則是雖暫有之、亦遂歸於尽耳、又世所傳、有如羊祜識環之類、好恠者往々談之、以為後身之証、此等事恠異妄誕、固非君子所語、然陰陽之變不可測、亦不可謂決無此事、是其氣散之初、偶与他家受胎之氣相感乃如此、余嘗譬之於焚香、人之有精神、猶香之有煙氣、未有香燼而煙氣独存者、然方煙散之時、或有巾帨之類、為之所触留香氣於其中、至他日麝之、前日之香猶在是也、豈可謂巾帨為香之所變乎、及其久、雖香氣之託者、亦無有矣、世之所謂託生者、其理蓋如此也、況此等事古今間、億万人中有一人、乃概以一人例億万人、以為可信、亦見其愚也、至於祭祀感格之理、則最為幽冥微妙、非區々之論所能尽也、然其大要則勉齋黃氏之說得之矣、其說曰、祖考之氣雖散而所以為祖考之氣、未嘗不流行於天地之間、祖考之精神雖亡而吾所受之精神即祖考之精神、以吾受祖考之精神、而交於所以為祖考氣神与氣夫感、則洋々然在其上、在其左右者、蓋有必然而不可誣者矣、學者以此說入思議、反覆而體驗之、則其於鬼神幽明之故、亦思過半矣、遂書之以附山田氏之論云、享保丁未春正月十二日、英賀室直清識、

- * 1 東大本、都城本「陽」。
- * 2 東大本、都城本「陰」。
- * 3 東大本、都城本「怪」。
- * 4 東大本、都城本「悅」。
- * 5 東大本、都城本「交」。

二七、一二

答山宮仲淵神恠

河口靜齋

十月十八日、得仲淵書、今春、厩橋島田郭八幡甚右衛門家、白昼忽然飛礮撲窓戶、自旦至晡、開而視之、則無所見、卜者曰、長壁神自播州來求血食于此地、主人不為請官、必有後禍、甚右衛門具告執事、々々信之、卜地建祠、命延命寺主僧三學院奉其祀、日供魚肉粢盛、此後無復恠事矣、

秋、有愛宕街多賀谷内膳家幼僕、夜將登厠、忽有人來誘曰、將同往市上觀戲、答曰、不稟主人如何得往、其人曰、吾已告而見許無妨、幼僕從其言俱行、出門未幾、忽失其人、追求其跡、恍惚自往、至伊勢崎、自此遇雨則避之樹下、晴則遊覽、有一老嫗日來給食、蕎麥及麴、其色如赭、或与饅頭甚甘美、經十有三日而還家、秋又有厩城守門卒戶田伊左衛門、早起開門、有一長人、提其肩而行、力不可敵、須臾之間、遍歷妙義山讚州金毘羅等諸處、居二十日還于厩橋、自空中墜于本隊小頭某人屋上、自言扈從候、駕以還、且說屢遇盛饌、又言伴送者十四五人、至高崎別去、内五人送我至此、胸門掛一紙褰物、深自秘奉、合掌作礼、不許人見、城市喧伝、以為世伝天狗之恠、請兄論其由為何、僕亦有所見、且願高論、然後敢請正、云々、

大抵世上種々奇恠妄幼、須看得破方纔安、然是不可向文字中討尋、又非襲他人說話、而株守一隅可得、然亦唯多究文字、多聽說話、庶幾所疑融積、不至被俗哄動耳、先年高須氏家許多靈異、伝至江府、當時門屋氏問僕曰、此類為虛為実、僕曰、世間自有一種往來于虚実之間者、門屋頗為信服、此人素聰明、故一說便動、唯自恃才

高不肯遜志于學耳、世伝恠事、如仮捏偽撰則舍而不論、如足下所記、耳目所接、豈曰無之、即正往來于虛實之間者、忽有忽無、乍虛乍實、方其有時、則森羅万象忽然皆有、然不比平常五行所生、首尾皆實者、故又忽然而歸于無矣、吾徒一切聽其自生自滅耳、凡此等事陽衰陰盛之兆、宜修德以応之、乃是正當*4議儀論、此外非僕所能弁也、

*1 東大本、都城本「候」。

*2 東大本、都城本「問」。

*3 東大本、都城本「幻」。

*4 東大本、都城本「議」。

二七、一三

書川口生將進酒篇後

鳩巢先生

川口氏子莊三郎、年甫成童、以其所作將進酒一篇、來請正於余、余見之驚異、以為悠暢雋永翩翩、將追古之作者及之、自是途*1途人嘖々稱川口生之材、而又謂自以胸臆決之、恐不免衆人之疑、於是裁書并以生詩カ轉而致之白石翁、々復書曰、英材異出盛世、偉事、篇中轉折處最有趣、可嘉、尚又曰、少年父為誰、名稱如何、行年幾、願聞之、明日以「它事」書門*2問、又及生事、嘆賞不已、夫白石之詩名「天下」者也、千人之諾々、不如一士之譔々、今生之詩、為白石所稱如此、則其余瓦釜雷鳴者異同不必論可也、吾謂自今而後、吳釣荊璞得定価於薛卞之門、而為天下之寶、決矣、因念、曩昔至亡友觀瀾之家、見生卅角隅坐命題賦詩、授筆立就座中人咸駭敏速、以為七步之材、其後生從觀瀾、学会世事、驅迫、絕不相見三年、曾歲月之幾何、其材思大進如此、非復當日之阿蒙、而余老頽日甚、疎懶

日加、志倦業廢、一事無成、今見生能無愧乎、生以過人之資、春秋之富、日与諸老先生遊、其積學而致道、猶如駕良驥就康衢、而王良造父為之先後、駸々乎孰能禦之、至如余老而無用者、惟補過塞闕以尽余年而已、庶足以無憾矣、遂為次第其語、以勗カ生志、亦將自激昂以止老耄之嗟焉尔、享保三年冬十一月日鳩巢書、

*1 東大本、都城本「逢」。

*2 東大本、都城本「問」。

二七、一四

題江閔筆談後

鳩巢先生

右江閔筆談、朝鮮正使趙泰億所集也、初泰億等三使以正德辛卯之冬至江都、館于城東本願寺、白石先生源君美造客館、筆語更僕繼晷以燭、時制述官及三書記亦在坐、君美左右受敵綽有余裕、自兩國文獻故事、以及情欸戲諢之語、愈出而愈無窮矣、觀者愕然駭視以為不可及云、午夜方辭別、泰億悉取座上數十紙、謂君美曰、今日之會曠世偉事、此數十紙請為「吾獲」、將万里持還且叙錄之以貽後世、不亦可乎、君美曰、它日果能叙錄、幸分一本來、泰億諾之、既就歸途、後數月於駟程中編次為一卷、寄送如約、亦庶乎有信者矣、今所錄一從泰億之旧、但其戲語詼諧資笑噱者悉削去之、以從簡潔耳、滄浪室直清書、

二七、一五

題內殿燕樂筆語後

鳩巢先生

皇朝樂部有得於本邦者、有得於外國者、京師伶官之家世掌之、自

近世燕饗以散樂為禮、古樂遂廢不行、可嘆也已、辛卯冬朝鮮使臣來聘、惟十一月三日錫宴于內殿、依前代例、當用散樂、朝散大夫源君美建議于朝、更以古樂代之、偏及本邦外國之樂、及至燕饗之日堂上樂作、使臣皆竦然改容、每樂更奏、君美与之筆語、應對如流、宴罷、乃第錄樂名、各附問答之語^{*1}、其下、以進、今之所錄即其稿也、昔延陵季子聘魯、觀三代之樂、左氏傳之、古今以為美談、自漢季三國之後、歷南北十六朝、以逮南采、遼金之時、敵國交聘前後相踵、未聞有使臣觀樂於燕會之際者、千有餘年間絕矣、不可見者、今乃見之、吾知、後之作史者、亦將繼左氏而傳之、使其事迹赫々於百世之下、豈特使臣之榮、抑亦邦家之光也、鳩巢主人室直清題、

*1 東大本、都城本「干」。

*2 東大本、都城本「宋」。

二七、一六

送田辺子善序

河口静齋

朱子^{*1}遺其子敬之往師東萊先生、及其行戒諭諄悉、其中有云、見他人好文字必錄之、近世朱學之徒、以文章為害學者多忌此說、往年筑後書生西村晴白者、嘗舉此條質諸其師鄉原窓南、々々躊躇良久、忽云、是由敬之太不肖耳、窓南者綱齋先生之門人也、其賤文章往々如此、而天下喜文日甚一日、及仁齋徂徠之出也、專以文學鼓動一世、如仁齋雖不以文章為業者、然其著述實有可觀、東厓繼之、則又益以文有名、徂徠立一切之論、舉先王礼樂周孔名教而尽歸作詩作文之中、叱經生為土苴、於是与朱學為讐如不共戴天者、至此時、朱學者流亦有以文章名世者、如觀瀾鳩巢二先生是也、然而二先生之學、亦

各研精經義、其見識持論卓然自立、不特以文而已、蓋天下之所知也、而朱學之弊、人々自高、分門割戶殆有閭牆之風、吹毛求疵、待二先生唯取其文而已且文章實其所賤、視為一小技、是以所賤待人也、而又欲獨取其文以禦彼仁齋徂徠之徒焉、胸中未免有城府、則何以能得天下之士哉、故當世朱門學者、無以文章自表見者、又無棄文章自信不疑者、蓋坐乎此也、朱子嘗議陸氏之學曰、象山門人徒有是非之心、而無辭讓之心、有羞惡之心、而無惻隱之心、不意今日學朱子者、如函南之言、反踐此弊、此豈朱子之教使其然哉、仙台^{*2}曰君子善、与予始相識、門其學^{*3}、門淵源、則實篤信朱子者也、門予以作文之法、予對曰、經術之士多不能作文、無他也、視文章太輕易耳、子善不以予言為非、及歸仙台、又求詳說文章之道、予謂前言已尽、子善盍姑思之、以輕心臨事、雖至易之物反難矣、子善若從予言、其於文章蓋有余師焉、因舉從來所見聞以送其行、如此辭樸意直、故不為文、亦不以子善為外尔、庚午夏五、

*1 東大本、都城本「遺」。

*2 東大本、都城本「田」。

*3 東大本、都城本「問」。

*4 東大本、都城本「問」。

*5 東大本、都城本「問」。

二七、一七

題山田氏擬請立儒宗門疏

鳩巢先生

嚮余聞或人之言、有一儒生投書官庁函中、乞「官府下」令、凡都下學儒者得「林祭酒保任文字」、後許「喪祭不」依浮屠、又令「諸国倣」

焉、以為^レ法^ト、事寢不報、余聞而^レ慙^ス之、不知果有此事否、今觀山^{*1}曰¹氏擬疏請立儒宗門、亦類此、雖計出不得已、亦為得便宜、本^{*2}邦自王侯以下喪祭事、一切付之浮屠、千年于今矣、當時執政者亦聞此等之儀、往々以生事乱法卻之、誰敢建白於³朝者是可嘆已、然山田氏所論理勝辞直、於事情亦不失、他日儻^シ遇^シ君相崇儒之時、未必無味於其言、安知其不舉而行之乎、然則此疏宜伝之於世可也、近世儒者皆事記誦詞章、於凡世道事恕不介意、而山田氏独有志於持世教如此、則其學可知矣、況其文辞雅健有足称者乎、遂題数語以為贈、享保丁未歲春上元日、鳩巢老人室直清、援筆于駿台之草廬、

※【頭書】「慙 説文是也」

- *1 東大本、都城本「田」。
- *2 東大本では平出（改行）。
- *3 東大本、都城本「議」。

二七、一八

答學者門^{*1}

鳩巢先生

或門^{*2}神之所在曰、在人心、人不自知尔、何以言之、今雖暴虐不仁之人、哀人之冤死、則為之泣下、雖放蕩不義之人、羞己之不義、則為之面泄^{*3}、夫汝既為不仁而無忌憚矣、則其泣下者^ハ明^{ケシ}、非汝使然也、汝既為不義而無忌憚矣、則其面泄者^ハ明^{ケシ}、非汝使然也、然則誰使之然哉、曰、神也、是則神之体物而不遺者、是則天地之妙用、常流行上下於兩間、而無天人之間者也、嗚呼知此則知神矣、神之示我明顯而不可欺也、如此而我乃詐善飾惡、動^レ輒欺之、是謂

褻神侮天、人而褻神侮天、罪莫大焉、夫如是者禍必逮夫身矣、孔子曰、獲罪於天、無所禱也、豈可不信乎、豈可不懼乎、

- *1 東大本、都城本「問」。
- *2 東大本、都城本「問」。
- *3 東大本、都城本「泄」。
- *4 景岡本、東大本、都城本いずれも「此」とし、頭書で「是」と改める。

二七、一九

弔大石良雄文

鳩巢先生

出郭而南二十里、望芝山於海畿、佳城鬱々、茂林菲菲々、金僊攸^レ宮、棟宇翬飛攀^二薜蘿^一而上躋瞻^二丘墳之巍々^一、曰赤穂之君臣爰啓^二塋于翠微、想侯之没曾幾年于今、屹而余威、大石子暨其徒諸墓累累^二而環困、伊昔一体而同仇死猶喜、魂魄相依、慨念當日、猶在目、噫、吾去此其安婦、始吾慕乎古人、嘆今世之莫覩、今觀諸子之所為、反疑初心之殆迂、方^二諸子之流離^一、不^レ過^レ為^二亡隸遷虜^一、生嘗仕^二叢尔之國、死遂葬^二辺海之土^一、而天下仰望如泰山、賓旅奔赴如都聚、無尺土之封、而衆宗之、猶臣之尊主無蔑孳之親、而民愛之、猶子之戀父、嗟夫孚感之極、有如是耶、吾謂事固有所輕重於世者、未必不係乎命數、自夫文教失宣天下相尚、以武所賴勇士排難忠臣禦侮、奈何近世汰侈成^レ俗、瑤醕為^一蠱、三風十愆家家相祖嗟風俗之日頹、有如將傾之宇、天作赤穂之難借諸子而技拄^シ揭^二六合之綱維^一、正^二万世之繩矩^一、天地為之震動、人鬼為之鼓舞、吾未聞丈夫立志砥節、有若斯之赫々者、至於沈晦、待時堅忍成謀、同^二愚甯子^一、協^二籌留侯^一、蓋載在天下之耳目、無為多言而徒咻、惟私心之

感慕有吾淚之不留、跪陳辭而相弔、庶其有識於幽^一、

二七・二〇

祭小谷勉善文

鳩巢先生

嗚呼勉善而命止斯耶、惟君生有耿介之操廉潔之志、中歲始好聖賢之學、夙夜汲々於自治、平昔玩好一切屏去、惟道之嗜篤信實踐遠道自致、及其德與年進行、與學至、既有節儉之守、加以縉藉之思、溫恭保身、老成勝^レ事、不獨後生之所^レ式、亦比前烈而無媿、嗚呼勉善而命止斯耶、始吾教授于北、君抱經而來視、日居^{*1}月諸寒暑無避以齒、則君居^レ先以賢、則吾不類、豈料、誤聞而相信、不以非材見棄、尔來二十余年、未嘗以一日有異、顧交道之有終、庶^二幾古人之誼^一、吾方東徙于武、君亦以職來寓相謂、天俛良期、使我二人復聚觀、君鞅掌公事、倥偬激務又以其假講學求益、不渝其素、迎接音問相^二尋旦暮^一、曾日月之幾何、忽棄我而北赴、每尺素之往來、嘆白駒之無駐、吾恨離索之既久、君願後會之有^レ路、今夏聞君微恙、踰月稍見衰羶、繼承葉餌、有驗能堪追遙之步^一、賴^二精神之可^レ恃、猶足少減憂懼、但恐不^二及時愈^一、或浸染而成^レ痼、不意秋冷為祟、忽一朝而聞訃、嗚呼善人之云喪矣為吾道之不祚、宜其使吾失聲慟哭、呼天告愬寢食俱廢、手足失措、爰留書而在後、憑馭使而遠伝、何手筆之爛然、見心腹之開布、捧誦如聞謦咳、不覺淚下如雨、曰、余自始聞道檢身、不至大誤、幸全手足以終、職由教誨之故、想為賜之至多、匪言所得而具^一、所恨前約不效、一別湍先朝露、生雖悲道之不興、死猶望子之有遇、願子保壽終耆耄勉^レ時自護、又聞臨終屬甥昌言、殷勤寄言謝我無數、嗟非見愛之深、孰能心曲之傾注師德、固非所當、推許何甚過度、若其始終於道至死無復外顧、自古君

子所難、今在君其有裕思高躅而莫及、奈何不使吾感慕、嗚呼勉善而命止^レ斯耶、往吾罹戊戌之災、生理紛如禁絲、妻子避火狼狽路岐^一、會君為^{*2}候家出使聞之、使道奔馳下馬勞問佇立移時、哀我困厄涕泗交垂既歸邸舍、遣人遺以金貨衣服、下暨敦牟^{*4}厄匱、至今家人感泣、猶言受君厚施、吾嘗有下体之疾、北年勞君憂思、旁問良藥、百計求治、託人遙取溫泉、舟運車輸以與吾、湯^{*6}球^{*5}是資、凡此皆不足為君稱、而今云々者、將以明君之篤於故旧、出天性踰等夷、而吾之德与福薄、卒無以報君之恩私、嗚呼勉善而命止斯耶、縱吾他日有遇於世、誰為為^レ之、誰令聞之、況復犬馬齒老精氣日衰、何以答君遺言、而河清之与期、雖然道之興廢在天、非我之所能為、惟吾脩身以俟寡過以没、則將見君於地下有辭焉、俯無以違區々之志、仰有以酬故人之知如是而已、嗚呼君之病也、吾不能執手以訣君之葬也、吾不能執紼以隨負一世之知己、顧平生而忸怩千里、緘^レ詞而寄哀、魂有靈、其監茲、嗚呼哀哉、

- *1 東大本、都城本「居」。
- *2 東大本、都城本「候」。
- *3 東大本、都城本「便」。
- *4 東大本、都城本、果図本いずれも「孰」を「敦」と頭書で改める。
- *5 東大本、都城本「比」。
- *6 東大本、都城本「沐」。

二七・二一

陶靖節贊

河口静斎

善哉陶子。^{*1}其耕而仕也。雲無心以出岫。其棄官而歸也。鳥倦飛而

知還。舒卷惟其所如。去來與時俱適。陶子善哉、

鳩巢先生評、以歸去來辭贅靖節、一快事也、

*1 以下、この贊の「」は原本のまま。

二七・二二

武州羽生村清源寺中菅公祠并像、莫知其所創、宝曆四年甲戌、
見住持崇愿奉像於江府、重新修飾、六月朔旦恭展瞻拜賦、此及
以紀時月、後学河口子深肅題、

遺像想元聖、格天万世功、寬袍儒士服、寢幘大臣風、勲業存周室、
文章寵漢宮、威顔尚咫尺、嘆息仰蒼穹、（*1〔用〕） 旧作神成、

寺旧有画像極古、伝云、菅公在謫所映水自写其真、鬚眉皓然、
与凡迥異、至享保癸卯、羽生義綱禱而獲応、乃命工彫刻、令木像（*2〔用〕）
是、子深重識、

梅花薰砌 梅か香をおはしまちかくさそひ来て

神に手向の庭の朝風

桜花盛開 折を得て今をさかりとさくらほな

手ことにかさす春の宮守

松経年 跡たれて幾世になりぬ（*3〔用〕） 引植し

その神垣の松そ木たりき

宝曆四年五月廿五日

*1 東大本、都城本「用」。

*2 東大本、都城本「令」。

*3 東大本、都城本「引」。

二七・二三

勸学説

山田文蔚

学之進与不進、唯在勤与惰耳、勤則進、惰則不進、進何、知其所未知者、而能其所未能者也、不進何、画其所固知、而安其所已能也、大抵人情難於勤易於惰、是以往々見其不進者、而不見進者、甚之則有并其他日之所進而亡焉者、其如是也、則不惟不進、乃亦退也已、夫人幼而從師受句讀、俛焉日夜不懈、習其所受而巳、其或一字之舉、深以為恥、而其稍長、談論經史、作為文章、弁博之雄、辭藻之華、聽者解頤、觀者眩目、輿人伝誦之、曰夫己氏有子、其能然乎、則謂之盛世俊選、大邦偉器、宣矣乎、為其父祖者、亦謂是子將能起吾宗光吾族也、於是乎、親愛之益厚、奉養之益豐、且以之播揚親戚、張夸鄉閭、為子者視父之愛己、鄉党之称己、而亦自謂吾之学成矣、乃揚々意滿氣盛、眉軒趾高、蔑視先生長者、不足学焉、惰心一生、旧業尽廢、及其壯、而締交縉紳也、学士大夫与之講性命道德之說、論典章文物之儀、跡興廢治乱之数、則懵莫之知、亦与之較技於燕門、則猥瑣鄙拙、殆不足觀也、甚焉則至訓詁之通、句讀之習、亦蕩然失之、而与世之不学之徒無有異矣、豈其風慧而晚痴者也歟、抑亦唯在勤与惰耳、子曰、譬如為山、未成一簣、止吾止也、譬如平地、雖覆一簣、進吾往也、可不勤乎哉、可不勤乎哉、近觀元惟送田生之詩、若有不如旧時者、故為此説与之、

*1 東大本、都城本「間」。

二七・二四

弁復讎

山田君豹

或曰、父讎可復乎、余忘之曰、然、礼曰、父讎不共戴天也、曰、於是有人実犯穿踰竊盜之罪而見殺於人、其子以殺父者為讐、而復之乎、曰、不然、礼之言豈謂之乎、此乃周官所謂殺人而義令勿讐也、凡謂之讐者、至怨之稱也、若夫權門豪家席勢張威橫殺人之父兄而不顧、或攻剽椎埋潛匿、或忿靜相毆殺之而亡名之類、皆所謂至怨、而為人子者、義当痛恨奮激、寢苦枕干、以必復之而後已也、然夫凶暴殘賊之徒、王法所必誅而無赦也、則発摘緝捕、未有不就戮者矣、夫法之所誅、即理之所誅、即子之所当以為讐而復之者也、此三者未始不相因也、若吾子所謂穿踰竊盜、則亦法之所誅、而亦人之所得而殺者也、則是人殺賊也、誅奸也、雖人子之情、若不可已、豈得誣無怨之人以讐而復之乎哉、又或老姦巨猾、故殺平民、誣以竊盜穿踰偽造其迹、而無他左驗、其子以為冤、則亦当忘食廢寢、苦心衡慮、百方甄覈、而幸得其情、則明告于官、以雪父冤、而復讐可也、不知出此、悲憤激厲、唯以趨讐為急、悍然不顧、則已無益於親而已、亦陷於不義、是不惟無益、而復增親之辱焉耳、雖其情固可哀、何足以為孝子乎哉、如或柔懦懼怯畏死貪生、於其当復之讐而不能復之、妄以周官之言藉口者、則絶彝倫喪大義、亦非所可責也、

* 果図本「未始不始不相因也」とあり、「不始」は衍字か。今改める。

二七・二五

天狗説

物茂郷^{*1}

名山之顛出雲、膚寸而合、不崇朝而雨天下、神之福也、殺機一発、風怒霆行、拔樹隕石、巖壑辟易、万物為齏、頃刻而霽、天地開明、一介弗損、隤然如故、是誰之為与、窈冥之中、蓋有物焉、儻忽乎為

人、儻忽乎為物、衆莫能端倪、世俗所囟伝、廼有象鼻鳴喙載勝虎爪電目肉翅髣髴乎豐隆之神者、咸稱之曰天狗云、茂卿稽諸典籍、易有之、艮為山、為狗、為黔喙之属、是其所繇象邪、世薦紳先生、或引客星、或援外国之獸者、廼孰名惑其実、可謂妄已、大氏三代而上、但謂之某山之神、後世所訛、起自丘言、中国多仙、吾邦多天狗、彼所稱紫虚碧霞真武帝君、廼此謂榮術太郎金毘羅妙義之類皆是也、夫神者聰明正直者也、而無知、安能知人之所命乎、故或以為神為仙、或以為仏為菩薩、為羅漢明王、為魑魅罔兩、人各徂其所見、建之名称、惟人有知、安能知神之所自命乎、惟神能降禍福弗爽、故世人所稱、至于今弗替、是重黎之所以別人神也、故大伝又曰、知鬼神之情狀者、唯聖人為然、平安西北、愛太子之山峯焉、顛有榮術太郎祠、主其祀者上人惠通、乞予文、予故为天狗説以贈之、物子曰、予匏繫斯土、不能西陟愛太子之山、以問其神、上人其宿齋戒沐浴、捧斯篇造祠、以命之、其必漠然莫之能応邪、抑将有蓬勃然興乎山阿者也、則知吾言之信然也、而神実歆之、

* 1 東大本、都城本「卿」。

二七・二六

〔蝦夷記〕^{*1}

寛文八年、蝦夷東辺師摩茶里之地、有沙務社印者^{或云沙知前}、長大多力、諸夷畏而服之、近地諸島尽従其命、因是跋扈不順、扨師^{*2}摩茶里河上、築壘以自居、時蝦夷山中有金坑、華人多往開鑿採取金礦、往來日熟、内有黠者、沙務社印以女妻之以為耳目、欲侵掠松前之地、而擅通商之利、有鬼菱者^{或云鬼部}、〔蝦〕夷蠅部人也、豪健^{*3}躡捷、膂力過

人、傾心中国、誠欸無二、惡沙務社印驕慢懷毒、恐為地方之患、而欲一身誅之以立奇功、為之計、沙務社印聞之大怒、率衆襲鬼菱、與戰未決、師靡茶里河邊有華人文四郎之宅、與沙務社印之壘止隔一水、鬼菱意輕沙務社印、單身離所居三里許、獨帶一奴、徑到文四郎之家、沙務社印從壘上窺望大喜、輒率二百許人、船載渡河、急圍其家、呼曰、鬼菱可速出就禽、不然立可放火、于時家內唯文四郎及通事勘左衛門以下十余人而已、鬼菱料不能禦、慨然謂文四郎曰、命數至此不可奈、是天亡我也、不宜以我故而累諸君、願得一條槍為君決死、雖賊輩千百何足懼哉、文四郎以槍授之、鬼菱大喜、留槍柄八尺許、砍去其余使短、用布襖裹頭、提槍趨出、賊衆又呼曰、鬼菱初來不持尺刃、誰以槍俛鬼菱者、須放火烧殺、鬼菱亦呼曰、是也、乃投其槍于地、顧文四郎曰、請藏吾奴無為賊獲、手持木桿向賊、先以大槌擊牆一方數下、賊聽其響、謂自此出、皆集其處以待、鬼菱自他處走出、直突賊圍逃去、行數百步為賊槍傷其足、遂僵于地、賊畏其勇不敢前逼、簇而射之、箭被四体、竟為賊所刎、文四郎匿鬼菱之奴于櫃中、賊競入遍搜家內、擒奴以示沙務社印、々々曰、此等賊人殺之何益、乃赦而歸之、從是兇威益張、是歲八月、松前候家人、率商船六十艘至蝦夷貿易、半至、賊詐為好意、出迎曰、今年海物甚多、不論值直、請恣意選取、乃輪船中貨物上岸、入夜賊潛到、候船中諸人睡熟而尽殺之、得脫者僅四五人、至翌年五月、逃還松前、具告賊情、先是前一月已有申報、帰順諸夷皆訴沙務社印叛狀、松前国老佐藤權左衛門馳驅遣通事上聞、五月、台旨命松前八左衛門殿、赴松前指揮処置、初沙務社印事發、松前候*8(医)已使其臣蠣崎佐左衛門率三百許人赴蝦夷、至軍怒夷札寨、沙務社印手下二千人來攻、佐左衛門與所將卒及金坑役夫等合五百許人、固守軍怒夷以待後援、而佐

藤權左衛門將百二十人、松前儀左衛門將百五人、仁井田瀬兵衛將百三十人、並八左衛門殿陸統至軍怒夷、與賊夾水而陣、我軍進發鳥銃、賊死者百余人、震恐而退、賊亦以毒矢射我軍、而不能穿札、無一人被傷者、自旦至晝、賊尽奔潰竄于山中、我軍乘勝而進、佐左衛門先驅、儀左衛門次之、瀬兵衛權左衛門又次之、八左衛門殿居後、距軍怒夷八九厘、賊在瑟歌利山、進而圍之、衆槍爭登、賊入瑟歌利河、潛水而逃以滅其跡、擒後者十六人、權左衛門時年七十餘、勇而有謀、請八左衛門殿、解其縛以為鄉導、深入蒙別之地、此地有大河曰鳥斯邪滿別、賊悉藏其船、使我不得渡、賊曾四五十人、將千許人隔岸而陣、權左衛門與通事勘右衛門、登高遙呼賊曾曰、汝禽獸敢抗大国、未伏天誅、中府命八左衛門殿為將、發大軍至此、当拏戮汝輩、使無遺類、我憐汝輩一旦赤族、若革心向化、有投順之志、則我宜為汝求哀以脫其死、向來所擒今皆不殺、汝須齷心帰罪、汝尚執迷不悛、即任汝射我、汝禽獸所發之箭、豈能入我人之身耶、乃左右袒拍胸踴躍、賊大驚伏、尽投力解甲以降、權左衛門慰諭之曰、汝已識逆順、我心為汝求活無怖、乃率以帰軍怒夷、半途又有賊三百許人遮路、權左衛門又擲高大呼曰、我佐藤權左衛門也、今率降虜帰塞、誰敢拒我、賊皆羅拜道上、無敢抗者、及暮至軍怒夷寨、八左衛門殿分兵渡鳥斯耶滿別河、獲賊十六人、於是佐藤權左衛門請領百三十人、先大軍二日、以生口為導、略地至師靡茶里、距沙務社印所居僅一日程、諸蝦夷爭降附、因命諸夷構營以居我軍、權左衛門使謂沙務社印曰、尔來勝負、汝所備聞当往取汝首、汝不能死、速來投降、沙務社印大恐謝曰、当速往謝罪于麾下、即与六七十人、戎服持弓矢、搜衛具刺以來、衛具刺者劍也、跪于海浜沙上、沙務社印年八十許歲、容貌魁偉、三倍常人、權左衛門望見之、使通事佐兵衛言之曰、汝既既

服罪來降、而不積甲捨兵、反覆可惡、我不汝赦、須臾城中洗頸待刃、沙務社印等聽之、盡去其備、單身至權左衛門、當拜謁、權左衛門亦自解佩刀、召曾長十六人上座、歎語良久、為設酒食、責沙務社印曰、汝之所為悖逆無道、本欲藏汝種類、以及同惡、駢戮不遺、而我憐汝不忍如此、欲為汝指示活路、宜奉物千件以贖罪、沙務社印許諾、使人舁畢出送寶貨至八百件、交收已訖、權左衛門是時陰馳使促大軍速來、沙務社印不知也、權左衛門乃曰、贖物已收八百件、汝罪已積、欲置酒相慶、因留沙務社印、及曾長二十五人、阿弥子二人宴于別廬、阿弥子者蝦夷貴種也、在權左衛門營中、其余盡縱還沙務社印之壘、遂与沙務社印等開懷暢飲、皆大醉臥、于時閏十月廿三日也、夜將五更、八左衛門殿以下全軍応期而至、囿沙務社印所居、此時賊有發愚牙喜見若丸之助三人、既降悔曰、我為沙務社印所欺、誘我以叛、使我共出重贖、平生所珍一旦輸盡、我不復与彼同坐、不肯往宴、在權左衛門本營、是日見營人炊飲甚多、恠而問之、爨夫給之曰、以餽汝輩夷人先舁畢中者耳、三人疑而不安、忽聞軍馬之聲、大驚走出、諸人但捕丸之助、通事甚右衛門搏發具牙而殺之、其一人逃去、諸軍囿沙務社印所居之廬數重、一時大喊、賊驚起、狼狽失措、束手就戮、內有陳鉄械者、沙務社印之弟也、狂走衝突以至于斃、沙務社印起坐、大罵曰、權左衛門豎子欺我、衆共斬之、至死不動、肌厚数寸、殊于常人、阿弥子等皆死、乃燒其廬、進襲師靡茶里之城、克之、賊尽四散、唯沙務社印之季弟志羅氣刺、狀類病狂、初亦從二兄來降、知我軍有異、而先潛逃去、得免於誅、沙務社印既戮、諸帥還兵、有余賊千余人、伺我兵還而來、我追兵發烏銃拒却之、東辺之地尽平、蟬崎小左衛門蟬崎采女、率五百余人鎮撫西辺之地、諸夷悉服、初沙務社印有衆数万、然劫害客商之後以訖于亡、我兵未嘗損一

人、而津輕^{*12}候、發兵、使一隊將至松前以為後繼、隣近諸国皆戒嚴、置烽燧以備急警、每里設通以便報聞、然曾未数月、兇豎授首、一方帖然焉、

芋山外史曰、沙務冥頑不靈、而能容鬼蜮之奴、有渠魁之器、鬼蜮輕躁賈禍、而死不累人、志羅氣刺見幾而作、不可謂夷無人也已、

癸亥夏五十有七日

右一篇第六十四卷蝦夷談筆記、可通読

*1 県図本に題なし。目録により補う。

*2 東大本、都城本「靡」。

*3 東大本により補う。

*4 東大本、都城本「健」。

*5 東大本、都城本「砍」。

*6 東大本、都城本「侯」。

*7 東大本、都城本「侯」。

*8 東大本、都城本「侯」。

*9 東大本、都城本「里」。

*10 東大本、都城本「失」。

*11 県図本のみ衍字。今、改める。

*12 東大本、都城本「侯」。

*13 以下、『静斎文集』になし。

通昭錄卷之二十八

- 一 異說類編
- 一 鳩巢先生語
- 一 雜詩類編

一 物茂卿曰、五常出周書不知其解、仁義礼智出孟子謂根於性而不謂性謂之性者自漢儒始配之五行者亦自漢儒始、然漢儒之性廼宋儒之氣質、初無理氣之說、理氣之說自茂叔始、

一 董仲舒曰、夫仁義礼智信五常之道 本伝、

一 漢書東平王伝曰、夫人之性皆有五常、

一 伊藤維棹曰、孟子既歿斯道不明乎、天下世儒之所講求者不過訓詁文字之間、及宋氏興鉅儒輩出崇正黜邪漢唐之陋為之一洗、其功固偉矣、然當時禪學盛行、以其遺說解聖人之旨者不為不少、於是專貴一心而以明鏡止水為修身之極功、胡氏云、一疵不存万理明尽隨所意欲莫非至理是也、夫操則存舍則亡、出入無時莫知其鄉心之不可恃而不可不道以存之如此、故夫子之聖猶至七十始曰從心、所欲不踰矩、蓋聖德之至從容中道而非一疵不存、万里明尽之謂也、

一 伊藤仁齋齒未強仕艸論語古義、向五十霜稿凡五易白首紛如冀訓于後昆後長胤鋸梓 古義、序、

一 徂徠曰、朱子妄謂不名先儒礼也、於是乎尹焞游酢謝良佐属悉氏而不名又從而為之階級子程張而氏諸儒自此之後大全諸書奉以為金科玉條不敢違、遂使讀者范乎不能識其為誰某也、

一 又曰、上論語成琴張而下論成原思故二子独称名、

一 鄭氏曰、論語仲弓子游子夏等撰定、

一 伊藤仁齋曰、編論者游夏之儔而已、

一 徂徠曰、子為男子美称、子必有父人無不有父、者不德為不背為不肖其父也、欠論語称孔子去姓。候如春秋公魯侯。内辞也、

* 句点「。」は原本のママ。

一 又曰、老後於縱人之常也、孔子七十從心所欲亦放縱耳、祇其不踰矩所以為聖人也、

* 東大本、都城本「放」。

一 又曰、孔子無尺土之有亦異於湯与文武焉、使孔子見用於世邪、唯有管仲之事已、然其時距文武五百年、正天命当革之秋也、使孔子居管仲之位、則何止是哉、故孔子与其仁而小其器、蓋惜之也、

一 徂徠徵無量寿經連義述文贊適親也、莫疎也、解論語適莫字、

一 又曰、佞古称口才未有姦惡之意、觀於雍也仁而不佞可見已、聖人所以惡之者以行之不逮也、後世藉聖人惡之、遂以称姦人謂之佞、是後世佞字与孔子時異、

一 楊升庵外集云、晉書樂肇論語駁曰、燕齊謂勉強為文莫論語集註曰莫疑辞、徂來曰、是援唐詩中莫字、以解論語可謂不識古文辞已、

一 曾子以不毀傷身体為孝、徂徠曰、孝經本謂免於刑戮也、身謂剝与宮体謂刖髮謂髡膚謂墨、故身体髮膚四字指五刑而言之、古之道以免於刑戮為先、故曰、不敢毀傷孝之始也、觀春秋時諸侯大夫之言、每以後全首領終於牖下為幸矣、古時議論皆尔、曾子在無道之世、故以此為幸焉、若以保護身体為說、其說終有不可通者、戴記戴樂正子春之事近迂矣、亦必有所為而發也、

一 又曰、湯武者開国之君也、開国之君配諸天举一代之人尊而奉之、孰敢間之戰国時諸子興而後、有非薄聖人者、是天下之罪人

也、孟子生其時欲以口舌勝之、遂有誅一夫紂之說湯武豈孟子所私哉、孟子不自揣妄謂我道之祖務欲分疏其為聖人、是其過也、尔後世有論湯武放伐者昉孟子也、故漢儒以為權、仁齋以為道、皆僭妄已、

一 仁齋曰、吾 太祖開國元年癸丁周惠王十七年、到今

君臣相伝綿々不絶、尊之如天、敬之如神、實中國之所不及、夫子之欲去華而居夷亦有由也、徂來曰、此自諛言不容弁說^欠此心孔子經過其地、因欲居之不尔当欲適九夷而曰、欲居其非遙望者審矣、^欠若夫 吾邦之美外此有在、何必伝會論語妄作無稽之言乎、夫配祖於天以神道、設教刑政爵賞、降自廟社三代皆尔、是 吾邦之道即夏商古道也、今儒者所伝独詳周道、遽見其与周殊而謂非中華聖人之道、亦不深思耳、自百家競起孟子好弁、而後學者不識三代聖人之古道、悲哉、

* 東大本、都城本「必」。

一 徂來曰、唐以十哲從祀誠失考後世乃躋四配而公之次十哲而候之甚矣哉、後王之驕其貴也僭矣哉、後儒之驕其聖也、以一人之見而泝乎千百歲之上、以黜陟之伝其道守其教、吾豈敢神穆乎、不言而吾任意陟降之神若或言乎、其謂之何、古者朝廷尚爵鄉党學校尚齒未有外、是二者、而為之序矣、以己意秩其德亦仏氏菩薩羅漢是倣已、孔子坐門人侍皆以齒千載之下、孰能易之、夫子之神如在也、^{*}且子雖齊聖不先父食思孟之於十哲子行也、神其享乎、

※【頭書】「子雖——左伝文十二年」

一 又曰、程氏曰、曾氏卒伝其道、此何所拠、韓愈原道何足為拠、
一 又曰、宋儒^伊謂曾子深喻之曰、唯子貢不能如曾子之唯乃其優劣矣殊不知記者有詳略也、可謂鑿矣、大氏宋世禪學甚盛、其渠魁者

自聖自智稱尊王公前橫行一世、儒者莫之能抗、蓋後世無爵而尊者莫是過也、儒者心羨之而風習所漸其所見亦似之、故曰性曰心、皆彼法所尚、豁然貫通即彼頓悟、孔曾思孟道統相承即彼四七二三遂以孔門一貫大小大事曾子之唯即迦葉微笑矣、豈不兒戲乎、過此以往天理人欲即真無明、理氣即空二諦、天道人道即法身心身、聖賢即如來菩薩、十二元會即成住壞空、持敬即坐禪、知行即解行、陽排而陰字之至於其流裔操戈自攻要之、不能出彼範圍中、悲哉如此章一貫之旨誠非不能大知之者所及然游夏以上豈不与聞特門人所錄偶有参与賜耳、千載之後拋遺文僅存者、而謂二子独得聞之、又以其詳略而為二子優劣可不謂鑿乎、

一 又曰、哭則不歌、顏子不遷怒、是聖人之有余哀而無余怒也、諸老先生粗鹵之甚、其於七情也、均視之故程正叔乃欲慶之日不弔、

一 又曰、疑大學又衛人作故其書道引康誥以及淇奥也、

一 仁齋曰、宋儒謂、父子相隠天理人情之至非也、此以人情天理岐而為二、夫人情者天下古今之所同、然五常百行皆由是而出、豈外人情而別有所謂天理者哉、徂來曰、是執拗之說耳、天理誠宋儒家言、然欲富欲貴欲安佚欲声色皆人情之所同、豈道乎、要之道自道人情自人情、豈容混乎、至道固不悖人情、人情豈皆合道乎、予嘗以仁齋先生為理學者流為是故、

一 室子曰、桓公云子糾長幼三伝不載程子、蓋以前漢薄昭之言為証耳、窃謂、春秋時立庶以賢、不以長、小白与糾俱非正嫡、其年長幼固非若嫡庶之分不可犯、況二公子皆出於流亡之余小白非当必立之人糾非不当必立之人、今程子以桓公与糾年長幼、断管仲之事、恐未当朱子又以建成大宗合而論之、建成實為嫡子、大宗其弟也、又恐不得以桓公比建成、以糾比大宗、嘗按管仲在齊見襄公不君乱

將作乃與鮑叔牙謀存齋祀各奉一公子出奔、是管仲鮑叔牙本意為齊謀不為二公子謀也。今不記此事出何書欲覆考未暇蓋謂公子中有一人存齊祀可也、其

後桓公先入齊而齊人婦之縱公子糾長^レ不可與之爭國、況其幼者乎、故管仲不敢黨所從、乃輔桓公以圖後功、此聖人所以許其功不責其死也、召忽不知大義唯知死其黨、此小節不足稱者也、然以召忽為逆黨之類恐不可也、桓公既非當必立之人、則糾不可以為逆賊、召忽又不可以為逆黨、但其死固非大義之所係亦後世為知己死之類也、故聖人以為匹夫匹婦之諒耳、

※【貼紙】「程子曰、桓公兄而子糾弟、襄公死則桓公當立、此以春秋知之、春秋書桓公則曰、齊小白言當有齊國也、於子糾則止曰糾不言齊以不當有齊也、不言子糾非君子之嗣子也、公穀并二註ノ四家皆書納糾、左傳」

「獨言子糾誤也、然書齊人取子糾殺之者齊大夫常テ與魯盟於薛既納糾以君又殺之故書子糾是罪魯也、／／何書追昭按出瑯琊代醉編」

一 管仲不死程子以為桓公兄也、子糾弟也、故可也、見集註、仁齋曰、按管子及莊周荀卿韓非越絕等書皆以子糾為兄、桓公為然、則桓公之於子糾是以弟殺兄不義之甚者也、管仲亦不得免黨不義之罪、夫子何故深與其功而不一論其不死之非耶、蓋春秋之義子以母貴、故於嫡庶之弁、則甚嚴而於衆妾之子亦不似兄弟之義論之、況管仲之於子糾盡其心而已矣、運窮力屈遂囚于魯不避事讐之嫌而成齊桓之業、是夫子之所以不言其非也、徂來曰、桓公公子糾孰兄孰弟議論紛如孔子之取管仲以其仁而已矣、必以小白兄子糾弟者不知道者也、蓋以子糾為弟者自薄昭始其言出於一時諱避之為而後人弗

之察、已子糾兄而小白弟章々乎明哉、宋儒陋見因孔子仁管仲而固執薄昭之言、遂以罪王魏、王魏亦管仲耳祇、其人不及管仲而太宗委任亦不及桓公、未免有優劣焉、然管仲自損其主而王魏高祖所命、則王魏豈可罪哉、仁齋先生乃謂春秋之義論之、此皆強為之說以求通者已夫鄉人猶且序齒推兄弟之序也、而謂衆妾之子無兄弟之義可乎、孔子未嘗仁桓公而唯仁管仲則桓公之罪可知已、然使管仲不遇桓公、則濟世安民之功、豈能被天下後世哉、是管仲之不可尤也、且管仲之前無霸々自管仲始、豈非豪傑之士邪、且古之人皆能量己之力、以為之後儒皆言其可言耳、孔子曰、為之難言之得無訕乎、宜其不知聖人之心也、仁齋又以慈愛之心頃刻不忘為仁、是孟子內外之說所圍、豈非心學邪、段使信能慈愛心頃刻不忘、然若無安民長人之德烏得為仁乎、

一 徂來曰、子絕四毋意毋必毋固毋我、此章乃語化境也、不啻孔子、凡妙一藝者、皆有化境、孔子之化其可得見者乃在禮、故曰、動容周旋中禮、盛德之至、是此章之義也、事至則以禮忘之、若初不經意、故曰毋意、變則禮從而變、前無期待、後無固滯、故曰毋必毋固、唯有先王之禮而已、無復有孔子、故曰毋我、何有於我哉、可併証矣、大氏一部論語、可為後世心學之祖者、唯此耳、然當孔子時、豈有心學哉、子思贊孔子曰、優々大哉、禮義三百威儀三千、鄉黨形容孔子、唯礼耳、夫孔子之智、豈門人之所能測哉、故當時之觀孔子、皆在礼也、故毋意必固我、以孔子行礼解之、而後為不失琴張意焉、後世儒者不知孔子之道、即古聖人之道、古聖人之道、唯礼尽之、其解論語、皆以義理、無憑、猖狂自恣、豈不謬乎、

※【貼紙】「瑯琊代醉編云、朱子曰、桓公兄也、子糾弟也、若便

桓弟而糾兄則仲庶之與桓不可同世之仇矣、／昭按以上程子語然左伝子糾夷二兄小白夷二弟越絶書管仲臣^三於桓公兄子糾^一朱子ノ言豈未詳考且要之夫子一匡天下民愛其賜之說還只是取其功焉候曰薄昭與淮厲王書曰、齊桓殺其弟、次反國程子因以此糾為小白弟、然荀子謂桓公殺兄越絶、書謂子糾桓公兄也、皆與昭不合、蓋文帝為厲王兄特避就以為之諱耳、考之管子載君忽之言曰、百歲之後、吾君下世有犯吾所立奪、吾糾也、雖得天下、吾不生也、況與我齊國之故也、觀此則糾之立有先君之命矣、呂紀曰、初鮑叔管子召忽三人相善、欲相與定齊國以全子、糾為必立君忽曰、吾三人者于齊猶鼎之有足去一、則不成且小白必不立矣、不若三人佐糾也、管子曰、不可、夫國人惡子糾之母次及糾小白、無母而國人憐之、事未可知、不若令人事小白、夫有齊國必此二公子也、于是鮑叔傳小白尹文子曰、子糾宜立者也、小白先入故齊人立之、黃楚望曰、考春秋、立子以貴之□、子糾魯出也、魯女貴而班在衛上、則子糾當立、凡此文皆子糾為兄、與當立之証、千古是非未可□決、按史記、襄公次弟糾奔魯、其母魯女也、管仲召忽傳之、次弟小白奔□、鮑叔傳之、小白母衛女也、有寵於□公觀兩次字兄弟之序可見、

一 又曰、歐陽脩破祥瑞之說、其言弁而如可觀、殊不知聖人以神道設教、豈凡人所能識哉、宋儒出而古先聖王之道壞矣、其禍殆甚於仏老、悲哉、

一 又曰、周一尺直今曲尺七寸二分、

一 又曰、仁齋譏宋儒、而終不能出於宋儒之範圍、五謂之理學者流豈不然乎、

* 東大本、都城本「吾」。

一 仁齋曰、古人言敬者多矣、或就天道而言、或就祭祀而言、或就尊長而言、或政事而言。皆有所敬而然曰修己以敬、曰居敬而行簡皆以敬民事而言、未有無事而徒言敬者也、若後世之言敬者異哉、

一 徂徠曰、論語君子矜而不爭章^{衛靈公篇}朱註可謂善解已、仁齋乃曰、君子道德自持非立異以為高、故矜而不爭物我一視非苟同以徇俗、故群而不黨、吁道德自持物我一視道學先生哉、大氏君子者在上的名士大夫通稱、方孔子時、豈有是意哉、是其欲刪朱註別成一家者、豈非立意以為高哉悲哉、蓋君子守礼貴讓、故矜而不爭君子居仁、仁者長人之德、故群而不黨、

一 仁齋曰、医之製方、必有君臣佐使之差奇偶緩急之殊、衆藥相配而後能已疾救人、若夫用單方者亦徒備急之用不足為法、聖人之設教也、亦然以仁存心以礼、存心衆功兼全而後以成其德、如先儒主敬之說亦用單方之類耳、又曰、事思敬九思之一耳、謂九思皆當主乎、敬者何哉、徂徠曰、仁齋以此而譏朱子持敬之非、然朱子亦有窺先王敬天之義、而不知本諸天、是朱子之失也、仁齋曰、敬唯在事者不知先王之道者也、

一 徂徠曰、礼者緣人情而作者也、故孔子曰、安則為之、後儒不知道故不為深責宰我、可謂謬矣、

一 殷有三仁、何晏曰、仁者愛人、三人行異而同称仁、以其俱在憂亂寧民、朱子曰、同出於至誠惻怛之意、故不拂乎愛之理、而有以全其心之德也、仁齋曰、三子皆忠君憂國、不為身嫌、故皆謂之仁、又曰、仁夷德也、故至誠而不偽、至正而不偏、皆自愛惻怛之心而發、有痛哭流涕之意、徂徠曰、三子之行、其詳不可得而聞焉、在孔子時、必有伝其蹟之詳者、故孔子知其為仁而斷之云尔、後世朱子仁齋之徒、皆各以己所見以定所謂仁者、而推言三子之心

必合諸己所見者、以解孔子為仁之意焉、是以其說皆雖可聽、吾未知其果合孔子稱仁之意乎否也、朱子所謂至誠惻怛、仁者所謂至誠而不偽、至正而不偏、此皆吾所謂各以己所見者也、幸三子之行、其詳不可得而聞焉、則朱子仁齋之說、人不能斥其非是也、然律諸管仲而其說窮矣、故知何晏之說優於二家也、且如仁齋之說、止可謂之忠耳、大氏道學者流、率皆以知道自任、競言古聖賢心中之微、典籍所不載者、豈可不謂之鑿乎、今且拋仁字之義、參以論語之文比干之死、必在微子去箕子為奴之後也、其所諫必在用微子箕子之言、而先是微子箕子亦必告紂以保宗社安天下之事耳、夫有安天下之心而又有安天下之功、謂之仁、管仲是也、有安天下之心而無安天下之功、不得謂之仁、有安天下之功而無安天下之莫有此事焉、如三子者有安天下之心而無安天下之功、雖無安天下之功、然使紂從其言、則亦是以安天下、故謂之仁、今之可言者止於是焉、

一 孔子曰、仁遠乎哉、徂徠曰、言仁至遠也、仁以安天下為功、故至遠焉、所以安天下者先王之道也、孔子卷先王之道而懷之、豈遠乎哉、若使孔子居王侯之位、乎下車而仁可得而行也、故曰我欲仁斯仁至矣、

一 回也其心三月 徂徠曰、回也、呼顏子告之也、不違仁者、依於仁也、仁一德也、先王之道所為德者衆焉、仁何以尽乎德、然先王之道、安民之道也、安民之德、謂之仁、它德雖衆乎、皆所以輔仁而成之也、故孔子以依於仁教之、謂其心苟能依於仁、則其它衆德皆自然來集矣、按論語唯此章以心言之、聖門唯仁為心法、一言一動、一事一物、皆欲与先王安民之德相成、是所謂依於仁也、不違仁也、

一 徂徠曰、四乳生八子、亦以伯々仲々叔々季々相並云尔、然世亦

有是事、豈是怪乎、且今俗惡双生、必殺其一、原諸人、情雖古亦然、觀於此則其風少弭邪、君子之所以貴博物也、

一 又曰、近世諸老先生多以孟子解論語、亦未知孟子与外人爭者也、豈足以解門內之言乎、其解經、皆以理而不以道、可謂不見宗廟之美百官之富已、其專心四書而忽略六經、亦坐是故耳、

一 堯曰篇公則民說 仁齋曰、公字不見於論語、拋前篇、当作惠字、宋儒每以公字為學問之緊要、曰天理之公、曰公而以人体之是也、然公字屢見老莊之書、而於吾聖人之書無之、何者是是而非、少無所偏私謂之公、然不扞親疎、槩而行之、則必有害於義、夫父為子隱、子為父隱、越人關弓而射之、則已談笑而道之、其兄關弓而射之、則垂涕泣而道之、不可謂公、然人情之至道之所存也、苟居仁由義、則不待言公而自無所偏私矣、

徂徠曰、以論語無公字而駁宋儒、則懲羹吹齋者、比已宋儒所謂天理之公其原誠出老莊之見焉、然聖人豈惡公邪、無偏無党皇極之敷言也、民之所好々之、民之惡々之、豈非公乎、君子之道惡執一而廢百、故宋儒拈一公字与仁齋惡公字其失適相同也、

一 徂徠曰、宋儒一事之仁古莫有是說、不可從矣、

一 仁齋曰、孟子稱倡性善之說為万世道學之宗旨、而孔子不言之者何哉、蓋人能從教則隨其所志、所勤皆可以至於聖賢、而性之美惡不暇論焉、故雖無性善之說可矣、故曰性相近也、習相遠也、夫自衆人至於堯舜其間相去、奚翅千万而夫子謂之相近者、則孟子所謂人皆可以為堯舜之意、故雖不言性善而性善自在其中矣、謂夫子不言性善者非也、孟子本以仁義為甚宗旨而其所以發性善之說者、蓋為自暴自棄者立其標榜、使知所本耳、蓋道至尊而教次之、而其尽道受教者性之德也、若使人之性如雞犬之無智焉、則雖有善道莫得

而入、雖有善教莫得而從也、惟其善故能尽道受教而之善也。輕此孟子所以為自暴自棄者。發性善之說、而亦莫不以教為要何者、倘專任其性而不學以充之、則眾人焉耳、愚人焉耳、其卒或為桀紂而止、故曰、苟不充之不足以事父母、又曰、苟失其養無物不消、皆言性之不可恃也、專謂孟子倡性善之說為道學之宗旨者、後世學驚虛遠視性甚高之所致而非孟子之本旨也、

一 程子曰、仲尼之門能不仕大夫之家者、閔子曾子數人而已、仁齋曰、孔子曾仕季桓子、孔門諸子亦仕大夫之門者有之矣、豈可皆以為非耶、徂徠曰、味程子之言、豈必以此為非乎、蓋仕諸侯者有志於一國之治者也、仕大夫者否矣、其志瑣々焉者也、程子乃与其大者也、

一 徂徠曰、聖人作者有聰明睿知之德、故開國之君如堯舜禹湯文武是為聖人、繼世之君及臣雖有至德、不得稱聖人、所以稱孔子為聖人者、其德與業、可以比諸作者之聖也、夫仁人可學而能焉、如聖人聰明睿知之德、稟諸天、豈可學乎、自孟子以伯夷柳下惠為聖人、而後遂失其義焉、

一 程子曰、周公之功固大矣、皆臣子之分所當為魯、安得獨用天子禮樂哉、成王之賜伯禽之受皆非也、王弼州弁曰、叔子之為此語也、於秦之君臣也、非三代之君臣也、唐虞之世其為帝者、茅茨不剪、土階三尺而已、都兪吁咈咈于其內、得一言則君臣交相拜而相咏嗟、非截然而不相及也、堯得舜而三載、命之陟位受終、類上帝、禋六宗、望山川、徧群神、輯五瑞、狩四嶽、不聞其以疑堯儀也、舜得禹而命之終陟、受命於神宗、率百官、若帝之初、不聞其以疑舜讓也、堯舜之於舜禹、臣之者也、成王之於周公、師之者也、以尊則叔父也、以親則為其父弟者也、存而負屨以行天子之

事、沒而崇以天子之禮樂、夫誰曰不可、且以周公之功與舜禹並、而尊親過之、不復子則禪而帝、復子則祀而王、聖人之所以崇德報功也、而非者何也、夫秦而始君朕也、君父皇考也、而臣弗與也、其尊若天而臣若草芥也、吾故曰叔子之為此語也、語於秦之君臣也、茂卿曰、大氏後儒謂礼万世不易者是其心有自以為礼者、故妄意成王伯禽皆非矣、夫礼為一代之典、周礼周公作而成王伯禽親受之、故成王伯禽非礼歟、則孰為礼豈不肆乎、故孔子所謂非礼者謂其後也、

※【頭書】「四部稿也王賜伯禽礼案編」。

* 東大本、都城本「議」。

一 徂徠曰、孔子無尺士之有、亦異於湯與文武焉、使孔子見用於世邪、唯有管仲之事已、然其時距文武五百年、正天命當革之秋也、使孔子居管仲之位、則何止是哉、故孔子与其仁而小其器、蓋惜之也、亦自道也、夫孔子小之、而終不言其所以小之、可以見已、

一 程子曰、君子处世事之無害於義者、從俗可也、仁齋曰、可謂謬矣、夫事苟無害於義、則俗即道、外俗更無所謂道者、故曰、君子之道、造端於夫婦、徂徠曰、仁齋又不知道也、道者古聖人之所建、豈謂世俗所為即道可乎、亦弘氏法身徧法界之見耳、

一 徂徠曰、戰國時諸子興而後、有非薄聖人者、是天下之罪人也、孟子生其時、欲以口舌勝之、遂有誅一夫紂之說、湯武豈孟子所私哉、孟子不自揣、妄謂我道之祖、務欲分疏為聖人、是其過也、爾、後世有論湯武放伐者、昉孟子也、故漢儒以為權、仁齋以為道、皆僭妄已、仁齋曰、天下之所同然之謂道、制一時之宜、之謂權、湯武之放伐、蓋順天下之心而行之、誅一夫紂矣、非弑君也、乃仁之至、義之尽、而非制一時之宜者也、故當謂之道、而不可謂之權也、

* 東大本、都城本「戰國之時」。

一 仁齋曰、孔子曰姓相近、而孟子專曰性善、其言似有不同者、何諸孟子學孔子者也、其旨豈有異乎、其所謂性善者即發明性相近之旨者也、蓋自堯舜至於途人其間相去、奚翅千萬可謂遠矣、而謂之相近者人之性質剛柔昏明、雖有不同然、而至於其有四端、則未嘗不同譬之水焉、雖有耳若清濁之異然其就下則一也、故夫子以為相近而孟子專以為性善、故曰、人性之善也、猶水之就下也、又曰、乃若其情則可以為善矣、乃所謂善也、皆就生質論之而非以理言之也、若理言之、則豈可以遠近言哉、徂徠曰、性相近也、習相遠也、性者性質也、人之性質初甚相遠、及所習殊而後賢不肖之相去、遂致遼遠也、已欠自孟子有性善之言、而儒者論性聚訟千古、遂以為孔子論性之言、而不知為觀學之言也、蓋孔子沒而老莊興專倡自然、而以先王之道為偽、故孟子發性善以抗之、孟子之學有時乎失孔氏之旧、故荀子又發性惡以抗之、皆爭宗門者也、宋儒不知之以本然氣質斷之殊不知古之言性皆謂性質何本然之有仁齋弁之者是矣、然仁齋又以為孔子孟子其旨不殊焉、其言曰、人之性質剛柔云云略至孟子出專以為性善、可謂善解孟子者已、然孔子之意不在性而在習孟子、則主仁義內外之說、豈一哉、且孔子以上知下愚不移、而孟子則人皆可以為堯舜、則孟子亦豈非以理言之邪、大抵孟子之言皆與外人爭者、豈可合諸孔子哉、

一 鳩巢先生曰、嚮者以為山崎氏之學專於理一、而略於分殊者知有君臣之大義不知湯武放伐與君臣之義並行、而不相悖知敬義有內外之分、不知不可以修身以上為敬、以直內以齋家以下為義、以方外此其大者也、其他所見多執定一理、而不察分殊所以流於神道也、然今而思之其理一者守義理之一隅也、於本原一理、處所見未徹、

故往々有所窒礙、而欲以其所見一之是其略^二於分殊者暗於理一故也、

一 又曰為學者講不知命章諄々致意大概謂學者少讀書、知聖賢之道、而一生不免為鄉人者、其病源安在只為身計所誤、雖有志於道、然見害而避見利而趨只取身之便利為一大事、無一心向道之志、則其圖身計之心實而向道之心假也、學者當於入門之初、自問己欲為君子人耶、欲為福利之人耶、苟欲為福利之人、則論語之書不值一文錢不如近權要學諛諛之有功也、然當思人生天地間以有此義理之心異於禽獸、今只知一身利害而已不知有義理、是禽獸也、他人以禽獸辱己必怒矣、安有以禽獸自居而恬^ト不恥者乎、人一生不過百年、世間之事須臾變滅、朝則門前成市、夕則設雀羅、朝則樽前獻壽、夕則為鬼簿、此釈氏所以一生為一夢也、唯此一箇道理貫徹古今、天以此授之於我以為萬物之靈、則我一生保之、不負付與之重、死則安然而瞑於我素願足矣、今記者以此章終論語之書所謂知命者為學者入頭處、在以一生貧富禍福委於天命而不用智、夫以智力得之者非正命也、非正命而得之者、又非正命而失之、其得與失如浮雲之隨風、而不一生為活計、於此艱脆不安之境泛々焉、以生以死是眾人之事也、君子知命無他以義立命也、真実知幸遇之命、非正命而不可必則富貴利達委之於命只一意守義而已、義當富貴則富貴、雖舜得天下非己之所預亦正命也、義當貧賤、則貧賤雖顏子簞瓢陋巷非己之所知亦正命也、孟子所謂順受其正者正謂此也、學者不以此定其入頭、則畏首畏尾噓生吹枯何所底止、雖一生從事於學、亦與俗人無異也、豈足與語君子哉、當時聞者皆聳然改容、

一 岩淵孝孺問曰、嘗疑蘧伯玉於孫林父甯殖放弑之謀、不對而出以

問先生、々々曰、此士君子處身之大節、宜更思之、後偶讀禮至內亂不与焉外患不避也、為同僚將作亂、已力不能討、姑避以圖後幸耳、遽伯玉不對而出、即其義也、公羊伝所謂君子避內難而不避外難、亦此意也、近見許白雲說与愚意合、未知是否、室子曰、學者要識時勢、春秋時天子号令不行於諸侯、列國皆有世卿臣室以執國柄、廢立皆出其手、雖行弑逆之事然更立公子率國人以奉之、國人亦皆安堵、以為無預於社稷之安危、此其時勢有与後世不同者、當時從君於難者死之固当其他在外之臣力能討、則討之不能則避之、亦其宜也、若不量其力不審其勢而輕率兵以討之、則身死事敗而賊不可得徒為動搖民心貽害於國而已、可謂無知慮之甚者、以此論遽伯玉之事可無疑矣、嚮者疑門之項以其說頗長、故使賢思而得之、今見來示果与愚見合、其所引礼伝之言亦足以証矣、

一 鳩巢先生答鈴木貞齋書云、孫林父欲放獻公告遽伯玉、々々不對出、而林父遂逐公、立公孫剽、其後寧喜欲弑剽納公、告伯玉、々々又不對而出、寧喜遂弑剽、今來喻云、二子不能放弑其君、豈未之考耶、伯玉為衛大夫、聞孫寧之謀乃先難逃去、以為自全之謀、豈於忠臣之義為得乎、集註以此為自全之事何也、一儒生之儀有未可遂以為非者、賢明以為君子不為太甚、又以為臣弑君不可獨罪臣、此等之說、恐未足塞議者之意、直清謂伯玉去就、一窮理事也此必先審當時之勢權輕重之宜而後論決之可也不得一時安排曲為之論、講更思之、

* 東大本、都城本「講」。『後編鳩巢文集』卷七「講」。

一 鳩巢曰、自源賴義征奥州關東武士無不属其麾下者、長田氏亦當時臣属賴義者、故忠致世世与源家、講君臣之義、但忠致於義朝雖分同君臣、然非食祿之臣耳、義朝固為叛君賊父之人、然其叛君無

心於謀君、以其与平清盛相讐、遂党賊臣、其賊父亦迫君命不得已而殺之、實由小人不識義理不可、与自行弑逆者同科矣、忠致於義朝、縱為通家旧識之人、彼以窮來投、何忍殺之、況於号為故主者乎、当距以大義而遂之出境、終身不与之通乃於事體為得、

一 又曰、孟子集註云、千乘之家者天子之公卿采地方百里、今按、采地方百里之下、当添者十二字、若方百里則不可出千乘矣、蓋集註偶失考索輒以方百里為方千里十分之一、不知方百里實為方千里百分之一、非十分之一也、

一 近世宿儒老師往往有以孔孟之言議程朱者、後生晚進習聞其說以為程朱之書不足誦、凡諸邪說之起皆由此、蓋世學之弊至今日極矣、吾徒当堅守毅率不變、庶幾或者聞風興起者、但所患者沈潛之人極不易得、聖賢之書非可以粗心讀者、世之學者不能深詣皆坐此、

一 又曰、孟子引孔子之言曰、始作俑者其無後乎、嘗疑殆上文不類、集註說以為孟子引此意在深戒、人君不仁之心若愚之所見則謂上文既論人君不仁之罪最為深切而又更引作俑之事者以明民当愛重之意不獨戒不仁也、蓋民為万物之靈不惟人君為民父母所不忍殺、亦雖人君有不得殺者、故引孔子之言以為用象人以葬聖人且惡之如此、則民之可愛且重也甚矣、安可使斯民飢而死乎、大抵世主常視民甚輕其飢而死亦怱然不加之意所以至於率獸而食人也、由是觀則其引仲尼以下自有一種意味而如之何三字最為有力、

一 又曰、論陳蔡絕糧事見「聖人」無計較處、司馬遷鄙陋不足知此、乃求其所以絕糧之故、不得遂巧為之說、以致千古之誤、可嘆也、

* 東大本、都城本「可嘆也」。

一 又曰、曾子避越寇此等事不易概論、又不知當時事體何如、春秋

時列國每常報伐、恐不過發其牆屋取其禾稼、而去曾子不応以尊長預爭問之事、乃姑避之、亦其宜也、

一 又曰、泰伯以天下讓仁山蔡峯之說非不正矣、然詩明言大王翦商左伝亦云泰伯不從、朱子亦不得枉為「大王」諱之、蓋其翦商之志不得以一毫之私論之亦順乎、天而已矣、天之於物栽者培之、傾者覆之、聖人何嘗容私慮於其間哉、但捫孔子稱泰伯為至德、則其不足於大王也、自可見矣、亦未尽善之意也、

二八・〇三

(一)

題富士山

琉球

蔡宏謨卯

寬延元作

形勝岱宋老欲仙、八之字樣坐安然、雪垂白髮長無禿、雲複素衣軀被穿、低拱群山將伏地、受朝一柱足擎天、鐘靈護國常佳氣、六十余州自万年、

(二)

己巳歲旦

山君豹

新年開曙色、桜色三千丈、人意亦如何、朝來佳氣多、

(三)

瓊河発掉

琉球

程順則

朝天面舫発瓊河、北望京華雨露多、從此一帆風送去、扣舷齊唱大平歌、

(四)

鄉夢

前賢

分明昨夜在家鄉、召入王門賜酒漿、曉角忽驚人好夢、醒來殘月照東廂、

(五)

南陽曉行

前賢

晨星落々発南陽、月店霜橋問武鄉、莫為三分長太息、吳宮魏闕已荒涼、

(六)

出都

前賢

金勒絲韁白玉鞍、天書高捧出長安、中原錦繡山川麗、江北江南立馬看、

(七)

咏竹

那覇宮

吳彬

瞻彼青々竹、群居獨不群、無心自承露、有幹直凌雲、

(八)

上巳

程搏万仲扶

順則之子
十一歲作

上巳日清和、江干好放歌、羽觴流曲水、風起送微波、

(九)

懷人

前賢 十二歲作

雲尽天边夜氣涼、草堂独坐月如霜、笛声忽繞寒牕外、遙懷美人水一方、

(一〇)

咏松竹

中山 王舅毛自義

水光山色年々碧、竹葉松枝处处同、八十老翁顏色好、一觴遙落海雲東、

(一一)

客中殘春

中山 周新命熙臣

一片花飛動客愁、三春欲尽恨難留、可憐柳畔鶯声老、為惜年光懶上楼、

(一二)

送鄭克理歸中山

前賢

五月榴花映別觴、離哥一曲断人腸、孤帆海上乘風去、万里長天望渺茫、

(一三)

浪華城陷後作

前田德善院

糲食短衣知自足、擲投世担一身輕、

(一四)

又

爭就世人功与利、残余清素得吾心、

(一五)

奉賀八十八醞

山君豹

九醞靈醬滿玉壺、瑤地春色伴仙姑、含錫牽得兒孫悅、帶咲閑米書字符、

(一六)

木村貞行

稱國右名門
播州赤穂人

身寄浮雲滄海東、久愆恩義世塵中、看花对酒無窮恨、敢作曉天艸木風、

(一七)

梅若塚

伝聞京城一小兒、角田川辺弃生涯、儼然客自今猶在、梅是紅顏柳是眉、

(一八)

富士

道本 大清國之僧

遙望富士雪為山、竦处三州碧漢間、万丈寒光通帝坐、一痕玉浪浸湖湾、雲開苜蓿峯頭現、日弘扶桑頂上团、我自東來縈夢想、試尋中快蹲攀、

* 東大本、都城本「中」。

(一九)

延享戊辰元旦

釈正真 年十二天台山無動寺僧

皇城景色雪如梅、昨夜東風花亦開、林外忽看五雲下、一声黄鳥谷中来、

(二〇)

歳晚書懷

洞庭屈籌 字主計洛陽人

月九雪巖書窓一、一五寒林幽居一、一情一不一貧瘦、一一名一不一守、一一一

(二一)

夜下墨水

南郭

金竜山畔江月浮、江動月揺金竜流、扁舟不停天如水、兩岸秋風下二州、

* 果図本、東大本、都城本いずれも「金流竜」。

(二二)

小夜中山

道春

坂道升降是早天、夢殘馬上不成眠、此山無限西行寿、能使詠歌伝千古、

* 東大本、都城本「伝千古」。

(二三)

拝敦盛石塔

拝看石塔涙縦横、十六年花一日栄、千古名高青葉笛、言猶在耳断腸

声、

(二四)

賀榎本氏慈母七十初慶 寫君謨

北堂佳氣共春来、王母蟠桃花自開、為賀桑弧今日喜、長伝寿酒万年杯、

(二五)

全

島天錫

春満瑤池設寿筵、一双青鳥自聯翩、仙園数樹蟠桃色、長快高堂何母前、

(二六)

全

上野成章

瑤池水暖凍初開、青鳥一双侍晏来、王母膝前為寿日、彩霞近繞万年杯、

(二七)

郡山国華

風暖盛筵罄合歡、芝蘭相映酒盃寛、北堂新動彩衣彰、七十仙姑帶笑看、

(二八)

谷元延清

雪霽暖回春色清、開筵此日祝長生、令堂不恥三遷教、膝下負孫業欲

成、

(二九)

小浜貞幹

花滿仙園春色遲、開筵阿母醉金色、自今称寿三千歳、方見蟠桃結実時、

(三〇)

山本正誼

高堂称慶倒華樽、正見春風萱草蕃、懸幌門前簇車馬、含飴膝下喜兒孫、九如新献仙姑寿、三遷順知慈母恩、何用偷桃向瑤水、君家自有旧蟠根、

(三一)

岩切貞喜

長餐瑤草謝彫枯、却見童顏映玉壺、□擬范生賢母統、趨庭彩服掌中珠、

(三二)

二首
赤崎貞幹

青鳥翩々遶玉台、西来王母此徘徊、相逢欲問瑤池上、他日蟠桃幾度開、

(三三)

開宴北堂麗景遲、春風長滿万年卮、百花似佐老萊舞、偏映斑斕五色

衣、

(三四)

橋口為美

高懸綿幌盛筵開、賓主献酬万寿盃、宝婺光□綺羅席、老梅香滿玉楼台、吹簫秦女披雲下、命賀*婦娥捧藥来、称慶永歌樂無極、氛氲佳氣繞蓬萊、

* 東大本、都城本「駕」。

(三五)

薩太守源公殿下経行于寄陽而巡覽海防之要地矣、其威儀嚴正、実可觀而已、外臣駕松父子等恭迷鄙懷而謹奉上、

長崎 真駕松

三州七島旧開封、入貢中山臣職供、久仰先王遊予地、長留方伯鎮撫蹤、旌旗映日翔鸞鳳、樓艦御風驅螭□、千里行程列多士、修文講武各陪從、

(三六)

贈人觀場

紫綸巾上紫雲飄、咫尺勾欄猶覺遥、看尽梨園名弟子、帰来幾処向人驕、

(三七)

閨怨

柳沢氏女

称采女
年十六女

楼上幾回使妾傷、雲山依旧此瞻望、

空量破曉鐘千夜、未見鴛鴦夢一場、

(三八)

雪中 同前

此日雪浸々、庭前改壯觀、金華銀樹下、白虎玉竜蟠、

(三九)

管家 十一歳作

月耀如晴雪、梅花似照星、可憐金鏡軫、庭上玉芳馨、

(四〇)

応安元年、禪僧絶海入明、見太祖問徐福事、海客之以詩、曰、
熊野峯前徐福祠、満山藥中雨余肥、祇今海上波濤穩、万里好風順早
帰、

(四一)

太祖大感賜和章

熊野峯前血食祠、松根琥珀也応肥、昔時徐福求仙藥、直到如今竟不
帰、

(四二)

長門春章 一休 十三歳作

秋霜長^{ニシ}信美人吟、径路無媒上苑陰、榮辱悲歎目前事、君恩淺処草
方深、

(四三)

春日山莊応制 嵯峨帝姫 有智子内親王 年十七

寂々幽林水樹裏、仙輿一降一池塘、栖林孤鳥識春沢、隱澗寒花見日
光、泉声近^ニ初雷響、山色高時暮雨行、從此更知恩顧渥、生涯何以
答穹蒼、

魔府八景

(四四)

海雲夜雨

靄吞多景海雲亭、逐婦林鳩遶暮庭、半夜枕頭檐外雨、心腸縱鉄亦堪
聴、

(四五)

桜島暮雪

千里富士山縮地、雪光射牖^窓詩脾、玉峯獨立逼天処、暫是暮雲涅不
緇、

(四六)

堀江帰帆

桜峯聳海夕陽紅、遠近帰帆飛快風、商客漁郎争掛纜、晚来猶賑堀江
中、

(四七)

松原晚鐘

千歲梵宮聳海傍、萬松鬱々尽光長、宿鴉噪罷暮鯨吼、響合湖声出下方、

(四八)

紫原夕照

曾聽紫原古戰場、太平今見種麻桑、晚鴉噪翼眠牛背、一段好望在夕陽、

(四九)

塩屋秋月

塩家烟断塩塚冷、柱影帶秋興引詩、一段奇觀在鹹地、暮湖載月滿來時、

(五〇)

荒田落鴈

橫空鴈字幾行々、忽落荒田求稻梁、此処本無矰繳累、飽成飲啄睡斜陽、

(五一)

郡本晴風

宿雨雲收曉望明、風光江色一同清、漁夫樵者解簑笠、泛水登山日午晴、

(五二)

坊津八景

深浦夜雨

大江沙岬畔、古樹繁孤舟、怒号風濤湧、倂然夜雨流、鏡声霑響落、灯火乱光幽、独坐危檣影、含憐對睡鷗、

(五三)

中嶋晴風

松樹千季操、臨江偃蓋開、雨霑沙岸去、日映雲煙來、潮水激如鼓、山風起作雷、清帝自何処、吹綠下蓬萊、

(五四)

和竜洞院

院中寂々晚風醒、洞有神竜山自靈、非閑拜時煩惱断、補陀洛地一心寧、

(五五)

和奥院

何勞千里向高野、奥院茲成占道場、物我共忘過橋上、飛泉樽濕客衣涼、

(五六)

和池中弁天

一葉棹間一水程、弁宮碧遶午漣輕、風光移得竹生島、何羨近湖遊樂情、

(五七)

和時雨滝

懸得嶮崖百尺泉、巖頭玉乱落吟辺、輕雷長轟雨如霧、林際朦朧白日天、

(五八)

和稻荷社

社上風光宜四時、桜峯逼漢雷雲空、拝余懷旧堪催感、暗夜石頭一火奇、

(五九)

松山晚鐘

松間出化城、空外落鐘声、栖鳥園林通、夕陽江海傾、悠然辻水淨、蕭索入風輕、断續^{*}鯨音裏、煙火觀死生、

※【頭書】「続敷」

(六〇)

亀浦帰帆

空濶海西面、升沈漁父舟、隔山晚鐘響、映水暮雪浮、回棹出天末、連帆辻岬以、清風幾千里、吹送渡江流、

(六一)

鶴崎暮雪

岩嶮百尋嶂、載雪及花時、敷玉波懸岬、鏤銀月掛枝、白雪浸影遶、青靄和光溢、更自晚風裏、皓然落日遲、

(六二)

網代夕照

西海渺茫去、接雲落日円、玉光散録地、金色漲浸天、青草瘞沙遠、緑萍繞岬連、漁郎皆拳網、回棹^{（返）}行船、

* 東大本、都城本「縁」。

(六三)

御寄秋月

素秋天外晴、孤月乘潮生、灑々随波去、沈々入渚清、山寺黄葉落、風冷白雲輕、〔東〕海幾千里、涵虚一色明、

* 東大本により補う。

(六四)

田代落鴈

埜田開万頃、鴻鴈一行遊、傍母眠汀上、離群呼海頭、稻梁乱風偃、蘆荻傲霜修、不識懸金字、為誰渡此秋、

(六五)

桜花

平城天皇

昔在幽巖下、光華照四方、忽逢攀折客、含笑亘三陽、送氣時多少、垂陰枝短長、如何此一□^{（物）}擅美九春場、

(六六)

見 禁中花

伊勢貞昌

千載值逢興交加、夢耶非夢慰生渥、春魂若不化胡蝶、埜^{*}牲爭馴雲上

(七七)

惜牡丹

白樂天

惆悵階前紅牡丹、晚來唯有兩枝殘、明朝風起心吹盡、夜惜衰紅把火看、

(七八)

寒食夜

前賢

無月無燈寒食夜、々深猶立闌花前、忽因時節驚年幾、四十如今欠一年、

(七九)

禁中夜作書与元九

前賢

心緒萬端書兩帙、欲封重讀意遲々、五声宮漏初明後、一点窓灯欲滅時、

(八〇)

前賢

遺文三十軸、々々金玉声、竜門原上土、埋骨不埋名、

(八一)

邵康節

富貴如將知力求、仲尼年少合封侯、世人不解青天意、空使身心半夜愁、

(八二)

泰山孫明復

人亦天地一物尔、饑食渴飲無休時、若非道義充其腹、何異鳥獸安鸞眉、

(八三)

東坡

一居山林欲語一、一聽狐猿梢叫一、一貧家類人亦一、一送数日却外一、

(八四)

秋冬春夏月、今古四時同、南北東西雪、乾坤大地寒、

(八五)

東坡

花々々而易老花、々顏花盛夢中花、花時花亦宣情在、花落花過誰問花、

(八六)

花上金鈴

蕭水厓

搖曳金鈴日幾回、不教紅紫委蒼苔、誰知烏鵲驚飛去、別有嚬花野鹿來、

(八七)

偶書

唐洪甫

讀破床上万卷花書、恨中今古幾榮枯、七雄五霸成何事、到底夷齋是丈夫、

(八八)

櫻

宋景濂

賞櫻日本盛於唐、如被牡丹兼海棠、恐是趙昌所難尽、春風纔起雪吹香、

(八九)

全

王荊公

山桜抱石蔭松枝、比並余花開最遲、只有春風嫌寂寞、吹香渡水報人知、

(九〇)

挽恭靖木先生

新井白石

四馬蕭々送葬車、古原霜落白楊疎、大名私議門人謚、厚德応伝国史書、爲志我聞三代飾、築場誰結六年庐、自今弟子如星散、共是離群嘆索居、

(九一)

秋江送人

江上青楓白露秋、佳人暫駐木蘭舟、醉中攀折官橋柳、搖落千山暮色愁、

(九二)

和雪夜韻

飛雪飄搖舞、月明臨万戶、誰將玉笛吹、梅落不知數、

(九三)

柳邊繫馬

青絲驄馬紫遊韁、紅粉樓前繫翠樓、不惜白花飛似雪、千条万縷爲君長、

(九四)

採蓮曲

十五採蓮女、羞人不出花、青荷如小扇、試折一枝遮、打起鴛鴦兒、莫教棲綠池、三年江上別、又及採蓮時、

(九五)

即事

黃簾綠幙^{*題}午風香、十里芙蓉鑑綠塘、却怕玉階秋氣入、班姬執扇不堪涼、

* 東大本、都城本「幙」。

(九六)

宮前螢

景華宮殿暮烟浮、月姊星娥侍宴遊、莫怪君王長夜醉、溪山如昼露螢流、

(九七)

歲寒林

鬱々長松樹、蕭々修竹林、結茅松竹下、深知歲寒心、

(九八)

浴月池

待月清池上、清池靜不波、波間浴明月、偏覺清光多、

(九九)

甲子十二月十日恭陪 大駕於東天台仏会

星下天門度海東、梵王宮殿五雲重、双林樹影連仙路、七宝蓮華湧鷺
峯、

(一〇〇)

花下小飲

昨夜東風弘雁池、梁園雪後玉珂移、楚人原重黃金諾、^{*}郢樹忘同白首
期、共對美人疑月色、何勞馭使贈春枝、定知歲々花相似、長使風流
若此時、

* 景因本、東大本、都城本とも「：諾○忘同白首期郢樹」とあり、「郢樹」
を「諾」の後ろに置くよう指示。今改める。

(一〇一)

与明遠兒 在小琉球作 山月洲

^{*憶}惜昔少年時、辛勤讀青史、雖以驚駘資、窃飲天下士、慨然撫卷
嘆、願作奇男子、人間事多違、天道有泰否、壯志安在哉、嗟咤徒老
矣、奔走衣与食、南荒客万里、殊域不可居、風俗真頑鄙、肝胆向誰

傾、寥々無知己、天路一何長、夜々夢桑梓、題詩寄尔輩、相思渺雲
水、

* 東大本、都城本「憶」。

(一〇二)

恭謁

神武帝宮 在筑前国芦屋郡

茅茨余古風、金鎖閣靈宮、神武雷霆震、聖恩雨露通、千祺伝帝業、
万国仰□□、^{(天)(功)}□^(尊)駐六竜駕、山河瑞靄濃、

(一〇三)

遺悶 ^{*是}足歲悼女孫

節序愁中變、鶯花病裏休、三春唯伏枕、兩月不登樓、眠少夢難結、
情鐘淚易流、殘生失一樂、欲語每搔頭、

* 東大本、都城本「是」。

(一〇四)

拜因南先生墓 在東都大^{だい}園寺

樞衣嘗立雪、諄々荷恩慈、四海難青眼、五常悼白眉、聲華郡旧史、
光霽想先師、宿山添新淚、風悲上塚時、

金鱗先生有子五人、而因南為故第四、句用五常々、

* 東大本、都城本「園」。

(一〇五)

別稚子

小兒纔二歲、未識別離悲、膝上牽衣咲、使余双淚垂、

(一〇六)

旅泊

夜泊長江雨、孤灯客思賒、幾回蝴蝶夢、飛傍故鄉花

東都四時歌

(一〇七)

春

春風城北路、半醉戴花還、借問紅顏子、応遊飛鳥山、

(一〇八)

夏

避暑三人口、清風六月秋、橋辺歌管起、競繫木蘭舟

* 東大本、都城本「人」。

(一〇九)

秋

一任逢搖落、繁華不似秋、千門多樂事、何処起人愁、

(一一〇)

冬

佳人斟綠酒、公子擁紅炉、千古梁園雪、非関賦有無、

(一一一)

水上別家人

親朋從此去、遊子泣孤征、憐尔無情水、亦為鳴咽声、

(一一二)

退朝口号

穆矣衣冠会、已哉犬馬年、不才逢聖世、班次愧群賢、

(一一三)

渡疆溪

故国朝々隔、客心夜々愁、慇懃一溪水、北岸是肥州、

(一一四)

上巳前一日悼適女孫

小園風雨夜來悲、吹落桃花第一枝、縦値明朝修禊日、春光何似去年時、

萱堂七十寿賀会詩

(一一五)

兒寿 兒玉祝人

松下開筵初度辰、萱堂寿色映盃新、即今相約歲寒樹、雨露同榮幾万春、

(一一六)

上成章 上野善兵衛

春風二月寿筵設、日煖瑤池綠水清、最羨仙姑懸輓處、青葱玉樹繞階生、

(一一七)

倪草 兒玉早之允

孝子學終絕倫、斷機功就古稀人、庭除更有青葱樹、不乏南星寿域春、

(一一八)

兒秉德 兒玉五兵衛

松樹鬱葱經幾年、寿筵開處瑞烟連、君非啻結歲寒約、餐實服脂欲字仙、

(一一九)

日兼儔 日置五郎太

僊台祥氣日氤氳、檻外偃松最出群、阿母即今開宴處、老標新駐閨風雲、

(一二〇)

黒清逸 黒田嘉右衛門

婺女星輝曉色催、碧桃花底綺筵開、嘉賓欲問長生訣、共拜仙姑称寿杯、

(一二一)

平武文 平山五郎右工門

孤松鬱鬱百余尋、勁節分明秀古今、称寿北堂設筵處、影浮春酒更森々、

(一二二)

三經柄 三原次助

高標千歲傲風霜、翠蓋重々陰北堂、喜值兒孫称寿日、更含黛色映霞觴、

(一二三)

白国器 迫田甚之丞

阿母堂前一樹松、凌雲翠蓋幾重々、盛筵此日称觴處、瑞色氤氳映酒濃、

(一二四)

欄外孤松百尺長、四時黛色自蒼々、仙台此日開筵處、佳氣氤氳滿酒觴、

(一二五)

長通喬 長崎鉄之丞

鬱葱松樹帶祥煙、阿母堂前經幾年、孫子開筵相對處、共看白鶴下青天、

(一二六)

種時真 種子島伊藏

孤松百尺蔭高堂、偃蓋蒼々帶瑞光、仙嫗開筵此懸幌、為稱万寿獻霞觴、

(一二七)

石近誼 石原伝太夫

千年松樹聳參天、鬱々葱々〔々〕*帶翠烟、今日北堂稱寿処、更添瑞色照瓊筵、

* 果図本「々」なし。東大本により補う。

(一二八)

伊兼峯 伊集院新左門

千尋松樹蔭高台、偃蓋色深瑞氣開、此日君家稱寿処、青春長醉万年杯、

(一二九)

重篤宣 重久仙藏

青松百尺瑞雲傍、偃蓋爭開阿母堂、風韻似伝流水曲、攀來為勸万年觴、

(一三〇)

入親雄 入田喜右門

貞松高秀万条分、疑是蒼竜帶瑞雲、蓋影新開仙嫗宴、更携寿酒坐來醺、

(一三一)

小貞幹 小浜長藏

青蔥松樹鬱千尋、偃蓋春濃瑞色深、阿母高堂開宴日、自今長結歲寒心、

(一三二)

志常名 志和池源五

青松高倚瑞雲隈、阿母堂前翠蓋開、自是君家春不老、児孫爭勸寿筵盃、

(一三三)

本親賢 本田武兵衛

孤松百尺蔭華堂、佳色千秋凌雪霜、影浸庭池方的々、氣連城闕更蒼々、臥竜鱗動盤根大、巢鶴翼飄秀葉光、自是仙姬堪比寿、採苓長酌万年觴、

(一三四)

得通昭

北堂二月寿筵開、五色祥雲縹紗來、請見我曹歡舞処、班斚彩服映霞杯、

(一三五)

関修齡 関栄一郎 武江国文学頭

游子逢春未擬帰、韶光華髮映庭闈、紅梅着両堂前發、青鳥凌雲海上飛、載筆試裁潘岳賦、倚門応望老萊衣、他郷宦路勞陳乞、無那梅觴

願已違、

(一三六)

閑黙成 修齡子

風流詞客旧高名、万里雄飛好遠征、海上寧無懷橘、思天涯亦是倚門、情北堂空負班衣、舞南国重携彩翰、成懸想仙桃花已發、將雛一曲鳳簫声、

(一三七)

宗大礼 市来四郎太

高堂開宴酒杯行、王母蟠桃春轉清、為悅閨園能上寿、新題猶自入琴声、

(一三八)

橋子璉 橋口権藏

遙恩良辰宴、春風送瑞烟、北堂萱艸茂、南極寿星懸、滿座嘉賓醉、傍階玉樹連、長生君有術、人唱九如篇、

(一三九)

向井章 向井源五左工門

相憶瑤池宴、笙歌對酒開、琪花開檻發、仙鶴映霞來、恨少班衣舞、喜堪金馬才、南山吾有曲、寄助白雲杯、

(一四〇)

川成憲 川上幸右門

燦爛婺星天一方、時知錦帔帶禎祥、獻寿欄前黃雀舞、催宴簾外青鳥翔、芝蘭玉樹茂園裡、五色斑斕侍萱堂、金壺濺出千日酒、賓客齊舉九霞觴、瑤台春煖桃更熟、閨苑風輕花幾香、蕙帳昔時玉燕夢、鸞鳳呈瑞生令郎、一過不忘王仲任、博聞強記声誉長、豈徒博聞強記譽、健毫文章亦擅場、一百余城称第一、今從 金旆在武昌、応是断機孟母賢、温席扇床日供鮮、温席扇床今暫欠、心目常存北堂前、陽春正迎古稀寿、遥使吾曹頌佳筵、為君愛日心情切、下調亦雜郢中篇、自茲定識籌漆屋、遐筭長比龜崔年、

(一四一)

山本正誼

母氏正当七十年、高堂称慶設華筵、側身西望飛揚甚、獻寿遙題松寿篇、松寿凌雲偃蓋開、森々鬱々蔭楼台、借問何人移此樹、阿母少時手自栽、阿母容華還不萎、貞松性質本無移、貞松阿母与為友、千秋万歳長若斯、

右七首東都作

鹿兒島県史料集刊行一覽

集	史	料	名	執筆	者	集	史	料	名	執筆	者
1	薩藩政要録			桃園恵真・五味克夫		28	要用集(上)			芳 即正	
2	丁丑日誌(上)			村野守次		29	要用集(下)			芳 即正	
	丁丑日誌(下)			芳 即正		30	桂久武書翰			村野守次	
3	薩摩国新田神社文書			五味克夫		31	本藩地理拾遺集(上)(薩摩国)			桐野利彦	
4	一向宗禁制関係資料			桃園恵真		32	本藩地理拾遺集(下)(大隅国・諸縣国)			宮下満郎	
5	薩摩国山田文書			五味克夫・郡山良光		33	江夏十郎関係文書			山田尚二	
6	諸家大概・別本諸家大概・職掌紀原・御家譜			桃園恵真		34	示現流関係史料			宮下満郎	
7	薩摩国阿多郡史料・山田聖栄自記			五味克夫・郡山良光		35	樺山玄佐自記並雜記・樺山紹劍自記			晋 哲哉	
8	御登御道中日帳御下向・列朝制度			原口虎雄		36	島津世禄記			山田尚二	
9	明治元年戊辰戦役関係資料			村野守次		37	島津世家			畠中 彬	
10	伊能忠敬の鹿兒島測量関係資料並に解説			増村 宏		38	譯司冥加録・漂流民関係史料			宮下満郎	
11	管窺愚考・雲遊雜記傳			五味克夫		39	薩摩藩天保改革関係史料一			尾口義男	
12	川上忠塞一流家譜			五味克夫・桑波田興		40	薩藩学事一・鹿兒島島師範学校史料			宮下満郎	
13	本藩人物誌			桃園恵真		41	薩藩学事二・薩藩学事三			畠中 彬	
14	薩陽過去帳			宮下満郎		42	薩藩名勝志(その一)			吉元正幸	
15	備忘抄・家久公御養子御願一見			五味克夫		43	薩藩名勝志(その二)			吉元正幸	
16	鹿兒島縣地誌(上)			桐野利彦		44	薩藩名勝志(その三)			吉元正幸・塩満郁夫	
17	鹿兒島縣地誌(下)			桐野利彦		45	鹿兒島県布達(上)			宮下満郎	
18	薩藩舊土文章			五味克夫・桑波田興		46	鹿兒島県布達(下)			宮下満郎	
19	薩藩先公貴翰(乾)			五味克夫・桑波田興		47	伊地知権左衛門日記・先君掖官遺抄			堂満幸子・林 匡	
20	薩藩先公貴翰(坤)			五味克夫・桑波田興		48	加治木古老物語・薩藩雜事録・雜事奇談集・舊薩藩寄譚日記集 上・下			安藤 保・徳永和喜	
21	小松帶刀傳・薩藩小松帶刀履歴・小松公之記事			芳 即正		49	西藩烈士干城録(一)			徳永和喜	
22	小松帶刀日記			芳 即正		50	西藩烈士干城録(二)			徳永和喜	
23	新修舊鹿兒島藩領国・郡・郷・村・浦・町附(上)			原口虎雄		51	西藩烈士干城録(三)			徳永和喜	
24	新修舊鹿兒島藩領国・郡・郷・村・浦・町附(下)			原口虎雄		52	通昭録(一)			安藤 保・清水 勝	
25	三州御治世要覽			宮下満郎・桑波田興		53	通昭録(二)			塩満郁夫・尾口義男	
26	桂久武日記			村野守次		54	通昭録(三)			丹羽謙治	
27	明赫記			宮下満郎							

鹿児島県史料集刊行委員会委員

五十音順

安藤 保 九州大学名誉教授

尾口 義男 前始良市歴史民俗資料館長

五味 克夫 鹿児島大学名誉教授

塩満 郁夫 鹿児島県歴史資料センター黎明館
史料編纂委員

晋 哲哉 元蒲生町長

堂満 幸子 鹿児島県歴史資料センター黎明館
史料編纂委員

徳永 和喜 元鹿児島県歴史資料センター黎明館
学芸課長

中野 翠 元指宿高等学校長

中山 右尚 鹿児島大学名誉教授

丹羽 謙治 鹿児島大学教授

日限 正守 鹿児島大学教授

三木 靖 鹿児島国際大学短期大学部名誉教授

宮下 満郎 鹿児島県歴史資料センター黎明館
史料編纂委員

「通昭録」(三)

(鹿児島県史料集 第五十四集)

平成二十七年三月

発行

鹿児島市城山町七―一
鹿児島県立図書館
電話 ○九九―二二四―九五―一
FAX ○九九―二二四―五八二四

印刷

鹿児島市中央町二七―一六
かわち印刷有限公司
電話 ○九九―二五四―五〇五四